

JP1/Base 運用ガイド

コマンド／JP1 イベント／トラブルシューティング／付録

13. コマンド .....	6
コマンドの記述形式 .....	6
コマンド一覧 .....	7
cpysvprm (Windows 限定) .....	12
hntr2getname (Windows 限定) .....	13
hntr2kill (UNIX 限定) .....	13
hntr2mon (UNIX 限定) .....	13
hntr2util (UNIX) .....	14
hntr2util (Windows) .....	16
jbs_killall.cluster (UNIX 限定) .....	18
jbs_log.bat (Windows 限定) .....	19
jbs_log.sh (UNIX 限定) .....	21
jbs_spmc (UNIX 限定) .....	24
jbs_spmc_reload .....	25
jbs_spmc_status .....	26
jbs_spmc_stop .....	28
jbs_start (UNIX 限定) .....	29
jbs_start.cluster (UNIX 限定) .....	30
jbs_stop (UNIX 限定) .....	31
jbs_stop.cluster (UNIX 限定) .....	32
jbsacllint .....	33
jbsaclreload .....	34
jbsadduser .....	35
jbsadmin (Windows Vista 限定) .....	37
jbsblockadesrv .....	37
jbschgds (Windows 限定) .....	38
jbschgpasswd .....	39
jbschkds (Windows 限定) .....	40
jbsgetcnf .....	42
jbsgetumap .....	43
jbshostsexport .....	44
jbshostsimport .....	45
jbslistacl .....	46
jbslistsrv .....	47
jbslistuser .....	48
jbsmkpass (Windows 限定) .....	50
jbsmkumap .....	51
jbspassmgr (Windows 限定) .....	52
jbsrmacl .....	52
jbsrmumap .....	54
jbsrmumappass (Windows 限定) .....	56

jbsrmuser.....	57
jbsrt_del.....	59
jbsrt_distrib.....	60
jbsrt_get .....	61
jbsrt_sync .....	62
jbssetacl.....	63
jbssetcnf.....	64
jbssetumap .....	65
jbssetusrsv (UNIX 限定) .....	67
jbsumappass (Windows 限定) .....	68
jbsunblockadesrv .....	69
jbsunsetcnf .....	70
jcocmdconv .....	71
jcocmddef.....	72
jcocmddel .....	78
jcocmdlog .....	79
jcocmdshow .....	82
jevdbinit .....	84
jevdbswitch.....	86
jevdef_distrib.....	87
jevdef_get .....	89
jeveltreload (Windows 限定) .....	91
jevexport .....	92
jevlogdstart (UNIX 限定) .....	95
jevlogdstop (UNIX 限定) .....	95
jevlogreload.....	96
jevlogstart .....	97
jevlogstat.....	100
jevlogstop.....	101
jevregsvc (Windows 限定) .....	102
jevreload .....	103
jevsend.....	104
jevsendd.....	106
jevstart (UNIX 限定) .....	108
jevstat .....	109
jevstop (UNIX 限定) .....	111
Jischk .....	111
Jiscond .....	113
Jisconv .....	115
Jiscpy .....	117
Jisext.....	118
Jisinfo.....	119

Jiskeymnt .....	120
Jisktod .....	124
Jislckclear (Windows 限定) .....	129
Jislckext .....	130
Jislckfree (Windows 限定) .....	131
Jislckreg (UNIX 限定) .....	132
Jismlektr (Windows 限定) .....	133
Jisprt .....	134
Jisrsdel (UNIX 限定) .....	135
jp1base_setup (UNIX 限定) .....	136
jp1base_setup_cluster (UNIX 限定) .....	137
jp1bshasetup (Windows 限定) .....	139
jp1ping .....	139
14. JP1 イベント .....	141
14.1 JP1 イベントの属性 .....	141
14.1.1 基本属性 .....	141
14.1.2 拡張属性 .....	142
14.2 JP1/Base が出力する JP1 イベント一覧 .....	144
14.3 JP1 イベントの詳細 .....	146
15. トラブルシューティング .....	165
15.1 対処の手順 .....	165
15.2 ログ情報の種類 .....	166
15.2.1 共通メッセージログ .....	166
15.2.2 統合トレースログ .....	166
15.2.3 プロセス別ログ .....	169
15.2.4 操作ログ .....	169
15.2.5 ログファイルおよびディレクトリ一覧 .....	169
15.3 トラブル発生時に採取が必要な資料 .....	178
15.3.1 Windows の場合 .....	178
15.3.2 UNIX の場合 .....	181
15.4 資料の採取方法 .....	186
15.4.1 Windows の場合 .....	186
15.4.2 UNIX の場合 .....	190
15.5 トラブルへの対処方法 .....	193
15.5.1 OS 共通のトラブル .....	193
15.5.2 Windows の場合 .....	194
15.5.3 UNIX の場合 .....	198
15.5.4 ヘルスチェック機能で異常を検知した場合 .....	199
15.6 JP1/Base 使用上の注意事項 .....	200
付録 .....	202
付録 A ファイルおよびディレクトリ一覧 .....	202
付録 B プロセス一覧 .....	215

付録 B.1 Windows の場合 .....	215
付録 B.2 UNIX の場合 .....	217
付録 C ポート番号一覧 .....	219
付録 C.1 JP1/Base のポート番号 .....	219
付録 C.2 ファイアウォールの通過方向 .....	220
付録 C.3 コネクションの接続状態 .....	221
付録 D 制限値一覧 .....	222
付録 E 性能と見積もり .....	223
付録 E.1 メモリー所要量 .....	223
付録 E.2 ディスク占有量 (Windows の場合) .....	223
付録 F 正規表現の文法 .....	223
付録 F.1 デフォルトで使用できる正規表現 .....	223
付録 F.2 正規表現を拡張した場合に使用できる拡張正規表現 .....	225
付録 F.3 06-71 以前および 07-00 以降で使用できる正規表現の比較 .....	226
付録 F.4 正規表現を指定する際のヒント .....	227
付録 F.5 正規表現の指定例 .....	228
付録 G カーネルパラメーター一覧 .....	229
付録 H 通信設定の変更対応 .....	229
付録 I 操作ログの出力 .....	230
付録 I.1 操作ログに出力される事象の種別 .....	230
付録 I.2 操作ログの保存形式 .....	231
付録 I.3 操作ログの出力形式 .....	232
付録 I.4 操作ログが出力される契機 .....	236
付録 I.5 操作ログを出力するための設定 .....	238
付録 I.6 操作ログに出力されるメッセージの一覧 .....	240

### 13. コマンド

この章では、JP1/Base で使用できるコマンドの文法を説明します。

#### コマンドの記述形式

コマンドの説明で使用する記号を、次のように定義します。

記号	意味
 (ストローク)	複数の項目に対し、項目間の区切りを示し、「または」の意味を示す。 例 「A   B   C」は、「A, B または C」を示す。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目の中から、必ず 1 組の項目を選択する。項目の区切りは で示す。 例 {A   B   C}は「A, B または C のどれかを指定する」ことを示す。
[ ]	この記号で囲まれている項目は任意に指定できる(省略してもよい)。 複数の項目が記述されている場合には、すべてを省略するか、どれか一つを選択する。 例 [A]は「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示す。 [B   C]は「何も指定しない」か「B または C を指定する」ことを示す。
...	この記号の直前に示された項目を繰り返して複数個、指定できる。 例 「A, B, ...」は「A のあとに B を必要個数指定する」ことを示す。
— (下線)	括弧内のすべてを省略したときに、システムがとる標準値を示す。標準値がない場合は、指定した項目だけが有効である。 例 [A]Bはこの項目を指定しなかった場合に、A を選択したと見なすことを示す。

## コマンド一覧

JP1/Base で使用できるコマンドの一覧を次に示します。なお、表中では、Windows, UNIX での対応を凡例のように表記しています。

(凡例)

○: 対応している。

—: 対応していない。

スーパーユーザー: Windows の場合、Administrators を意味する。

### 起動管理機能で使用するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
JP1SVPRM.DAT ファイルの作成	<a href="#">cpysvprm</a>	○	—	なし

### ネットワーク設定の確認で使用するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
ネットワーク設定の確認	<a href="#">jp1ping</a>	○	○	なし

### JP1/Base のプロセスの起動・終了およびセットアップなどで使用するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
統合トレース(HNTRLib2)の起動	<a href="#">hntr2mon</a>	—	○	スーパーユーザー
統合トレース(HNTRLib2)の終了	<a href="#">hntr2kill</a>	—	○	スーパーユーザー
統合トレース(HNTRLib2)の設定変更	<a href="#">hntr2util (Windows)</a>	○	—	スーパーユーザー
	<a href="#">hntr2util (UNIX)</a>	—	○	スーパーユーザー
統合トレース(HNTRLib2)を利用する PP 名称の出力	<a href="#">hntr2getname</a>	○	—	スーパーユーザー
JP1/Base のセットアップ	<a href="#">jp1base_setup</a>	—	○	スーパーユーザー
イベントサービスを含めた JP1/Base の起動	<a href="#">jbs_start</a>	—	○	スーパーユーザー
イベントサービスを含めた JP1/Base の終了	<a href="#">jbs_stop</a>	—	○	スーパーユーザー
イベントサービスを除く JP1/Base のプロセスの起動	<a href="#">jbs_spmd</a>	—	○	スーパーユーザー
イベントサービスを除く JP1/Base のプロセスの終了	<a href="#">jbs_spmd_stop</a>	○	○	スーパーユーザー
イベントサービスを除く JP1/Base のプロセスの状態確認	<a href="#">jbs_spmd_status</a>	○	○	スーパーユーザー
イベントサービスを除く JP1/Base のプロセスの再読み込み処理	<a href="#">jbs_spmd_reload</a>	○	○	スーパーユーザー
クラスタシステムで運用するための設定	<a href="#">jp1bshasetup</a>	○	—	スーパーユーザー
	<a href="#">jp1base_setup_cluster</a>	—	○	スーパーユーザー
クラスタシステムでの起動	<a href="#">jbs_start.cluster</a>	—	○	スーパーユーザー
クラスタシステムでの終了	<a href="#">jbs_stop.cluster</a>	—	○	スーパーユーザー
クラスタシステムで運用中の JP1/Base プロセスの強制終了	<a href="#">jbs_killall.cluster</a>	—	○	スーパーユーザー
JP1/Base 管理者コンソールの起動	<a href="#">jbsadmin(Windows Vista 限定)</a>	○	—	スーパーユーザー

## バージョンアップに関するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
バージョン 7 以前の JP1/Base のコマンド実行履歴をバージョン 8 用のコマンド実行履歴ファイルに移行する	<a href="#">jccmdconv</a>	○	○	スーパーユーザー

## ユーザー管理機能で使用するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
認証サーバの設定	<a href="#">jbssetusrsv</a>	—	○	スーパーユーザー
認証サーバの確認	<a href="#">jbslistsv</a>	○	○	スーパーユーザー
認証サーバの閉塞	<a href="#">jbsblockadesrv</a>	○	○	スーパーユーザー
認証サーバの閉塞解除	<a href="#">jbsunblockadesrv</a>	○	○	スーパーユーザー
JP1 ユーザーの登録	<a href="#">jbsadduser</a>	○	○	スーパーユーザー
JP1 ユーザーの削除	<a href="#">jbsrmuser</a>	○	○	スーパーユーザー
登録した JP1 ユーザーの表示	<a href="#">jbslistuser</a>	○	○	スーパーユーザー
登録済み JP1 ユーザーのパスワードの変更	<a href="#">jbschgpasswd</a>	○	○	スーパーユーザー
JP1 ユーザーの操作権限の登録	<a href="#">jbssetacl</a>	○	○	スーパーユーザー
JP1 ユーザーの操作権限の削除	<a href="#">jbsrmacl</a>	○	○	スーパーユーザー
登録した JP1 ユーザーの操作権限の表示	<a href="#">jbslistacl</a>	○	○	スーパーユーザー
マッピング情報の生成, 共通定義への登録	<a href="#">jbsmkumap</a>	○	○	スーパーユーザー
マッピング情報の個別登録	<a href="#">jbssetumap</a>	○	○	スーパーユーザー
マッピング情報の個別削除	<a href="#">jbsrmumap</a>	○	○	スーパーユーザー
登録済みマッピング情報の一覧表示	<a href="#">jbsgetumap</a>	○	○	スーパーユーザー
OS ユーザーのパスワード管理情報のメンテナンス用プログラム	<a href="#">jbspassmgr</a>	○	—	スーパーユーザー
OS ユーザーの個別登録, 個別パスワード情報変更	<a href="#">jbsumappass</a>	○	—	スーパーユーザー
OS ユーザーの個別削除	<a href="#">jbsrmumappass</a>	○	—	スーパーユーザー
OS ユーザーのパスワード情報の共通定義への一括登録	<a href="#">jbsmkpass</a>	○	—	スーパーユーザー
認証サーバの操作権限に関する定義情報の表示	<a href="#">jbsaclint</a>	○	○	スーパーユーザー
認証サーバの操作権限に関する定義情報の再読み込み	<a href="#">jbsaclreload</a>	○	○	スーパーユーザー
連携するディレクトリサーバの変更	<a href="#">jbschgds</a>	○	—	スーパーユーザー
連携するディレクトリサーバの設定確認	<a href="#">jbschkds</a>	○	—	スーパーユーザー



## イベントサービスで使用するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
転送設定ファイルのリロード	<a href="#">jevreload</a>	○	○	スーパーユーザー
イベントデータベースの初期化	<a href="#">jevdbinit</a>	○	○	スーパーユーザー
イベントデータベースの切り替え	<a href="#">jevdbswitch</a>	○	○	スーパーユーザー
イベントデータベースの csv ファイルへの出力	<a href="#">jevexport</a>	○	○	なし
イベントサーバのサービスの追加登録	<a href="#">jevregsvc</a>	○	—	スーパーユーザー
手動でのイベントサービスの起動	<a href="#">jevstart</a>	—	○	スーパーユーザー
手動でのイベントサービスの終了	<a href="#">jevstop</a>	—	○	スーパーユーザー
イベントサービスの状態確認	<a href="#">jevstat</a>	○	○	スーパーユーザー
イベントサーバへの JP1 イベントの登録	<a href="#">jevsend</a>	○	○	なし
イベントサーバへの JP1 イベントの登録および到達確認	<a href="#">jevsendd</a>	○	○	なし
イベントログトラップ機能の動作定義ファイルのリロード	<a href="#">jevltreload</a>	○	—	スーパーユーザー
ログファイルトラップ管理デーモンの起動	<a href="#">jevlogdstart</a>	—	○	スーパーユーザー
ログファイルトラップ管理デーモンの終了	<a href="#">jevlogdstop</a>	—	○	スーパーユーザー
ログファイルトラップ機能の起動	<a href="#">jevlogstart</a>	○	○	スーパーユーザー
ログファイルトラップ機能の終了	<a href="#">jevlogstop</a>	○	○	スーパーユーザー
ログファイルトラップ機能の動作定義ファイルのリロード	<a href="#">jevlogreload</a>	○	○	スーパーユーザー
ログファイルトラップ機能のステータスチェック	<a href="#">jevlogstat</a>	○	○	スーパーユーザー
イベントサービスの定義情報の収集	<a href="#">jevdef_get</a>	○	○	スーパーユーザー
イベントサービスの定義情報の配布	<a href="#">jevdef_distrib</a>	○	○	スーパーユーザー

## ISAM (索引順編成) ファイルの操作および保守に関するユーティリティコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
キーの追加, 削除, 再構築	<a href="#">Jiskeymnt</a>	○	○	スーパーユーザー
ファイルの変換	<a href="#">Jisconv</a>	○	○	スーパーユーザー
ファイルの検証	<a href="#">Jischk</a>	○	○	スーパーユーザー
ファイルの抽出	<a href="#">Jisext</a>	○	○	スーパーユーザー
リソースの設定支援	<a href="#">Jislckreg</a>	—	○	スーパーユーザー
レコード内容の表示	<a href="#">Jisprt</a>	○	○	スーパーユーザー
リソースの削除	<a href="#">Jisrsdel</a>	—	○	スーパーユーザー
キー定義情報の表示	<a href="#">Jisinfo</a>	○	○	スーパーユーザー
ファイルの圧縮	<a href="#">Jiscond</a>	○	○	スーパーユーザー
ロックテーブルの拡張	<a href="#">Jislckext</a>	○	○	スーパーユーザー
ロックテーブル情報の表示	<a href="#">Jismcktr</a>	○	—	スーパーユーザー
ロックエントリ情報の削除	<a href="#">Jislckfree</a>	○	—	スーパーユーザー
ファイル・レコード占有状態の確認, 解除	<a href="#">Jislckclear</a>	○	—	スーパーユーザー
ファイルのコピー	<a href="#">Jiscpy</a>	○	○	スーパーユーザー

レコードの抽出	Jisktod	○	○	スーパーユーザー
---------	---------	---	---	----------

### 共通定義情報の採取, 登録, および削除コマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
共通定義情報の採取	jbsgetcnf	○	○	スーパーユーザー
共通定義情報の登録	jbssetcnf	○	○	スーパーユーザー
共通定義情報の削除	jbsunsetcnf	○	○	スーパーユーザー
jp1hosts 情報の共通定義情報への登録	jbshostsimport	○	○	スーパーユーザー
共通定義情報に登録した jp1hosts 情報の確認	jbshostsexport	○	○	スーパーユーザー

### トラブルシューティングで使用するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
障害発生時の資料の採取	jbs_log.bat	○	—	スーパーユーザー
	jbs_log.sh	—	○	スーパーユーザー

### 構成定義に関するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
JP1/IM の構成定義情報の下位ホストへの配布	jbsrt_distrib	○	○	スーパーユーザー
JP1/IM の下位ホストからの構成定義情報の収集, および更新	jbsrt_sync	○	○	スーパーユーザー
JP1/IM の構成定義情報の削除	jbsrt_del	○	○	スーパーユーザー
JP1/IM の構成定義情報の表示	jbsrt_get	○	○	スーパーユーザー

### 自動アクション, およびコマンド実行に関するコマンド

機能概要	コマンド名	Windows	UNIX	必要な実行権限
JP1/IM のコマンド実行環境の設定	jcocmddef	○	○	なし
JP1/IM から実行したコマンドの履歴の出力	jcocmdlog	○	○	なし
JP1/IM - View から実行したコマンド, 自動アクションで実行したコマンドの削除	jcocmddel	○	○	スーパーユーザー
JP1/IM - View から実行したコマンド, 自動アクションで実行したコマンドの状態確認	jcocmdshow	○	○	スーパーユーザー

なお, 以降のコマンドの説明では, コマンドはアルファベット順に記載されています。

### JP1/Base 管理者コンソール (Windows Vista 限定)

#### (1)JP1/Base 管理者コンソールの概要

JP1/Base では実行権限に管理者権限が必要なコマンド (管理者用コマンド) を提供しています。

JP1/Base 管理者コンソールは管理者用コマンドを実行するためのコマンドプロンプトです。

#### (2)起動方法

スタートメニューから[プログラム] - [JP1\_Base] - [管理者コンソール]を選択すると起動します。

#### (3)停止方法

プロンプト上で exit コマンドを入力, または Close ボタン(×)をクリックすると停止します。

#### (4)動作のカスタマイズ

JP1/Base 管理者コンソールを起動したときに任意の環境変数の設定やカレントパスの変更などのカスタマイズ情報を, JP1/Base 管理者コンソールが提供するプロファイルバッチプログラムを編集することで定義できます。

プロファイルバッチプログラムは, インストール先フォルダ¥jp1baseconf¥jbsadmin¥profile.bat です。

#### [プロファイルバッチプログラムのデフォルト定義]

```
@echo off

rem #-----
rem # ここに JP1/Base 管理者コンソールのプロファイル情報 (環境変数など)
rem # を設定できます.
rem #-----

echo JP1/Base 管理者コンソール

@echo on
```

例えば環境変数 JP1\_HOSTNAME に logical と設定したい場合, 次のように定義します。

```
@echo off

rem #-----
rem # ここに JP1/Base 管理者コンソールのプロファイル情報 (環境変数など)
rem # を設定できます.
rem #-----

echo JP1/Base 管理者コンソール
set JP1_HOSTNAME=logical

@echo on
```

## cpysvprm (Windows 限定)

### 機能

起動管理機能 (JP1/Base Control Service) を使用するときに必要な JP1SVPRM.DAT ファイルを作成するコマンドです。

### 形式

cpysvprm [-n **ファイル名**]

cpysvprm -d

### 実行権限

なし (ただし, Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

### 引数

#### -n **ファイル名**

指定したファイルをコピーして, JP1/Base のデータフォルダ (**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥conf¥boot¥) に JP1SVPRM.DAT ファイルを作成します。指定するファイル名は, フルパスで指定してください。このオプションを省略した場合, JP1/Base のデータフォルダにある JP1SVPRM.DAT.MODEL ファイルをサンプルにして, JP1/Base のデータフォルダに JP1SVPRM.DAT ファイルを作成します。

#### -d

JP1/Base のデータフォルダにある JP1SVPRM.DAT ファイルを削除します。このコマンドを実行すると, 起動管理機能は使用できなくなります。

### 注意事項

- -n オプションで指定したファイル, または JP1SVPRM.DAT.MODEL ファイルのバックアップを必ずとってください。
- JP1/Base のデータフォルダ (**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥conf¥boot¥) にある JP1SVPRM.DAT.MODEL ファイルを直接編集しないでください。

## hntr2getname (Windows 限定)

### 機能

統合トレース(HNTRLib2)を使用する PP 名称を標準出力に出力します。

### 形式

hntr2getname

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

システムドライブ¥Program Files¥Hitachi¥HNTRLib2¥bin¥

### 戻り値

-1	異常終了
0~126	HNTRLib2 を使用する PP 数
127	HNTRLib2 を使用する PP 数が 127 個以上

## hntr2kill (UNIX 限定)

### 機能

統合トレース(HNTRLib2)を終了するコマンドです。

### 形式

hntr2kill

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/hitachi/HNTRLib2/bin/

## hntr2mon (UNIX 限定)

### 機能

統合トレース(HNTRLib2)を起動するコマンドです。

### 形式

hntr2mon -d &

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/hitachi/HNTRLib2/bin/

### 注意事項

-d オプションはプロセスをセッションリーダーとして起動するだけで、シェルとの切り離しはしません。コンソールから直接統合トレース(HNTRLib2)を起動する場合は、C-Shell を使ってください。

### コマンド実行例

```
$ csh
```

```
% /opt/hitachi/HNTRLib2/bin/hntr2mon -d &
```

## hntr2util (UNIX)

### 機能

統合トレース(HNTRLib2)が出力する統合トレースログのサイズ、数、および出力先を変更するためのコマンドです。このコマンドを実行すると次に示すメニューが表示されます。

```
Hitachi Network Objectplaza Trace Library 2 - Configuration Utility  Rel 1.0

Select the item you want to change.  (Type 1-5 or e)

  1: Size of a log file.      256 KB
  2: Number of log files.    4
  3: Size of buffer.         64 KB
  4: Watch dog time.         10 Sec
  5: Name of log files.      /var/opt/hitachi/HNTRLib2/spool/hntr2*.log

e: Exit

Enter the number>
```

1

ログファイルのサイズを指定します。(8KB~4,096KB)

2

ログファイル数を指定します。(1~16)

3 および 4

変更しないでください。

5

ログファイルの出力先を指定します。

### 形式

hntr2util

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/hitachi/HNTRLib2/bin/

### 注意事項

各プログラムが1日あたりに出力するログの量を次に示します。この値を参考にしてログファイルのサイズを設定してください。なお、次に示す計算式の値は、正常に運用した場合のログの量です。エラー時に対処するためには、これ以上のサイズを設定してください。

### プロセス管理

#### 3.1 × 1日当たりの起動回数および停止回数(キロバイト)

上記の計算式の値は、1製品当たりのログの量です。JP1/Base, JP1/IM, JP1/AJS2それぞれでログの量を見積もってください。

### 認証サーバ

0.2 × JP1/AJS2 - View からのログイン回数 + 0.2 × コマンド実行回数(キロバイト)

### JP1/IM

$(0.16 + \text{自動アクションのコマンド長}) \times 1 \text{ 日当たりの自動アクション実行回数} + 0.4 \times \text{JP1/IM - View からの自動アクション定義の変更回数} + 0.16 \times \text{JP1/IM - View から JP1/IM - Manager へのログイン回数} + (0.16 + \text{コマンド実行画面のコマンド長}) \times 1 \text{ 日当たりのコマンド実行回数 (キロバイト)}$

## JP1/AJS2

**起動条件が成立した数**  $\times 0.2$  (キロバイト)

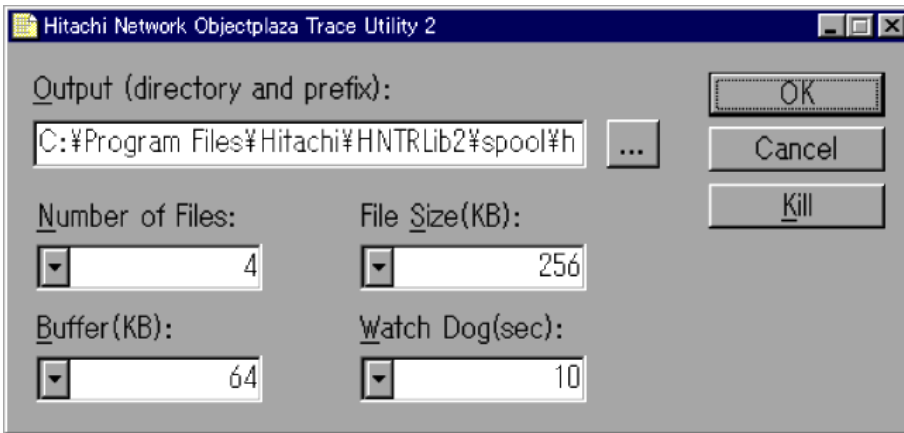
統合トレース(HNTRLlib2)の設定を変更した場合は、統合トレース機能を再起動する必要があります。次に示す手順で、統合トレース機能を再起動してください。

1. 次に示すコマンドを実行して、統合トレース採取プロセスを停止します。  
`/opt/hitachi/HNTRLlib2/bin/hntr2kill`
2. 次に示すコマンドを実行して、統合トレース採取プロセスを起動します。  
`/opt/hitachi/HNTRLlib2/bin/hntr2mon -d &`

## hntr2util (Windows)

### 機能

統合トレース(HNTRLib2)が出力する統合トレースログのサイズ、数、および出力先を変更するためのコマンドです。このコマンドを実行すると、次に示すダイアログボックスが表示されます。



このダイアログボックス上で統合トレースログの出力先、数、およびサイズを設定できます。次にこのダイアログボックスの各項目について説明します。

#### Output (directory and prefix):

ログファイルの出力先およびログファイル名のプリフィックスを指定します。デフォルトでは、**システムドライブ** `¥Program Files¥Hitachi¥HNTRLib2¥spool¥hntr2*.log` になっています。

#### Number of Files:

ログファイル数(1~16)を指定します。デフォルトでは、4 になっています。Output で指定した出力先に、ここで指定した値分のログファイルを作成します。

#### File Size (KB):

ログファイルのサイズ(8KB~4,096KB)を指定します。デフォルトでは、256 キロバイトになっています。

#### Buffer (KB):および Watch Dog (sec):

変更しないでください。

#### [OK]ボタン

ダイアログボックスで指定した値を反映して、ダイアログボックスを閉じます。

#### [Cancel]ボタン

ダイアログボックスで指定した値を反映しないで、ダイアログボックスを閉じます。

#### [Kill]ボタン

実行中のモニタープロセスを終了します。統合トレースサービス(サービス名:Hitachi Network Objectplaza Trace Monitor 2)を停止できますが、通常は、このボタンを利用しないで、Windows のコントロールパネルの[サービス]ダイアログボックス上で操作するようにしてください。

### 形式

hntr2util

### 実行権限

Administrators 権限

### 格納先ディレクトリ

システムドライブ¥Program Files¥Hitachi¥HNTRLib2¥bin¥

### 注意事項



各プログラムが1日あたりに出力するログの量を次に示します。この値を参考にしてログファイルのサイズを設定してください。なお、次に示す計算式の値は、正常に運用した場合のログの量です。エラー時に対処するためには、これ以上のサイズを設定してください。

## プロセス管理

$3.1 \times 1$  日当たりの起動回数および停止回数(キロバイト)

上記の計算式の値は、1製品当たりのログの量です。JP1/Base, JP1/IM, JP1/AJS2それぞれでログの量を見積もってください。

## 認証サーバ

$0.2 \times$  JP1/AJS2 - View からのログイン回数 +  $0.2 \times$  コマンド実行回数(キロバイト)

## JP1/IM

$(0.16 + \text{自動アクションのコマンド長}) \times 1$  日当たりの自動アクション実行回数 +  $0.4 \times$  JP1/IM - View からの自動アクション定義の変更回数 +  $0.16 \times$  JP1/IM - View から JP1/IM - Manager へのログイン回数 +  $(0.16 + \text{コマンド実行画面のコマンド長}) \times 1$  日当たりのコマンド実行回数(キロバイト)

## JP1/AJS2

起動条件が成立した数  $\times 0.2$ (キロバイト)

統合トレース(HNTRLib2)の設定を変更した場合は、統合トレース機能を再起動する必要があります。次に示す手順で、統合トレース機能を再起動してください。

1. Hitachi Network Objectplaza Trace Monitor 2 サービス(統合トレース機能)を再起動します。
2. コントロールパネルの[サービス]ダイアログボックスで、[Hitachi Network Objectplaza Trace Monitor 2]の名称のサービスを再起動します。

## jbs\_killall.cluster (UNIX 限定)

### 機能

論理ホスト上で動作している JP1/Base のプロセスを強制的に終了させるコマンドです。終了させるプロセスを次に示します。

- メインプロセス
- 構成管理プロセス
- リモートコマンド実行プロセス
- 認証サーバプロセス(認証サーバを起動している場合)
- イベントサービス

### 形式

jbs\_killall.cluster [論理ホスト名]

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/etc/opt/jp1base/

### 引数

#### 論理ホスト名

JP1/Base で設定した論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に設定されているホスト名を仮定します。このオプションを省略し、環境変数 JP1\_HOSTNAME に何も設定されていない場合は、異常終了します。

### 注意事項

- このコマンドは、論理ホスト名を先頭から 15 バイトまでで判定して、対応するプロセスを強制終了します。名称が 16 バイト以上の論理ホストのプロセスは強制終了できません。
- フェールオーバー時には、jbs\_stop.cluster コマンドを実行しても、プロセスが終了しないでフェールオーバーが失敗することがあります。終了しないプロセスを強制終了させるために、このコマンドを実行してください。

### 戻り値

0	正常終了
1 以上	異常終了

## jbs\_log.bat (Windows 限定)

### 機能

JP1/Base で障害が発生したときに資料を採取するためのツールです。JP1/Base の保守資料, OS のシステム情報, 統合トレースログなどを採取します。

このツールは、バッチファイルです。ユーザーによるカスタマイズはできません。

このツールを実行すると、資料格納フォルダに指定したフォルダの下に jp1default フォルダが作成されます。-h オプションを指定した場合は、jp1default フォルダと論理ホスト名のフォルダが作成されます。各フォルダの下に、base\_1st と base\_2nd のフォルダが作成され、そのフォルダの中に採取した資料がコピーされます。必要に応じて採取した資料を圧縮ツールなどで圧縮してください。フォルダ構成および資料内容を次に示します。

格納先フォルダ	採取した資料
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥conf¥	設定および定義ファイル
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥log¥	ログファイル
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥allusers¥jp1_default¥JP1Base¥log	ログファイル
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥allusers¥論理ホスト名¥JP1Base¥log	ログファイル
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥sys¥	OS のシステム情報
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥sys¥tmp¥event¥	イベントサーバ設定
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥default¥	共通定義情報
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥plugin¥conf¥	プラグインサービスの設定ファイル
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_1st¥spool¥	統合トレースログ
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_2nd¥log¥Command¥	コマンド実行履歴ファイル
資料格納フォルダ ¥jp1_default¥base_2nd¥sys¥	イベントデータベース
資料格納フォルダ ¥論理ホスト名¥base_1st¥conf¥	論理ホストの設定および定義ファイル (論理ホスト指定時)
資料格納フォルダ ¥論理ホスト名¥base_1st¥log¥	論理ホストのログ情報 (論理ホスト指定時)
資料格納フォルダ ¥論理ホスト名¥base_1st¥event¥	論理ホストのイベントサーバ設定 (論理ホスト指定時)
資料格納フォルダ ¥論理ホスト名¥base_2nd¥sys¥	論理ホストのコマンド実行履歴ファイル (論理ホスト指定時)
資料格納フォルダ ¥論理ホスト名¥base_2nd¥event¥	論理ホストのイベントデータベース (論理ホスト指定時)

なお、このツールを使って採取できる資料の詳細については、「[15.3 トラブル発生時に採取が必要な資料](#)」を参照してください。

## 形式

```
jbs_log.bat [-h 論理ホスト名]
             [資料格納フォルダ]
             [-r]
             [-t]
             [-u]
             [-p]
```

## 実行権限

なし(ただし, Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

## 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ¥jp1base¥tools¥

## 引数

### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に, 論理ホスト名を指定します。このオプションを指定した場合, 物理ホストと論理ホストの両方の資料を採取します。省略した場合, 物理ホストの資料だけを採取します。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

なお, このコマンドでは環境変数 JP1\_HOSTNAME の論理ホスト名は使用しません。このため, クラスタシステムで使用する場合には, 論理ホスト名を必ずこのオプションで指定してください。

### 資料格納フォルダ

採取した資料を出力するフォルダ名をフルパスまたはコマンドを実行した場所からの相対パスで指定します。パスに空白を含む場合は, 「`”`」で囲んで指定します。

存在しないフォルダを指定した場合は, その名称でフォルダが新規作成されます。

すでに存在するフォルダを指定した場合は, いったんフォルダを削除してから再度作成します。削除したくないファイルが格納されているフォルダと同じフォルダ名は指定しないでください。

このオプションを省略した場合, 環境変数 TEMP で指定されているフォルダ下の jp1log フォルダを仮定します。環境変数 TEMP は, 使用している OS およびユーザーによって異なりますので, Windows のコントロールパネルの [システム] から確認してください。

### -r

コマンド実行履歴ファイルを採取しない場合に指定します。

### -t

hosts ファイル, および services ファイルを採取しない場合に指定します。

### -u

クラッシュダンプを採取しない場合に指定します。

### -p

イベントデータベースを採取しない場合に指定します。

## 戻り値

0	正常終了
8	異常終了 <ul style="list-style-type: none"><li>引数エラー</li><li>採取する保守資料が格納されているフォルダが見つからない</li></ul>

## jbs\_log.sh (UNIX 限定)

### 機能

JP1/Base で障害が発生したときに資料を採取するためのツールです。JP1/Base の保守資料, OS のシステム情報, 統合トレース情報などを採取します。

このツールは, シェルスクリプトです。ユーザーによるカスタマイズはできません。

このツールを実行すると, ルートディレクトリの直下で, tar コマンドを使用して資料を採取する対象ディレクトリまたはファイルをアーカイブしたあと, compress コマンドを使用して圧縮します (Linux では, gzip コマンドを使用します)。圧縮されたファイルは, -f オプションを指定した場合は資料格納ディレクトリ名に, 省略した場合は /tmp/jp1base/ に格納されます。圧縮されたファイルのディレクトリ構成を次に示します。

格納先ディレクトリ	採取した資料
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_1st/var/opt/jp1base/conf/	設定および定義ファイル
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_1st/var/opt/jp1base/log/	ログファイル
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_1st/var/opt/jp1base/log/sys/	<ul style="list-style-type: none"><li>OS のシステム情報</li><li>jbs_spmd_status コマンドの実行結果</li></ul>
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_1st/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/	イベントサーバ設定
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_1st/var/opt/jp1base/plugin/conf/	プラグインサービスの設定ファイル
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_1st/var/opt/hitachi/HNTRLlib2/spool/	統合トレースログ
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_1st/opt/jp1/hcclibcnf/	共通定義情報
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_2nd/var/opt/jp1base/Command/	コマンド実行履歴ファイル
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_2nd/var/opt/jp1base/sys/event/	イベントデータベース
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_2nd/usr/tmp/jp1_ses/	SES 互換用設定ファイル
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_2nd/usr/lib/jp1_ses/	
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_2nd/usr/bin/jp1_ses/	
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_2nd/tmp/	
資料格納ディレクトリ名 /jp1_default_base_2nd/var/opt/jp1_ses/	
資料格納ディレクトリ名 /論理ホスト名_base_1st/etc/opt/jp1base/log/	論理ホストのログファイル
資料格納ディレクトリ名 /論理ホスト名_base_1st/etc/opt/jp1base/conf/	論理ホストの設定および定義ファイル (論理ホスト指定時)
資料格納ディレクトリ名 /論理ホスト名_base_1st/共有ディレクトリ/event/	論理ホストのイベントサーバ設定 (論理ホスト指定時)
資料格納ディレクトリ名 /論理ホスト名_base_2nd/共有ディレクトリ/event/	論理ホストのイベントデータベース (論理ホスト指定時)

資料格納ディレクトリ名/論理ホスト名 _base_2nd/var/opt/jp1base/COMMAND/	論理ホストのコマンド実行履歴ファイル (論理ホスト指定時)
--	----------------------------------

なお、このツールを使って採取できる資料の詳細については、「[15.3 トラブル発生時に採取が必要な資料](#)」を参照してください。

## 形式

```

jbs_log.sh [-f 資料格納ディレクトリ名]
           [-k]
           [-p]
           [-r]
           [-t]
           [-u]
           [-h 論理ホスト名]
           [ディレクトリ名またはファイル名...]

```

## 実行権限

スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/tools/

## 引数

### -f 資料格納ディレクトリ名

採取した情報の格納ディレクトリ名を、空白文字を含まない絶対パスで指定します。なお、指定されたディレクトリ名に空白文字を含んでいる場合、空白文字以前までの文字列を格納ディレクトリ名とし、空白文字以降の文字列は別の引数と見なされます。

-f オプションを省略した場合、次のファイルが作成されます。

物理ホストの場合

```

Linux 以外
/tmp/jp1base/jp1_default_base_1st.tar.Z
/tmp/jp1base/jp1_default_base_2nd.tar.Z
Linux
/tmp/jp1base/jp1_default_base_1st.tar.gz
/tmp/jp1base/jp1_default_base_2nd.tar.gz

```

論理ホストの場合

```

Linux 以外
/tmp/jp1base/論理ホスト名_base_1st.tar.Z
/tmp/jp1base/論理ホスト名_base_2nd.tar.Z
Linux
/tmp/jp1base/論理ホスト名_base_1st.tar.gz
/tmp/jp1base/論理ホスト名_base_2nd.tar.gz

```

### -k

バージョン 5 以前の製品である JP1/SES に関するログを採取しない場合に指定します。

### -p

イベントデータベースを採取しない場合に指定します。

### -r

コマンド実行履歴ファイルを採取しない場合に指定します。

-t

/etc/hosts, /etc/services, /etc/passwd ファイルを採取しない場合に指定します。

-u

core の解析情報を採取しない場合に指定します。

### ディレクトリ名またはファイル名

資料採取ツールで任意のファイルまたはディレクトリを採取したいときに指定します。フルパス名で指定してください。複数指定する場合は、スペースで区切ってください。

### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、論理ホスト名を指定します。このオプションを指定した場合、物理ホストと論理ホストの両方の資料を採取します。省略した場合、物理ホストの資料だけを採取します。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

なお、このコマンドでは環境変数 JP1\_HOSTNAME の論理ホスト名は使用しません。このため、クラスタシステムで使用する場合には、論理ホスト名を必ずこのオプションで指定してください。

### 戻り値

0	正常終了
8	<ul style="list-style-type: none"><li>引数エラー</li><li>指定された論理ホスト名が存在しない</li><li>指定された論理ホストの共有ディレクトリがマウントされていない</li><li>インストールされていない製品があったため、ファイルのコピー処理ができなかった</li><li>デバイスファイルが準備されているかどうかの質問にユーザーが NO で答えた</li><li>出力ファイルを上書きしてよいかの質問にユーザーが NO で答えた</li><li>指定された追加ファイルが読み取れない</li><li>指定された追加ファイルが存在しない</li><li>出力先ディレクトリが書き込めない</li><li>出力先ディレクトリが作成できなかった</li></ul>

## jbs\_spmc (UNIX 限定)

### 機能

イベントサービスの機能を除く JP1/Base のプロセスを起動するコマンドです。イベントサービス以外で障害が発生した場合、イベントサービスを終了する必要はありません。jbs\_spmc\_stop コマンドを使って、イベントサービスの機能を除いた JP1/Base のプロセスを終了し、jbs\_spmc コマンドで再起動します。イベントサービスの機能を除いた JP1/Base プロセスの終了については、jbs\_spmc\_stop コマンドを参照してください。

### 形式

```
jbs_spmc [-h 論理ホスト名]
          [-HA]
```

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、起動する論理ホスト名を指定します。指定できる文字数は、1~255(単位:バイト)です。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -HA

クラスタシステムで、プロセス管理の対象プロセスが一つでも異常終了した場合に、プロセス管理を終了させたいときに指定します。

### 注意事項

- このコマンドによって、JP1/Base のプロセスが起動したかどうか確認する場合は、jbs\_spmc\_status コマンドを実行してください。
- 同一ホスト上で、jbs\_spmc コマンドを同時に複数実行することはできません。

### 戻り値

0	正常終了
0 以外の値	異常終了



## jbs\_spmd\_reload

### 機能

イベントサービスの機能を除く JP1/Base のプロセスの再読み込みを実行するコマンドです。

### 形式

```
jbs_spmd_reload [-h 論理ホスト名]
                 [-t 時間(秒)]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、再読み込みしたい論理ホスト名を指定します。指定できる文字数は、1~255(単位: バイト)です。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -t 時間(秒)

jbs\_spmd\_reload コマンドの実行終了を待つ時間を秒単位で指定します。指定できる値は、0~32,767(単位: 秒)です。指定した時間内に jbs\_spmd\_reload コマンドの実行が終わらない場合、jbs\_spmd\_reload コマンドの実行が失敗したと見なします。デフォルトは、60 秒です。

### 注意事項

イベントサービスの環境設定は再読み込みされません。イベントサービスの環境設定の変更を反映するには、イベントサービスの再起動が必要です。

同一ホスト上で、jbs\_spmd\_reload コマンドを同時に複数実行することはできません。

### 戻り値

0	正常終了
0 以外の値	異常終了

## jbs\_spm�\_status

### 機能

イベントサービスの機能を除く JP1/Base の管理するプロセス群が起動または終了しているかどうかを確認するコマンドです。jbs\_spm�\_status コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。JP1/Base の管理するプロセスについては、「[付録 B プロセス一覧](#)」を参照してください。

### 認証サーバが設定されている場合

```
jbsessionmgr
jbsroute
jcocmd
jbsplugin
jbsbcd
jbsbhostd
```

### 認証サーバが設定されていない場合

```
jbsroute
jcocmd
jbsplugin
jbsbcd
jbsbhostd
```

### 形式

```
jbs_spm�_status [-h 論理ホスト名]
                 [-t 時間(秒)]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

```
インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥
```

UNIX の場合

```
/opt/jp1base/bin/
```

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、JP1/Base の管理するプロセス群が起動または終了しているかどうか確認したい論理ホスト名を指定します。指定できる文字数は、1～255 (単位: バイト) です。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -t 時間(秒)

jbs\_spm�\_status コマンドの実行終了を待つ時間を秒単位で指定します。指定できる値は、0～32,767 (単位: 秒) です。指定した時間内に jbs\_spm�\_status コマンドの実行が終わらない場合、jbs\_spm�\_status コマンドの実行が失敗したと見なします。デフォルトは 60 秒です。

### 注意事項

同一ホスト上で、jbs\_spm�\_status コマンドを同時に複数実行することはできません。

## 戻り値

0	すべてのプロセスが起動している
1	プロセス管理との通信などでエラーが発生した, またはクラスタンシステムで運用している場合に共有フォルダ(共有ディレクトリ)がマウントされていない
4	一部のプロセスが起動している
8	すべて停止している
12	要求処理中, またはタイムアウトした(リトライできます)

## jbs\_spmd\_stop

### 機能

イベントサービスの機能を除く JP1/Base のプロセスを終了するコマンドです。イベントサービス以外で障害が発生した場合、イベントサービスを終了しないで JP1/Base のプロセスを終了したい場合に便利です。再起動については jbs\_spmd コマンドを参照してください。

### 形式

```
jbs_spmd_stop [-h 論理ホスト名]
                [-kill]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、プロセスを終了する論理ホスト名を指定します。指定できる文字数は、1~255 (単位: バイト) です。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -kill

このオプションを指定すると、強制終了を実行します。

### 注意事項

- このコマンドによって、JP1/Base のプロセスが終了したかどうか確認する場合は、jbs\_spmd\_status コマンドを実行してください。
- このコマンドでは、ログファイルトラップ管理デーモンは終了しません。ログファイルトラップ管理デーモンを終了する場合は、このコマンドを実行したあと、jevlogdstop コマンドを実行して、ログファイルトラップ管理デーモンを終了してください。
- 同一ホスト上で、jbs\_spmd\_stop コマンドを同時に複数実行することはできません。

### 戻り値

0	正常終了
0 以外の値	異常終了

## jbs\_start (UNIX 限定)

### 機能

UNIX 版の JP1/Base (イベントサービス, ユーザー管理機能を含むプロセス管理機能, およびログファイルトラップ管理デーモン)を起動するコマンドです。

このコマンドを実行するためには, JP1/Base のインストールとセットアップの完了後, 次に示す操作が必要です。

```
cd /etc/opt/jp1base
```

```
cp -p jbs_start.model jbs_start
```

以上の作業によって, システムの開始時に, JP1/Base が自動的に起動します。

### 形式

jbs\_start

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/etc/opt/jp1base/

### 注意事項

- JP1/Base のプロセス群に起動要求を出したあと, 戻り値 0 で終了します。プロセス群が正しく起動したかどうかは, jbs\_start コマンドの終了後, jbs\_spmdd\_status コマンドで確認してください。

- Linux では, 次の注意事項があります。

Linux では, 標準設定でコアファイル出力時の最大サイズが「0」となっている場合があります。この場合, コアダンプは出力されません。このため, コアダンプが出力できるように, jbs\_start スクリプトおよび jbs\_start.cluster スクリプトは標準で, 次のように設定されています。

- 
- if [ 'uname' = Linux ]; then
- ulimit -c unlimited
- fi

この設定がご使用マシンのセキュリティポリシーに反する場合は, 次のように行の先頭に「#」を付けてコメント行に変更してください。コメント行に変更すると, ファイルの設定は無効になります。ただし, JP1/Base のプロセスがセグメンテーション障害やバス障害などのコアダンプ出力契機に, コアダンプが出力されないため, 調査ができないことがあります。

```
#if [ 'uname' = Linux ]; then
#ulimit -c unlimited
#fi
```

### 戻り値

0	正常終了
1	引数が二つ以上指定されている

## jbs\_start.cluster (UNIX 限定)

### 機能

クラスタシステムで JP1/Base (イベントサービス, ユーザー管理機能を含むプロセス管理機能, およびログファイルトラップ管理デーモン) を起動するコマンドです。このコマンドを実行する場合は, クラスタソフトにこのコマンドを登録する必要があります。

### 形式

jbs\_start.cluster **論理ホスト名**

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/etc/opt/jp1base/

### 引数

#### 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に, このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。

### 注意事項

- JP1/Base のプロセス群に起動要求を出したあと, 戻り値 0 で終了します。プロセス群が正しく起動したかどうかは, jbs\_start.cluster コマンドの終了後, jbs\_spmc\_status コマンドで確認してください。

- Linux では, 次の注意事項があります。

Linux では, 標準設定でコアファイル出力時の最大サイズが「0」となっている場合があります。この場合, コアダンプは出力されません。このため, コアダンプが出力できるように, jbs\_start スクリプトおよび jbs\_start.cluster スクリプトは標準で, 次のように設定されています。

- 
- `if [ 'uname' = Linux ]; then`
- `ulimit -c unlimited`
- `fi`

この設定がご使用マシンのセキュリティポリシーに反する場合は, 次のように行の先頭に「#」を付けてコメント行に変更してください。コメント行に変更すると, ファイルの設定は無効になります。ただし, JP1/Base のプロセスがセグメンテーション障害やバス障害などのコアダンプ出力契機に, コアダンプが出力されないため, 調査ができないことがあります。

```
#if [ 'uname' = Linux ]; then
#ulimit -c unlimited
#fi
```

### 戻り値

0	正常終了
1	引数が二つ以上指定されている

## jbs\_stop (UNIX 限定)

### 機能

JP1/Base (イベントサービスやユーザー管理を含むプロセス管理機能)を終了するコマンドです。このコマンドの実行には、JP1/Base のインストールとセットアップの完了後、次に示す操作が必要です。

```
cd /etc/opt/jp1base
cp -p jbs_stop.model jbs_stop
```

以上の作業によって、システムの終了時に JP1/Base が自動的に終了します。

### 形式

jbs\_stop

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/etc/opt/jp1base/

### 注意事項

ログファイルトラップ管理デーモンは、物理ホスト、論理ホスト共通のデーモンであるため、jbs\_stop コマンドでは、ログファイルトラップ管理デーモンを終了できません。jbs\_stop コマンドの実行後、jevlogdstop コマンドを実行すれば、ログファイルトラップ管理デーモンを終了できますが、論理ホストでログファイルトラップ管理デーモンを利用していた場合、論理ホスト用のログファイルトラップ機能が使用できなくなります。jevlogdstop コマンドを実行する場合は、論理ホストでログファイルトラップ機能を使用していないか十分に確認してください。

JP1/Base のプロセス群に停止要求を出したあと、戻り値 0 で終了します。プロセス群が正しく停止したかどうかは、jbs\_stop コマンドの終了後、jbs\_spmdd\_status コマンドで確認してください。

### 戻り値

0	正常終了
1	引数が二つ以上指定されている

## jbs\_stop.cluster (UNIX 限定)

### 機能

クラスタシステムで JP1/Base (イベントサービスやユーザー管理機能を含むプロセス管理機能)を終了するコマンドです。このコマンドを実行する場合は、クラスタソフトにこのコマンドを登録する必要があります。

### 形式

jbs\_stop.cluster **論理ホスト名**

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/etc/opt/jp1base/

### 引数

#### 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。

### 注意事項

ログファイルトラップ管理デーモンは、物理ホスト、論理ホスト共通のデーモンであるため、jbs\_stop.cluster コマンドでは、ログファイルトラップ管理デーモンを終了できません。jbs\_stop.cluster コマンドの実行後、jevlogdstop コマンドを実行すれば、ログファイルトラップ管理デーモンを終了できますが、物理ホストでログファイルトラップ管理デーモンを利用していた場合、物理ホスト用のログファイルトラップ機能が使用できなくなります。jevlogdstop コマンドを実行する場合は、物理ホストでログファイルトラップ機能を使用していないか十分に確認してください。

JP1/Base のプロセス群に停止要求を出したあと、戻り値 0 で終了します。プロセス群が正しく停止したかどうかは、jbs\_stop.cluster コマンドの終了後、jbs\_spmd\_status コマンドで確認してください。

停止処理時にも監視処理を行うクラスタシステムでは、JP1/Base (イベントサービスやユーザー管理機能を含むプロセス管理機能)を終了するコマンドを下記の手順で変更してください。

```
cd /etc/opt/jp1base
```

```
cp -p jbs_stop.cluster.retry.model jbs_stop.cluster
```

### 戻り値

0	正常終了
1	引数が二つ以上指定されている



## jbsaclint

### 機能

認証サーバに登録されている, JP1 ユーザーの操作権限に関する定義情報を表示するコマンドです。定義情報とは, アクセス権限レベル (JP1\_AccessLevel) ファイルおよびユーザー権限レベル (JP1\_UserLevel) ファイルを表します。認証サーバ上でこのコマンドを実行すると, JP1 ユーザーの操作権限に関する定義情報が整理されて, 標準出力で出力されます。

### 形式

jbsaclint [-h **論理ホスト名**]

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に, このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合, 環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合, 物理ホスト名が仮定されます。

### 注意事項

定義情報を表示させたい認証サーバ上でこのコマンドを実行してください。

### 戻り値

0	正常終了
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
32	通信機能の初期化中にエラーが発生した
128	内部処理で矛盾を生じた (C++ の例外)
255	そのほかのエラー

## jbsacreload

### 機能

JP1 ユーザーの操作権限に関する定義情報を認証サーバに再読み込みさせ、反映させるコマンドです。定義情報とは、アクセス権限レベル (JP1\_AccessLevel) ファイルおよびユーザー権限レベル (JP1\_UserLevel) ファイルを表します。このコマンドを実行すると、JP1 ユーザーの操作権限に関する定義情報を再読み込みさせ、反映させます。

### 形式

```
jbsacreload [-h 論理ホスト名]  
            [-s 認証サーバ名]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。指定した論理ホストに設定されている、JP1 ユーザーの操作権限に関する定義情報の再読み込みが行われます。

#### -s 認証サーバ名

JP1 ユーザーの操作権限に関する定義情報を再読み込みしたい認証サーバを指定します。このオプションを指定した場合、-h オプションは無視されます。

### 注意事項

-h オプションと-s オプションを同時に指定した場合は、-s オプションの指定が優先されます。どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されているときは、論理ホスト名として環境変数 JP1\_HOSTNAME で指定されているホスト名が仮定されます。また、どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されていないときは、物理ホストに対して指定された認証サーバの操作権限に関する定義情報を再読み込みします。

### 戻り値

0	正常終了
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
8	認証サーバが未起動または応答しない
16	認証サーバ側の処理でエラーが発生した
32	通信機能の初期化中にエラーが発生した
128	内部処理で矛盾を生じた (C++ の例外)
255	そのほかのエラー

## jbsadduser

### 機能

JP1 ユーザーを登録するコマンドです。このコマンドは、自ホストを認証サーバとして使用する場合だけ使用します。このコマンドを実行すると、登録する JP1 ユーザーに対するパスワードの入力が促されます。-p オプションを指定した場合は、パスワードの入力は促されずに指定したパスワードが登録されます。パスワードに指定できる文字数は 6 バイト以上 32 バイト以内です。-ds オプションを指定した場合は、パスワードを入力しないで連携ユーザーを登録できます。

### 形式

```
jbsadduser [-h 論理ホスト名]  
           [-s 認証サーバ名]  
           [-p パスワード | -ds] (-ds オプションは Windows 限定※)  
           JP1 ユーザー名
```

### 注※

-ds オプションは、Windows (Windows Server 2003 (IPF) および Windows Vista を除く) だけで使用できません。

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。指定した論理ホストに設定されている認証サーバに JP1 ユーザーを登録します。

#### -s 認証サーバ名

JP1 ユーザーを登録したい認証サーバを指定します。このオプションを指定した場合は、-h オプションの指定は無視されます。

#### -p パスワード

標準ユーザーのパスワードを指定します。パスワードに指定できる文字数は、6 バイト以上 32 バイト以内です。また、パスワードに使用できる文字は、¥" :とタブ・スペースを除く ASCII 文字だけです。このオプションを指定した場合、パスワードの入力は促されずに指定したパスワードが登録されます。

#### -ds

このオプションは、Windows (Windows Server 2003 (IPF) および Windows Vista を除く) だけで使用できます。連携ユーザーを登録する場合に指定します。このオプションを指定して登録した JP1 ユーザーがログインするときは、ディレクトリサーバが管理しているパスワードを入力してください。

#### JP1 ユーザー名

JP1 ユーザーとして登録したいユーザー名を指定します。JP1 ユーザー名には、小文字しか使用できません。指定できる文字数は、1 バイト以上 31 バイト以内です。また、ユーザー名に使用できる文字は、\* / ¥ " ' ^ [ ] { } ( ) : ; | = , + ? < > とタブ・スペースを除く ASCII 文字だけです。

## 注意事項

- -h オプションによる論理ホスト名の指定, および-s オプションによる認証サーバ名の指定は, JP1 ユーザー名の前に指定してください。
- -h オプションと-s オプションを同時に指定した場合は, -s オプションの指定が優先されます。どちらのオプションも省略した場合で, 環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されているときは, 論理ホスト名として環境変数 JP1\_HOSTNAME で指定されているホスト名が仮定されます。また, どちらのオプションも省略した場合で, 環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されていないときは, 物理ホストに対して指定された認証サーバに JP1 ユーザーを登録します。

## 戻り値

0	正常終了
1	ユーザーは登録済み
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
32	不正なパスワード
128	内部処理で矛盾を生じた(C++の例外)
255	そのほかのエラー

## jbsadmin (Windows Vista 限定)

### 機能

JP1/Base 管理者コンソールを起動します。

JP1/Base 管理者コンソールでは、JP1/Base が提供する管理者権限が必要なコマンドを実行できます。

### 形式

jbsadmin

### 実行権限

Administrators 権限

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

## jbsblockadesrv

### 機能

認証サーバへの接続を閉塞状態にするコマンドです。このコマンドを実行すると、オプションで指定した認証サーバへの接続が閉塞状態になります。

### 形式

jbsblockadesrv [-h **論理ホスト名**]  
                  -s **認証サーバ名**

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、接続先認証サーバを設定している論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -s 認証サーバ名

閉塞状態にしたい認証サーバ名を指定します。

### 戻り値

0	認証サーバを閉塞状態にした
1	認証サーバはすでに閉塞状態になっている
17	指定された認証サーバは閉塞状態にできない
0, 1, 17 以外	異常終了

### 使用例

プライマリー認証サーバが server1, セカンダリー認証サーバが server2 で, jbsblockadesrv コマンドを実行して server2 を閉塞状態にすると, 次のように表示されます。

```
jbsblockadesrv -s server2
```

```
プライマリー:server1
```

```
セカンダリー:server2:閉塞中
```

## jbschgds (Windows 限定)

### 機能

連携するディレクトリサーバを一時的に変更します。

このコマンドは, ディレクトリサーバ連携機能を設定した認証サーバ上で実行してください。

### 形式

```
jbschgds [-h 論理ホスト名]
          {-f 定義ファイル | -d}
```

### 実行権限

Administrators 権限

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に, このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合, 環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合, 物理ホスト名が仮定されます。

#### -f 定義ファイル

連携するディレクトリサーバを一時的に変更するための情報を定義したファイルを指定します。定義ファイルは任意の名称および任意の場所に格納できます。

定義ファイルの記述形式については「[4.3.1\(4\) 連携するディレクトリサーバを変更する](#)」を参照してください。

#### -d

連携するディレクトリサーバの一時的な変更を解除するときに指定します。

### 戻り値

0	正常終了
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
64	実行権限がない
128	内部処理で矛盾を生じた (C++の例外)
255	その他のエラー

## jbschgpasswd

### 機能

登録済みの JP1 ユーザーのパスワードを変更するコマンドです。このコマンドを実行すると、以前設定したパスワードと新しく設定するパスワードの入力が促されます。パスワードに指定できる文字数は、6 バイト以上 32 バイト以内で、新旧のパスワードが同一であってもかまいません。

### 形式

```
jbschgpasswd [-h 論理ホスト名]  
              [-s 認証サーバ名]  
              [-op 旧パスワード -np 新パスワード]  
              JP1 ユーザー名
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。指定した論理ホストに設定されている認証サーバに登録された JP1 ユーザーのパスワードを変更します。

#### -s **認証サーバ名**

JP1 ユーザーのパスワードを変更したい認証サーバを指定します。このオプションを指定した場合は、-h オプションの指定は無視されます。

#### -op **旧パスワード**

変更したい旧パスワードを指定します。-np オプションと同時に指定してください。-op オプションと-np オプションを指定すると、パスワードの入力が促されずに、-np オプションで指定したパスワードが登録されます。

#### -np **新パスワード**

新しいパスワードを指定します。-op オプションと同時に指定してください。

#### **JP1 ユーザー名**

パスワードを変更したい JP1 ユーザー名を指定します。

### 注意事項

- -h オプションによる論理ホスト名の指定、および-s オプションによる認証サーバ名の指定は、JP1 ユーザー名の前に指定してください。
- -h オプションと-s オプションを同時に指定した場合は、-s オプションの指定が優先されます。どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されているときは、論理ホスト名として環境変数 JP1\_HOSTNAME で指定されているホスト名が仮定されます。また、どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されていないときは、物理ホストの認証サーバに登録された JP1 ユーザーのパスワードを変更します。

### 戻り値

0	正常終了
1	ユーザーが存在しない, 旧パスワード誤りまたは連携ユーザーのパスワードを変更しようとした
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
8	認証サーバが未起動または応答しない
16	認証サーバ側の処理でエラーが発生した
32	不正なパスワード
128	内部処理で矛盾を生じた(C++の例外)
255	そのほかのエラー

## jbschkds (Windows 限定)

### 機能

ディレクトリサーバ連携機能を使用しているときに、ディレクトリサーバ連携機能の設定内容、ディレクトリサーバへの接続結果およびユーザー認証結果を表示します。表示する内容を次に示します。

- ディレクトリサーバ連携機能が有効かどうか
- ディレクトリサーバ名
- ポート番号
- SSL を使用するかどうか
- 識別名
- ディレクトリサーバへの接続結果
- ユーザー認証結果

このコマンドは、ディレクトリサーバ連携機能を設定した認証サーバ上で実行してください。

### 形式

```
jbschkds [-h 論理ホスト名]
          [-u ユーザー名 -p パスワード]
```

### 実行権限

Administrators 権限

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -u ユーザー名

ディレクトリサーバで認証するユーザー名を指定します。

#### -p パスワード

-u オプションで指定したユーザーのパスワードを指定します。



## 戻り値

0	正常終了
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
64	実行権限がない
128	内部処理で矛盾を生じた(C++の例外)
255	その他のエラー

## 使用例

出力例を次に示します。

ディレクトリサーバ連携機能が無効のとき

```
>jbschkds
```

```
ディレクトリサーバ連携機能は無効です
```

ディレクトリサーバ連携機能が有効でユーザー認証に成功したとき

```
>jbschkds -u jp1user -p password
```

```
ディレクトリサーバの設定内容を表示します
```

```
ディレクトリサーバ名 host-A
```

```
ポート番号 636
```

```
SSL 使用する
```

```
識別名 CN=jp1user,CN=Users,DC=netmanage,DC=local
```

```
ディレクトリサーバに接続できました
```

```
認証に成功しました
```

ディレクトリサーバ連携機能が有効でディレクトリサーバに接続できないとき

```
>jbschkds
```

```
ディレクトリサーバの設定内容を表示します
```

```
ディレクトリサーバ名 host-A
```

```
ポート番号 636
```

```
SSL 使用する
```

```
KAVA5810-E ディレクトリサーバに接続できませんでした
```

```
サーバーがダウンしています
```

## jbsgetcnf

### 機能

共通定義情報の内容をすべて採取するコマンドです。このコマンドを実行すると、共通定義情報を読み出し、標準出力に出力します。

### 形式

jbsgetcnf [-h **論理ホスト名**] > **退避ファイル名**

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、定義情報を採取したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、物理ホスト名が仮定されます。

なお、このコマンドでは環境変数 JP1\_HOSTNAME の論理ホスト名は使用しません。このため、クラスタシステムで使用する場合には論理ホスト名を必ずこのオプションで指定してください。このオプション以外の誤った引数を指定した場合は、誤った引数以降はすべて無視します。

#### **退避ファイル名**

共通定義情報を退避するファイル名を指定します。

### 戻り値

0	正常終了
-1	異常終了

## jbsgetumap

### 機能

登録済みのユーザーマッピング情報の一覧を表示するコマンドです。

このコマンドを実行すると、登録済みのユーザーマッピング情報を読み込み、jbsmkumap コマンドで登録したマッピング定義 (jp1BsUmap.conf) ファイルの形式で標準出力に出力します。

### 形式

jbsgetumap [-h 論理ホスト名]

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、ユーザーマッピング情報の一覧を表示したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

### 戻り値

1	正常終了
0	異常終了

## jbshostsexport

### 機能

共通定義情報に登録された jp1hosts 情報を採取するコマンドです。このコマンドを実行すると、共通定義情報から jp1hosts 情報だけを読み出し、標準出力に出力します。

### 形式

jbshostsexport [-h **論理ホスト名**] > **jp1hosts 定義ファイル名**

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、jp1hosts 情報を採取したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### jp1hosts 定義ファイル名

jp1hosts 情報を採取するファイル名を指定します。

### 戻り値

0	正常終了
1	メッセージ処理エラー
2	コマンド引数エラー
3	権限チェックエラー
4	共通定義エラー

## jbshostsimport

### 機能

jp1hosts 情報を共通定義情報に登録するコマンドです。なお、共通定義情報に登録される jp1hosts 情報内のホストの順序は不定です。

### 形式

```
jbshostsimport { {-o|-r} jp1hosts 定義ファイル名 | -d }  
                [-h 論理ホスト名]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### {-o|-r} **jp1hosts 定義ファイル名**

共通定義情報に登録したい jp1hosts 情報を定義したファイル名を指定します。-o オプションを指定した場合は、共通定義情報に登録済みの jp1hosts 情報を削除せずに新規に jp1hosts 情報を登録します (同一ホストが存在した場合は上書きします)。-r オプションを指定した場合は、共通定義情報に登録済みの jp1hosts 情報をすべて削除してから jp1hosts 情報を登録します。jp1hosts 定義ファイルの記述形式については「[11.3.2\(1\) jp1hosts 定義ファイルの形式](#)」を参照してください。

#### -d

共通定義情報に登録された jp1hosts 情報を削除したい場合に指定します。

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、jp1hosts 情報を登録または削除したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

### 注意事項

JP1/Base を起動しているときは、このコマンドを使用しないでください。

### 戻り値

0	正常終了
1	メッセージ処理エラー
2	コマンド引数エラー
3	権限チェックエラー
4	共通定義エラー
5	文法エラー
6	ファイル I/O エラー

## jbslistacl

### 機能

登録済みの JP1 ユーザーの操作権限を表示するコマンドです。

### 形式

```
jbslistacl [-h 論理ホスト名]
            [-s 認証サーバ名]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合: インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合: /opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。指定した論理ホストに設定されている認証サーバに登録されている JP1 ユーザーの操作権限が表示されます。

#### -s 認証サーバ名

登録済み JP1 ユーザーの操作権限を表示したい認証サーバを指定します。このオプションを指定した場合は、-h オプションの指定は無視されます。

### 注意事項

-h オプションと-s オプションを同時に指定した場合は、-s オプションの指定が優先されます。どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されているときは、論理ホスト名として環境変数 JP1\_HOSTNAME で指定されているホスト名が仮定されます。また、どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されていないときは、物理ホストの認証サーバの登録済み JP1 ユーザーが表示されます。

### 戻り値

0	正常終了
1	認証サーバにユーザーが登録されていない
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
8	認証サーバが未起動または応答しない
16	認証サーバ側の処理でエラーが生じた
32	通信機能の初期化中にエラーが生じた
128	内部処理で矛盾を生じた (C++の例外)
255	そのほかのエラー

# jbslistsrv

## 機能

接続先認証サーバを確認するコマンドです。このコマンドを実行すると共通定義情報に設定されている接続先認証サーバ名が画面に表示されます。

## 形式

jbslistsrv [-h **論理ホスト名**]

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、接続先認証サーバを設定している論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

## 戻り値

0	正常終了
0 以外	異常終了

## 使用例

使用例を次に示します。

(例 1)

プライマリ認証サーバが server1, セカンダリ認証サーバが server2 の場合に、jbslistsrv コマンドを実行すると、次のように表示されます。

```
jbslistsrv
```

```
プライマリ:server1
```

```
セカンダリ:server2
```

(例 2)

プライマリ認証サーバが server1, セカンダリ認証サーバが server2 で server1 が閉塞状態であった場合に、jbslistsrv コマンドを実行すると、次のように表示されます。

```
jbslistsrv
```

```
プライマリ:server1:閉塞中
```

```
セカンダリ:server2
```

(例 3)

接続先認証サーバ (認証サーバ名: server1) を 1 台しか設定していなかった場合に、jbslistsrv コマンドを実行すると、次のように表示されます。

```
jbslistsrv
```

```
プライマリ:server1
```

## jbslistuser

### 機能

登録済み JP1 ユーザーの一覧を表示するコマンドです。

### 形式

```
jbslistuser [-h 論理ホスト名]
              [-s 認証サーバ名]
              [-ld]
              [-ds] (Windows 限定※)
```

### 注※

-ds オプションは、Windows (Windows Server 2003 (IPF) および Windows Vista を除く) だけで使用できません。

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合: インストール先フォルダ¥jplbase¥bin¥

UNIX の場合: /opt/jplbase/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。指定した論理ホストに設定されている認証サーバの登録済み JP1 ユーザーが表示されます。

#### -s 認証サーバ名

登録済み JP1 ユーザーを表示したい認証サーバを指定します。このオプションを指定した場合は、-h オプションの指定は無視されます。

#### -ld

JP1 ユーザーごとに最終更新日付 (yyyy/mm/dd△HH:MM:SS 形式) を出力します。最終更新日付は、JP1 ユーザーの登録した日付またはパスワードを変更した日付です。なお、08-10 へバージョンアップする前に登録された JP1 ユーザー、または新規インストールで初期設定される JP1 ユーザー、または連携ユーザーの最終更新日付はハイフン(----/--/--:--:--:--) で表示されます。[JP1/Base 環境設定] ダイアログボックス、またはパスワード変更コマンド (jbschgpasswd) でパスワードを変更したあと、最終更新日付が表示されます。

-ds オプションを指定した場合は、このオプションの指定は無視されます。

#### -ds

このオプションは、Windows (Windows Server 2003 (IPF) および Windows Vista を除く) だけで使用できます。

連携ユーザーだけを表示します。

### 注意事項

- -h オプションと-s オプションを同時に指定した場合は、-s オプションの指定が優先されます。どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されているときは、論理ホスト名として環境変数 JP1\_HOSTNAME で指定されているホスト名が仮定されます。また、どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されていないときは、物理ホストの認証サーバの登録済み JP1 ユーザーが表示されます。
- -ld オプションと-ds オプションを同時に指定した場合は、-ds オプションだけが有効になります。



## 戻り値

0	正常終了
1	認証サーバにユーザーが登録されていない
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
8	認証サーバが未起動または応答しない
16	認証サーバ側の処理でエラーが発生した
128	内部処理で矛盾を生じた(C++の例外)
255	そのほかのエラー

## 使用例

標準ユーザーとして jpladmin および jpladmin2, 連携ユーザーとして testuser1 を認証サーバに登録している場合の出力例を次に示します。

オプションを何も指定しないとき

```
>jbslistuser
jpluser account[0]:jpladmin
jpluser account[1]:jpladmin2
jpluser account[2]:testuser1
正常終了しました
```

-ld オプションを指定したとき

```
>jbslistuser -ld
JP1User Name                               Last Modified Time
jpladmin                                   ----/--/-- ---:---:--
jpladmin2                                  2007/01/01 09:00:05
testuser1                                  2007/01/01 09:00:03
正常終了しました
>
```

タイトル行  
最終更新日

JP1 ユーザー名

-ds オプションを指定したとき

```
>jbslistuser -ds
jpluser account[0]:testuser1
正常終了しました
```

標準ユーザーとして jpladmin および jpladmin2 を認証サーバに登録し, 連携ユーザーとして何も登録していない場合の出力例を次に示します。

-ds オプションを指定したとき

```
>jbslistuser -ds
JP1 ユーザーアカウントがありません
異常終了しました
```

## jbsmkpass (Windows 限定)

### 機能

パスワード管理情報を一括して登録するためのバッチ用コマンドです。このコマンドを実行すると、共通定義情報に登録されていたパスワード管理情報がいったんすべて削除され、パスワード定義ファイルに記述したパスワード管理情報が共通定義情報に一括登録されます。

### 形式

```
jbsmkpass [-h 論理ホスト名 ]  
           -f パスワード定義ファイル
```

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、パスワード管理情報を登録する論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -f パスワード定義ファイル

パスワード管理情報を読み込みたいパスワード定義ファイルを指定します。パスワード定義ファイルに記述された文法がチェックされ、書式に誤りがあった場合、エラーを返します。パスワード管理情報が正しい場合、共通定義情報にパスワード定義ファイルの内容を一括登録します。パスワード定義ファイルの記述形式については、「[4.2.7\(2\) OSユーザーのパスワード管理情報を一括して設定する](#)」を参照してください。

### 注意事項

- このコマンドを実行すると、共通定義情報に登録したパスワード管理情報がいったんすべて削除され、パスワード定義ファイルに記述したパスワード管理情報が共通定義情報に一括登録されます。登録済みパスワード管理情報を残したい場合は、パスワード定義ファイルに登録済みパスワード情報を記述してください。
- Windows では、このコマンドを実行する OS ユーザーおよびユーザーマッピングされる OS ユーザーそれぞれに Windows 特有のユーザー権利を与える必要があります。詳細については、「[4.2.5 ユーザーマッピングを設定する前に](#)」を参照してください。

### 戻り値

1	正常終了
0	異常終了

## jbsmkumap

### 機能

ユーザーマッピング定義 (jp1BsUmap.conf) ファイルの情報を、共通定義情報に登録します。このコマンドを実行すると、共通定義情報に登録されていたマッピング情報がいったんすべて削除され、ユーザーマッピング定義ファイルの情報が共通定義情報に登録されます。ユーザーマッピング定義ファイルの書式に誤りがあった場合、エラーを返します。

### 形式

```
jbsmkumap [-h 論理ホスト名]  
          [-f ユーザーマッピング定義ファイル名]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、ユーザーマッピング情報を登録する論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -f ユーザーマッピング定義ファイル名

マッピング情報を記述した定義ファイルのファイル名を指定します。このオプションを省略した場合は、デフォルトのユーザーマッピング定義 (jp1BsUmap.conf) ファイルの情報を、共通定義情報に登録します。ユーザーマッピング定義ファイルの形式については、Windows の場合「[4.2.7\(5\) ユーザーマッピング情報を一括して設定する](#)」を、UNIX の場合「[4.4.5 ユーザーマッピングを設定する](#)」を参照してください。

### 注意事項

- このコマンドを実行すると、共通定義情報に登録されていたマッピング情報がいったんすべて削除され、マッピング定義ファイルの情報が共通定義情報に登録されます。登録済みのマッピング情報を残したい場合は、マッピング定義ファイルに登録済みマッピング情報を記述してください。
- Windows 2000 では、このコマンドを実行する OS ユーザーに Windows 特有のユーザー権利を与える必要があります (Windows XP Professional, Windows Server 2003 および Windows Vista では不要です)。詳細については、「[4.2.5 ユーザーマッピングを設定する前に](#)」を参照してください。
- このコマンドで設定した内容を確認する場合は、jbsgetumap コマンドを使用してください。

### 戻り値

1	正常終了
0	異常終了

## jbspassmgr (Windows 限定)

### 機能

パスワード管理情報に対して各種操作できるダイアログボックスを表示するコマンドです。パスワード管理情報に対して、次の操作ができます。

- 新規ユーザーの登録
- パスワードの変更
- 登録ユーザーの削除

このコマンドを実行すると、[パスワード管理]ダイアログボックスが表示されます。なお、このパスワード管理情報に登録または削除するユーザーは、OS に登録されているユーザーです。

### 形式

jbspassmgr

### 実行権限

Administrators 権限

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

### 注意事項

Windows では、このコマンドを実行する OS ユーザーおよびユーザーマッピングされる OS ユーザーそれぞれに Windows 特有のユーザー権利を与える必要があります。詳細については、「[4.2.5 ユーザーマッピングを設定する前に](#)」を参照してください。

## jbsrmacl

### 機能

指定した JP1 ユーザーに設定されている操作権限をすべて削除するコマンドです。

### 形式

jbsrmacl [-h 論理ホスト名]

[-s 認証サーバ名]

-u JP1 ユーザー名

[-i]

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合: インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合: /opt/jp1base/bin/

### 引数

**-h 論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、JP1 ユーザーの操作権限を削除したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

**-s 認証サーバ名**

操作権限を削除したい認証サーバ名を指定します。このオプションを指定した場合は、-h オプションの指定は無視されま  
す。

### **-u JP1 ユーザー名**

操作権限を削除したい JP1 ユーザー名を指定します。

### **-i**

このオプションを指定すると、指定した JP1 ユーザーの操作権限を削除する前に確認メッセージを表示します。メッセージ  
に対して「y」または「Y」を指定した場合だけ削除処理を実行します。

### **注意事項**

-h オプションと-s オプションを同時に指定した場合は、-s オプションの指定が優先されます。どちらのオプションも省略し  
た場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されているときは、論理ホスト名として環境変数 JP1\_HOSTNAME で指定さ  
れているホスト名が仮定されます。また、どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されて  
いないときは、物理ホストに対して操作権限を登録します。

### **戻り値**

0	正常終了
1	認証サーバにユーザーが登録されていない
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
8	認証サーバが未起動または応答しない
16	認証サーバ側の処理でエラーが生じた
32	通信機能の初期化中にエラーが生じた
128	内部処理で矛盾を生じた(C++例外の場合)
255	そのほかのエラー

## jbsrmumap

### 機能

共通定義情報からユーザーマッピング情報を個別に削除するコマンドです。

### 形式

```
jbsrmumap [-h 論理ホスト名]
           {-u JP1 ユーザー名 | -ua}
           [-sh サーバホスト名 | -sha]
           [-i]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、ユーザーマッピング情報を削除したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -u JP1 ユーザー名

ユーザーマッピング情報を削除したい JP1 ユーザー名を指定します。

#### -ua

JP1 ユーザー名に「\*」を指定したマッピング情報を削除する場合に指定します。

#### -sh サーバホスト名

-u オプションに指定する JP1 ユーザーに設定されているサーバホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、-u オプションに指定した JP1 ユーザーのマッピング情報がすべて削除されます。-sha オプションと同時に指定しないでください。

#### -sha

-u オプションに指定する JP1 ユーザーのサーバホスト名に、「\*」が指定されているマッピング情報を削除します。-sh オプションと同時に指定しないでください。

#### -i

このオプションを指定すると、ユーザーマッピング情報を削除する前に確認メッセージを表示します。メッセージに対して「y」または「Y」を指定した場合だけ削除処理を実行します。

### 戻り値

0	正常終了
1	引数誤り
2	コマンド実行ユーザーに権限がない
5	共通定義アクセスエラー

6	メモリーなどシステム・リソースが不足した
10	共通定義ロック取得エラー
255	そのほかのエラー

## jbsrmumappass (Windows 限定)

### 機能

JP1/Base のパスワード管理情報に登録されている OS ユーザーを削除するコマンドです。このコマンドを実行すると、パスワード管理情報に登録されている OS ユーザーを個別に削除できます。

### 形式

```
jbsrmumappass [-h 論理ホスト名]
               -u OS ユーザー名
```

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、OS ユーザーを削除したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -u OS ユーザー名

パスワード管理情報から削除したい OS ユーザー名を指定します。

### 戻り値

0	正常終了
0 以外	異常終了



# jbsrmuser

## 機能

JP1 ユーザーを削除するコマンドです。

## 形式

```
jbsrmuser [-i]
           [-h 論理ホスト名]
           [-s 認証サーバ名]
           JP1 ユーザー名
```

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合: **インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合: /opt/jp1base/bin/

## 引数

-i

このオプションを指定すると、指定したユーザー名を削除する前に確認メッセージを表示します。メッセージに対して「y」または「Y」を指定した場合だけ削除処理を実行します。

### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、このコマンドを実行させたい論理ホスト名を指定します。指定した論理ホストに設定されている認証サーバの JP1 ユーザーを削除します。

### -s 認証サーバ名

JP1 ユーザーを削除したい認証サーバを指定します。このオプションを指定した場合は、-h オプションの指定は無視されます。

### JP1 ユーザー名

削除したい JP1 ユーザー名を指定します。

## 注意事項

- -h オプションによる論理ホスト名の指定、および-s オプションによる認証サーバ名の指定は、JP1 ユーザー名の前に指定してください。
- -h オプションと-s オプションを同時に指定した場合は、-s オプションの指定が優先されます。どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されているときは、論理ホスト名として環境変数 JP1\_HOSTNAME で指定されているホスト名が仮定されます。また、どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されていないときは、物理ホストに対して指定された認証サーバの JP1 ユーザーを削除します。

## 戻り値

0	正常終了
1	ユーザーは削除済み
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
8	認証サーバが未起動または応答しない

16	認証サーバ側の処理でエラーが発生した
32	通信機能の初期化中にエラーが発生した
128	内部処理で矛盾を生じた(C++の例外)
255	そのほかのエラー

## jbsrt\_del

### 機能

このコマンドを実行したホストの構成定義情報を削除します。

### 形式

jbsrt\_del [-h **論理ホスト名**]

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**Base パス**¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、コマンドを実行するホストの論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## jbsrt\_distrib

### 機能

マネージャースト(JP1/IM - Manager インストールホスト)で実行するコマンドです。

構成定義ファイルに定義した情報を, コマンドを実行したホストの下位にあるホストに配布し, 定義を有効にします。

すでに構成定義が設定されている場合は, 既存の構成定義情報を削除してから, 構成定義を配布します。

このコマンドを実行するときには, 構成定義を配布する全ホストで, JP1/Base が起動している必要があります。配布先のホストで, JP1/Base が起動していなかった場合, そのホストへは構成定義が配布されません。この場合, コマンドの実行時に, 構成情報を設定できないというメッセージが出力されます。そのまま処理を続行すると, 残りのホストには定義が配布されます。定義を配布できなかったホストへ構成情報を配布するには, そのホストの JP1/Base を起動してから, 再度 jbsrt\_distrib コマンドを実行します。構成情報を削除しますか, というメッセージが出力されるので n を入力し, 定義を配布します。これで, システム全体への定義配布が完了します。

このコマンドが参照する構成定義ファイルは, 次のファイルです。

Windows の場合

**Base パス**¥conf¥route¥jbs\_route.conf

**共有フォルダ**¥jp1base¥conf¥route¥jbs\_route.conf(-h オプション指定時)

UNIX の場合

/etc/opt/jp1base/conf/route/jbs\_route.conf

**共有ディレクトリ**/jp1base/conf/route/jbs\_route.conf(-h オプション指定時)

定義ファイルの形式については, マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager リファレンス」(定義ファイルの章)を参照してください。

### 形式

jbsrt\_distrib [-h **論理ホスト名**]

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**Base パス**¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に, コマンドを実行するホストの論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合, 環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合, 物理ホスト名が仮定されます。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## jbsrt\_get

### 機能

このコマンドを実行したホストの構成定義情報を表示します。

なお、クラスタシステムの待機系ホストで `-h` オプションを指定してこのコマンドを実行すると、定義情報が表示されません。

この場合は、実行系ホストでコマンドを再実行してください。

### 形式

`jbsrt_get [-h 論理ホスト名]`

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**Base パス**¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### `-h` 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、コマンドを実行するホストの論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 `JP1_HOSTNAME` に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 `JP1_HOSTNAME` を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

### 出力例

このコマンドの出力例を次に示します。

**\*\* 構成定義情報 \*\***

上位ホスト : parent\_host

自ホスト : myhost

下位ホスト : child\_host1

: child\_host2

: [child\_host1]

: child\_host3

## jbsrt\_sync

### 機能

マネージャースト(JP1/IM - Manager インストールホスト)で実行するコマンドです。

下位のホストから構成定義情報を収集し、システム内の構成定義を更新します。システム構成定義を分割して定義したあとに、このコマンドを実行します。

### 形式

jbsrt\_sync [-h **論理ホスト名**]

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**Base パス**¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、コマンドを実行するホストの論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

# jbssetacl

## 機能

JP1 ユーザーの操作権限を個別に登録するコマンドです。

## 形式

```
jbssetacl [-h 論理ホスト名]
           [-s 認証サーバ名]
           -f 定義ファイル名
           [-no]
```

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、オプションで指定した論理ホストに設定されているプライマリー認証サーバに登録します。

### -s 認証サーバ名

JP1 ユーザーの操作権限を登録したい認証サーバを指定します。このオプションを省略した場合は、-h オプションの指定は無視されます。

### -f 定義ファイル

JP1 ユーザーの操作権限を記述した定義ファイルのファイル名を指定します。定義ファイルの形式は、ユーザー権限レベルファイル (JP1\_UserLevel) の形式と同じです。定義ファイルは任意の名称および任意の場所に格納できます。

### -no

このオプションを指定すると、指定した JP1 ユーザーに対してすでに操作権限が設定されていた場合、エラーを返し、その JP1 ユーザーの操作権限は登録されません。

## 注意事項

-h オプションと-s オプションを同時に指定した場合は、-s オプションの指定が優先されます。どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されているときは、論理ホスト名として環境変数 JP1\_HOSTNAME で指定されているホスト名が仮定されます。また、どちらのオプションも省略した場合で、環境変数 JP1\_HOSTNAME が設定されていないときは、物理ホストに対して操作権限を登録します。

## 戻り値

0	正常終了
2	引数誤り
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
8	認証サーバが未起動または応答しない
16	認証サーバ側の処理でエラーが生じた

32	通信機能の初期化中にエラーが生じた
64	ファイルフォーマットエラー
128	内部処理で矛盾を生じた (C++ 例外)
255	そのほかのエラー

## **jbssetcnf**

### **機能**

指定した定義ファイル内の情報を共通定義情報に登録するコマンドです。

### **形式**

jbssetcnf **定義ファイル名**

### **実行権限**

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### **格納先ディレクトリ**

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### **引数**

#### **定義ファイル名**

共通定義情報に登録したい定義ファイルを指定します。定義ファイル名はフルパスで指定してください。

### **戻り値**

0	正常終了 (引数にファイル名を指定しなかった場合もこの値が返される)
-1	異常終了



## jbssetumap

### 機能

共通定義情報にユーザーマッピング情報を個別に登録するコマンドです。

### 形式

定義ファイルを使用する場合

```
jbssetumap [-h 論理ホスト名]
             -f 定義ファイル名
             [-no]
```

定義ファイルを使用しない場合

```
jbssetumap [-h 論理ホスト名]
             {-u JP1 ユーザー名 | -ua}
             {-sh サーバホスト名 | -sha}
             -o OS ユーザー名[,OS ユーザー名...]
             [-no]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、ユーザーマッピング情報を登録したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### -f 定義ファイル名

登録または変更したいマッピング情報を記述した定義ファイルのファイル名を指定します。このオプションを指定した場合、-u オプション、-sh オプション、-sha オプションは指定できません。

#### -u JP1 ユーザー名

マッピング情報を登録または変更したい JP1 ユーザー名を指定します。

#### -ua

JP1 ユーザー名に「\*」を指定します。-u オプションと同時に指定できません。

#### -sh サーバホスト名

JP1 ユーザーが操作命令を出すサーバホスト名を指定します。-sha オプションと同時に指定できません。

#### -sha

サーバホスト名に「\*」を指定します。-sh オプションと同時に指定できません。

#### -o OS ユーザー名

JP1 ユーザーにマッピングしたい OS ユーザー名を指定します。

#### -no

このオプションを指定すると、指定した JP1 ユーザーに対して、すでにマッピング情報が登録されていた場合、エラーを返し、その JP1 ユーザーのマッピング情報は登録されません。

#### 注意事項

- Windows 2000 では、このコマンドを実行する OS ユーザーに Windows 特有のユーザー権利を与える必要があります (Windows XP Professional, Windows Server 2003 および Windows Vista では不要です)。詳細については、「[4.2.5 ユーザーマッピングを設定する前に](#)」を参照してください。
- このコマンドで設定した内容を確認する場合は、jbsgetumap コマンドを実行してください。

#### 戻り値

0	正常終了
1	引数誤り
2	コマンド実行ユーザーに権限がない
3	ユーザーマッピング定義ファイル読み込みエラー
4	ユーザーマッピング定義ファイルの文法エラー
5	共通定義アクセスエラー
6	メモリーなどシステム・リソースが不足した
10	共通定義ロック取得エラー
255	そのほかのエラー

## jbsssetusrsv (UNIX 限定)

### 機能

認証サーバ(プライマリー認証サーバおよびセカンダリー認証サーバ)を指定するコマンドです。JP1/IM および JP1/AJS2 を使用する場合に使用します。

このコマンドは、次に示すホスト上で実行してください。

- 認証サーバとして使用するホスト
- JP1/IM - Manager, JP1/AJS2 - Manager, JP1/AJS2 - Agent がインストールされたホスト

### 形式

```
jbsssetusrsv [-h 論理ホスト名]  
              プライマリー認証サーバ  
              [セカンダリー認証サーバ]
```

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、認証サーバを登録したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

#### プライマリー認証サーバ

通常時に利用する認証サーバ(プライマリー認証サーバ)を指定します。

#### セカンダリー認証サーバ

予備として稼働する認証サーバ(セカンダリー認証サーバ)を指定します。一つのユーザー認証圏内に認証サーバを2台設置する場合に指定してください。このオプションを省略した場合は、ユーザー認証圏内で稼働する認証サーバは1台だけとなります。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## jbsumappass (Windows 限定)

### 機能

JP1/Base のパスワード管理情報へ新規 OS ユーザーを登録, または登録された OS ユーザーのパスワードを変更するコマンドです。このコマンドを実行すると, 個別に OS ユーザーを登録したり, 個別に登録された OS ユーザーのパスワードを変更したりできます。

### 形式

```
jbsumappass [-h 論理ホスト名]
              -u OS ユーザー名
              [-p パスワード]
```

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に, 新規 OS ユーザーを登録したい, または登録された OS ユーザーのパスワードを変更したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合, 環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合, 物理ホスト名が仮定されます。

#### -u OS ユーザー名

パスワード管理情報に登録したい OS ユーザー名, またはパスワードを変更したい登録済み OS ユーザー名を指定します。

#### -p パスワード

OS ユーザーのパスワードを指定します。OS ユーザーにパスワードがない場合は, このオプションを省略してください。

### 注意事項

Windows では, このコマンドを実行する OS ユーザーおよびユーザーマッピングされる OS ユーザーそれぞれに Windows 特有のユーザー権利を与える必要があります。詳細については, 「[4.2.5 ユーザーマッピングを設定する前に](#)」を参照してください。

### 戻り値

0	OS ユーザーのパスワードを変更した
1	OS ユーザーを登録した
0, 1 以外	異常終了

# jbsunblockadesrv

## 機能

接続先認証サーバの閉塞状態を解除するコマンドです。このコマンドを実行すると、認証サーバへの接続状態(閉塞状態)を解除します。

## 形式

```
jbsunblockadesrv [-h 論理ホスト名]  
                  -s 認証サーバ名
```

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、接続先認証サーバを設定している論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

### -s 認証サーバ名

閉塞状態を解除したい認証サーバ名を指定します。

## 戻り値

0	認証サーバの閉塞状態を解除した
1	認証サーバはすでに閉塞状態ではない
0, 1 以外	異常終了

## 使用例

プライマリ認証サーバが server1、セカンダリ認証サーバが server2 で、server1 が閉塞中になっていた場合に、jbsunblockadesrv コマンドを実行して server1 の閉塞状態を解除すると、次のように表示されます。

```
jbsunblockadesrv -s server1
```

```
プライマリ:server1
```

```
セカンダリ:server2
```

## jbsunsetcnf

### 機能

オプションで指定した論理ホストの共通定義情報を削除するコマンドです。

### 形式

```
jbsunsetcnf [-i]
             -h 論理ホスト名
             [-c コンポーネント名]
             [-n サブキー]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

-i

このオプションを指定すると、指定した論理ホストの共通定義情報を削除する前に確認メッセージを表示します。メッセージに対して「y」または「Y」を指定した場合だけ削除処理を実行します。

**-h 論理ホスト名**

共通定義情報に登録した論理ホストから削除したい論理ホスト名を指定します。

**-c コンポーネント名**

共通定義情報に登録した論理ホストの削除したいコンポーネント名を指定します。

**-n サブキー**

共通定義情報に登録した論理ホストの削除したいコンポーネントのサブキーを指定します。このオプションは、-c オプションを指定している場合だけ有効となります。

### 注意事項

- 通常は、-i オプションを指定してこのコマンドを実行してください。
- JP1/Base を起動しているときは、このコマンドを実行しないでください。

### 戻り値

0	正常終了 (削除対象の論理ホストが存在しなかった場合もこの値が返される)
-1	削除処理に失敗

## jcocmdconv

### 機能

バージョン 7 以前の JP1/Base のコマンド実行の履歴を、バージョン 8 用のコマンド実行履歴ファイルに移行します。jcocmdconv コマンドを実行しないと、バージョン 7 以前に蓄積されたコマンド実行履歴が参照できません。バージョン 7 以前の JP1/Base から、バージョン 8 の JP1/Base にバージョンアップしたあと、一度だけ実行してください。jcocmdconv コマンドは物理ホスト、論理ホストで同時実行できます。

### 形式

jcocmdconv [-h **論理ホスト名**]

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、論理ホスト名を指定します。省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

### 注意事項

- バージョン 8 の JP1/Base, JP1/IM - Manager のインストールのあと、JP1/IM - Manager を起動する前に実行してください。JP1/IM - Manager を起動すると、自動アクションなどでバージョン 8 用のコマンド実行履歴が更新されてしまうおそれがあります。jcocmdconv コマンドの実行前に、コマンド実行履歴ファイルが更新されると、バージョン 7 以前で蓄積した履歴が移行できなくなります。
- jcocmdconv コマンドはコマンド実行履歴のあるマネージャーホスト上で実行してください。
- jcocmdconv コマンドはバージョン 8 の JP1/Base をインストールしたあと、一度だけ実行してください。
- クラスタ運用している場合は、物理ホスト、論理ホストのそれぞれで実行してください。
- 物理ホストで複数の jcocmdconv コマンドは同時に実行できません。

### 戻り値

0	正常終了
2	パラメーターが不正
3	論理ホストがない
4	メモリーエラー
5	ディスクファイルエラー
6	保存先ファイルがすでにある
7	コマンドがシグナルに中断された
8	実行権限エラー
32	共通定義アクセスエラー

41	ファイルアクセスエラー
42	ほかの jcocmdconv コマンドが実行中
255	そのほかのエラー

## jcocmddef

### 機能

コマンド実行環境を設定、参照するためのコマンドです。引数には、マネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) でだけ指定すればよいもの、コマンド実行先ホストでだけ指定すればよいものがあります。これらについては以降の引数の説明で説明します。

### 形式

```
jcocmddef [ [-show] |
             [-default]
             [-rsptime 応答監視時間]
             [-record レコード数]
             [-group ホストグループ定義ファイル名]
             [-loaduserprofile {ON|OFF}]
             [-queuenum コマンド先行入力数]
             [-execnum コマンド同時実行数]
             [-open {ON|OFF}]
             [-flush {ON|OFF}]
             [-cmdevent {0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7}]
             [-actevent {0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7}]
             [-actresult {ON|OFF}]
             [-host 論理ホスト名]
             [-runevinterval 経過時間イベント発行間隔]
             [-actlimit {ON [転送データ量(行数)] | OFF}]
             [-cmdlimit {ON [転送データ量(行数)] | OFF}]
             [-queuethreshold コマンド先行入力数の閾値] ]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限

UNIX の場合: なし

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**Base** パス¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -show

現在の定義内容を表示します。このオプションはほかのオプションと併用はできません。なお、このオプションを省略し、かつ、ほかのオプションも省略した場合は、このオプション指定時と同じく、現在の定義内容を表示します。



## **-default**

-rsptime, -record, -loaduserprofile, -queuenum, -execnum, -open, -flush, -cmdevent, -actevent, -actresult, -runevinterval, -actlimit, -cmdlimit, および-queueuthreshold の設定をデフォルトに戻します。ほかのオプションを同時に指定した場合は、-default オプションが有効になります。

## **-rsptime 応答監視時間**

このオプションはマネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) で設定します。

実行コマンドの応答監視時間を秒単位で指定します。指定できる値は 0~600 (秒) です。0 を指定した場合は監視しません。デフォルトは 60 秒です。

このオプションで指定した値は、JP1/Base を再起動したあとに有効になります。

## **-record レコード数**

このオプションはマネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) で設定します。

JP1/IM - View の [コマンド実行] 画面、および自動アクションで実行したコマンドの実行履歴を保存するファイルの上限値をレコード数で指定します。

指定できる値は、1~196,600 です。デフォルトは 20,000 レコードです。

1 回のコマンド実行で使用するレコード数は、(実行コマンドの出力行数+3)レコードです。1 レコードは 6,520 バイトです。レコードサイズは変更できません。

レコード数が少ないと、自動アクションのアクション結果が正しく表示されないことがあります。

変更したレコード数は、コマンド実行履歴ファイルを削除したあとに有効になります。コマンド実行履歴ファイルを削除すると、過去の自動アクション、コマンド実行による履歴はすべて失われますので、注意してください。コマンド実行履歴ファイルの削除手順、および削除する際の注意事項については、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager システム構築・運用ガイド」(トラブルシューティングの章、トラブルへの対処方法にある「レコード数の上限値を変更する」)を参照してください。

## **-group ホストグループ定義ファイル名**

このオプションはマネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) で設定します。

コマンド実行先ホストを定義したホストグループ定義ファイルを指定します。定義ファイルの形式は、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager リファレンス」(定義ファイルの章)を参照してください。

ホストグループ定義ファイルで、ホストグループを定義していない場合は、そのホストグループが削除されます。

## **-loaduserprofile {ON|OFF}**

このオプションはコマンド実行先ホストで設定します。

コマンド実行時に OS ユーザーのプロファイルを読み込むかどうかを指定します。プロファイルを読み込む場合は ON、読み込まない場合は OFF を指定します。ON または OFF の大文字・小文字は、区別されません。デフォルトは、OFF です。

このオプションで指定した値は、JP1/Base を再起動したあとから有効になります。

このオプションは、Windows の場合にだけ使用できます。

## **-queuenum コマンド先行入力数**

このオプションはコマンド実行先ホストで設定します。

自動アクション機能を使用してコマンドを実行する場合に、コマンド実行先ホストで実行待ちにできるコマンドの最大値を指定します。指定できる値は、0~65,535 です。デフォルトは 1,024 です。0 を指定した場合は、コマンド実行先ホストに複数のコマンドを同時に投入できません。

このオプションで指定した値は、JP1/Base を再起動したあとから有効になります。

## **-execnum コマンド同時実行数**

このオプションはコマンド実行先ホストで設定します。

自動アクション機能を使用してコマンドを実行する場合に、コマンド実行先ホストで同時に実行できるコマンド数の最大値を指定します。指定できる値は、1～48 です。デフォルトは 1 です。コマンドを実行するホストごとに異なる値を指定できます。

このオプションで指定した値は、JP1/Base を再起動したあとから有効になります。

このオプションは、実行終了までに長時間かかるコマンドを実行した場合に後続のコマンドの実行開始を早めたいときや、同時に大量の自動アクションが発生した場合に処理性能を向上させたいときなどに指定してください。

なお、このオプションで 2 以上の値を指定した場合は、複数のコマンドが同時に実行されるため、先に実行されたコマンドが必ずしも先に終了するとは限りません。したがって、自動アクションの終了順序を考慮した運用をしている場合は、このオプションを指定しないでください。

#### **-open {ON|OFF}**

このオプションはマネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) で設定します。

コマンド実行履歴ファイルを常時オープンした状態で実行履歴の出力を行うかを設定します。ON の場合、常時オープンした状態で出力を行います。OFF の場合、常時オープンせずに出力を行います。デフォルト設定は OFF です。自動アクション用コマンド実行履歴にだけ有効な設定で、JP1/IM - View の [コマンド実行] 画面用コマンド実行履歴では有効になりません。

-open の設定を有効にするには、JP1/Base の再起動が必要です。

#### **-flush {ON|OFF}**

このオプションはマネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) で設定します。

コマンド実行履歴 1 行ごとにディスクへ書き込みを行うかを設定します。この設定を有効にすることで、突然のシャットダウンが発生した場合でも 1 行ごとにディスクへ実行履歴が書き込まれているため、再起動後に実行履歴データを参照することができます。ON の場合、1 行ごとにディスク中のファイルに書き込みを行います。OFF の場合、システムでバッファリングを行うため、1 行ごとにディスク中のファイルへの書き込みを行いません。デフォルト設定は OFF です。

なお、-flush を有効にした場合、1 行ごとにディスク中のファイルへ書き込みを行うため、自動アクションおよびコマンド実行の性能が劣化する場合があります。

-flush の設定を有効にするには、JP1/Base の再起動が必要です。

#### **-cmdevent {0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7}**

このオプションはマネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) で設定します。

コマンド実行操作をした際にコマンド実行操作に関するイベントを発行したい場合に、どのイベントを発行するかを指定します。次に示す発行レベルのどれかを指定します。デフォルトは 0 です。

**表 13-1 イベント発行レベル(コマンド実行操作)**

発行レベル	発行するイベントのイベント ID	説明
0	なし	コマンド実行操作に関するイベントを発行しない
1	00003FA0	コマンド実行開始イベントを発行する
2	00003FA1	コマンド実行終了イベントを発行する
3	00003FA0, 00003FA1	コマンド実行開始イベント, コマンド実行終了イベントを発行する
4	00003FA2	コマンド実行異常終了イベントを発行する
5	00003FA0, 00003FA2	コマンド実行開始イベント, コマンド実行異常終了イベントを発行する
6	00003FA1, 00003FA2	コマンド実行終了イベント, コマンド実行異常終了イベントを発行する
7	00003FA0, 00003FA1, 00003FA2	コマンド実行開始イベント, コマンド実行終了イベント, コマンド実行異常終了イベントを発行する

このオプションで指定した値は、JP1/Base を再起動したあとから有効になります。

**-actevent {0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7}**

このオプションはマネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) で設定します。

アクションの状態が変化した際にアクション状態通知に関するイベントを発行したい場合に、どのイベントを発行するかを指定します。次に示す発行レベルのどれかを指定します。デフォルトは 0 です。

**表 13-2 イベント発行レベル(自動アクション状態通知)**

発行レベル	発行するイベントのイベント ID	説明
0	なし	アクション状態通知に関するイベントを発行しない
1	000020E0, 000020E3	アクション状態が送信中・キューイング・実行中になった際にイベントを発行する
2	000020E1, 000020E4	アクション状態が終了・キャンセル・強制終了になった際にイベントを発行する
3	000020E0, 000020E1, 000020E3, 000020E4	アクション状態が送信中・キューイング・実行中または終了になった際にイベントを発行する
4	000020E2, 000020E5	アクション状態が実行不可・実行失敗になった際にイベントを発行する
5	000020E0, 000020E2, 000020E3, 000020E5	アクション状態が送信中・キューイング・実行中または実行不可・実行失敗になった際にイベントを発行する
6	000020E1, 000020E2, 000020E4, 000020E5	アクション状態が終了・キャンセル・強制終了または実行不可・実行失敗になった際にイベントを発行する
7	000020E0, 000020E1, 000020E2, 000020E3, 000020E4, 000020E5	アクション状態が送信中・キューイング・実行中, 終了・キャンセル・強制終了, または実行不可・実行失敗になった際にイベントを発行する

このオプションで指定した値は、JP1/IM - Manager を再起動したあとから、または jco\_spmdd\_reload コマンドでリロードしたあとから有効になります。

なお、アクション状態通知に関するイベントは、アクション情報ファイルを参照して発行されます。アクション情報ファイルの上限値に達して、上書きされた場合には、上書きされる以前のアクション情報を参照できなくなるため、アクション状態通知に関するイベントを発行できません。このような場合には、警告イベント (000020E6 または 000020E7) またはエラーイベント (000020E8) が発行されます。

**-actresult {ON|OFF}**

このオプションはマネージャーホスト (JP1/IM - Manager インストールホスト) で設定します。

自動アクションによるコマンド実行の実行結果をコマンド実行履歴に保存するかどうか指定します。保存する場合は ON、保存しない場合は OFF を指定します。

ON または OFF の大文字・小文字は、区別されません。デフォルトは、ON です。コマンドの実行結果の詳細を知りたい場合は、必ず ON を指定してください。

OFF を指定すると、コマンド実行履歴ファイルへの出力を抑止するため、JP1/Base 制御部の処理速度を向上させることができます。ただし、自動アクションによるコマンドの戻り値以外の情報をすべて破棄するため、コマンドの実行結果の詳細は出力されません (JP1/IM - View の [アクション結果詳細] 画面の [メッセージ] に出力される情報がすべて「KAVB2401-I」のメッセージ情報になります)。

このオプションで指定した値は、JP1/IM - Manager を再起動したあとから有効になります。

**-host 論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

このオプションを指定して、実行系サーバまたは待機系サーバの設定を変更した場合は、必ずもう一方のサーバでも同様の設定をしてください。

#### **-runevinterval 経過時間イベント発行間隔**

このオプションはコマンド実行先ホストで設定します。

JP1/IM - View の[コマンド実行]画面、および自動アクションで実行したコマンドの経過時間を通知する、イベント発行間隔を指定します。指定できる値は、0~2,147,483,647(単位:秒)です。デフォルトは 600 秒(10 分)です。

指定した時間が経過するたびにイベント ID 00003FA3(実行経過時間通知イベント)が発行されます。0 を指定した場合、イベントは発行されません。

このオプションで指定した値は、JP1/Base を再起動したあとから有効になります。

#### **-actlimit {ON [転送データ量(行数)] | OFF}**

このオプションはコマンド実行先ホストで設定します。

自動アクションで実行したコマンドの実行結果をマネージャーに転送する場合に、転送するデータ量を抑止するかどうか、また、抑止する場合はその上限値を指定します。指定できる値は 0~196,600 です。デフォルトは ON(抑止する)で値は 1,000 です。

コマンド実行結果のデータ量を抑止する場合には、ON を指定し、転送するデータ量の上限値を行数(1 行 256 バイト)で指定します。行数の指定を省略した場合は、1,000 行が設定されます。

コマンド実行結果のデータ量の転送を抑止しない場合には、OFF を指定します。

自動アクションの実行結果として大量の出力データを必要としない場合、実行したコマンドが動作不正で無限ループした場合など、大量のデータの出力を抑止する目的で使用してください。

-actlimit の設定を有効にするには、JP1/Base の再起動が必要です。

#### **注意事項**

バージョン 08-00 以降の JP1/Base を新規インストールした場合だけ、デフォルトで 1,000 行が設定されます。

コマンド実行先ホストの JP1/Base のバージョンが 07-51 以前の場合、またはバージョン 07-51 以前から 08-00 以降にバージョンアップした場合、デフォルトは OFF(抑止しない)です。

#### **-cmdlimit {ON [転送データ量(行数)] | OFF}**

このオプションはコマンド実行先ホストで設定します。

JP1/IM - View の[コマンド実行]画面から実行したコマンドの実行結果をマネージャーに転送する場合に、転送するデータ量を抑止するかどうか、また、抑止する場合はその上限値を指定します。指定できる値は 0~196,600 です。デフォルトは ON(抑止する)で値は 1,000 です。

コマンド実行結果のデータ量を抑止する場合には、ON を指定し、転送するデータ量の上限値を行数(1 行 256 バイト)で指定します。行数の指定を省略した場合は、1,000 行が設定されます。

コマンド実行結果のデータ量を抑止しない場合には、OFF を指定します。

JP1/IM - View の[コマンド実行]画面から実行したコマンドの実行結果として、大量の出力データを必要としない場合、実行したコマンドが動作不正で無限ループした場合など、大量のデータの出力を抑止する目的で使用してください。

-cmdlimit の設定を有効にするには、JP1/Base の再起動が必要です。

#### **注意事項**

バージョン 08-00 以降の JP1/Base を新規インストールした場合だけ、デフォルトで 1,000 行が設定されます。

コマンド実行先ホストの JP1/Base のバージョンが 07-51 以前の場合、またはバージョン 07-51 以前から 08-00 以降にバージョンアップした場合、デフォルトは OFF(抑止しない)です。

### -queuethreshold コマンド先行入力数の閾値

このオプションはコマンド実行先ホストで設定します。

自動アクション機能を使用してコマンドを実行し、コマンド実行先ホストで実行待ちになるコマンド数(キューイング数)を監視したい場合に、コマンドの先行入力数の閾値を指定します。指定できる値は、0~65,535 です。デフォルトは 10 です。

0 を指定すると閾値監視をしません。

0 以外を指定すると、その値に達した時点で、警告の JP1 イベントが発行されます。また、先行入力数が 0 に戻った時点で、回復の JP1 イベントが発行されます。

閾値監視をすると、JP1/Base のキューにアクションが蓄積しているのを検知できます。そのため、実行遅延に対して事前に対処することができます。

-queuethreshold の設定を有効にするには、JP1/Base の再起動が必要です。

### 出力形式

jcocmdddef コマンドを実行すると、設定変更したパラメーターだけでなく、ほかのパラメーターも表示されます。出力形式を次に示します。

図 13-1 jcocmdddef コマンドの出力形式

Response time:60	●	応答監視時間(-rsptimeで指定)
Record size:20000	●	レコード数(-recordで指定)
LoadUserProfile:OFF	●	ユーザープロファイル読み込み可否(-loaduserprofileで指定)
Queuing num:1024	●	コマンド先行入力数(-queuenumで指定)
Execution num:1	●	コマンド同時実行数(-execnumで指定)
Record open:OFF	●	コマンド実行履歴ファイルの常時オープン可否(-openで指定)
Record flush:OFF	●	コマンド実行履歴の1行ごと書込み可否(-flushで指定)
Action Event Level:0	●	アクション状態通知イベントの発行レベル(-acteventで指定)
Command Event Level:0	●	コマンド実行操作イベントの発行レベル(-cmdeventで指定)
Action Result:ON	●	自動アクション実行結果の保存可否(-actresultで指定)
Running Event Interval:600	●	経過時間イベント発行間隔(-runeventintervalで指定)
Action Result Limit:1000	●	自動アクション実行結果の転送データ量(-actlimitで指定)
Window Result Limit:1000	●	コマンド実行結果の転送データ量(-cmdlimitで指定)
Queuing Threshold:10	●	コマンド先行入力数の閾値(-queuethresholdで指定)
Groupname:groupim01	●	ホストグループ名
Host:hostA,HostB	●	ホストグループ所属ホスト名

} -groupで指定した  
ホストグループ定義ファイル  
の内容

(凡例)

— (下線) : デフォルト値を示す。

### 戻り値

0	正常終了
-1	異常終了

## jcocmdel

### 機能

JP1/IM (JP1/IM - View の [コマンド実行] 画面または自動アクション) から実行指示を受けて JP1/Base 側で実行またはキューイングしているコマンドを終了させ、削除するコマンドです。

システムの運用中に誤ったコマンドを実行してしまった、処理に時間が掛かり過ぎるコマンドを実行したために後続のコマンドが実行されない状態になった、など、コマンド実行でトラブルが発生したときに使用します。なお、このコマンドを実行する前に jcocmdshow コマンドを実行してコマンドの状態を確認し、不要な (削除してもよい) コマンドかどうかを判断してください。

### 形式

```
jcocmdel [-h 論理ホスト名]  
          [-s 接続ホスト名]  
          [-f]  
          [コマンド ID | ALL]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**Base パス**¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

#### -s 接続ホスト名

削除したいコマンドが存在している接続先ホストのホスト名を指定します。指定できる文字数は、1~255 バイトです。このオプションを省略した場合は、自ホストを仮定します。

#### -f

コマンドを削除する際に、確認メッセージを表示させたくない場合に指定します。このオプションを指定すると、指定したコマンドを強制的に削除します。

#### コマンド ID | ALL

削除するコマンドを指定します。コマンド ID で指定する場合は jcocmdshow コマンドの実行結果で得た ID を、「実行中」および「キューイング中」のすべてのコマンドを削除したい場合は ALL を指定します。

コマンド ID を複数指定する場合は、スペースで区切ってください。

### 戻り値

0	正常終了
1	コマンド ID がない, または JP1/Base のコマンド実行管理内のコマンドが部分的に削除されている
2	引数エラー

4	システムリソース不足
8	コマンドを実行する権限がない
16	JP1/Base のコマンド実行管理との通信でエラーが発生した
32	共通定義アクセスエラー
64	接続先ホストからの応答がない
65	接続先ホストとバージョンの互換性がない
128	内部エラー
129	最大接続数エラー
255	その他のエラー

## 使用例

接続ホスト host01 で実行されているコマンド 1234 を削除する。

```
jcocmdel -s host01 1234
```

## 出力例

```
jcocmdel -s host01 1234
```

```
KAVB2291-Q このコマンド ID を削除してよろしいですか? [Y/y or N/n] -> y
```

```
KAVB2293-I コマンド実行制御内のコマンド削除に成功しました。
```

## jcocmdlog

### 機能

マネージャースト(JP1/IM - Manager インストールホスト)で実行するコマンドです。

JP1/IM - View の[コマンド実行]画面および自動アクションで実行したコマンドの履歴を、CSV 形式で標準出力に出力します。

### 形式

```
jcocmdlog [-window]
           [-act]
           [-dir 実行履歴保存ディレクトリ]
           [-h 論理ホスト名]
           [-ext]
           [-date {日時 | [開始日時],[終了日時]}]
```

### 実行権限

Windows の場合:なし

UNIX の場合:なし

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**Base パス**¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

## **-window**

JP1/IM - View の[コマンド実行]画面から実行したコマンドの履歴を出力します。

## **-act**

自動アクションで実行したコマンドの履歴を出力します。

-window オプションと-act オプションのどちらも省略した場合は、JP1/IM - View の[コマンド実行]画面および自動アクションで実行したコマンドの履歴を出力します。

なお、jcocmddef コマンドで出力抑止 (-actresult OFF) を設定している間は、出力結果には詳細情報が含まれません(出力される情報はすべて「KAVB2401-I」のメッセージ情報になります)。デフォルトまたは jcocmddef コマンドで出力抑止を解除した場合は(-actresult ON)、詳細情報が出力されます。

## **-dir 実行履歴保存ディレクトリ**

指定したディレクトリの実行履歴を出力します。省略した場合は、運用中の実行履歴を出力します。

## **-h 論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。-dir オプションが指定されている場合、このオプションは、無視されます。

## **-ext**

JP1/IM - View の[コマンド実行]画面および自動アクションで実行したコマンドの受け取り時刻を YYYY/MM/DD, hh:mm:ss の形式で出力します。また、実行コマンド名とメッセージをダブルクォーテーションで囲んで出力します。なお、実行コマンド名またはメッセージにダブルクォーテーションが含まれる場合、ダブルクォーテーションを連続して一つ付加します。-ext オプションを指定しない場合は、受け取り時刻は MM/DD/YY hh:mm:ss の形式で、実行コマンド名とメッセージをダブルクォーテーションで囲まずに出力します。

(例)

- -ext オプションを指定した場合  
Window,2005/04/01,14:16:23,hostA,"jcochstat -k HELD -n 1003",2420,0,"KAVB2013-I ""jcochstat -k HELD -n 1003""のコマンドが実行終了しました。 pid=2420 terminate code=0"
- -ext オプションを指定しない場合  
Window,04/01/05 14:16:23,hostA,jcochstat -k HELD -n 1003,2420,0,KAVB2013-I "jcochstat -k HELD -n 1003"のコマンドが実行終了しました。 pid=2420 terminate code=0

## **-date {日時 | [開始日時],[終了日時]}**

履歴を出力する日時を指定します。このオプションを省略した場合は、すべての履歴を出力します。

日時、開始日時および終了日時の指定形式は、日付(YYYYMMDD:年月日)と時刻(hhmmss:時分秒)を次のように指定します。時刻は省略できます。

- -date 日時  
日付または指定した時間帯の履歴を出力します。  
(例)-date 2005030317  
2005年3月3日の17時台(17時00分00秒~17時59分59秒)の履歴を出力します。
- -date [開始日時],[終了日時]  
開始日時と終了日時で範囲指定した場合、範囲内の履歴を出力します。  
時刻を省略した場合には以下のように仮定します。  
開始:000000(0時0分0秒)  
終了:235959(23時59分59秒)



- `-date` **開始日時,終了日時**  
指定した開始日時から終了日時までの範囲内の履歴を出力します。  
(例)`-date 2005030317,2005030416`  
2005年3月3日の17時00分00秒から2005年3月4日の16時59分59秒までの履歴を出力します。
- `-date` **開始日時,**  
指定した開始日時以降の履歴を出力します。  
(例)`-date 200503031724,`  
2005年3月3日の17時24分00秒以降の履歴を出力します。
- `-date` **,終了日時**  
指定した終了日時以前の履歴を出力します。  
(例)`-date ,200503031724`  
2005年3月3日の17時24分59秒以前の履歴を出力します。
- `-date` **,**  
`-date` オプション省略時と同様で、すべての履歴を出力します。

### 戻り値

0	正常終了
4	コマンド実行履歴ファイルが使用中のため、処理が中断された
-1	異常終了

### 出力形式

コマンドの実行結果は、コンマ区切り (CSV 形式) で出力されます。出力形式は次のとおりです。

実行種別,メッセージ受け取り時刻,コマンド実行先ホスト名,実行コマンド,プロセス ID,終了コード,メッセージ

実行種別は、「Window」(JP1/IM - View の[コマンド実行]画面から実行したコマンド)または「Action」(自動アクションで実行したコマンド)のどちらかの値を取ります。

コマンドの実行結果は1行256バイトで出力されるため、257バイト以上の実行結果は複数行に分割されて出力されます。

出力する内容のない項目は、コンマだけが出力されます。

## jcocmdshow

### 機能

JP1/IM (JP1/IM - View の [コマンド実行] 画面または自動アクション) から実行指示を受けて JP1/Base 側で実行またはキューイングしているコマンドの状態を確認するコマンドです。

システムの運用中に誤ったコマンドを実行してしまった、処理に時間が掛かり過ぎるコマンドを実行したために後続のコマンドが実行されない状態になった、など、コマンド実行でトラブルが発生したときに使用します。このコマンドを実行して得られる情報は、次のとおりです。

- ID: コマンド実行管理内で実行中、キューイング中のコマンドに付けられるユニークな ID
- STATUS: コマンド実行管理内でのコマンドの実行状態 (実行中は「R」、キューイング中は「Q」)
- TYPE: コマンド実行指示をした機能名 (JP1/IM - View からの実行指示の場合は「WIN」、自動アクションからの実行指示の場合は「ACT」)
- USER: コマンド実行指示をした JP1 ユーザー名
- STIME: コマンド実行管理が JP1/IM からコマンドを受け付けた時間
- ETIME: コマンド実行開始からの経過時間
- COMMAND: 実行中またはキューイング中のコマンド名

なお、このコマンドで確認したのち、不要 (削除してもよい) と判断したコマンドは jcocmd del コマンドを実行して削除してください。

### 形式

```
jcocmdshow [-h 論理ホスト名]  
            [-s 接続ホスト名]  
            [-window]  
            [-act]  
            [-state {r|q}]  
            [-ph コマンド投入元ホスト名]  
            [-v]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**Base パス**¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h **論理ホスト名**

クラスタシステムで運用している場合に、論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。クラスタシステムを使用していない場合には指定は不要です。

#### -s **接続ホスト名**

実行状態を確認したいコマンドが存在している接続先ホストのホスト名を指定します。指定できる文字数は、1~255 バイトです。このオプションを省略した場合は、自ホストを仮定します。

## -window

JP1/IM - View の[コマンド実行]画面から実行指示を受けたコマンドの実行状態だけを確認したいときに指定します。

-act オプションと同時に指定、または両方とも指定しなかった場合は、JP1/IM - View の[コマンド実行]画面または自動アクションから実行指示を受けたコマンドの実行状態が表示されるようになります。

## -act

自動アクションから実行指示を受けたコマンドの実行状態だけを確認したいときに指定します。-window オプションと同時に指定、または両方(-window, -act)とも指定しなかった場合は、JP1/IM - View の[コマンド実行]画面または自動アクションから実行指示を受けたコマンドの実行状態が表示されるようになります。

## -state {r|q}

コマンドの実行状況を指定します。「実行中」のコマンドを取得する場合は r を、「キューイング中」のコマンドを取得する場合は q を指定します。

このオプションを省略した場合は、「実行中」および「キューイング中」のコマンドを取得します。

## -ph コマンド投入元ホスト名

特定のホストから投入されたコマンドだけを確認したいときに指定します。

## -v

jcocmdshow コマンドを実行して出力される情報を縦表示したいときに指定します。

このオプションを省略した場合は、jcocmdshow コマンドを実行して出力される情報は横表示されます。

## 戻り値

0	正常終了
1	JP1/Base のコマンド実行管理にコマンドが存在しない
2	引数エラー
4	システムリソース不足
8	コマンドを実行する権限がない
16	JP1/Base のコマンド実行管理との通信でエラーが発生した
32	共通定義アクセスエラー
64	接続先ホストからの応答がない
65	接続先ホストとバージョンの互換性がない
128	内部エラー
129	最大接続数エラー
255	その他のエラー

## 使用例

接続ホスト host01 で実行されているコマンドの実行状況を確認する。

```
jcocmdshow -s host01
```

## 出力例

-v オプション省略時

```
jcocmdshow -s host01
```

```
ID   STATUS TYPE USER      STIME           ETIME           COMMAND
1234 R     WIN   jp1admin Feb 13 18:55:29 000:01:05 "C:¥WINNT¥system32¥notepad.exe"
```

-v オプション指定時

```
jcocmdshow -s host01 -v
```

```
ID          :1234
STATUS     :R
TYPE       :WIN
USER       :jp1admin
STIME      :Feb 13 18:55:29
ETIME      :000:01:05
COMMAND    :“C:¥WINNT¥system32¥notepad.exe”
```

## jevdbinit

### 機能

イベントデータベースを初期化するコマンドです。このコマンドを実行すると、イベントデータベースの内容が削除され、イベントデータベースが再作成されます。

新しいイベントデータベースの通し番号の開始番号は、削除される前のイベントデータベースから引き継いだ通し番号、または指定された通し番号になります。

初期化する前のイベントデータベースのバックアップを残すことができます。バックアップファイルは、jevexport コマンドで csv ファイルに出力できます。バックアップファイルをリストアすることはできません。

イベントデータベースの初期化の詳細については、「[6.6 イベントサービスの障害時の対処](#)」を参照してください。

### 形式

```
jevdbinit [-h イベントサーバ名]
           [-s イベントデータベース内通し番号の開始番号]
           [-f]
           {-b | -n}
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h イベントサーバ名

イベントデータベースを初期化したいイベントサーバ名を指定します。このオプションを省略すると、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名がイベントサーバ名として仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、自ホスト名と同じイベントサーバ名が仮定されます。イベントサーバ名は 255 バイト以内の文字列で指定してください。

#### -s イベントデータベース内通し番号の開始番号

初期化後に作成されるイベントデータベースの開始番号を指定します。-s オプションに指定した通し番号でイベントデータベースが作成されます。指定できる値は、0~2,147,483,647 です。

このオプションを省略した場合、削除する前のイベントデータベース内通し番号を引き継ぎます。

#### -f

このオプションを省略すると、このコマンドを実行してよいかどうかを確認するための入力が必要されます（「よろしいですか？ [Y/N]」、または「Is This OK?[Y/N]」が表示されます）。この確認入力を不要にしたい場合に、このオプションを指定します。

#### **-b**

初期化前のイベントデータベースをバックアップする場合に指定します。-b または -n の指定は、省略できません。バックアップファイルは、イベントデータベースが格納されているディレクトリと同じディレクトリに格納されます。バックアップファイル名は、次のようになります。

イベントデータベースファイル名	バックアップファイル名
IMEvent{0 1}.idx	0IMEvent{0 1}.idx
IMEvent{0 1}.dat	0IMEvent{0 1}.dat
IMEvent{0 1}.fwd	0IMEvent{0 1}.fwd

バックアップする場合、イベントデータベースが使用するディスク占有量が2倍になるためご注意ください。前回のバックアップファイルが残っている状態で -b オプションを指定すると、前回のバックアップファイルは削除されます。

#### **-n**

初期化前のイベントデータベースをバックアップしない場合に指定します。-b または -n の指定は、省略できません。前回のバックアップファイルが残っている状態で -n オプションを指定すると、前回のバックアップファイルは残ったままとなります。

#### **注意事項**

- イベントサービスが稼働しているときは、このコマンドは実行できません。
- このコマンドの実行中は、イベントサービスは起動できません。
- イベントデータベースが空の状態でのこのコマンドを実行すると、戻り値が7（イベントDBが壊れている）となりますが、問題ありません。

#### **戻り値**

0	正常終了
1	引数エラー
2	実行権限不足
3	入出力エラー
4	メモリー不足
5	イベントサーバ名が未定義
6	イベントデータベースが存在しない
7	イベントデータベースが壊れている
8	イベントサービスが稼働中のため、イベントデータベースを初期化できない
255	そのほかのエラー

## jevdbswitch

### 機能

イベントサービスが稼働しているイベントサーバのイベントデータベース内で、イベントが実際に登録される面を、現在使用されている側のイベントデータベース(アクティブ面)から、待機している側のイベントデータベース(スタンバイ面)に強制的に切り替えるコマンドです。

イベントデータベースがスタンバイ面に切り替わる際、スタンバイ面に登録されていたデータは削除されます。このコマンドを2回続けて実行することで、イベントデータベースは初期化されます。なお、イベントデータベースに登録されているJP1イベントを保存しておきたい場合は、あらかじめ `jevexport` コマンドでイベントデータベースを csv ファイルに出力してください。

jevdbswitch コマンドを使用したイベントデータベースの初期化方法については、「[6.6 イベントサービスの障害時の対処](#)」を参照してください。

### 形式

```
jevdbswitch [-h イベントサーバ名]
              [-f]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h イベントサーバ名

イベントが実際に登録されるイベントデータベースをアクティブ面からスタンバイ面に切り替えるイベントサーバ名を指定します。このオプションを省略すると、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名がイベントサーバ名として仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、自ホスト名と同じイベントサーバ名が仮定されます。イベントサーバ名は 255 バイト以内の文字列で指定してください。

#### -f

このオプションを省略すると、このコマンドを実行してよいかどうかを確認するための入力が必要されます(「よろしいですか? [Y/N]」、または「Is This OK? [Y/N]」が表示されます)。この確認入力を不要にしたい場合に、このオプションを指定します。

### 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	実行権限不足
3	入出力エラー
4	メモリー不足
5	イベントサーバ名が未定義
8	イベントサービスに接続できない

9	イベントデータベースが切り替えられたかどうかを検知できない
255	そのほかのエラー

## jevdef\_distrib

### 機能

イベントサービスの定義情報を配布するコマンドです。このコマンドを実行すると、配布定義ファイルに指定した配布先へ定義情報が配布され、配布先で定義情報が反映されます。

### 形式

```
jevdef_distrib {-f [配布定義ファイル名] |
               -e [配布定義ファイル名] |
               -l [配布定義ファイル名]
               [-h 論理ホスト名]}
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jplbase¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jplbase/bin/

### 引数

#### -f [配布定義ファイル名]

転送設定ファイル (forward) の定義情報を配布するときに指定します。配布定義ファイルとして、あらかじめ `jev_forward.conf` を作成しておいた場合、配布定義ファイル名の指定は省略できます。任意の名称で配布定義ファイルを作成した場合は、配布定義ファイル名を指定します。指定するファイル名にディレクトリ名は指定できません。配布定義ファイルは、「[8.4.3 配布定義ファイル](#)」を参照し、各配布定義ファイルの格納先に作成してください。

#### -e [配布定義ファイル名]

イベントログトラップ機能の動作定義ファイルの定義情報を配布する場合に指定します。配布定義ファイルとして、あらかじめ `jev_ntevent.conf` を作成しておいた場合、配布定義ファイル名の指定は省略できます。任意の名称で配布定義ファイルを作成した場合は、配布定義ファイル名を指定します。指定するファイル名にディレクトリ名は指定できません。配布定義ファイルは、「[8.4.3 配布定義ファイル](#)」を参照し、各配布定義ファイルの格納先に作成してください。なお、配布先ホストが Windows の場合に対してだけ配布処理を行います。

配布先エージェントが論理ホストの場合、配布先エージェントホストの物理ホスト (実行系) へ、イベントログトラップ機能の動作定義ファイルが配布およびロードされます。

#### -l [配布定義ファイル名]

ログファイルトラップ機能の動作定義ファイルの定義情報を配布する場合に指定します。配布定義ファイルとして、あらかじめ `jev_logtrap.conf` を作成しておいた場合、配布定義ファイル名の指定は省略できます。任意の名称で配布定義ファイルを作成した場合は、配布定義ファイル名を指定します。指定するファイル名にディレクトリ名は指定できません。配布定義ファイルは、「[8.4.3 配布定義ファイル](#)」を参照し、各配布定義ファイルの格納先に作成してください。

配布先エージェントが論理ホストの場合、配布先エージェントホストの物理ホスト(実行系)へ、ログファイルトラップ機能の動作定義ファイルが配布およびリロードされます。

## -h 論理ホスト名

論理ホスト上でこのコマンドを実行する場合に指定します。このオプションを省略すると、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、自ホスト名と同じホスト名が仮定されます。

-e オプションを指定した場合、コマンドを実行したホスト(実行系)の物理ホストに設定しているイベントログトラップ機能の動作定義ファイルが配布されます。

-l オプションを指定した場合、コマンドを実行したホスト(実行系)の物理ホストに設定しているログファイルトラップ機能の動作定義ファイルが配布されます。

## 注意事項

- jevdef\_distrib コマンドを実行できるホストは、バージョン7の JP1/IM - Central Console またはバージョン8の JP1/IM - Manager がインストールされているホストだけです。
- マネージャーホストの下位に、バージョン7の JP1/IM - Central Console またはバージョン8の JP1/IM - Manager がインストールされたサブマネージャーが存在する場合、サブマネージャーからも jevdef\_distrib コマンドが実行できます。マネージャーホストおよびサブマネージャーから同時に jevdef\_distrib コマンドを実行した場合は、最後に配布した定義情報が有効となります。
- 定義情報は、配布定義ファイルに指定した配布先に配布されます。
- jevdef\_distrib コマンド実行時、配布先ホストの jbsplugin プロセス(Windows の場合)、jbsplugin デーモン(UNIX の場合)が起動している必要があります。
- jevdef\_distrib コマンド実行時、起動していないホストがある場合、そのホストの定義情報を変更できなかったメッセージが表示されます。この場合、エラーとなったホストが起動していることを確認したあとに、再度定義情報を配布してください。
- jevdef\_distrib コマンド実行時に、配布先のホストですでに定義情報が設定されている場合は、各ホストに設定されている定義情報を削除してから定義情報を配布します。
- 配布定義ファイルに、JP1/IM の構成定義ファイルで定義されていないホストを指定すると、jevdef\_distrib コマンド実行時にエラーとなり、定義情報はどこにも配布されません。
- 配布定義ファイルに配布先ホストを重複して指定すると、jevdef\_distrib コマンド実行時にエラーとなり、定義情報はどこにも配布されません。
- jevdef\_distrib コマンド実行時に、配布先ホストにインストールされた JP1/Base のバージョンが 06-71 以前の場合、そのホストでの処理を中断し、次の配布先への処理を続行します。
- 配布先ホストでリロードの失敗によるエラーが発生した場合、配布前の定義を有効としたまま機能を続行しますが、定義情報は配布した定義情報に書き換えられます。リロードに失敗したホストには、再度 jevdef\_distrib コマンドを実行してください。
- エラーになった配布先ホストのホスト名およびエラーメッセージは標準エラー出力されます。
- 転送設定ファイルの定義情報を配布すると、配布先で jevreload コマンドが実行されます。
- ログファイルトラップ機能またはイベントログ変換機能の定義情報を配布すると、配布先で jevlogreload コマンドまたは jeveltreload コマンドが実行されます。このとき、トラップ処理中の場合は、トラップ処理完了後にリロードコマンドが実行されます。jevlogreload コマンドまたは jeveltreload コマンドが実行中にイベントが発生した場合は、リロードコマンドを実行後、新たに読み込まれた定義情報に従ってイベントが変換されます。



- 定義情報を配布する場合、ログファイルトラップ機能のファイル属性に関するパラメーター (FILETYPE, HEADLINE, HEADSIZE, およびRECTYPE) の値は、起動時に指定した値のまま変更しないでください。これらのパラメーターを変更して定義情報を配布すると、配布先の定義情報は変更されますが、jevlogreload コマンドの実行時エラーとなります。
- 以下の場合には、配布コマンドを実行してもエラーとなり定義情報は配布されません。
  - 配布定義ファイルに定義してある配布先ホストが重複した場合
  - JP1/IM のシステム構成で定義していないホストを配布定義ファイルに定義した場合

## 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	サービスまたは管理デーモンが起動していない
3	構成定義情報取得エラー
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
10	配布定義ファイルに誤りあり
11	配布定義ファイルオープンエラー
12	配布先でエラー
255	そのほかのエラー

## jevdef\_get

### 機能

イベントサービスの定義情報を収集するコマンドです。

### 形式

```
jevdef_get {-f | -e | -l [動作定義ファイル名]}
           [-h 論理ホスト名]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -f

転送設定ファイル (forward) の定義情報を収集します。

#### -e

イベントログトラップ機能の動作定義ファイル (ntevent.conf) の定義情報を収集します。収集先ホストが Windows の場合に対してだけ収集処理を行います。

収集先エージェントが論理ホストの場合、収集先エージェントホストの物理ホスト(実行系)のイベントログトラップ機能の動作定義ファイルが収集されます。

#### -l [動作定義ファイル名]

ログファイルトラップ機能の動作定義ファイル(jevlog.conf)の情報を収集します。収集先ホストで、任意の名称の動作定義ファイルを作成している場合は、動作定義ファイル名を指定してください。

収集先エージェントが論理ホストの場合、収集先エージェントホストの物理ホスト(実行系)のログファイルトラップ機能の動作定義ファイルが収集されます。

#### -h 論理ホスト名

論理ホスト上でこのコマンドを実行する場合に指定します。このオプションを省略すると、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、自ホスト名と同じホスト名が仮定されます。

#### 注意事項

- jevdef\_distrib コマンド実行時、配布先ホストの jbsplugin プロセス(Windows の場合)、jbsplugin デーモン (UNIX の場合) が起動している必要があります。
- jevdef\_distrib コマンド実行時に、配布先ホストにインストールされた JP1/Base のバージョンが 06-71 以前の場合、そのホストでの処理を中断し、次の配布先への処理を続行します。
- 定義情報の収集先ホストでエラーが発生した場合は、そのホストでの処理を中断し、次の収集先への処理を続行します。
- エラーになった収集先ホストのホスト名およびエラーメッセージは標準エラー出力されます。
- 収集した定義情報は、1 行につき 1,023 バイトまで出力されます。1,024 バイト以降は出力されません。

#### 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	サービスまたは管理デーモンが起動していない
3	構成定義情報取得エラー
4	メモリーなどシステム・リソースが不足した
10	収集先でエラー
255	そのほかのエラー

## jeveltreload (Windows 限定)

### 機能

イベントログトラップ機能の動作定義ファイル (nthevent.conf) をリロードするコマンドです。

### 形式

jeveltreload

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

### 注意事項

- リロードコマンド実行時にトラップ処理を行っていた場合、そのトラップ処理の完了後、リロード処理を行います。
- server パラメーターを変更した場合は、イベントログトラップサービスを再起動してください。再起動しないでコマンドを実行するとエラーとなり、リロードできません。

### 戻り値

0	正常終了
1	引数誤り
2	サービスが起動していない
3	動作定義ファイルの文法エラー
4	動作定義ファイルのオープンエラー
5	メモリーなどシステム・リソースが不足した
6	権限チェックエラー
255	そのほかのエラー

## jevexport

### 機能

イベントデータベースの内容を csv 形式に変換して、csv ファイルに出力するコマンドです。

### 形式

```
jevexport [-h イベントサーバ名]
          [-i イベントデータベースファイル名]
          [-o 出力ファイル名]
          [-f フィルターファイル名]
          [-t {ON | OFF}]
          [-l コードセット名]
          [-k 項目ファイル名]
          [-a]
```

### 実行権限

Windows の場合: なし

UNIX の場合: なし

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h イベントサーバ名

イベントデータベースの内容を csv 形式に変換して、csv ファイルに出力するイベントサーバ名を指定します。このオプションを省略すると、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名がイベントサーバ名として仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、自ホスト名と同じイベントサーバ名が仮定されます。イベントサーバ名は 255 バイト以内の文字列で指定してください。

このオプションは、-i オプションと同時に指定できません。

#### -i イベントデータベースファイル名

イベントデータベースの内容を csv 形式に変換して、csv ファイルに出力するイベントデータベースファイル名を指定します。パス名を省略した場合は、カレントディレクトリが仮定されます。

このオプションは、-h オプションと同時に指定できません。

#### -o 出力ファイル名

csv ファイルとして出力するファイル名を指定します。このオプションを省略した場合は、カレントディレクトリに imevexport.csv ファイルを出力します。

なお、JP1 イベントは古い順に出力されます。

#### -f フィルターファイル名

イベントデータベースに登録された JP1 イベントの中から、csv ファイルに出力したい JP1 イベントの条件を記述したテキストファイルを指定します。JP1 イベントの条件の記述形式は、転送設定ファイルで利用するフィルター条件の記述形式と同じです。詳細については、「[6.5.3 フィルターの文法](#)」を参照してください。このオプションを省略した場合、イベントデータベースに登録されたすべての JP1 イベントが csv ファイルへの出力対象となります。

### 注意事項

csv ファイルに出力する JP1 イベントの条件として、フィルターファイルに日本語文字列を指定する場合、その文字コードは、jevexport コマンド実行時のロケール情報（環境変数 LANG など）と合致させてください。

JP1 イベントの条件として指定した文字列の文字コードと jevexport コマンド実行時のロケール情報（環境変数 LANG など）が異なる場合、JP1 イベントは csv ファイルに出力されません。

#### -t {ON | OFF}

JP1 イベント登録時刻、JP1 イベント到着時刻、および拡張属性の共通情報の START\_TIME や END\_TIME を 1970 年 1 月 1 日からの通算秒の表記から YYYYMMDDhhmmss の西暦表示に変換したい場合は、ON を指定してください。西暦表示に変換しない場合は、OFF を指定してください。なお、このオプションを省略した場合は、OFF を指定した場合と同じ動作になります。

#### -l コードセット名

csv 形式に変換するときにイベントデータベース中の文字列を指定された文字コードに変換します。このオプションを省略した場合は、文字コードを変換しません。指定できる文字コードを次に示します。

- SJIS
- EUCJIS
- ISO2022JP
- UTF-8

#### -k 項目ファイル名

csv 形式に変換するときに出力する拡張属性の固有情報を記述したファイルを指定します。このファイルはテキスト形式で作成してください。項目ファイルの記述形式を次に示します。

- csv ファイルに出力したい固有情報名を先頭 (1 バイト) から記述する。
- csv ファイルに出力したくない固有情報は、記述しないまたはコメント行 (# を行頭に付ける) にする。
- 固有情報で、1970 年 1 月 1 日からの通算秒で表記されているものについては固有情報名の前に @ を付ける。

@ を付けることによって YYYYMMDDhhmmss の西暦表示に変換できます。

ただし、名称の前に @ を付けた固有情報に値が設定されていない場合は、0 を仮定して西暦表示に変換します。TZ=JST-9 の場合、「19700101090000」に変換します。

以上の条件をファイルに記述した例を次に示します。

AAA ← 時間変更なし

@BBB ← YYYYMMDDhhmmss の西暦表示に変換する

#CCC ← コメント行

このオプションを指定すると、イベントデータベースに記録された固有情報のうち、項目ファイルに記述された拡張属性の固有情報だけが出力されます。

このオプションを省略した場合、イベントデータベースに含まれる拡張属性の固有情報がすべて出力対象となります。

#### -a

csv ファイルの先頭行に基本属性および拡張属性のタイトル名を、見出し行として出力します。拡張属性の固有情報は、属性名称と属性値がペアで出力されるため、最初の個別拡張属性名だけがタイトルとして出力され、以降は省略されます。

日本語で出力する場合は、-l オプションのコードセット名に文字コードを指定してください。-l オプションを指定しない場合は、タイトル名は英語で出力されます。

#### 注意事項

- -o オプションに指定した出力ファイルがすでに存在する場合、そのファイルを上書きします。

- 出力ファイル名、フィルターファイル名、および項目ファイル名の途中にスペースが入る場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲んで指定してください。
- -o, -f, および-k オプションで指定するファイル名の長さは 255 バイト以内になしてください。
- このコマンドの実行中にイベントデータベースが切り替わった場合、その時点で csv 出力を中断し、メッセージを出力します。その際の csv ファイルの出力情報は保証できません。コマンドを再実行することで、正常な情報を出力できます。
- このコマンドでは、イベントサーバ設定ファイルで指定したイベントデータベースのサイズ分の csv 出力を保証します。イベント情報をすべて保存したい場合は、イベントデータベースが切り替わる前に、比較キーワード WITHINなどを指定したフィルタファイルを-fオプションで指定して定期的に行うことを推奨します。イベントデータベースサイズの詳細については、「[6.4.2\(3\)\(i\) db-size イベントデータベースの容量](#)」を参照してください。
- -l オプションで文字コードを変換する場合、機種依存文字は正しく変換できません。
- このコマンドで JP1/SES 形式のイベントを csv ファイルに出力する場合、JP1/SES 形式のイベントはコードセットを持たないため、文字列にダブルクォーテーションマークを含むイベントを正しく csv 形式に変換できないことがあります。
- イベント ID は 16 進数で csv 出力されます。表計算ソフトで表示する場合、指数表示形式に合致したイベント ID (例:000020E0) は指数形式で表示されることがあります。テキストファイルで表示すれば、文字列表示で確認できます。
- 破壊されたイベントデータベースを csv ファイルに出力した場合、破損していないデータは正常に出力されますが、破損しているデータ部分には、KAJP1765-W のメッセージが出力されます。

## 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	コマンド処理中に csv 出力を中断した
3	イベントデータベースに破損レコードを検出した
255	そのほかのエラー

## 使用例

使用例を次に示します。

イベントサーバ名が Service のイベントデータベースから filter.txt に記述されたフィルター条件に合致した JP1 イベントだけを取り出し、conf.txt ファイルで指定された固有情報だけを csv 形式に変換して、csvconv.csv ファイルに出力します。

```
jevexport -h Service -o csvconv.csv -f filter.txt -k conf.txt
```

## jevlogdstart (UNIX 限定)

### 機能

ログファイルトラップ管理デーモンを起動するコマンドです。

### 形式

jevlogdstart

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jplbase/bin/

### 戻り値

0	正常終了
255	異常終了

## jevlogdstop (UNIX 限定)

### 機能

ログファイルトラップ管理デーモンを終了するコマンドです。

### 形式

jevlogdstop

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jplbase/bin/

### 注意事項

ログファイルトラップ管理デーモンは、物理ホスト、論理ホスト共通のデーモンです。また、jevlogdstop コマンドを実行すると、ログファイルトラップ機能が使用できなくなります。jevlogdstop コマンドを実行する場合は、物理ホストおよび論理ホストでログファイルトラップ機能を使用していないか十分に確認してください。

### 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	管理デーモンが起動していない
255	そのほかのエラー

# jevlogreload

## 機能

ログファイルトラップ機能の動作定義ファイルをリロードするコマンドです。リロードできる定義情報は、jevlogstart コマンドで起動時に指定した動作定義ファイルの MARKSTR, ACTDEF パラメーターの値だけです。

## 形式

jevlogreload { ID 番号 | ALL }

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### ID 番号

リロードしたいログファイルトラップの ID 番号を指定します。なお、ID 番号は、jevlogstart コマンドの実行時に、標準出力に出力されます。

### ALL

jevlogstart コマンドで起動したすべてのログファイルトラップをリロードします。

## 注意事項

MARKSTR, ACTDEF 以外のパラメーターを、起動時に設定した値と異なる値で設定すると、コマンド実行時エラーとなりリロードできません。MARKSTR, ACTDEF 以外のパラメーターを変更したい場合は、該当するログファイルトラップ機能を再起動してください。また、リロードコマンド実行時にトラップ処理を行っていた場合、そのトラップ処理の完了後、リロード処理を行います。

## 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	サービスまたは管理デーモンが起動していない
3	指定 ID のログファイルトラップは存在しない(すでに終了している)
4	動作定義ファイルに誤りあり
5	動作定義ファイルオープンエラー
6	メモリーなどシステム・リソース不足
7	イベントサーバが起動していない
8	権限チェックエラー
10	一部リロード失敗
255	そのほかのエラー



## jevlogstart

### 機能

ログファイルトラップ機能を起動するコマンドです。このコマンドを実行すると、オプションに指定してあるログファイルを検索します。そして、任意のデータを持つログの 1 行を JP1 イベント化し、イベントサーバに登録します。このコマンドの起動前に、ログファイルトラップ機能の動作定義ファイルを作成しておく必要があります。

ログファイルに出力されるデータの形式が異なるファイルは同時に扱えません。この場合は、新たに別のログファイルトラップ機能を起動する必要があります。

### 形式

```
jevlogstart [-f 動作定義ファイル名]
             [-t ファイル監視間隔(秒)]
             [-m イベント化するデータの最大長(バイト)]
             [-h]
             [-n 表示コマンド名] (UNIX 限定)
             [-p ログデータ出力元プログラム名]
             [-r]
             [-s 登録先イベントサーバ名]
             ログファイル名 1[ログファイル名 32(100)]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -f 動作定義ファイル名

ログファイルトラップ機能の動作定義ファイルの名称を 256 バイト以内で指定します。なお、相対パス名を指定する場合、ディレクトリ名を補ったフルパス名が 256 バイト以内になるように指定してください。相対パスはこのコマンドを実行するカレントディレクトリからの相対パスです。あらかじめ conf フォルダに jevlog.conf を作成し、そこに動作定義内容を指定しておいた場合、このオプションは省略できます。

jevlog.conf の格納先ディレクトリは次のとおりです。

Windows の場合

インストール先フォルダ¥jp1base¥conf¥

UNIX の場合

/etc/opt/jp1base/conf/

#### -t ファイル監視間隔(秒)

ログファイルの監視間隔 (1~86,400 秒) を指定します。このオプションを省略すると、10 が仮定されます。

#### WRAP1, WRAP2 または HTRACE の形式のログファイルを監視する場合

ラップラウンドする頻度が高い場合や監視間隔を長く指定した場合に、ログファイルトラップがデータを読み込む前に上書きされてしまい、データの読み込み漏れが発生するおそれがあります。データの読み込み漏れの予防策として、次の監視間隔の見積もり式を参考にしてください。

**ログファイルサイズ(バイト) × ログファイル数 > 1 秒当たりの出力サイズ(バイト) × 監視間隔(秒)**

### **-m イベント化するデータの最大長(バイト)**

指定したログファイルを読み込むとき、ログファイルの 1 行を、先頭から何バイト(1~1,024)まで JP1 イベントにするのかを指定します。行の終了文字は終了記号「¥0」に変更されます。先頭からのバイトの指定には、「¥0」が含まれます。読み込んだログファイルの 1 行がこのオプションで指定されたバイト数を超えた場合、イベント化するデータは「-m で指定したバイト数 - 1 バイト」になります。

このオプションで指定した値は、入力したログファイルの 1 行の有効範囲を示します。したがって、動作定義ファイルの MARKSTR パラメーターの正規表現と ACTDEF パラメーターの正規表現をチェックするのは、ここで指定した範囲内です。つまり、有効範囲を超えたカラムに対応する正規表現があっても、それらはチェックの対象にはなりません。このオプションを省略すると、512 が仮定されます。行終了文字は「¥0」に変更されます。

### **-h**

ログを先頭から読み込みたい場合に指定します。ログを出力するプログラムを起動したあとにこのコマンドを実行すると、この時点ですでに出力されているログは読み込まれません。しかし、このオプションを指定すれば、ファイルの先頭データから読み込みができるようになります。ラップラウンドファイルの場合、ファイルの先頭から EOF (End Of File) までデータを読み込んだ後、カレント入力ポインターを見つけて、最新データを読み込んでいきます。

### **-n 表示コマンド名**

このオプションは UNIX だけで使用できます。

ログファイルトラップ機能の表示コマンド名を指定します。この表示コマンド名は、ps コマンドで表示できます。なお、コマンド名は 256 バイト以内で指定してください。このオプションを省略した場合、「ログファイル名 1」が表示コマンド名に仮定されます。

### **-p ログデータ出力元プログラム名**

ログデータを出力するプログラム名を指定します。指定した名称は JP1/IM - View の [イベントコンソール] 画面に表示されます。

表示される名称は次のとおりです。

Windows の場合

/HITACHI/JP1/NT\_LOGTRAP/ログデータ出力元プログラム名

UNIX の場合

/HITACHI/JP1/UX\_LOGTRAP/ログデータ出力元プログラム名

このオプションを省略すると、Windows の場合、「/HITACHI/JP1/NT\_LOGTRAP」、UNIX の場合、「/HITACHI/JP1/UX\_LOGTRAP」と表示されます。

### **-r**

-r オプションを指定しておくと、ログファイルトラップ機能起動時に指定したログファイルが存在しなかった場合、そのファイルが作成されるまで、-t オプションで指定した間隔でオープンを試みます。オープンに成功すると検索を開始します。このオプションを省略した場合、ログファイルトラップ機能を起動した時点で、指定したログファイルが存在していない場合、ログファイルトラップ機能はログファイルのオープンを中止し、処理を終了します。

### **-s 登録先イベントサーバ名**

JP1 イベント登録先のサーバ名を、このオプションで指定されたサーバ名に変更します。指定できるイベントサーバは、自ホストで稼働しているイベントサーバに限ります。このオプションを省略すると、自ホストと同じイベントサーバ名が仮定されます。イベントサーバ名は 255 バイト以内で指定してください。

このオプションは、主にクラスタシステムで使用します。

**ログファイル名 1[ ...ログファイル名 32(100)]**

監視するログファイル名を指定します。ログファイル名を 256 バイト以内で指定します。なお、相対パス名を指定する場合、ディレクトリ名を補った完全名が 256 バイト以内になるように指定してください。相対パスはこのコマンドを実行するカレントディレクトリからの相対パスです。ログファイル名の先頭に「-(ハイフン)」を指定しないでください。

指定できる個数は Windows では 32 個、UNIX では 100 個までです。ただし、オープンできるファイル数が各システムによって異なるため、実際に指定できる個数の最大値は、Windows では 32 以下、UNIX では 100 以下になる場合があります。また、UNIX の場合、1 ログファイルの監視につき、1 プロセスを使用します。ps コマンドで表示されるコマンド名は「ログファイル名.child」です。

ログファイルの形式によっては監視できない場合があります。監視できるログファイルおよび監視できないログファイルの形式については、「[7.2.2 ログファイルトラップ機能を使用する前に](#)」を参照してください。

### 注意事項

- ログファイルトラップ機能は、ログを出力するプログラムを起動する前に起動してください。ログ出力中のファイルに対してログファイルトラップ機能を起動すると、正しくトラップできません。また、存在していないログファイルを指定する場合は、`-r` オプションでログファイルトラップ機能を待機させてください。
- Windows の場合、ログファイルトラップ管理サービス、UNIX の場合、ログファイルトラップ管理デーモンが起動されているのを確認してから、`jevlogstart` コマンドを実行してください。

### 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	サービスまたは管理デーモンが起動していない
3	イベントサービスが起動していない
255	そのほかのエラー

また、`jevlogstart` コマンドを実行すると、標準出力に ID 番号を出力します。この ID 番号は、指定したログファイルのログファイルトラップ変換を終了するときに必要なになります。

### 使用例

この使用例は、Windows の場合です。

(例 1)

ログファイル `c:\log\logfile1.log` から検索し、読み込みます。ここでの引数はログファイル名以外すべてデフォルトです。動作定義ファイルは `JP1/Base` の `conf` フォルダ内の `jevlog.conf`、ファイル監視間隔は 10 秒、イベント化するデータの最大長は 512 バイトです。

```
jevlogstart c:\log\logfile1.log
```

(例 2)

動作定義ファイルを `c:\conf\configfile.conf` にして、ログファイル `c:\log\logfile1.log` から検索し、読み込みます。

```
jevlogstart -f c:\conf\configfile.conf c:\log\logfile1.log
```

(例 3)

ファイル監視間隔を 5 秒にして、ログファイル `c:\log\logfile1.log` と `c:\log\logfile2.log` から検索し、読み込みます。

```
jevlogstart -t 5 c:\log\logfile1.log c:\log\logfile2.log
```

# jevlogstat

## 機能

ログファイルトラップ機能の動作状況を表示するコマンドです。このコマンドを実行すると、引数に指定した ID 番号を持つログファイルトラップの動作状況を戻り値で返します。

## 形式

jevlogstat ID 番号

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### ID 番号

動作状態を確認したいログファイルトラップの ID 番号を指定します。なお、ID 番号は、jevlogstart コマンドの実行時に、標準出力に出力されます。

## 戻り値

0	指定 ID のログファイルトラップは動作中
1	引数エラー
2	サービスまたは管理デーモンが起動していない
3	指定 ID のログファイルトラップが存在しない(すでに終了している)
255	そのほかのエラー

# jevlogstop

## 機能

ログファイルトラップ機能を終了するコマンドです。

このコマンドを実行すると, jevlogstart コマンドで実行したログファイルトラップを終了できます。

## 形式

jevlogstop [-w] { ALL | ID 番号 }

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** %jp1base%\bin\

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### -w

ログファイルトラップの停止前に, 監視間隔にかかわらず一度ログを読みます。このオプションを指定しなかった場合, 前回の監視タイミングから jevlogstop コマンド実行時までの間に発生したログは読み込まれません。

監視対象のログデータ量, およびリトライ中に保留された JP1 イベントの件数によっては, コマンドを実行してから終了するまでの時間が長くなる場合があります。クラスタシステム運用時で, フェールオーバー発生時の終了処理にこのオプションを使用する際は注意が必要です。

## ALL

jevlogstart コマンドで起動したすべてのログファイルトラップが終了します。

## ID 番号

jevlogstart コマンドで返された ID 番号を指定します。指定した ID 番号のログファイルトラップが終了します。なお, ID 番号は, jevlogstart コマンドの実行時に, 標準出力に出力されます。

## 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	サービスまたは管理デーモンが起動していない
3	指定 ID のログファイルトラップが存在しない(すでに終了している) ALL 指定の場合に, ログファイルトラップが一つも存在しない。
255	そのほかのエラー

## jevregsvc (Windows 限定)

### 機能

Windows で、イベントサーバをクラスタシステムで運用する場合、フェールオーバーさせるイベントサーバのサービスを追加・削除するコマンドです。

### 形式

```
jevregsvc -r [イベントサーバ名]
```

```
jevregsvc -u [イベントサーバ名]
```

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

### 引数

#### -r イベントサーバ名

イベントサーバのサービスを追加します。イベントサーバ名を省略すると、自ホスト名が仮定されます。

#### -u イベントサーバ名

イベントサーバのサービスを削除します。イベントサーバ名を省略すると、自ホスト名が仮定されます。

### 注意事項

イベントサーバ名は、イベントサーバインデックスに指定したものと大文字小文字を含めて完全に一致させてください。

### 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
255	そのほかのエラー

# jevreload

## 機能

転送設定 (forward) ファイルをリロードするコマンドです。

## 形式

jevreload [-h イベントサーバ名]

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### -h イベントサーバ名

転送設定 (forward) ファイルをリロードしたいイベントサーバ名を指定します。このオプションを省略すると、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名がイベントサーバ名として仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、自ホスト名と同じイベントサーバ名が仮定されます。イベントサーバ名は 255 バイト以内の文字列で指定してください。

## 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	指定されたイベントサーバが未起動
3	転送設定ファイルに誤りがある
255	そのほかのエラー

## 使用例

使用例を次に示します。

イベントサーバ evserver1 の転送設定 (forward) ファイルをリロードします。

```
jevreload -h evserver1
```

## jevsend

### 機能

イベントサーバに JP1 イベントを登録するコマンドです。

### 形式

```
jevsend [-i イベントID]
          [-m メッセージ]
          [[-e 拡張属性名=拡張属性値] ...]
          [-d 送信先イベントサーバ名]
          [-s 送信元イベントサーバ名]
```

### 実行権限

Windows の場合: なし

UNIX の場合: なし

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -i イベントID

登録する JP1 イベントのイベント ID を指定します。指定できる範囲は、0~1FFF, 7FFF8000~7FFFFFFF です。このオプションを省略すると、0 が仮定されます。

#### -m メッセージ

登録する JP1 イベントのメッセージテキストを指定します。メッセージテキストは、1,023 バイト以下の文字列で指定してください。

#### -e 拡張属性名=拡張属性値 ...

登録する JP1 イベントの拡張属性を指定します。登録する拡張属性の設定は「-e 拡張属性名=拡張属性値」を1組として複数記述できます。「=」と拡張属性値の間には空白(スペースやタブなど)を入れないでください。拡張属性とは次に示す内容の100個までの集まりのことです。なお、すべての属性値の長さの合計が、10,000 バイトに制限されます。

拡張属性	内容	形式
拡張属性名	属性の意味を表す名称	英数字またはアンダーライン(英字は大文字, 先頭は英字)から成る32バイトまでの文字列
拡張属性値	属性の内容	文字列(0~10,000 バイト)

なお、拡張属性名に“SEVERITY”を指定した JP1 イベントは、JP1/IM - View の[イベントコンソール]画面の一覧に表示されます。“SEVERITY”の拡張属性値は、[14.1.2 拡張属性](#)の項目「重大度」の内容の中から指定し、必ず先頭を大文字にしてください。

#### -d 送信先イベントサーバ名

JP1 イベントを転送設定ファイルで指定されたイベントサーバに送信せずに、任意のイベントサーバに送信したい場合、送信先のイベントサーバ名を指定します。イベントサーバ名は255バイト以内の文字列で指定してください。

### 注意事項

- 定義されていないイベントサーバ、起動されていないイベントサーバ、およびネットワークの障害などでイベントが届かないイベントサーバなどを指定してもエラーにはなりません。



- このオプションを指定して送信したJP1 イベントは自ホストのイベントサーバからは、取得できません。
- このオプションを指定して、JP1 イベントを他ホストのイベントサーバに送信する場合、イベントサーバ設定ファイルで設定した forward-limit パラメーターの指定によるリトライの対象にはなりません。

### -s 送信元イベントサーバ名

オプション-dを併用する場合は、転送のために使用するイベントサーバ名を指定します。また、オプション-dを指定しない場合は、イベントを登録するイベントサーバ名を指定します。指定できるイベントサーバは自ホストで稼働しているイベントサーバに限ります。このオプションを省略すると、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名がイベントサーバ名として仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、自ホスト名と同じイベントサーバ名が仮定されます。イベントサーバ名は 255 バイト以内の文字列で指定してください。

このオプションは、主にクラスタシステムで使用します。

### 注意事項

- オプションと値の間には 1 個以上の半角のスペースを入れてください。
- メッセージテキスト、拡張属性値の途中にスペースを入れる場合は、ダブルクォーテーションマーク(“)で囲んで指定してください。
- コマンドのオプションで指定できるバイト数は、OS の制限に依存しますので、各 OS の制限内で設定してください。
- UNIX システムで、メッセージまたは拡張属性に日本語の非 ASCII 文字を含める場合、LANG 環境変数に、使用する文字コードを表す正しい値を設定しておいてください。

### 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
255	そのほかのエラー

### 使用例

(例 1)

イベント ID が 111、メッセージが“BaseEvent\_Sample”の JP1 イベントを登録します。

```
jevsend -m BaseEvent_Sample -i 111
```

(例 2)

イベント ID が 111、拡張属性名が“EXTATTR”，拡張属性値が“Extend Value”を登録します。

```
jevsend -i 111 -e EXTATTR="Extend Value"
```

(例 3)

次に示す拡張属性の JP1 イベントを登録します。

- 拡張属性名が“EXTATTR”，拡張属性値が“extattr”
- 拡張属性名が“INCLUDESPACE”，拡張属性値が“include space”

```
jevsend -e EXTATTR=extattr -e INCLUDESPACE="include space"
```

(例 4)

イベント ID が 111、拡張属性名が“SEVERITY”，拡張属性値が“Information”の JP1 イベントを登録します。

```
jevsend -i 111 -e SEVERITY=Information
```

## jevsendd

### 機能

イベントサーバに JP1 イベントを登録し、登録に成功したかどうか確認できるコマンドです。イベントサービスが起動した状態にもかかわらず JP1 イベントが登録されない場合に、登録の確認を行うために使用するコマンドです。

### 形式

```
jevsendd [-i イベント ID]
          [-m メッセージ]
          [[-e 拡張属性名=拡張属性値] ...]
          -d 送信先イベントサーバ名
          [-s 送信元イベントサーバ名]
          [-f 初期ポーリング間隔(秒)]
          [-p ポーリング間隔(秒)]
          [-t 確認回数]
```

### 実行権限

Windows の場合: なし

UNIX の場合: なし

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -i イベント ID

登録する JP1 イベントのイベント ID を指定します。指定できる範囲は、0~1FFF, 7FFF8000~7FFFFFFF です。このオプションを省略すると、0 が仮定されます。

#### -m メッセージ

登録する JP1 イベントのメッセージテキストを指定します。メッセージテキストは、1,023 バイト以下の文字列で指定してください。

#### -e 拡張属性名=拡張属性値 ...

登録する JP1 イベントの拡張属性を指定します。登録する拡張属性の設定は「-e 拡張属性名=拡張属性値」を 1 組として複数記述できます。「=」と拡張属性値の間には空白（スペースやタブなど）を入れないでください。拡張属性とは次に示す内容の 100 個までの集まりのことです。なお、すべての属性値の長さの合計が、10,000 バイトに制限されます。

拡張属性	内容	形式
拡張属性名	属性の意味を表す名称	英数字またはアンダーライン（英字は大文字、先頭は英字）から成る 32 バイトまでの文字列
拡張属性値	属性の内容	文字列（0~10,000 バイト）

なお、拡張属性名に SEVERITY を指定した JP1 イベントは、JP1/IM - View の [イベントコンソール] 画面の一覧に表示されます。SEVERITY の拡張属性値は、「[14.1.2 拡張属性](#)」の項目「重大度」の内容の中から指定し、必ず先頭を大文字にしてください。

#### -d 送信先イベントサーバ名

送信先のイベントサーバ名を指定します。イベントサーバ名は 255 バイト以内の文字列で指定してください。

## 注意事項

- このオプションを指定して送信したJP1 イベントは自ホストのイベントサーバからは、取得できません。
- このオプションを指定して、JP1 イベントを他ホストのイベントサーバに送信する場合、イベントサーバ設定ファイルで設定した forward-limit パラメーターの指定によるリトライの対象にはなりません。

### -s 送信元イベントサーバ名

転送のために使用するイベントサーバ名を指定します。指定できるイベントサーバは自ホストで稼働しているイベントサーバに限ります。このオプションを省略すると、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名がイベントサーバ名として仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、自ホスト名と同じイベントサーバ名が仮定されます。イベントサーバ名は 255 バイト以内の文字列で指定してください。

このオプションは、主にクラスタシステムで使用します。

### -f 初期ポーリング間隔(秒)

JP1 イベントを送信先イベントサーバへ送信してから最初の到達確認までの待ち時間を 1 から 10 秒で指定します。このオプションを省略すると、3 秒が仮定されます。

### -p ポーリング間隔(秒)

初回の到達確認で JP1 イベントが到達していなかった場合、2 回目以降の到達確認をする間隔を 3 から 600 秒で指定します。このオプションを省略すると、10 秒が仮定されます。

### -t 確認回数

2 回目以降の到達確認の確認回数を 0 から 999 で指定します。このオプションを省略すると、0 が仮定されます。

## 注意事項

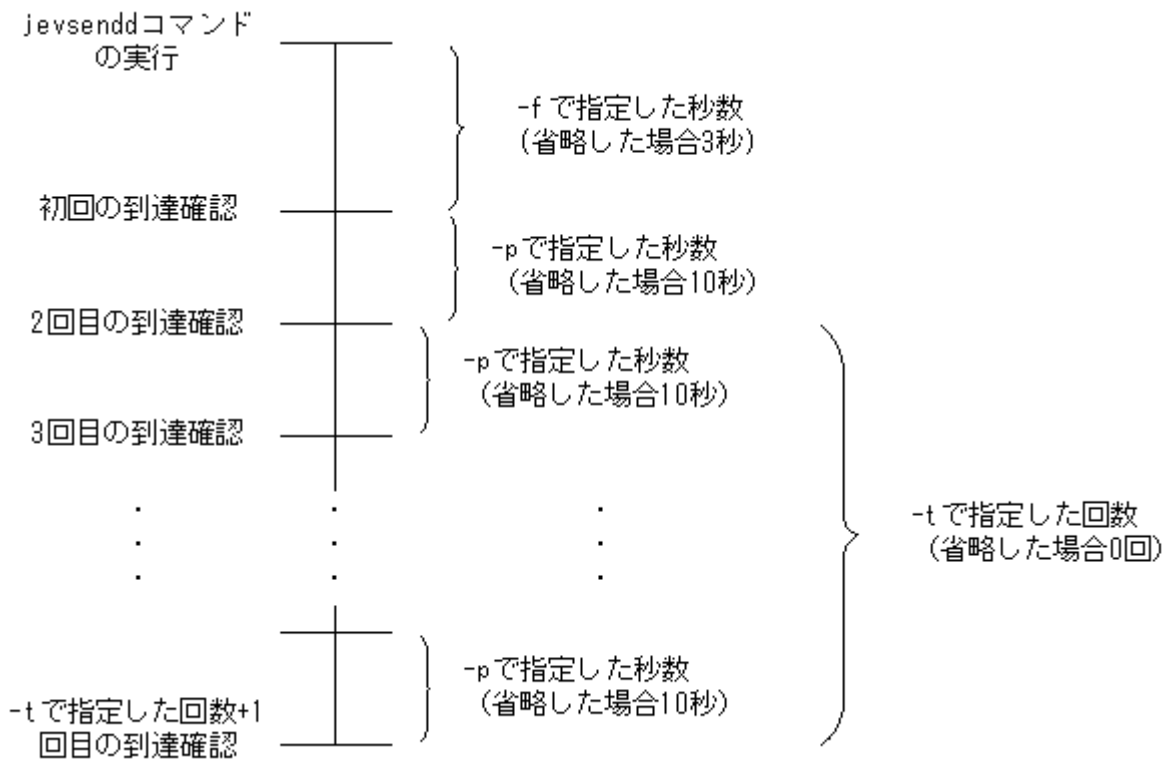
- オプションと値の間には 1 個以上の半角のスペースを入れてください。
- メッセージテキスト、拡張属性値の途中にスペースを入れる場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲んで指定してください。
- ダブルクォーテーションマーク(")の前に円記号を付けた場合(¥), ダブルクォーテーションマークとして解釈されます。
- 次に示す特殊文字を含む場合、ダブルクォーテーションマーク(")で囲む必要があります。  
# ; | & ( ) ^ < > スペース タブ
- コマンドのオプションで指定できるバイト数は、OS の制限に依存しますので、各 OS の制限内で設定してください。
- UNIX システムで、メッセージまたは拡張属性に日本語の非 ASCII 文字を含める場合、LANG 環境変数に、使用する文字コードを表す正しい値を設定しておいてください。
- このコマンドは、到達確認がされるか、エラーを検知するまで制御を返しません。

## 戻り値

0	正常終了
1	引数エラー
2	処理は続行中(最大到達待ち時間内に到達確認ができなかった場合)
3	転送に失敗した
255	そのほかのエラー

## 補足事項

-f, -p, -t オプションを指定した場合の動作を次の図に示します。



最大到達待ち時間は、次の式で求められます。

最大到達待ち時間 = -fで指定した秒数 + -pで指定した秒数 × -tで指定した回数

最大到達待ち時間内に到達確認ができなかった場合、エラーメッセージを出力して終了します。

## jevstart (UNIX 限定)

### 機能

手動でイベントサーバを起動するコマンドです。

### 形式

jevstart [イベントサーバ名]

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### イベントサーバ名

起動するイベントサーバを指定します。イベントサーバ名を省略すると、自ホストと同じイベントサーバ名が仮定されます。

### 戻り値

0	正常終了
255	異常終了

## jevstat

### 機能

イベントサービスのプロセス群(jevservice)が起動または終了しているかどうかを確認するコマンドです。このコマンドを実行すると、イベントサービスのプロセス群の動作状況が確認できます。イベントサービスのプロセスについては、「[付録 B プロセス一覧](#)」を参照してください。

### 形式

```
jevstat [イベントサーバ名]
        [-t 時間(秒)]
```

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### イベントサーバ名

クラスタシステムなどで運用している場合に、イベントサービスのプロセス群が起動または終了しているか確認したいイベントサーバ名を指定します。大文字、小文字は区別されます。このオプションを省略した場合、このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。イベントサーバ名は 255 バイト以内の文字列で指定してください。

#### -t 時間(秒)

jevstat コマンドの実行終了を待つ時間を秒単位で指定します。指定できる値は、1~32,767(単位: 秒)です。指定した時間内に jevstat コマンドの実行が終わらない場合、jevstat コマンドの実行が失敗したと見なします。デフォルトは 60 秒です。

### 注意事項

- イベントサービス起動直後に jevstat コマンドを実行すると、エラーメッセージ「KAJP1706-E イベントサーバに接続できません」が出力される場合があります。このようなときは、イベントサービスの起動から数秒あけて jevstat コマンドを実行してください。
- jevstat コマンドを実行し、統合トレースログに「KAJP1775-E 通信データの送受信に失敗しました (保守情報)」が出力された場合には、コマンドの実行がタイムアウトしているおそれがあります。-t オプションにコマンドの実行終了を待つ時間を指定して、jevstat コマンドを再実行してください。

### 戻り値

0	すべてのプロセスが起動している
1	異常終了(コマンドの処理でエラーが発生)
4	一部のプロセスが起動している
8	すべて停止している
12	異常終了(イベントサーバがエラーを返した)

### 補足事項

UNIX上のクラスタシステムで運用している場合、論理ホストの異常検知スクリプトにjevstatコマンドを組み込んで利用できます。この場合、論理ホスト上で動作させるイベントサーバ名の大文字小文字を意識して正しく指定してください。論理ホスト用イベントサーバ名は、イベントサーバインデックスファイル(index)に定義されているので、これを参考にして指定してください。

イベントサーバインデックスファイル(index)の定義例と、それを基にjevstatコマンドを実行した場合の実行結果を次に示します。

イベントサーバインデックスファイル(index)内の定義例

```
server * default
server HOSTZZ /jp1/share/
```

jevstat コマンド実行例と実行結果

jevstat コマンド実行例	実行結果
jevstat	物理ホスト上のイベントサーバの状態を表示します。
jevstat hostzz	指定されたイベントサーバ名が見つからない旨のエラーメッセージを表示します。
jevstat HOSTZZ	論理ホスト上のイベントサーバの状態を表示します。

## 使用例

jevstat コマンドの実行例を Windows, UNIX に分けて次に示します。

Windows の場合

```
E:\>jevstat
KAJP1771-I HOST1 の状態通知処理を開始します
稼働中のプロセスを表示します
プロセス名称   プロセス ID
   jevservice      1234
KAJP1772-I プロセスは全て起動しています
```

UNIX の場合

```
$/opt/jp1base/bin/jevstat
KAJP1771-I HOST1 の状態通知処理を開始します
稼働中のプロセスを表示します
プロセス名称   プロセス ID
   jevservice      2098
KAJP1772-I プロセスは全て起動しています
```

KAJP1772-I は、イベントサーバとして必要なプロセスがすべて起動しているときに表示されるメッセージです。

## jevstop (UNIX 限定)

### 機能

手動でイベントサーバを停止するコマンドです。

### 形式

jevstop [イベントサーバ名]

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### イベントサーバ名

起動するイベントサーバを指定します。イベントサーバ名を省略すると、自ホストと同じイベントサーバ名が仮定されます。

### 戻り値

0	正常終了
255	異常終了

## Jischk

### 機能

ISAM ファイルの論理構造を検証し、不正がある場合にメッセージを表示します。指定された検証レベルに応じて、ISAM ファイルを構成する各ファイルの内容や、ファイルの関連などを検証します。

また、UNIX では、キーファイルが不正な場合、キーの情報を表すキー定義パラメーターを出力できます。このパラメーターを使用すると、Jiskeymnt (キーの追加, 削除, および再構築) コマンドでキーファイルを再構築できます。

### 形式

Jischk [-l レベル] ファイル名 ... (Windows の場合)

Jischk [-l レベル] [-p] ファイル名 ... (UNIX の場合)

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -l レベル

ファイルを検証するレベルを指定します。レベルの数字が大きいほど、検証の内容が厳密になり、処理時間が長くなります。

1

Windows の場合、キーファイルだけを検証します。

UNIX の場合、キー定義ファイル、およびキーファイルを検証します。

2

Windows の場合、キーファイル、およびキーファイルとデータファイルの関連を検証します。

UNIX の場合、キー定義ファイル、キーファイル、およびキーファイルとデータファイルの関連を検証します。

3

次の項目を検証します。

キー定義ファイル (UNIX 限定)

キーファイル

キーファイルとデータファイルの関連

データファイルの構造

レコード件数

省略時は、1 が仮定されます。

**-p**

キーファイルの不正が検出されたとき、Jiskeymnt (キーの追加, 削除, および再構築) コマンド用のキー定義パラメーターを標準出力する場合に指定します。なお、このオプションは UNIX だけで使用できます。

### ファイル名

検証するファイルのファイル名を指定します。ドライブ、およびディレクトリを省略した場合は、カレントドライブ、およびカレントディレクトリが仮定されます。複数のファイルを指定する場合は、ファイル名を 1 文字以上のスペースで区切ります。また、ワイルドカード(\*)を使用してファイルを指定できます。なお、Windows の場合、スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

(例)

Windows の場合の指定例を次に示します。

ディレクトリ"c:\¥data"にあるすべてのファイルを指定します。

```
Jischk -l3 c:\¥data¥*
```

ディレクトリ"c:\¥data"にある、ファイル名が"SAMPLE"で始まるファイルを指定します。

```
Jischk -l3 c:\¥data¥SAMPLE*
```

### 注意事項

- 複数のファイルを指定したときに、処理の途中で入出力エラーが発生した場合や、ファイルがなかった場合は、その時点でコマンドの実行は終了します。
- Windows で、検証結果をテキストファイルなどに出力したい場合は、>のあとに出力先のファイル名を指定します。指定例を次に示します。

(例)

```
Jischk -l3 sample > chk.txt
```

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了
2	異常終了(ファイルの不整合があった場合に返される)



# Jiscond

## 機能

データファイルの無効領域を圧縮します。同時に、キーファイルを再構築します。

レコードを更新したり、レコードを削除したりすると、データファイルに無効領域が発生します。このコマンドでは、データファイルの無効データを除去して、データファイルを圧縮します。また、キー定義ファイルのキー情報に従って、キーを抽出しながらキーファイルを再構築します。ただし、ファイルにキーが定義されていない場合、キーファイルは再構築しません。

## 形式

Jiscond [-r] [-d dir **ワークフォルダ名**] [-k | -q] **ファイル名** (Windows の場合)

Jiscond [-T dir **ワークディレクトリ名**] [-k | -q] **ファイル名** (UNIX の場合)

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### -r

データファイルおよびキーファイルの圧縮率を表示する場合に指定します。指定すると、ファイル圧縮ユーティリティの実行結果に、圧縮前のファイルサイズに対する圧縮後のファイルサイズの割合が表示されます。

### -d dir **ワークフォルダ名**

ファイルの圧縮では、キーファイルをソートするために、ワークファイルを使用します。そのため、ワークファイルを作成するディレクトリを指定します。省略時は、環境変数の temp, または tmp で指定されたディレクトリ、またはカレントディレクトリを使用します。なお、このオプションは Windows だけで使用できます。

### -T dir **ワークディレクトリ名**

ファイルの圧縮では、キーファイルをソートするために、ワークファイルを使用します。そのため、ワークファイルを作成するディレクトリを指定します。省略時は、/tmp, または /usr/tmp を使用します。なお、このオプションは UNIX だけで使用できます。

### -k

ISAM ファイルの再編成と同時に、肥大化抑止を設定する場合に指定します。JP1 の運用を長期間継続すると、ISAM データベースのインデックスであるキーファイルのサイズが際限なく増加するため、定期的に ISAM ファイルの再編成を行う必要があります。この引数を指定すれば、キーファイルの肥大化を抑止できます。

### -q

ISAM ファイルの再編成と同時に、肥大化抑止の設定を解除する場合に指定します。JP1 を以前のバージョンに戻すためには、以前のバージョンで対応していない機能を解除する必要があります。この引数を指定すれば、以前のバージョンの JP1 でも ISAM ファイルをアクセスできます。

## ファイル名

検証するファイルのファイル名を指定します。ドライブ、およびディレクトリを省略した場合は、カレントドライブ、およびカレントディレクトリが仮定されます。Windows で、複数のファイルを指定する場合は、ファイル名を1文字以上のスペースで区

切ります。スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(“)で囲みます。また、ワイルドカード(\*)を使用してファイルを指定できます。

(例)

Windows の場合の指定例を次に示します。

ディレクトリ c:\¥data にあるすべてのファイルを指定します。

Jiscond c:\¥data¥\*

ディレクトリ c:\¥data にある、ファイル名が SAMPLE で始まるファイルを指定します。

Jiscond c:\¥data¥SAMPLE\*

## 注意事項

- ファイルを圧縮するときにワークファイルを使用します。また、ファイルの圧縮では、データファイルの複製を作成してからキーファイルを構築するので、容量の大きいファイルを圧縮する場合には注意が必要です。
- Windows で、複数のファイルを指定したときに、処理の途中で入出力エラーが発生した場合、またはファイルがなかった場合は、その時点でコマンドの実行は終了します。
- Windows で、圧縮率を表示する指定にすると、結果が表示されるまでに多少時間が掛かります。
- 06-71 以前の JP1/Base の実行系・待機系が使用する共有ディスク上に ISAM ファイルを作成しているシステムで、ISAM ファイルに対して肥大化抑止の設定をしたい場合は、実行系・待機系の JP1/Base のバージョンを 07-00 以降にしたあと、共有ディスク上の ISAM ファイルに対して肥大化抑止の設定をしてください。
- 実行系・待機系で共有ディスク上に作成した ISAM ファイルに対して肥大化抑止の設定をしているシステムで、JP1/Base を 06-71 以前のバージョンに戻す場合は、共有ディスク上の ISAM ファイルの肥大化抑止設定を解除してから、実行系・待機系の JP1/Base のバージョンを戻してください。

## 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

**機能**

順編成ファイル(ISAMファイル)に変換します。また、ISAMファイル(ISAMファイル)に変換します。

このコマンドは、障害が発生したISAMファイルから順編成ファイルに抽出したデータレコードを、ISAMファイルのデータファイルに回復する場合などに使用します。

**ISAMファイルに変換する**

キー定義ファイルの内容に従って、順編成ファイル(ISAMファイル)のデータファイルに変換します。このとき、同時にキーファイルを作成します。ただし、ISAMファイルにキーが定義されていない場合、キーファイルは作成しません。

変換元の順編成ファイルと変換先のISAMファイルは、レコード種別が同じでなければなりません。レコード種別の関係を、次の表に示します。

**表 13-3 レコード種別の関係 (ISAMファイルに変換する場合)**

順編成ファイル(変換元)	ISAMファイル(変換先)	
	固定長	可変長
固定長	○	×
可変長	×	○

(凡例)

○:変換する

×:変換しない

レコード長の扱いは、次のようになります。

- 固定長の順編成ファイル(ISAMファイル)に変換する場合  
変換先のキー定義ファイルに定義されているレコード長を、変換元のレコード長と見なして変換します。
- 可変長の順編成ファイル(ISAMファイル)に変換する場合  
変換元の各レコードのレコード長に従って変換します。  
変換元のレコード長が、変換先のキー定義ファイルに定義されているレコード長の範囲に含まれていない場合は、変換元のレコード長を不正と見なし、変換を中止します。

**注意事項**

順編成ファイル(ISAMファイル)に変換する際の注意事項を次に示します。

- 変換先のISAMファイルを、あらかじめ作成しておく必要があります。
- ISAMファイルに変換する際、ワークファイルを使用します。

**順編成ファイルに変換する**

ISAMファイルのデータファイル(ISAMファイル)を、順編成ファイルに変換します。変換元のレコードは、データファイル中での物理的な並び順に従って出力されます。データファイル中の削除レコードは、出力されません。

変換元のISAMファイルと変換先の順編成ファイルは、レコード種別が同じでなければなりません。レコード種別の関係を、次の表に示します。

**表 13-4 レコード種別の関係 (順編成ファイルに変換する場合)**

ISAMファイル(変換元)	順編成ファイル(変換先)	
	固定長	可変長
固定長	○	×
可変長	×	○

(凡例)

○:変換する

×:変換しない

レコード長の扱いは、次のようになります。

- 固定長の ISAM ファイルを固定長の順編成ファイルに変換する場合  
変換元のキー定義ファイルに定義されているレコード長を、変換先のレコード長と見なして変換します。
- 可変長の ISAM ファイルを可変長の順編成ファイルに変換する場合  
変換元のキー定義ファイルに定義されている最小レコード長、および最大レコード長を、変換先の最小レコード長、および最大レコード長と見なして変換します。

## 形式

Jisconv [-f] -t **タイプ** [-d dir **ワークフォルダ名**] **ファイル名 1** **ファイル名 2** (Windows の場合)

Jisconv -t **タイプ** [-T dir **ワークディレクトリ名**] **ファイル名 1** **ファイル名 2** (UNIX の場合)

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

-f

ファイル名 2 で指定したものと同一ファイル名のファイルが存在するとき、上書き確認メッセージを表示しない場合に指定します。なお、このオプションは Windows だけで使用できます。

-t **タイプ**

ファイルの変換タイプを、次に示すどちらかで指定します。

SI

順編成ファイルを ISAM ファイルに変換します。

IS

ISAM ファイルを順編成ファイルに変換します。

-d dir **ワークフォルダ名**

順編成ファイルを ISAM ファイルに変換する場合、キーファイルをソートするために、ワークファイルを使用します。そのため、ワークファイルを作成するディレクトリを指定します。省略時は、環境変数の temp、または tmp で指定されたディレクトリ、またはカレントディレクトリを使用します。なお、このオプションは Windows だけで使用できます。

-T dir **ワークディレクトリ名**

順編成ファイルを ISAM ファイルに変換する場合、キーファイルをソートするために、ワークファイルを使用します。そのため、ワークファイルを作成するディレクトリを指定します。省略時は、/tmp、または /usr/tmp を使用します。なお、このオプションは、UNIX だけで使用できます。

**ファイル名 1**

変換元ファイルのファイル名を指定します。ドライブ、およびディレクトリを省略した場合は、カレントドライブ、およびカレントディレクトリが仮定されます。

Windows の場合、スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

UNIX の場合、順編成ファイルから ISAM ファイルへの変換で、ハイフン(-)を指定した場合は、標準入力を仮定します。

## ファイル名 2

変換先ファイルのファイル名を指定します。ドライブ, およびディレクトリを省略した場合は, カレントドライブ, およびカレントディレクトリが仮定されます。同じファイル名のファイルが存在する場合, 上書きします。

Windows の場合, スペースを含むファイル名を指定する場合は, ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

UNIX の場合, ISAM ファイルから順編成ファイルへの変換で, ハイフン(-)を指定した場合は, 標準出力を仮定します。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jiscpy

### 機能

**コピー元ファイル名**で指定した ISAM ファイルを, **コピー先ファイル名**で指定した ISAM ファイルにコピーします。また, **コピー元ファイル名 1 [コピー元ファイル名 2 ...]**で指定した ISAM ファイルを, **コピー先ディレクトリ名**で指定したディレクトリにコピーします。

### 形式

Jiscpy **コピー元ファイル名** **コピー先ファイル名**

Jiscpy **コピー元ファイル名 1 [コピー元ファイル名 2 ...]** **コピー先ディレクトリ名**

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jplbase¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jplbase/bin/

### 引数

#### コピー元ファイル名

コピーする ISAM ファイルを指定します。

#### コピー先ファイル名

**コピー元ファイル名**で指定した ISAM ファイルをコピーするファイル名を指定します。

#### コピー元ファイル名 1 [コピー元ファイル名 2 ...]

ISAM ファイルを複数コピーする場合に指定します。なお, ISAM ファイルを複数指定する場合は, **コピー先ディレクトリ名**を指定する必要があります。

#### コピー先ディレクトリ名

コピーする ISAM ファイルを格納するディレクトリ名を指定します。

### 注意事項

ISAM ファイルを安全にコピーするには, JP1/Base を停止する必要があります。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jisext

### 機能

障害が発生した ISAM ファイルのデータファイルから、有効なレコードをできる限り抽出し、順編成ファイルに回復します。また、UNIX の場合、ISAM ファイルのキー定義情報を出力します。

このコマンドでは、データファイルの先頭からレコードを検証し、不正を検出するまで、レコードを順編成ファイルへ出力します。次に、末尾からレコードを検証し、不正を検出するまで、レコードを順編成ファイルへ出力します。

レコードを抽出するとき、レコード種別、およびレコード長は、キー定義ファイルに基づいて決定されます。そのため、キー定義ファイルが破壊されている場合は、これらの属性をオプションで指定する必要があります。ファイルを検証したときに、定義ファイルの不正を検出したというメッセージが表示された場合、キー定義ファイルは破壊されています。なお、キー定義ファイルが正常な場合でも、これらの属性を指定できます。この場合、指定した属性でレコードが抽出されます。

### 形式

Jisext [-f **レコード種別:レコード長**] **ファイル名 1** **ファイル名 2** (Windows の場合)

Jisext {-p | -f **レコード種別:レコード長**} **ファイル名 1** [**ファイル名 2**] (UNIX の場合)

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -p

キー定義パラメーターを標準出力したい場合に指定します。-f オプションと同時に指定できません。なお、このオプションは、UNIX だけで使用できます。

#### -f **レコード種別:レコード長**

ISAM ファイルのレコード種別、およびレコード長を指定します。ここでの指定は、キー定義ファイルでの指定より優先されます。UNIX の場合、-p オプションと同時に指定できません。

#### **レコード種別**

レコード種別を、次のどちらかで指定します。

f: 固定長

v: 可変長

#### **レコード長**

レコード長を、1~65,503 の範囲で指定します。

レコード種別が可変長の場合、最大レコード長を指定します。この場合、最小レコード長は 1 を仮定します。

#### **ファイル名 1**

レコードを抽出する ISAM ファイルのファイル名を指定します。ドライブ、およびディレクトリを省略した場合は、カレントドライブ、およびカレントディレクトリが仮定されます。Windows の場合、スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

## ファイル名 2

抽出したレコードを出力する順編成ファイルのファイル名を指定します。ドライブ、およびディレクトリを省略した場合は、カレントドライブ、およびカレントディレクトリが仮定されます。同じファイル名のファイルが存在する場合、上書きします。

Windows の場合、スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

HP-UX、および Solaris の場合、省略できません。

## 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jisinfo

### 機能

ISAM ファイルを構成するファイルに関する情報、およびキーに関する情報を表示します。

次に示す、キー定義ファイルの内容を表示します。

- データファイルに関する情報  
レコード形式、レコード長、フラグ類
- キーファイルに関する情報  
キーファイルページ長、キー項目名、キー項目数、キーファイル名、フラグ類、キーの要素数、キーの位置、キーの長さ、キーの属性

### 形式

Jisinfo [-u] [-e] **ファイル名** (-e オプションは UNIX 限定)

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jplbase¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jplbase/bin/

### 引数

#### -u

レコードの削除や更新によってデータファイルおよびキーファイルに未使用領域ができます。このファイルの未使用領域サイズの割合を表示する場合に指定します。なお、未使用領域率が高い場合は、ファイル圧縮ユーティリティで未使用領域率を 0 にできます。

#### -e

このオプションは UNIX だけで使用できます。

ISAMファイルの肥大化抑止機能の設定を確認する場合に指定します。設定が有効のときは、「キーファイル再利用」の項目に「再利用する」と表示されます。なお、Windows の場合で肥大化抑止が設定されているとき、ISAM ファイルの肥大化抑止の状態は常に表示されます。

### ファイル名

キー定義情報を表示するファイルのファイル名を指定します。ドライブ、およびディレクトリを省略した場合は、カレントドライブ、およびカレントディレクトリが仮定されます。複数のファイルを指定する場合は、ファイル名を1文字以上のスペースで区切ります。また、ワイルドカード(\*)を使用してファイルを指定できます。

Windows の場合、スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

(例)

Windows の場合の指定例を次に示します。

ディレクトリ c:\¥data にあるすべてのファイルを指定します。

```
Jisinfo c:\¥data¥*
```

ディレクトリ c:\¥data にある、ファイル名が SAMPLE で始まるファイルを指定します。

```
Jisinfo c:\¥data¥SAMPLE*
```

### 注意事項

- 複数のファイルを指定したときに、処理の途中で入出力エラーが発生した場合や、ファイルがなかった場合は、その時点でコマンドの実行は終了します。
- 検証結果をテキストファイルなどに出力したい場合は、>のあとに出力先のファイル名を指定します。指定例を次に示します。

(例)

```
Jisinfo sample > info.txt
```

- 未使用領域を表示する指定にすると、キー定義情報が表示されるまでに多少時間が掛かります。
- 未使用領域を表示する指定にすると、指定した ISAM ファイルがほかの処理でアクセス中の場合、占有エラーとなります。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jiskeymnt

### 機能

キーを追加、または削除したり、キーファイルを再構築したりします。追加、削除、および再構築するキーの情報は、テキストエディターや UNIX の vi などのエディターを使用して、キー定義パラメーターファイルに定義しておきます。

### キーの追加

キー項目名やキーの定義情報を、キー定義ファイルへ追加します。また、追加するキーに対応するキーファイルを作成します。

### キーの削除

キー項目名やキーの定義情報を、キー定義ファイルから削除します。また、削除するキーに対応するキーファイルを削除します。

### キーの再構築

指定されたキーに対応するキーファイルを、現在のキー定義内容で再作成します。

### 形式



Jiskeymnt **ファイル名** (Windows の場合)

Jiskeymnt [**ファイル名 ...**] (UNIX の場合)

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** %jp1base%\bin\

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

### ファイル名

キーを編集する ISAM ファイルの情報を記述した、キー定義パラメーターファイルのファイル名を指定します。

Windows の場合、スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

UNIX の場合、省略時は、ISAM ファイルのキー定義情報を標準入力から読み込みます。複数のファイルを指定する場合は、ファイル名を 1 文字以上のスペースで区切ります。また、ワイルドカード(\*)を使用してファイルを指定できます。

(例)

Windows の場合の指定例を次に示します。

ディレクトリ c:\%data にあるすべてのファイルを指定します。

Jiskeymnt c:\%data\\*

ディレクトリ c:\%data にある、ファイル名が SAMPLE で始まるファイルを指定します。

### キー定義パラメーターファイルの定義方法

キーの追加、削除、および再構築で使用するキー定義パラメーターファイルの定義方法を説明します。

### パラメーターファイルの指定内容

キー定義パラメーターファイルに指定する内容を、次の表に示します。

表 13-5 キー定義パラメーターファイルの指定内容 (キーの追加、削除、および再構築)

キーワード	形式	内容
fi-	ファイル名 <sup>※1</sup>	ISAM ファイルのファイル名を指定する。パス名を含めて指定できる。OS のファイル名の規則に従うこと。 Windows の場合、スペースを含むファイル名は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲む。 UNIX の場合、指定できるファイル名の最大長は、ファイル名の長さに関する OS の制限値よりも 4 文字短い。
an-	キー項目名 <sup>※2</sup>	キーを追加するとき、キー項目名を指定する。
dn-	キー項目名 <sup>※2</sup>	キーを削除するとき、キー項目名を指定する。
rn-	キー項目名 <sup>※2</sup>	キーを再構築するとき、キー項目名を指定する。すべてのキーを再構築する場合は、キー項目名を省略する。
ke-	t=キー属性 ,p=キー位置 ,l=キー長 [,ISDESC]	キーを追加するとき、キーの詳細を指定する。キー追加時は、必ず指定する。合成キーの場合、構成項目ごとに指定する。 <sup>※3</sup> キー属性 次のどれかを指定する。

		<p>c: 文字型 (CHARTYPE)  i: 2 バイト整数型 (INTTYPE)  l: 4 バイト整数型 (LONGTYPE)  f: 計算機浮動型 (FLOATTYPE)  d: 計算機倍長型 (DOUBLETYPE)</p> <p>キー位置  レコード種別に応じて、次のように指定する。  固定長の場合: 0 ~ (レコード長 - 1) の範囲  可変長の場合: 0 ~ (最小レコード長 - 1) の範囲</p> <p>キー長  キー属性に応じて、次のように指定する。  c (文字型) の場合: 1 ~ 255 の範囲  i (2 バイト整数型) の場合: 2  l (4 バイト整数型) の場合: 4  f (計算機浮動型) の場合: 4  d (計算機倍長型) の場合: 8</p> <p>ISDESC  キーの要素が降順型であることを示す。省略時は昇順型とする。</p>
cp-	重複情報, 圧縮情報	<p>キーを追加するとき、キーの重複および圧縮の情報を 16 進 4 桁で指定する。</p> <p>ビット位置 15: 重複キー順序保証  キー値が重複した場合のキー作成順を保証するかを指定する。  0: 保証する  1: 保証しない</p> <p>ビット位置 14: スパースキーの有無  0: なし  1: あり</p> <p>ビット位置 1~13: 予備 (Windows の場合)  (0000000000)<sub>2</sub> 固定</p> <p>ビット位置 4~13: 予備 (UNIX の場合)  (0000000000)<sub>2</sub> 固定</p> <p>ビット位置 1~3: 圧縮レベル<sup>※4</sup> (UNIX の場合)  (111)<sub>2</sub>: 完全圧縮  (000)<sub>2</sub>: 圧縮なし</p> <p>ビット位置 0: 重複キーの許可  0: 認めない  1: 認める</p>
sp-	スパース文字	<p>キーを追加するとき、スパース文字の内部値を 16 進 2 桁で指定する。cp パラメーターでスパースキーありを指定した場合に指定する。</p>

注※1

末尾に ".KDF", ".DRF", および ".K01" ~ ".K99" を付けたファイル名は指定できない。

注※2

各キー項目名は半角で 31 バイトまで指定できる。また、an-パラメーターのキー項目名に“K01”～“K99”は指定できない。

### 注※3

キー属性, キー位置, キー長, および順序 (ISDESC) がすべて同じ構成項目を, 複数指定できない。

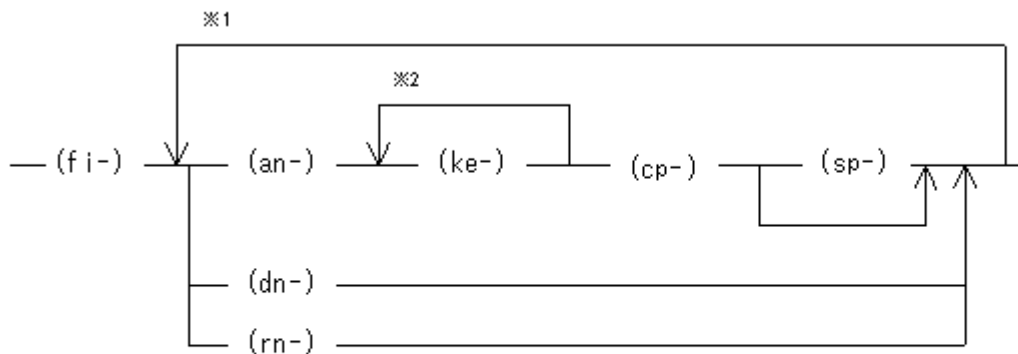
### 注※4

この ISAM ファイル管理では, 圧縮レベルの指定内容に関係なく, キーは圧縮される。

キー定義パラメーターファイルには, 追加するキー, 削除するキー, および再構築するキーを, 同時に指定できます。また, それぞれ複数のキーを指定できます。

### パラメーターの記述方法

キー定義パラメーターファイルのパラメーターの記述方法を, 次に示します。



注※1 複数のキーを追加, 削除, および再構築する場合, キーの数だけ繰り返す。

注※2 合成キーを追加する場合, 構成項目の数だけ繰り返す。

### パラメーターファイル定義時の注意事項

キー定義パラメーターファイルを定義するときの注意事項を, 次に示します。

- 各パラメーターの間には, 1 個以上のスペースを指定してください。

(例)

fi-isamfile△rn-subkey1△...

(凡例) △:スペース

- パラメーター内にスペースは指定できません。

(例)

ke-t=c△,p=10...

(凡例) △:スペース

### 注意事項

- 主キーの追加, および削除はできません。
- キーの追加, および再構築では, ワークファイルを使用します。
- UNIX で, 複数のファイルを指定したときに, 処理の途中で入出力エラーが発生した場合や, ファイルがなかった場合は, その時点でコマンドの実行は終了します。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jisktod

### 機能

障害が発生した ISAM ファイルのキーファイルから、有効なレコードをできる限り抽出し、順編成ファイルに回復します。また、このコマンドは、回復する ISAM ファイルに排他モードでロックをかけます。回復する ISAM ファイルにアクセスしている場合は、このコマンドを実行する前に必ずアクセスしていない状態にしてください。

ISAM ファイルの以下に示す論理構造を検証し、キーファイルで管理している有効レコードを順編成ファイルへ出力します。

- 定義ファイルの論理構造
- データファイルのサイズとレコードの論理構造
- キーファイルの論理構造とデータファイルとの整合性

論理構造を検証した結果、不正を検出した場合は、指定されたメッセージ出力レベルに応じて、詳細なメッセージを出力します。致命的な不正を検出した場合は、コマンドは異常終了し、順編成ファイルは作成されません。ただし、不正の内容によっては、できる限り有効レコードを抽出します。

レコードを抽出するとき、レコード種別、およびレコード長は、キー定義ファイルに基づいて決定されます。そのため、キー定義ファイルが破壊されている場合は、レコードを抽出できません。

出力された順編成ファイルは、既存のファイルの変換コマンド (Jisconv) で、ISAM ファイルに変換できます。変換先のレコード種別、およびレコード長は、順編成ファイルと同じにしてください。

### 形式

Windows の場合

Jisktod [-k キー項目名]

[-l メッセージの出力レベル]

[-b バッファサイズ]

[-d ワークフォルダ名]

**抽出対象の ISAM ファイル名 順編成ファイル名**

Jisktod -c

[-k キー項目名]

[-l メッセージの出力レベル]

[-b バッファサイズ]

[-d ワークフォルダ名]

**検証対象の ISAM ファイル名**

UNIX の場合

Jisktod [-k キー項目名]

[-l メッセージの出力レベル]

[-b バッファサイズ]

[-T ワークディレクトリ名]

**抽出対象の ISAM ファイル名 順編成ファイル名**

Jisktod -c

[-k キー項目名]

[-l メッセージの出力レベル]

[-b バッファサイズ]

[-T ワークディレクトリ名]

## 検証対象の ISAM ファイル名

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ** ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -c

ISAM ファイルの論理構造の検証だけを実行したい場合に指定します。指定した ISAM ファイルの各キーファイルからレコードが抽出可能かどうかを検証します。ISAM ファイルの論理構造を検証した結果、各キーファイルから抽出可能なレコード件数やエラーの内容を標準エラー出力にメッセージを出力します。

このオプションを指定する場合は、検証したい ISAM ファイル名を指定してください。

このオプションを省略した場合は、ISAM ファイルの論理構造の検証を実行したあとに有効なレコードをできる限り抽出し、順編成ファイルに回復します。このオプションを省略する場合は、有効レコードを抽出する ISAM ファイル名と、抽出した有効レコードを出力する順編成ファイル名を指定してください。

-k オプションを指定した場合は、検証したいキーファイルを特定できます。

-k オプションを省略した場合は、キー定義ファイルに定義されているすべてのキーファイルを検証します。対象のキーファイルが存在しない場合は、検証処理をスキップし、次のキーファイルの検証処理を実行します。

#### -k キー項目名

キー項目名は、キー定義情報の表示コマンド (Jisinfo) で表示されるキーファイル情報のキー項目名を指定します。

-c オプションを指定する場合 (ISAM ファイルの論理構造を検証したい場合) は、検証したいキーファイルのキー項目名を指定します。-c オプションを指定し、-k オプションを省略した場合、キー定義ファイルに定義されているすべてのキーファイルを検証します。

-c オプションを省略する場合 (ISAM ファイルから有効レコードを抽出したい場合) は、有効レコードを抽出するキーファイルのキー項目名を指定します。-c および -k オプションを省略した場合は、キー定義情報の表示コマンド (Jisinfo) で表示されるキーファイル情報の最初のキー項目名のキーファイルに対して、有効レコードが抽出されます。

#### -l メッセージの出力レベル

エラーの内容を示す詳細メッセージを標準エラー出力に出力するかどうかを指定します。指定できる値は 0 または 1 です。1 を指定した場合は、詳細メッセージを含めすべてのメッセージを標準エラー出力に出力します。デフォルトは 0 です。

#### -b バッファサイズ (MB)

ファイル入出力に使用するバッファサイズを、MB (メガバイト) 単位で指定します。指定できる値は 0~256 です。0 を指定した場合はバッファを確保しません。デフォルトは 16 です。

#### -d ワークフォルダ名

キーファイルから有効レコードを取り出しソートするために、ワークファイルを使用します。そのため、ワークファイルを作成するフォルダを指定します。このオプションを省略した場合は、環境変数の temp, tmp で指定されたフォルダ、またはカレントフォルダを使用します。なお、このオプションは Windows だけで使用できます。

#### -T ワークディレクトリ名

キーファイルから有効記録を取り出しソートするために、ワークファイルを使用します。そのため、ワークファイルを作成するディレクトリを指定します。このオプションを省略した場合は、/tmp または /usr/tmp を使用します。なお、このオプションは UNIX だけで使用できます。

### 抽出対象の ISAM ファイル名

-c オプションを省略した場合に指定できます。キーファイルから有効記録を抽出する ISAM ファイル名を指定します。ドライブ名およびディレクトリ名を省略した場合は、カレントドライブおよびカレントディレクトリが仮定されます。スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

また、ファイル名の後ろに定義ファイルの拡張子\*を指定した場合、指定した拡張子を取り除いた名前を ISAM ファイル名と仮定します。定義ファイルの拡張子\*以外を指定した場合は、拡張子を含めた名前を ISAM ファイル名と仮定します。

注※

Windows の場合: 半角大小文字の「.KDF」

UNIX の場合: 半角大文字の「.DEF」

### 順編成ファイル名

-c オプションを省略した場合に指定できます。抽出対象の ISAM ファイルで指定した ISAM ファイルから抽出した有効記録を出力する順編成ファイル名を指定します。すでに存在するファイル名を指定した場合は、上書きされます。

ドライブ名およびディレクトリ名を省略した場合は、カレントドライブおよびカレントディレクトリが仮定されます。スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

また、ISAM ファイルの拡張子\*は指定できません。

注※

Windows の場合: 半角の大文字または小文字の「.KDF」「.DRF」「.K01～.K99」

UNIX の場合: 半角大文字の「.DEF」「.DAT」「.K01～.K99」

### 検証対象の ISAM ファイル名

-c オプションを指定した場合に指定できます。論理構造を検証する ISAM ファイル名を指定します。ドライブ名およびディレクトリ名を省略した場合は、カレントドライブおよびカレントディレクトリが仮定されます。スペースを含むファイル名を指定する場合は、ダブルクォーテーションマーク(")で囲みます。

また、ファイル名の後ろに定義ファイルの拡張子\*を指定した場合、指定した拡張子を取り除いた名前を ISAM ファイル名と仮定します。定義ファイルの拡張子\*以外を指定した場合は、拡張子を含めた名前を ISAM ファイル名と仮定します。

注※

Windows の場合: 半角の大文字または小文字の「.KDF」

UNIX の場合: 半角大文字の「.DEF」

### 注意事項

- -c オプションを省略した場合、ファイル入出力に使用するバッファは 2 面使用されます。したがって、-b オプションに指定した値の 2 倍のバッファサイズが確保されます。
- 複数のキーファイルを持つ ISAM ファイルのうち、どれか 1 個でも論理構造が確保されていないキーファイルが存在すると、ファイルの変換コマンド (Jisconv) で ISAM ファイルに変換できないことがあります。

### 戻り値

0	正常終了
1	抽出できない記録が存在する
2	一部整合性が確保されていないが、抽出できる記録が存在する
3	引数誤り、ファイル不正、システムエラー、内部矛盾、排他エラー

### 使用例

ISAM ファイル (ISAMFILE) から順編成ファイル (SAMFILE) に有効レコードを抽出する例を次に示します。

- 1 個の ISAM ファイルから順編成ファイルに抽出する例
  - >Jisktod ISAMFILE SAMFILE
  - KAIU347-I 索引順編成ファイルのデータファイル検証を開始します。
  - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
  - KAIU348-I 索引順編成ファイルのデータファイル検証を終了します。
  - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
  - KAIU321-I 索引順編成ファイルの抽出を開始します。
  - キー項目名 : K01
  - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
  - 出力ファイル : SAMFILE
  - KAIU323-I 正常にキーファイルからレコードを抽出しました。
  - キー項目名 : K01
  - 抽出件数 : 101
  - 登録件数 : 101
  - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
  - 出力ファイル : SAMFILE
- 2 個のキーファイル (キー項目名 : K01 と K02) を持つ ISAM ファイルから順編成ファイルに抽出する例
  - 1. 各キーファイルに対してキーファイルの論理構造を検証します。
    - >Jisktod -c -l 1 ISAMFILE
    - KAIU347-I 索引順編成ファイルのデータファイル検証を開始します。
    - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
    - KAIU348-I 索引順編成ファイルのデータファイル検証を終了します。
    - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
    - KAIU322-I 索引順編成ファイルのキーファイル検証を開始します。
    - キー項目名 : K01
    - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
    - KAIU333-W リーフページとレコードのキーが一致していません。
    - キー項目名: K01 ISAM ファイル名: ISAMFILE オフセット: 0x00000000
    - KAIU342-W 定義ファイルとキーファイルのレコード件数が一致しません。
    - キー項目名 : K01
    - 有効レコード件数: 100
    - 登録件数 : 101
    - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
    - KAIU340-W キーファイルから管理されていないレコードが存在します。
    - キー項目名 : K01
    - ISAM ファイル名 : ISAMFILE
    - オフセット : 0x00000000
    - KAIU328-W キーファイルは一部整合性が確保できていません。
    - キー項目名 : K01
    - 抽出可能件数 : 100
    - 登録件数 : 101

- ISAM ファイル名 : ISAMFILE
- KAIU322-I 索引順編成ファイルのキーファイル検証を開始します。
- キー項目名 : K02
- ISAM ファイル名 : ISAMFILE
- KAIU324-I キーファイルは正常な状態です。
- キー項目名 : K02
- 抽出可能件数 : 101
- 登録件数 : 101

ISAM ファイル名 : ISAMFILE

2. 手順 1 で検証した結果, 正常なキーファイル(キー項目名:K02)を使用して, レコードを抽出します。

>Jisktod -k K02 ISAMFILE SAMFILE

KAIU347-I 索引順編成ファイルのデータファイル検証を開始します。

ISAM ファイル名 : ISAMFILE

KAIU348-I 索引順編成ファイルのデータファイル検証を終了します。

ISAM ファイル名 : ISAMFILE

KAIU321-I 索引順編成ファイルの抽出を開始します。

キー項目名 : K02

ISAM ファイル名 : ISAMFILE

出力ファイル : SAMFILE

KAIU323-I 正常にキーファイルからレコードを抽出しました。

キー項目名 : K02

抽出件数 : 101

登録件数 : 101

ISAM ファイル名 : ISAMFILE

出力ファイル : SAMFILE



## Jislckclear (Windows 限定)

### 機能

ISAM ファイルにアクセスするユーザープログラムを強制終了した場合などで、消滅したプロセスによってファイルやレコードが占有されたままとなっている状態を確認および解除します。

### 形式

Jislckclear {-c | -d}

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

### 引数

#### -c

ISAM ファイルにアクセスするユーザープログラムを強制終了した場合などで、消滅したプロセスによってファイルやレコードが占有されているかどうかを確認します。消滅したプロセスのファイルやレコードの占有情報が残っている場合は、KAIU315-I のメッセージが標準エラー出力に出力されます。

#### -d

ISAM ファイルにアクセスするユーザープログラムを強制終了した場合などで、消滅したプロセスによってファイルやレコードが占有されている状態をすべて解除します。

### 注意事項

- このコマンドの実行中は共有メモリーを排他にするため、ISAM ファイルにアクセスするユーザープログラムは待機状態となります。
- c オプションで占有情報を確認したあと、-d オプションで解除する間に、ISAM ファイルにアクセスしているほかのプロセスによって、占有状態が解除される場合があります。このため、-c オプションで表示される占有情報の個数と、-d オプションで表示される解除した数は一致しない場合があります。

### 戻り値

0	正常終了
1	正常終了 (占有情報の通知または解除)
2	正常終了 (占有情報がないため処理を終了)
3	異常終了 (実行権限がない)
4	異常終了 (引数の誤り)
5	異常終了 (システムコールエラー)
99	異常終了 (プログラム論理エラー)

## Jislckext

### 機能

ロックテーブルのエントリー数を拡張, または縮小します。なお, Jislckext コマンド実行前や実行後にロックテーブルの状態を表示する手順は, 次のようになります。

### Windows の場合

1. **Jislckext コマンドの -t オプションを使用して現在のロックエントリー数を取得する。**  
コマンドは次のように指定して実行してください。  
Jislckext -t
2. **エントリー数を変更する。**  
コマンドは次のように指定して実行してください。  
Jislckext エントリー数
3. **Jislckext コマンドの -t オプションを使用してロックエントリー数に変更されたことを確認する。**  
コマンドは次のように指定して実行してください。  
Jislckext -t

### UNIX の場合

1. **ipcs コマンドで共有メモリーのセグメントサイズを調べる。**  
コマンドは次のように指定して実行してください。  
ipcs -ma | grep 0x88
2. **エントリー数を求める。**  
次に示す計算式でエントリー数が求められます。  
(ipcs コマンド実行結果 - 36972) / 104
3. **エントリー数を変更する。**  
コマンドは次のように指定して実行してください。  
Jislckext エントリー数
4. **ipcs コマンドで共有メモリーのセグメントサイズが変更されたことを確認します。**  
ipcs -ma | grep 0x88

### 形式

Jislckext エントリー数

### 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

インストール先フォルダ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### エントリー数

指定したエントリー数で, ロックテーブルを再作成します。

### 注意事項

- ロックテーブルがほかのプロセスで使用中の場合は, 使用中のエントリー数だけを返します。

- ロックテーブルのエントリー数を変更する場合は、JP1/Base のサービス、および JP1/AJS2 のサービスを停止する必要があります。また、ISAM ファイルの操作、保守に関するユーティリティコマンド、および JP1/AJS2 のジョブネットを操作するコマンドを終了する必要があります。
- ロックテーブルのエントリー数の最大は、32,767 です。

#### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jislckfree (Windows 限定)

### 機能

システム共有メモリーに持つ ISAM のロックテーブルから、PID で指定されたロックエントリー情報を削除します。これによって、ファイル・レコード占有が解除されます。指定された PID が ISAM のロックテーブル中になくても正常終了します。ISAM のロックテーブルがない (ISAM を使用している JP1 製品が起動していない) 状態でコマンドを実行した場合、"SetSecurity DescriptorDacl Error" のエラーメッセージで異常終了します。

### 形式

Jislckfree -p PID

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

### 引数

-p PID

PID には、ISAM ファイル・レコード占有中のプロセス ID を指定します。

### 注意事項

- ISAM のロックテーブルから指定された PID で示されるロックエントリー情報をすべて削除するため、PID で示される JP1 製品の起動中にコマンドは実行しないようにしてください。
- ロックエントリー情報を削除したい PID は、Jislcktr コマンドでわかります。

#### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jislckreg (UNIX 限定)

### 機能

ISAM で使用するリソースの設定を支援します。

JP1 製品に組み込まれている ISAM データベースはシステムで共通のリソースを使用しているため、ある製品で ISAM データベースへのアクセスが集中した場合、ほかの JP1 製品の ISAM データベースへのアクセスと動作が干渉して性能が低下することがあります。ISAM で使用するリソースを分割することでアクセス性能を向上できます。設定方法については、各 JP1 製品のマニュアルを参照してください。

### 形式

```
Jislckreg {-r | -c | -i | -s}
```

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -r

現在の設定ファイル (/etc/opt/jp1base/conf/Jismdef.ini) の内容に従って ISAM で使用するリソース (共有メモリーとセマフォ) を設定します。ISAM リソースの設定は、JP1/Base の起動時に自動的に行われるため、この引数を使用して本コマンドを実行する必要はありません。

#### -c

設定ファイル (/etc/opt/jp1base/conf/Jismdef.ini) の文法をチェックします。

#### -i

現在のシステム上のリソース設定情報を表示します。

#### -s

設定ファイル (/etc/opt/jp1base/conf/Jismdef.ini) でのシステムリソース使用量を表示します。

### 注意事項

- 設定を変更する場合、すべての JP1 サービスを停止してからファイル内容の変更をしてください。
- 設定ファイルの変更後、すべての JP1 サービスを再起動する前に Jisrsdel コマンドを実行してください。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jismcktr (Windows 限定)

### 機能

ISAM ロックテーブルの情報を表示します。表示内容を次に示します。

```
*** REG INFO ***
ISM_FILENO_ENV[1024]          ファイルロックテーブル数
ISM_LOCKENTRY_ENV[1024]      ロックエントリー数
***** Lock Table *****
tableCount:1024              ファイルロックテーブル数
fileCount:3                  ファイルロックテーブル使用数

[1]C:¥TEMP¥TEST11.KDF        ファイルロックテーブル情報
    usedEntryCount:1          使用エントリー数
--- PID --- TID --- fd --- Offset --- lngth --- mode --- time ---
[1] 255    188    160    0      1      1    03/05/14 10:35:07

[2]C:¥TEMP¥TEST11.DRF        ファイルロックテーブル情報
    usedEntryCount:2          使用エントリー数
--- PID --- TID --- fd --- Offset --- lngth --- mode --- time ---
[1] 255    188    20     0      1      2    03/05/14 10:35:11
[2] 255    188    20     82     1      2    03/05/14 10:35:15

[3]C:¥TEMP¥TEST11.K01        ファイルロックテーブル情報
    usedEntryCount:0          使用エントリー数
--- PID --- TID --- fd --- Offset --- lngth --- mode --- time ---
```

レジストリ情報

ロックテーブル情報

### 形式

Jismcktr

### 実行権限

Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jplbase¥bin¥

# Jisprt

## 機能

データファイルのレコードの内容を、指定した形式に編集して表示します。表示形式には、ダンプ形式、文字形式、および 16 進形式があります。

レコード内容の表示は、次に示すときに終了します。

- データファイルのすべてのレコードの内容を、表示し終わったとき。
- オプションで指定した範囲内のレコードの内容を、表示し終わったとき。
- オプションで指定した件数分のレコードの内容を、表示し終わったとき。

## 形式

Jisprt [-t **タイプ**]

{[-k **キー項目名**][-s **開始キー値[:x]**][-e **終了キー値[:x]**] | -d}

[-c **レコード件数**]

**ファイル名**

## 実行権限

Windows の場合: Administrators 権限 (Windows Vista の場合は管理者コンソールから実行)

UNIX の場合: スーパーユーザー権限

## 格納先ディレクトリ

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

## 引数

-t **タイプ**

レコード内容の表示形式を、次のどれかで指定します。

d

ダンプ形式

c

文字形式

h

16 進形式

省略時は、d を仮定します。

-k **キー項目名**

レコードの表示順序の基準にするキーの、キー項目名を指定します。省略時は、主キー順にレコードを表示します。

-s **開始キー値[:x]**

表示を開始するキーの値を指定します。省略時は、いちばん小さい値を持つキーから表示します。キーの値を 16 進数で指定する場合、値のあとに:x を指定します。

-e **終了キー値[:x]**

表示を終了するキーの値を指定します。省略時は、いちばん大きい値を持つキーまで表示します。キーの値を 16 進数で指定する場合、値のあとに:x を指定します。

-d

レコードを物理順に表示する場合に指定します。-k **キー項目名**, -s **開始キー値[:x]**, および e **終了キー値[:x]**と同時に指定できません。

### -c レコード件数

表示するレコードの件数を指定します。

### ファイル名

レコード内容を表示するファイルのファイル名を指定します。

### 注意事項

- レコード内容をテキストファイルなどに出力したい場合は、>のあとに出力先のファイル名を指定します。  
(例)  
Jisprt sample > prt.txt
- UJIS 環境, または Solaris の場合, 半角のかたかなをピリオドに置き換えて表示します。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## Jisrsdel (UNIX 限定)

### 機能

ISAM で使用するリソースを削除します。

### 形式

Jisrsdel

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/bin/

### 注意事項

このコマンドを実行する場合は, すべての JP1 サービスが停止していることを確認してください。JP1 サービス実行中に実行すると, ISAM ファイルを破壊するおそれがあります。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了

## jp1base\_setup (UNIX 限定)

### 機能

JP1/Base の動作環境を設定します。このコマンドは、クラスタシステムやクラスタシステムでない場合も含めて、JP1/Base を使用する場合に実行します。

### 形式

jp1base\_setup

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/bin

### 注意事項

- JP1/Base をインストールしてあるホストに対して上書きで JP1/Base をインストールする場合は、jp1base\_setup コマンドを起動してセットアップを行う必要はありません。  
バージョンが 06-00 の場合、JP1/IM がインストールされているマシンに JP1/Base を上書きインストールし、jp1base\_setup コマンドを実行すると、JP1/IM の jcocmddef コマンドで設定していた値がデフォルトに戻ります。この場合は、jcocmddef コマンドを使用して値を再設定してください。
- 論理ホスト設定後に jp1base\_setup コマンドを実行した場合、物理ホストの通信方式が ANY バインド方式に設定されます。この場合は、以下の手順で物理ホストの通信方式を IP バインド方式に変更してください。
  1. 以下の内容のファイルを作成する。  
[JP1\_DEFAULT¥JP1BASE]  
"JP1\_BIND\_ADDR"="IP"
  2. 操作 1 で作成したファイルを jbssetcnf コマンドを使って共通定義に設定する。
- JP1/Base を起動しているときは、このコマンドを実行しないでください。

### 戻り値

0	正常終了
1	異常終了



## jp1base\_setup\_cluster (UNIX 限定)

### 機能

JP1/Base の論理ホストの動作環境を設定します。クラスタシステムでの環境設定で使用します。環境設定は、実行系、待機系の順に行います。

### 形式

```
jp1base_setup_cluster -h 論理ホスト名  
                        [-d 共有ディレクトリ [-a 認証サーバ] [-s] [-v]]
```

### 実行権限

スーパーユーザー権限

### 実行系の環境設定

論理ホスト名と共有ディレクトリ名の指定が必要です。ほかのオプションについては、必要に応じて指定してください。このコマンドを実行すると、指定した共有ディレクトリに定義ファイルなどがコピーされるため、必ず共有ディスクをマウントしておいてください。

### 待機系の環境設定

論理ホスト名だけを指定します。実行系で設定した情報を基に動作環境を設定します。なお、待機系の環境設定をする前に、実行系で設定した共通定義情報を待機系にコピーする必要があります。コピーする場合、jbsgetcnf コマンド、および jbssetcnf コマンドを利用します。

### 格納先ディレクトリ

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

環境を設定する論理ホスト名を指定します。

### 注意事項

- 論理ホスト名は、hosts ファイルやネームサーバに設定し、TCP/IP 通信ができるようにしてください。
- DNS 運用の場合は、FQDN (Fully Qualified Domain Name) 形式ではないホスト名を指定してください。例えば、jp1v6.soft.hitachi.co.jp の場合は、jp1v6 を指定します。

#### -d 共有ディレクトリ

実行系の環境設定時に使用します。フェールオーバー時に引き継ぐ情報を格納する共有ディレクトリを指定します。共有ディスク上のディレクトリを指定してください。指定した共有ディレクトリで、JP1/Base の動作に必要な環境設定が行われます。このオプションを指定してコマンドを実行すると、共有ディスク上に次の表に示すディレクトリを作成し、定義ファイルを /etc/opt/jp1base/conf/ からコピーします。

ディレクトリ	格納するファイル
共有ディレクトリ/jp1base/conf/	定義ファイル
共有ディレクトリ/jp1base/log/	ログファイル
共有ディレクトリ/event/	イベントサーバ設定ファイル

なお、定義ファイルの内容は、必要に応じて変更してください。

#### -a 認証サーバ

論理ホストが接続する認証サーバのホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、認証サーバの設定は物理ホストの環境設定と同じ認証サーバが指定されます。

-s

論理ホストで認証サーバを実行する場合に指定します。このオプションを指定すると、JP1/Base の起動時に認証サーバが起動するように設定されます。このオプションを省略した場合、認証サーバを起動しないように設定されます。

-v

このオプションを指定すると、論理ホストの動作環境を設定するときのすべてのメッセージを画面上に表示します。

### 注意事項

- 設定は、ノードごとに実施してください。
- このコマンドを実行すると、ローカルディスク上にあるイベントサービスのイベントサーバインデックスファイル (/etc/opt/jp1base/conf/event/index) に「論理ホスト名」と「**共用ディスク上のディレクトリ名/event**」が自動設定されます。また、「**共用ディスク上のディレクトリ名/event**」下にイベントサーバ設定ファイル (conf) および転送設定ファイル (forward) が作成されます。
- このコマンドを実行すると、TCP/IP 通信で使うソケットのバインド方法を IP アドレス指定方式に変更します。変更の対象は、作成する論理ホストおよび物理ホストの設定です。TCP/IP 通信のソケットのバインド方法の詳細については、OS のマニュアルを参照してください。
- jp1base\_setup\_cluster コマンドで、イベントサービスの通信方式の設定はできません。イベントサーバ設定ファイル (conf) を編集してイベントサービスの通信方式を設定してください。
- JP1/Base を起動しているときは、このコマンドを実行しないでください。

### 使用例

論理ホスト名を lnode0 に、共有ディスク上のディレクトリ名を /shdsk/lnode0 に設定した場合の使用例を次に示します。

実行系での環境設定

```
jp1base_setup_cluster -h lnode0 -d /shdsk/lnode0 -a lnode0 -s
```

このコマンドを実行すると、論理ホストの環境設定、共有ディスク上に共有ディレクトリと共有ファイルの作成、および認証サーバの設定が行われます。

待機系での環境設定

```
jp1base_setup_cluster -h lnode0
```

## jp1bshasetup (Windows 限定)

### 機能

JP1/Base の論理ホストの動作環境を設定する [Base クラス構成の設定] ダイアログボックスを表示するコマンドです。クラスタシステムでの環境設定で使用します。

### 形式

```
jp1bshasetup
```

### 実行権限

Administrators 権限

### 格納先ディレクトリ

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

### 注意事項

JP1/Base を起動しているときは、このコマンドを実行しないでください。

## jp1ping

### 機能

オペレーティングシステムで管理しているネットワーク機能 (gethostbyname) を使用して、引数で指定されたホスト名を IP アドレスに変換し、得られた IP アドレスに対して ping コマンドを実行するコマンドです。

ネットワークインターフェースを複数備えているホスト (一つのホスト名に対して複数の IP アドレスを割り当てているようなホスト) に対するネットワークの設定が有効かを確認する場合に使用します。

### 形式

```
jp1ping [-h 論理ホスト名]
```

ホスト名

### 実行権限

Windows の場合: なし

UNIX の場合: なし

### 格納先ディレクトリ

Windows の場合

インストール先フォルダ ¥jp1base¥bin¥

UNIX の場合

/opt/jp1base/bin/

### 引数

#### -h 論理ホスト名

クラスタシステムで運用している場合に、jp1ping を実行したい論理ホスト名を指定します。このオプションを省略した場合、環境変数 JP1\_HOSTNAME に指定した論理ホスト名が仮定されます。環境変数 JP1\_HOSTNAME を指定していない場合、物理ホスト名が仮定されます。

### ホスト名

ネットワーク上のホスト名を指定します。

### 戻り値

0	正常終了
0 以外	異常終了 (ただし、引数を指定しないでコマンドを実行し、使用方法が表示される場合は正常終了)

## 使用例

server1 上で自分自身 (server1) がどの IP アドレスを使用しているのかを確認するために、jp1ping コマンドを実行した場合の結果(出力例)を次に示します。

```
C:¥>jp1ping server1
```

```
LogicalHostnameKey : no define. use JP1_DEFAULT
```

```
jp1hosts           : no entry. extract hostlist is disabled.
```

```
Search jp1hosts    : server1 is not found.
```

```
Resolved Host List : server1 -> server1.hitachi.co.jp(172.16.0.10, 172.16.0.20),
```

```
Check with ping command ---
```

```
Pinging 172.16.0.10 with 32bytes of data:
```

```
Reply from 172.16.0.10: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

```
Reply from 172.16.0.10: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

```
Reply from 172.16.0.10: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

```
Reply from 172.16.0.10: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

```
Pinging 172.16.0.20 with 32bytes of data:
```

```
Reply from 172.16.0.20: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

```
Reply from 172.16.0.20: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

```
Reply from 172.16.0.20: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

```
Reply from 172.16.0.20: bytes=32 time<10ms TTL=128
```

```
C:¥>
```

出力内容から、server1 というホスト名が、172.16.0.10 と 172.16.0.20 の二つの IP アドレスに解決され、実際に NIC への ping が有効になっていることが判断できます。

## 14. JP1 イベント

この章では、JP1/Base が出力する JP1 イベントの種類と発行契機、および JP1 イベント情報の内訳について説明します。

### 14.1 JP1 イベントの属性

JP1 イベントの属性を示します。JP1 イベントの属性には基本属性と拡張属性があります。

基本属性は、すべての JP1 イベントが持っている属性です。拡張属性は、JP1 イベントを発行するプログラムが独自に割り当てる属性です。

#### 14.1.1 基本属性

JP1 イベントの基本属性を次の表に示します。

表 14-1 JP1 イベントの基本属性

通称	形式 <sup>*1</sup>	内容	JP1/SESでの採否
イベント DB 内の通し番号	数値 (32 ビット)	発行元によらないでこのイベントサーバに到達した順番(ローカルイベントも含む)。この属性は JP1 イベントのイベントサーバ間の転送時に保存されない。主に JP1 イベントを擬似オペレーターやほかのイベントサーバへ転送した時の漏れ・重複の防止に用いる。	×
イベント ID	数値 (32 ビット) の 2 組 <sup>*2</sup>	発行 AP や事象の内容を表す 8 バイトの値。	○
登録要因	数値 (32 ビット)	JP1 イベントがこのイベントサーバに登録された要因。この属性は JP1 イベントのイベントサーバ間転送時に保存されない。登録要因を次に示す。 1 の場合: 自イベントサーバから自イベントサーバあての発行 2 の場合: 自イベントサーバから他イベントサーバあての発行(この値はアプリケーションで取得できません) 3 の場合: 他イベントサーバから自イベントサーバあての発行 4 の場合: 環境設定の指定による他イベントサーバから自イベントサーバへの転送	×
発行元プロセス ID	数値 (32 ビット)	発行元 AP のプロセス ID。	○
登録時刻	数値 (32 ビット)	発行元イベントサーバでの登録時刻(発行元ホストの時計に基づく。UTC の 1970-01-01 00:00:00 からの秒数)。	○
到着時刻	数値 (32 ビット)	自イベントサーバでの登録時刻(UTC の 1970-01-01 00:00:00 からの秒数)。この属性は JP1 イベントのイベントサーバ間転送時に保存されない。	×
発行元ユーザー ID	数値 (32 ビット)	発行元プロセスのユーザー ID (数値)。Windows と Java では環境設定による固定値(-1~65,535)。	○
発行元グループ ID	数値 (32 ビット)	発行元プロセスのグループ ID (数値)。Windows と Java では環境設定による固定値(-1~65,535)。	○
発行元ユーザー名	文字列 (0~20 バイト)	発行元プロセスのユーザー名。	○
発行元グループ名	文字列 (0~20 バイト)	発行元プロセスのグループ名。Windows と Java ではヌル文字列。	○
発行元イベントサーバ名 <sup>*3</sup>	文字列 (0~255 バイト)	発行元のイベントサーバ名。 JP1 イベントが、エージェントホスト→サブマネージャーホスト→マネージャーホストのように転送された場合でも、最初のエージェントホストのイベントサーバ名が入る。	○
送信先イベントサーバ名 <sup>*3</sup>	文字列 (0~255 バイト)	発行元 AP が他イベントサーバへの転送を明示して指定した場合に、他イベントサーバの名称が入る。	○
発行元 IP アドレス	バイト列 (0~16 バイト)	発行元イベントサーバに対応する IP アドレス(NAT(ネットワークアドレス変換)やプロキシを経由した場合および環境設定で転送した JP1 イベントについては正確な値ではない)。	○

送信先 IP アドレス	バイト列(0~16 バイト)	送信先イベントサーバに対応するIPアドレス(NAT(ネットワークアドレス変換)やプロキシを経由した場合および環境設定で転送した JP1 イベントについては正確な値ではない)。	○
発行元別通し番号	数値(32ビット)	発行元ホストでのイベント DB 内通し番号(転送によって値は変化しない)。*4	×
コードセット	文字列(0~255 バイト)	メッセージ・詳細情報・拡張属性が記述されている文字コードセット名。*5	×
メッセージ	文字列(0~ 1,023 バイト)*6	JP1 イベントの内容を表した文字列。	○
詳細情報	文字列またはバ イト列(0~1,024 バイト)*6	任意のデータ。	○

(凡例)

○:JP1/SES でサポートしている属性

×:JP1/SES でサポートしていない属性

注※1

文字列は0を除く任意のバイト列です。バイト列は0を含むことがあります。

注※2

上位 4 バイト(基本コード), 下位 4 バイト(拡張コード)で示される 16 進数で表現されます。例えば, 00000111:00000000 または 111:0 と表現します。値の範囲については各 JP1 プログラムのマニュアルを参照してください。また, ユーザーの使用できる ID は 0:0~1FFF:0 および 7FFF8000:0~7FFFFFFF:0 の範囲です。なお, 拡張コードは必ず 0 になります。

注※3

通常, イベントサーバ名はホスト名です。

注※4

06-51/C 以降の JP1/Base では, JP1/SES プロトコルのイベントについては JP1/SES プロトコルのイベントを受信したイベントサーバでそのときの時刻をミリ秒に変換したものを基に採番されます。

注※5

次の値などがあります。

- 8859\_1(ISO-8859-1)
- SJIS(シフト JIS)
- EUCJIS(EUC 日本語)
- UTF-8(日本語 UTF-8)

注※6

メッセージと詳細情報を合わせて 1,024 バイトに制限されます。メッセージと詳細情報の関係を次に示します。

詳細情報の有無と形式	メッセージなし	メッセージあり(文字列)
なし	—	1,023 バイト
あり(文字列)	1,023 バイト	合計 1,022 バイト
あり(バイト列)	1,024 バイト	合計 1,023 バイト

### 14.1.2 拡張属性

JP1 イベントの拡張属性とは, JP1 イベント発行元プログラムが任意に指定できる属性です。拡張属性には共通情報と固有情報があります。共通情報は JP1 プログラムで統一されている情報を示します。固有情報は共通情報以外の拡張属性を示します。

共通情報の一覧を次の表に示します。

**表 14-2 共通情報の一覧**

項目	属性名	内容
重大度	SEVERITY	JP1 イベントの緊急性を表す。緊急性の高い順に、次の値がある。 "Emergency" (緊急) "Alert" (警戒) "Critical" (致命的) "Error" (エラー) "Warning" (警告) "Notice" (通知) "Information" (情報) "Debug" (デバッグ)
ユーザー名	USER_NAME	業務を実行しているユーザー名。
プロダクト名	PRODUCT_NAME	JP1 イベントを発行したプログラム名。次に示すプログラム名などがある。 "/HITACHI/JP1/AJS" "/HITACHI/JP1/AOM" "/HITACHI/JP1/IM" "/HITACHI/JP1/NBQ" "/HITACHI/JP1/NETMDM" "/HITACHI/JP1/NPS" "/HITACHI/JP1/NQSEXEC" "/HITACHI/JP1/SES" "/HITACHI/JP1/BASE"
オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	オブジェクトの種類を表す。 "JOB" "JOBNET" "BATCHJOB" "ACTION" "LIST" "EVENTDB" "COMMAND" "LOGFILE" "SNMP_TRAP" "SESSION" "SPMD"
オブジェクト名	OBJECT_NAME	ジョブ、ジョブ ネットなどのオブジェクトの名称。ジョブ ネットなど階層のあるオブジェクトの場合、最下層の要素。
登録名タイプ	ROOT_OBJECT_TYPE	オブジェクトの種別。通常はオブジェクトタイプと同じだが、ジョブ ネットなど階層のあるオブジェクトの場合、最上層のオブジェクトの種別となる。値の範囲はオブジェクトタイプと同じ。
登録名	ROOT_OBJECT_NAME	ユーザーの操作時に実行を指示する単位になる名称。通常はオブジェクト名と同じだが、ジョブ ネットなど階層のあるオブジェクトの場合、最上層のオブジェクトの名称になる。
オブジェクト ID	OBJECT_ID	オブジェクト ID。 PRODUCT_NAME との組み合わせによってオブジェクトのインスタンスを統合システム内で一意に意識できる文字列 (形式は他製品に依存する。この情報は JP1/IM - View の [統合機能メニュー] 画面から各製品のモニターを呼び出すときに使用する)。
事象種別	OCCURRENCE	オブジェクト名に示したオブジェクトに対して起こった事象。次に示す事象種別などがある。 "END" "LATEEND" "LATESTART" "NOTICE" "PAUSE" "START" "SWITCH" "RECEIVE"
開始時刻	START_TIME	実行開始または再実行開始の時刻 (UTC 1970-01-01 00:00:00 からの秒数)。この項目は設定されない場合もある。
終了時刻	END_TIME	実行終了の時刻 (UTC 1970-01-01 00:00:00 からの秒数)。この項目は設定されない場合もある。
終了コード	RESULT_CODE	10 進数文字列の終了コード。この項目は設定されない場合もある。

## 14.2 JP1/Base が出力する JP1 イベント一覧

JP1/Base が出力する JP1 イベントを次の表に示します。

表 14-3 JP1/Base が出力する JP1 イベント一覧

イベント ID	発行契機	メッセージ
00003D00	イベントデータベースを切り替えた場合	イベント DB を旧 DB 番号から新 DB 番号に切り替えました
00003D04	イベントサービスの再起動機能によって異常終了したプロセスを再起動した場合	イベントサービスは内部機能の再起動により回復しました
00003A10	ログファイルトラップのリトライによってイベントサービスに再接続できた場合	ログファイルトラップのリトライが行なわれたため、イベント発行が遅延しました
00003A20	ログファイルトラップがログファイルの監視を開始できない場合	該当ログファイルの監視を開始出来ません
00003A21	AP のログファイルの読み込みリトライ回数がかしきい値をオーバーし、該当ログファイルの監視を停止した場合	指定された回数リトライ処理を行いましたが、該当ログファイルの読み込みが出来ないため監視を停止します
00003A22	AP のログファイルの状態が異常となった場合	該当ログファイルを正しく監視することができない状態になりました
00003A71	Windows イベントのログメッセージを検知した場合	Windows イベントのログメッセージ
動作定義ファイルの ACTDEF パラメーターに指定されたイベント ID	AP のログファイルのレコードを検知した場合	ログファイルの 1 行分のデータの内容
00003A80	SNMP トラップを検知した場合	JP1/Cm2/NNM または HP OpenView NNM のメッセージ
00003FA0 <sup>*1</sup>	コマンド実行制御が[コマンド実行]画面からコマンド実行要求を受け取った場合	[ <b>ホスト名</b> : <b>JP1 ユーザー名</b> ] コマンド実行を開始しました
00003FA1 <sup>*1</sup>	[コマンド実行]画面から実行要求されたコマンドが実行完了した場合	[ <b>ホスト名</b> : <b>JP1 ユーザー名</b> ] コマンド実行が終了しました
00003FA2 <sup>*1</sup>	[コマンド実行]画面から実行要求されたコマンドが、何らかの原因で実行されなかった場合	[ <b>ホスト名</b> : <b>JP1 ユーザー名</b> ] コマンド実行が異常終了しました
00003FA3 <sup>*1</sup>	jcocmddef コマンドで経過時間イベント発行間隔を指定している場合。 [コマンド実行]画面および自動アクションから実行要求されたコマンドが、経過時間イベント発行間隔を超えて実行している場合。	[ <b>ホスト名</b> ] コマンド実行の実行時間が <b>数値</b> 秒を超えました
00003FA5 <sup>*1</sup>	jcocmddef コマンドでコマンド先行入力数のしきい値が設定されている場合。自動アクションの先行入力数がしきい値に達した場合。	<b>実行先ホスト名</b> で <b>実行元ホスト名</b> から要求されたコマンドの先行入力数が閾値[ <b>xx</b> 件]を超えました
00003FA6 <sup>*1</sup>	jcocmddef コマンドでコマンド先行入力数のしきい値が設定されている場合。自動アクションの先行入力数が 0 になった場合。	<b>実行先ホスト名</b> で <b>実行元ホスト名</b> から要求されたコマンドの先行入力数が 0 件になりました
00004700 <sup>*2</sup>	認証サーバが閉塞状態になった場合	<b>接続順序</b> : <b>認証サーバ名</b> を閉塞状態に設定しました
00004701 <sup>*2</sup>	認証サーバの閉塞状態が解除された場合	<b>接続順序</b> : <b>認証サーバ名</b> の閉塞状態を解除しました
00004702 <sup>*2</sup>	全認証サーバが閉塞状態になった場合	全ての認証サーバが閉塞しました
00004720 <sup>*2</sup>	プロセスが異常終了した場合	<b>コンポーネント名</b> の <b>管理対象プロセス名</b> は異常終了しました
00004721 <sup>*2</sup>	プロセス起動時にタイムアウトした場合	<b>コンポーネント名</b> の <b>プロセス名</b> の起動がタイムアウトしました。処理を継続します
00004722 <sup>*2</sup>	異常終了したプロセスの再起動が完了した場合	<b>コンポーネント名</b> の <b>管理対象プロセス名</b> の再起動が完了しました
00004740	監視対象プロセスが異常終了した場合	<b>機能名</b> が異常終了しました
00004741	監視対象プロセスが共有メモリーに一定期間アクセス(更新)しなくなった場合(重大	<b>機能名</b> が処理中のまま <b>nn</b> 秒経過しています



	度:Error)	
00004742	監視対象プロセスが共有メモリーに一定期間アクセス(更新)しなくなった場合(重大度:Warning)	<b>機能名</b> が処理中のまま <b>nn</b> 秒経過しています。 <b>mm</b> 秒経過後にエラー状態になります
00004743	共有メモリーに一定期間アクセス(更新)していなかった監視対象プロセスが回復した場合	<b>機能名</b> の正常状態が確認されました
00004747	ヘルスチェック機能が異常終了した場合	エラーが発生したため、ヘルスチェック機能を終了します
00004748	他ホスト監視中に異常を検知した場合(サービスが機能していない)	<b>ホスト名</b> の <b>サービス名</b> が機能していないため監視通知が出来ない状態です
00004749	他ホスト監視中に異常を検知した場合(ホストに接続できない)	<b>ホスト名</b> に接続できないため監視ができません
0000474A	他ホストを監視できるようになった場合	<b>ホスト名</b> の監視が可能になりました
0000474B	共有メモリーが参照できない場合	共有メモリーがロックされています
00002102 <sup>※3</sup>	UNIX の場合、次のどちらかの契機で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>JP1/SES 互換機能が有効な状態でイベントサービスが起動したとき</li> <li>リモートホストの JP1/SES または JP1/AJS のイベントサービスから接続されたとき</li> </ul>	なし
00002103 <sup>※3</sup>	UNIX の場合、次のどれかの契機で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>JP1/SES 互換機能が有効な状態でイベントサービスが起動したとき</li> <li>リモートホストの JP1/SES または JP1/AJS のイベントサービスから接続されたとき</li> <li>リモートホストの JP1/SES または JP1/AJS のイベントサービスへ接続するとき</li> </ul> Windows の場合、次のどちらかの契機で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>リモートホストの JP1/SES または JP1/AJS のイベントサービスから接続されたとき</li> <li>リモートホストの JP1/SES または JP1/AJS のイベントサービスへ接続するとき</li> </ul>	なし
00002104 <sup>※3</sup>	UNIX の場合、次のどちらかの契機で出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>JP1/SES 互換機能が有効な状態でイベントサービスを停止するとき</li> <li>接続されているリモートホストの JP1/SES または JP1/AJS のイベントサービスが停止したとき</li> </ul>	プロセスの機能名称
00010B7F <sup>※3</sup>	Windows または UNIX の場合、リモートホストの JP1/AJS のイベントサービスから接続されたとき出力されます。	なし

注※1 JP1/IM - Manager 用に jcocmddf コマンドを使って設定した場合にだけ、発行される JP1 イベントです。設定の詳細は、「13. コマンド」の「[jcocmddf](#)」を参照してください。

注※2 認証サーバの閉塞状態の変更時、またはプロセスの異常終了時に JP1 イベントを発行させる設定をした場合にだけ発行されます。認証サーバの閉塞状態、またはプロセスの異常を JP1 イベントで監視したい場合は、「[2.4.3\(2\) プロセスの異常終了および認証サーバの切り替え発生を検知する](#)」を参照してください。

注※3 JP1/SES 互換機能の JP1 イベントには重大度がありませんが、Information と同じレベルのため、この通知に対する対処は不要です。

### 14.3 JP1 イベントの詳細

JP1 イベントの詳細をイベント ID 別に示します。

#### (1) イベント ID:00003D00 の詳細

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	メッセージ	—	イベント DB を旧 DB 番号から新 DB 番号に切り替えました
	詳細情報	—	旧イベント DB 番号
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Notice
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/IM
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE EVENTDB
		オブジェクト名	OBJECT_NAME 旧イベント DB 番号
		オブジェクト ID	OBJECT_ID イベントサーバ名:旧 DB 番号
		事象種別	OCCURRENCE SWITCH
	固有情報	旧イベント DB 番号	E0

(凡例)

—:なし

#### (2) イベント ID:00003D04 の詳細

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	イベント ID	—	00003D04
	メッセージ	—	イベントサービスは内部機能の再起動により回復しました。
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Notice
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/IM
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE EVENT
		オブジェクト名	OBJECT_NAME jevservice
		事象種別	OCCURRENCE NOTICE

(凡例)

—:なし

(3) イベントID:00003A10の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00003A10	
	メッセージ	—	KAVA3640-W ログファイルトラップのリトライが行なわれたため、イベント発行が遅延しました。(ID=ID 番号)	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Warning	
		プロダクト名	PRODUCT_NAME Windows の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> <b>プログラム名</b>は jevlogstart コマンドの-p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP</li> </ul> UNIX の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> <b>プログラム名</b>は jevlogstart コマンドの-p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP</li> </ul>	
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE LOGFILE	
		オブジェクト名	OBJECT_NAME jevlogstart	
		オブジェクトID	OBJECT_ID リトライ処理をしたログファイルトラップの ID 番号	
		事象種別	OCCURRENCE RECONNECT	
		固有情報	リトライ開始時刻	RETRY_START_TIME リトライ処理が開始された時刻 (UTC 1970-01-01 00:00:00 からの秒数)
			再接続時刻	RECONNECT_TIME イベントサービスへ再接続が確認できた時刻 (UTC 1970-01-01 00:00:00 からの秒数)
			保留イベント数	HOLD_EVENT リトライ処理中に保留された JP1 イベントの件数
			消去イベント数	DELETE_EVENT リトライ処理中に消去された JP1 イベントの件数

(凡例)

—:なし

(4) イベント ID:00003A20 の詳細

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	イベント ID	—	00003A20
	メッセージ	—	KAVA3643-E 該当ログファイルの監視を開始出来ません (code= <b>エラー番号</b> , file name= <b>ログファイル名</b> )
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME Windows の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> プログラム名は jevlogstart コマンドの-p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP</li> </ul> UNIX の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> プログラム名は jevlogstart コマンドの-p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP</li> </ul>
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE LOGFILE
		オブジェクト名	OBJECT_NAME 監視ログファイル(パス)名
		オブジェクト ID	OBJECT_ID ログファイルトラップの ID 番号
		事象種別	OCCURRENCE NOTICE
		固有情報	監視停止時刻

(凡例)

—:なし

(5) イベントID:00003A21の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00003A21	
	メッセージ	—	KAVA3644-E 指定された回数リトライ処理を行いましたが、該当ログファイルの読み込みが出来ないため監視を停止します (code= <b>エラー番号</b> , file name= <b>ログファイル名</b> )	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Error	
		プロダクト名	PRODUCT_NAME Windows の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> プログラム名は jevlogstart コマンドの-p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP</li> </ul> UNIX の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> プログラム名は jevlogstart コマンドの-p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP</li> </ul>	
	オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	LOGFILE	
	オブジェクト名	OBJECT_NAME	監視ログファイル (パス) 名	
	オブジェクトID	OBJECT_ID	ログファイルトラップの ID 番号	
	事象種別	OCCURRENCE	NOTICE	
	固有情報	監視停止時刻	WATCH_STOP_TIME	ログファイル監視を停止した時刻 (UTC 1970-01-01 00:00:00 からの秒数)

(凡例)

—:なし

(6) イベント ID:00003A22 の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベント ID	—	00003A22	
	メッセージ	—	KAVA3645-E 該当ログファイルを正しく監視することができない状態になりました (code= <b>数値</b> , file name= <b>ログファイル名</b> )	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	Windows の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> プログラム名は jevlogstart コマンドの-p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP</li> </ul> UNIX の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> プログラム名は jevlogstart コマンドの-p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの-p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP</li> </ul>
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	LOGFILE
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	監視ログファイル (パス) 名
		オブジェクト ID	OBJECT_ID	ログファイルトラップの ID 番号
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE
		固有情報	異常検知時刻	WATCH_CHECK_TIME

(凡例)

—:なし

(7) イベントID:00003A71の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	メッセージ	—	Windows イベントログのメッセージ。*最大 1,023 バイト。超えた分は切り捨て。	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Windows ログの種別に応じて登録する。 値: ログ種別 Error: エラー Warning: 警告 Information: 情報, その他 Notice: 監査成功, 監査失敗	
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/NTEVENT_LOGTRAP/ソース	
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE LOGFILE	
		オブジェクト名	OBJECT_NAME NTEVENTLOG	
		登録名タイプ	ROOT_OBJECT_TYPE LOGFILE	
		登録名	ROOT_OBJECT_NAME NTEVENTLOG	
	固有情報	Windows ログ登録日時	A0	time_t 型 (UTC 1970-01-01 00:00:00 からの秒数)
		コンピュータ名	A1	コンピュータ名
		Windows ログ種別	A2	System/Security/Application/Directory Service/DNS Server/File Replication Service
		Windows ログ種類	A3	Error/Warning/Information/Audit_Success/Audit_Failure 上記以外: None Windows Vista の場合はイベントビューアの“レベル”に表示される内容。 セキュリティログの場合, イベントビューアの“キーワード”に表示される内容。
Windows ログ分類		A4	分類。 分類できなかった場合: None Windows Vista の場合はイベントビューアの“タスクのカテゴリ”に表示される内容。	
Windows イベントID		A5	Windows のイベント ID	
Windows ユーザー名		A6	Windows のユーザー名。 ユーザー名がわからなかった場合: N/A	
プラットフォーム		PLATFORM	NT	
	PP 名	PPNAME	/HITACHI/JP1/NTEVENT_LOGTRAP	

(凡例)

—: なし

注※ イベントログの説明文を記載したメッセージ DLL が正しく設定されていない場合は, 挿入句や詳細コードをダブルクォーテーションマーク(“)で囲んで JP1 イベントのメッセージに登録します。

(8) 動作定義ファイルの ACTDEF パラメーターで指定されたイベント ID の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	メッセージ	—	ログファイル 1 行分のログデータの内容	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	動作定義ファイルの ACTDEF パラメーターで指定された重大度
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	Windows の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの -p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> プログラム名は jevlogstart コマンドの -p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの -p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP</li> </ul> UNIX の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>jevlogstart コマンドの -p オプションを指定した場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP/<b>プログラム名</b> プログラム名は jevlogstart コマンドの -p オプションで指定したログデータ出力元プログラム名。</li> <li>jevlogstart コマンドの -p オプションを指定していない場合 /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP</li> </ul>
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	LOGFILE
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	起動コマンドのオプションで指定したログファイル名
	登録名タイプ	ROOT_OBJECT_TYPE	LOGFILE	
	登録名	ROOT_OBJECT_NAME	起動コマンドのオプションで指定したログファイル名	
	固有情報	プラットフォーム	PLATFORM	Windows の場合: NT UNIX の場合: UNIX
		PP 名	PPNAME	Windows の場合: /HITACHI/JP1/NT_LOGTRAP UNIX の場合: /HITACHI/JP1/UX_LOGTRAP

(凡例)

—:なし



## (9) イベント ID:00003A80 の詳細

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	メッセージ	—	JP1/Cm2/NNM または HP OpenView NNM のメッセージ
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY SNMPトラップの重要度に対応した値 デフォルトの設定 値：重要度 Information：Normal Warning：Warning Error：Minor Critical：Major Alert：Critical
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/IM/SNMP_TRAP
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE SNMP_TRAP
		オブジェクト名	OBJECT_NAME JP1/Cm2/NNM または HP OpenView NNM で設定されたイベント名
		登録名タイプ	ROOT_OBJECT_TYPE SNMP_TRAP
		登録名	ROOT_OBJECT_NAME JP1/Cm2/NNM または HP OpenView NNM で設定されたイベント名
		事象種別	OCCURRENCE RECEIVE
固有情報		SNMP Object ID	SNMP_OID SNMPトラップのオブジェクト ID
		SNMPトラップ発生日時	SNMP_DATE SNMPトラップの発生日時
		SNMPトラップ発生源	SNMP_SOURCE SNMPトラップの発生源
		重要度	SNMP_SEVERITY SNMPトラップに設定された重要度
		NNM サブマップ表示 URL	SNMP_URL JP1/Cm2/NNM または HP OpenView NNM のサブマップを表示するための URL
		バリアブルバインディング格納結果※1	SNMP_VARBIND_RESULT バリアブルバインディングを変換した結果 SUCCESS: すべての\$変数が変換された。 ESTRLEN: 文字列長の制限(1,023 バイト)によって文字列が途切れた\$変数がある。 EVARNUM: \$変数の個数制限(28 個)によって削除された\$変数がある。 EEVENTLEN: JP1 イベント長の制限(10,000 バイト)によって削除された\$変数がある。 ESTRVARNUM: \$変数の個数制限(28 個)によって削除された\$変数があり、かつ、変換された\$変数の中に文字列長の制限(1,023 バイト)によって文字列が途切れた\$変数がある。 ESTREVENTLEN: JP1 イベント長の制限(10,000 バイト)によって削除された\$変数があり、かつ、変換された\$変数の中に文字列長の制限(28 個)によって文字列が途切れた\$変数がある。
		バリアブルバインディングの数※1	SNMP_VARBIND_NUM SNMPトラップに含まれるバリアブルバインディングの個数
バリアブル	SNMP_VARBIND_OID[1,2,3...]※2	バリアブルバインディングのオブジェクト ID	

	バインディングのオブジェクトID※1		
	バリアブルバインディングタイプ※1	SNMP_VARBIND_TYPE[1,2,3...]※2	バリアブルバインディングの型 ASN_INTEGER ASN_U_INTEGER ASN_OCTET_STR ASN_OBJECT_ID ASN_IPADDRESS ASN_UNSIGNED32 ASN_COUNTER32 ASN_TIME_TICKS ASN_COUNTER64 Unsupport: 上記以外の型
	バリアブルバインディングの値	SNMP_VARBIND[1,2,3...]※2	バリアブルバインディングの値

(凡例)

—:なし

注※1

SNMPトラップ変換機能の設定で、バリアブルバインディングをJP1 イベントに変換する設定にした場合に出力されます。

注※2

一つのバリアブルバインディングに対して、SNMP\_VARBIND\_OID, SNMP\_VARBIND\_TYPE, および SNMP\_VARBIND の三つが出力されます。各項目のあとに付く数値は、バリアブルバインディングの\$変数に対応しています。

**(10) イベントID:00003FA0の詳細**

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	メッセージ	—	KAVB2100-I [ホスト名 : JP1 ユーザー名] コマンド実行を開始しました。
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Information
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/IM
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE COMMAND
		オブジェクト名	OBJECT_NAME JCOCMD
		事象種別	OCCURRENCE NOTICE
		ユーザー名	USER_NAME コマンドを実行する JP1 ユーザー名
		開始時刻	START_TIME コマンド実行要求受付時刻
	固有情報	実行先ホスト	EXECHOST コマンド実行先ホスト名
		実行コマンド	EXECCMD 実行するコマンド名
		環境変数ファイル名	EXECENV 実行時に使用する環境変数ファイル名

(凡例)

—:なし

**(11) イベントID:00003FA1の詳細**

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	メッセージ	—	KAVB2101-I [ホスト名 : JP1 ユーザー名] コマンド実行が終了しました。
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Information
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/IM/JCOCMD
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE COMMAND
		オブジェクト名	OBJECT_NAME JCOCMD
		事象種別	OCCURRENCE NOTICE
		ユーザー名	USER_NAME コマンドを実行する JP1 ユーザー名
		終了時刻	END_TIME コマンド終了時刻
	終了コード	RESULT_CODE 実行したコマンドのリターンコード	
	固有情報	実行先ホスト	EXECHOST コマンド実行先ホスト名
		実行コマンド	EXECCMD 実行したコマンド名

(凡例)

—:なし

**(12) イベントID:00003FA2の詳細**

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		メッセージ	—	KAVB2102-E [ホスト名 : JP1 ユーザー名] コマンド実行が異常終了しました。
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/IM/JCOCMD
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	COMMAND
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	JCOCMD
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE
		ユーザー名	USER_NAME	コマンドを実行する JP1 ユーザー名
		終了時刻	END_TIME	コマンド異常終了時刻

(凡例)

—:なし

**(13) イベントID:00003FA3の詳細**

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		メッセージ	—	KAVB2402-W [ホスト名] コマンド実行の実行時間が <b>数値</b> 秒を超えました
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Warning
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/IM/JCOCMD
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	<ul style="list-style-type: none"> <li>• COMMAND ([コマンド実行]画面の場合)</li> <li>• ACTION (自動アクションの場合)</li> </ul>
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	JCOCMD
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE
		ユーザー名	USER_NAME	コマンドを実行する JP1 ユーザー名
		開始時刻	START_TIME	コマンド実行要求受付時刻
	固有情報	実行先ホスト	EXECHOST	コマンド実行先ホスト名
		実行コマンド	EXECCMD	実行するコマンド名
		投入元ホスト	REQUESTHOST	コマンドを投入したホスト名
		コマンド ID	COMMANDID	コマンド ID
		実行時間	EXEC_TIME	コマンドの実行経過時間

(凡例)

—:なし

**(14) イベント ID:00003FA5 の詳細**

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	メッセージ	—	KAVB2071-W <b>実行先ホスト名</b> で <b>実行元ホスト名</b> から要求されたコマンドの先行入力数が閾値[xx 件]を超えました。
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Warning
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/IM/JCOCMD
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE ACTION
		オブジェクト名	OBJECT_NAME JCOCMD
		事象種別	OCCURRENCE NOTICE
		ユーザー名	USER_NAME コマンドを実行する JP1 ユーザー名
	開始時刻	START_TIME コマンド実行要求受付時刻	
固有情報	実行先ホスト	EXECHOST コマンド実行先ホスト名	
	投入元ホスト	REQUESTHOST コマンドを投入したホスト名	

(凡例)

—:なし

**(15) イベント ID:00003FA6 の詳細**

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	メッセージ	—	KAVB2072-I <b>実行先ホスト名</b> で <b>実行元ホスト名</b> から要求されたコマンドの先行入力数が 0 件になりました。
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Information
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/IM/JCOCMD
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE ACTION
		オブジェクト名	OBJECT_NAME JCOCMD
		事象種別	OCCURRENCE NOTICE
		ユーザー名	USER_NAME コマンドを実行する JP1 ユーザー名
	開始時刻	START_TIME コマンド実行要求受付時刻	
固有情報	実行先ホスト	EXECHOST コマンド実行先ホスト名	
	投入元ホスト	REQUESTHOST コマンドを投入したホスト名	

(凡例)

—:なし

**(16) イベントID:00004700の詳細**

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	イベントID	—	00004700
	メッセージ	—	KAVA1524-W <b>接続順序: 認証サーバ名</b> was successfully blocked. KAVA1524-W <b>接続順序: 認証サーバ名</b> を閉塞状態に設定しました.
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Warning
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/BASE/JBSSESS
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE SESSION
		オブジェクト名	OBJECT_NAME 認証サーバを閉塞したホスト名
	事象種別	OCCURRENCE NOTICE	
固有情報	接続失敗先ホスト名	AUTHSRV_NAME	閉塞された認証サーバ名

(凡例)

—:なし

**(17) イベントID:00004701の詳細**

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	イベントID	—	00004701
	メッセージ	—	KAVA1525-I <b>接続順序: 認証サーバ名</b> was successfully unblocked. KAVA1525-I <b>接続順序: 認証サーバ名</b> の閉塞状態を解除しました
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY Information
		プロダクト名	PRODUCT_NAME /HITACHI/JP1/BASE/JBSSESS
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE SESSION
		オブジェクト名	OBJECT_NAME 認証サーバの閉塞を解除したホスト名
	事象種別	OCCURRENCE NOTICE	
固有情報	接続失敗先ホスト名	AUTHSRV_NAME	閉塞解除された認証サーバ名

(凡例)

—:なし

(18) イベントID:00004702の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00004702	
	メッセージ	—	KAVA1396-E All authentication servers were blocked. KAVA1396-E 全ての認証サーバが閉塞しました	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSSESS
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	SESSION
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	すべての認証サーバへの接続が閉塞したホスト名
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE

(凡例)

—:なし

(19) イベントID:00004720の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00004720	
	メッセージ	—	KAVB3737-E The コンポーネント名 管理対象プロセス名 terminated abnormally KAVB3737-E コンポーネント名 の管理対象プロセス名 は異常終了しました	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/SPMD
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	SPMD
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	異常終了したプロセス名
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE

(凡例)

—:なし

(20) イベントID:00004721の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00004721	
	メッセージ	—	KAVB3613-W コンポーネント名 timeout occurred in 管理対象プロセス名. Processing continues. KAVB3613-W コンポーネント名 のプロセス名 の起動がタイムアウトしました. 処理を継続します	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Warning
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/SPMD
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	SPMD
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	起動タイムアウトしたプロセス名
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE

(凡例)

—:なし

(21) イベントID:00004722の詳細

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		イベント ID	—	00004722
		メッセージ	—	KAVB3616-I Restart of the <b>コンポーネント名</b> <b>管理対象プロセス名</b> has finished. KAVB3616-I <b>コンポーネント名</b> の <b>管理対象プロセス名</b> の再起動が完了しました
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Information
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/SPMD
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	SPMD
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	再起動したプロセス名
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE

(凡例)

—:なし

## (22) イベント ID:00004740 の詳細

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		イベント ID	—	00004740
		メッセージ	—	KAVA7017-E <b>機能名</b> が異常終了しました。(ホスト名=ホスト名, プロセス名= <b>プロセス名</b> , 内部機能名= <b>内部機能名</b> , pid= <b>プロセス ID</b> , tid= <b>スレッド ID</b> )
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	異常終了した機能名
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE
	固有情報	ホスト名	HOST_NAME	ホスト名
		プロセス名	PROCESS_NAME	プロセス名
		内部機能名	SFUNCTION_NAME	内部機能名
		プロセス ID	PROCESS_ID	プロセス ID
		スレッド ID	THREAD_ID	スレッド ID

(凡例)

—:なし

## (23) イベント ID:00004741 の詳細

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		イベント ID	—	00004741
		メッセージ	—	KAVA7014-E <b>機能名</b> が処理中のまま nn 秒経過しています。(ホスト名=ホスト名, プロセス名= <b>プロセス名</b> , 内部機能名= <b>内部機能名</b> , pid= <b>プロセス ID</b> , tid= <b>スレッド ID</b> )
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	機能名
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE
	固有情報	ホスト名	HOST_NAME	ホスト名
		プロセス名	PROCESS_NAME	プロセス名
		内部機能名	SFUNCTION_NAME	内部機能名
		プロセス ID	PROCESS_ID	プロセス ID
		スレッド ID	THREAD_ID	スレッド ID

(凡例)



-:なし

(24) イベントID:00004742の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00004742	
	メッセージ	—	KAVA7013-W <b>機能名</b> が処理中のまま <b>nn</b> 秒経過しています. <b>mm</b> 秒経過後にエラー状態になります. (ホスト名= <b>ホスト名</b> , プロセス名= <b>プロセス名</b> , 内部機能名= <b>内部機能名</b> , pid= <b>プロセスID</b> , tid= <b>スレッドID</b> )	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Warning
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	機能名
	固有情報	事象種別	OCCURRENCE	NOTICE
		ホスト名	HOST_NAME	ホスト名
		プロセス名	PROCESS_NAME	プロセス名
		内部機能名	SFUNCTION_NAME	内部機能名
	プロセスID	PROCESS_ID	プロセスID	
	スレッドID	THREAD_ID	スレッドID	

(凡例)

-:なし

(25) イベントID:00004743の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00004743	
	メッセージ	—	KAVA7016-I <b>機能名</b> の正常状態が確認されました. (ホスト名= <b>ホスト名</b> , プロセス名= <b>プロセス名</b> , 内部機能名= <b>内部機能名</b> , pid= <b>プロセスID</b> , tid= <b>スレッドID</b> )	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Information
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	機能名
	固有情報	事象種別	OCCURRENCE	NOTICE
		ホスト名	HOST_NAME	ホスト名
		プロセス名	PROCESS_NAME	プロセス名
		内部機能名	SFUNCTION_NAME	内部機能名
	プロセスID	PROCESS_ID	プロセスID	
	スレッドID	THREAD_ID	スレッドID	

(凡例)

-:なし

(26) イベントID:00004747の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00004747	
	メッセージ	—	KAVA7003-E エラーが発生したため、ヘルスチェック機能を終了します。(ホスト名=ホスト名)	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	ホスト名
	事象種別	OCCURRENCE	NOTICE	

(凡例)

—:なし

(27) イベントID:00004748の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00004748	
	メッセージ	—	KAVA7222-E ホスト名の サービス名 が機能していないため監視通知が出来ない状態です。	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	ホスト名
	事象種別	OCCURRENCE	NOTICE	
固有情報	サービス名	SERVICE_NAME	サービス名	

(凡例)

—:なし

(28) イベントID:00004749の詳細

属性種別	項目	属性名	内容	
基本属性	イベントID	—	00004749	
	メッセージ	—	KAVA7223-E ホスト名 に接続できないため監視ができません。	
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	ホスト名
	事象種別	OCCURRENCE	NOTICE	

(凡例)

—:なし

(29) イベントID:0000474Aの詳細

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		イベントID	—	0000474A
		メッセージ	—	KAVA7224-I <b>ホスト名</b> の監視が可能になりました.
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Information
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	ホスト名
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE

(凡例)

—:なし

(30) イベントID:0000474Bの詳細

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		イベントID	—	0000474B
		メッセージ	—	KAVA7030-E 共有メモリーがロックされています.(ホスト名= <b>ホスト名</b> , プロセス名= <b>プロセス名</b> , 機能名= <b>機能名</b> , 内部機能名= <b>内部機能名</b> , pid= <b>プロセスID</b> , tid= <b>スレッドID</b> )
拡張属性	共通情報	重大度	SEVERITY	Error
		プロダクト名	PRODUCT_NAME	/HITACHI/JP1/BASE/JBSHC
		オブジェクトタイプ	OBJECT_TYPE	JBSHC
		オブジェクト名	OBJECT_NAME	機能名
		事象種別	OCCURRENCE	NOTICE
	固有情報	ホスト名	HOST_NAME	ホスト名
		プロセス名	PROCESS_NAME	プロセス名
		内部機能名	SFUNCTION_NAME	内部機能名
		プロセスID	PROCESS_ID	プロセスID
		スレッドID	THREAD_ID	スレッドID

(凡例)

—:なし

(31) イベントID:00002102の詳細

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		メッセージ	—	—
		詳細情報	—	—

(凡例)

—:なし

(32) イベントID:00002103の詳細

属性種別		項目	属性名	内容
基本属性		メッセージ	—	—
		詳細情報	—	—

(凡例)

ー:なし

**(33) イベントID:00002104の詳細**

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	メッセージ	ー	プロセスの機能名称
	詳細情報	ー	ー

(凡例)

ー:なし

**(34) イベントID:00010B7Fの詳細**

属性種別	項目	属性名	内容
基本属性	メッセージ	ー	ー
	詳細情報	ー	ー

(凡例)

ー:なし

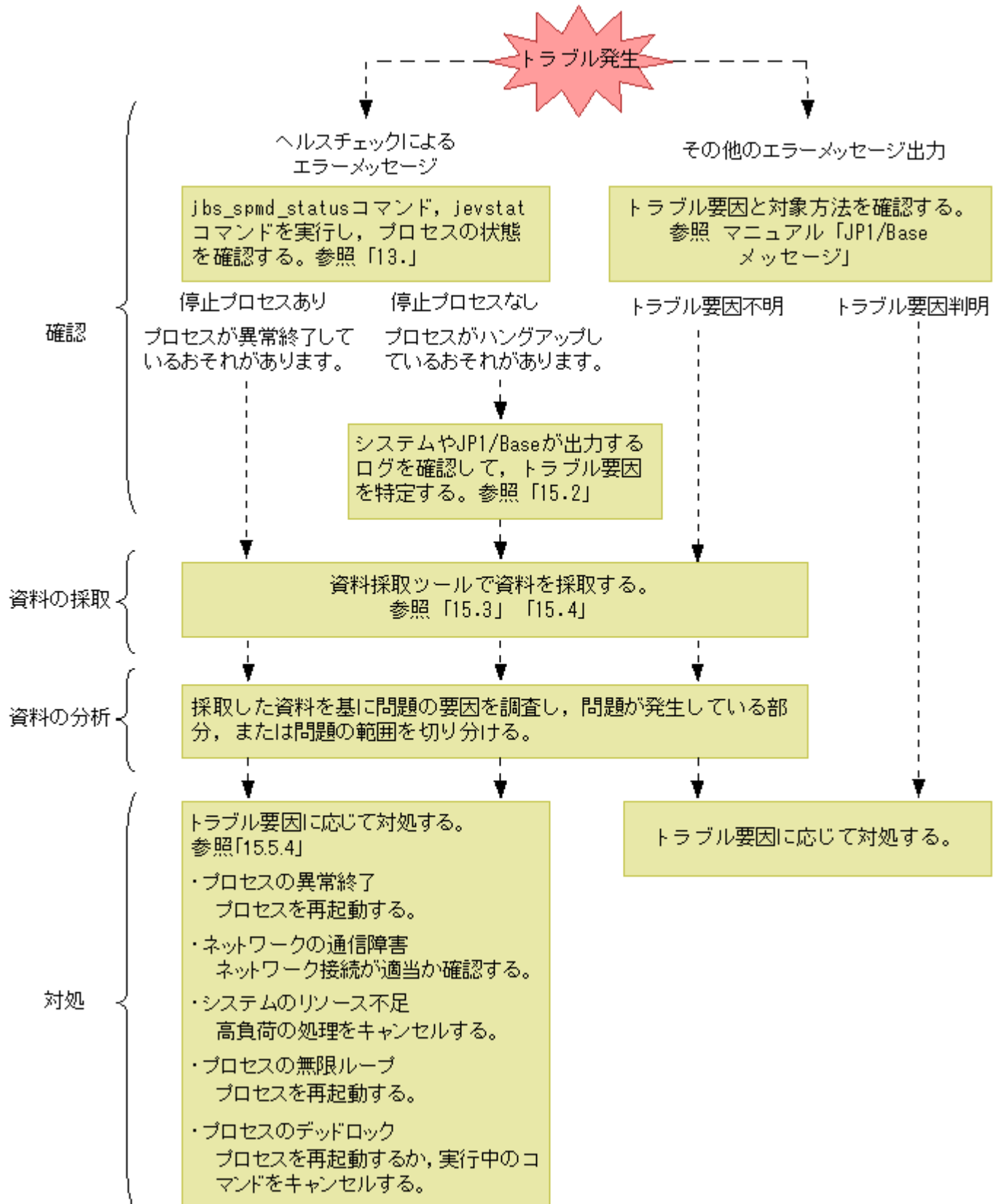
## 15. トラブルシューティング

この章では、JP1/Base でトラブルの原因になりやすい項目やトラブルへの対処方法などについて説明します。

### 15.1 対処の手順

JP1/Base でトラブルが起きた場合の対処の手順を次の図に示します。

図 15-1 トラブル発生時の対処の手順



## 15.2 ログ情報の種類

JP1/Base を運用しているときに出力されるログ情報は 4 種類あります。

- 共通メッセージログ
- 統合トレースログ
- プロセス別ログ
- 操作ログ

### 15.2.1 共通メッセージログ

共通メッセージログとは、システム側のトラブルを通知する、システム管理者向けのログ情報のことです。共通メッセージログは、必要最小限のトラブル情報を通知します。

共通メッセージログは、UNIX の場合は syslog, Windows の場合は Windows イベントログに出力されます。

### 15.2.2 統合トレースログ

統合トレースログとは、各プログラムが出力するトレース情報を、統合トレース機能 (HNTRLib2) を通じて、一つの出力先ファイルにまとめて採取するログ情報のことです。共通メッセージログより詳しい内容のメッセージが出力されます。

統合トレースログのデフォルトの出力先は次のとおりです。

Windows の場合

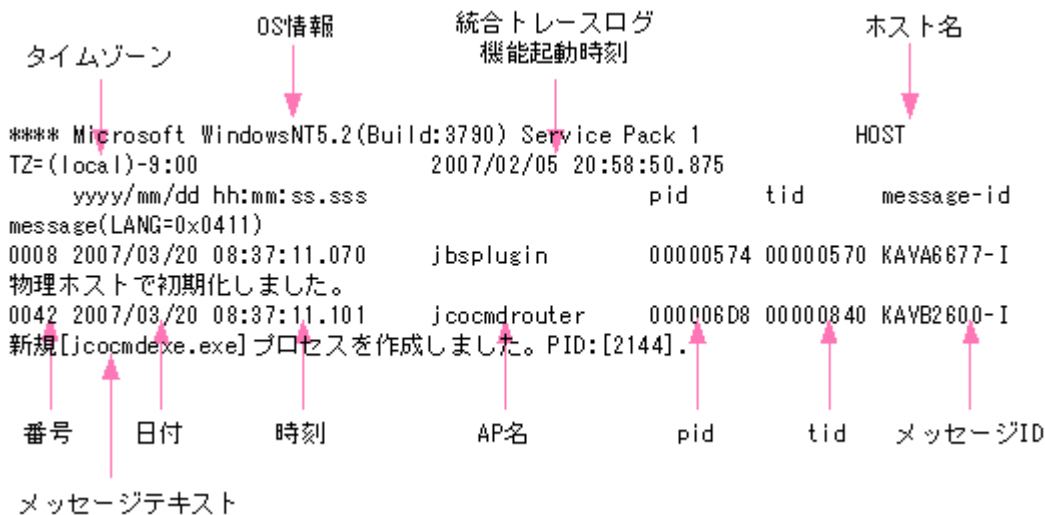
システムドライブ¥Program Files¥Hitachi¥HNTRLib2¥spool¥hntr2{1|2|3|4}.log

UNIX の場合

/var/opt/hitachi/HNTRLib2/spool/hntr2{1|2|3|4}.log

統合トレースログファイルは、任意のテキストエディターで参照できます。統合トレースログの出力例を次の図に示します。

図 15-2 統合トレースログファイルの出力例



統合トレースログファイルに出力されるヘッダー情報と出力項目の説明を次の表に示します。

**表 15-1 統合トレースログファイルのヘッダー情報**

ヘッダー情報	説明
OS 情報	統合トレース機能が起動している OS の情報が出力されます。
ホスト名	統合トレース機能が起動しているホスト名が出力されます。
タイムゾーン	Windows の場合 OS のタイムゾーンが出力されます。 UNIX の場合 統合トレースプロセスの環境変数 TZ が出力されます。 環境変数 TZ が設定されていない場合は Unknown と出力されます。
統合トレースログ機能起動時刻	統合トレース機能を起動した時刻が出力されます。

**表 15-2 統合トレースログファイルの出力項目**

出力項目	説明
番号(4 桁)	トレースレコードの通番 番号はログを出力したプロセスごとに採番されます。
日付(10 バイト)	トレースの取得日付: <b>yyyy/mm/dd</b> (年/月/日)
時刻(12 バイト)	トレースの取得時刻(ローカル時刻): <b>hh:mm:ss.sss</b> (時:分:秒.ミリ秒)
AP 名(16 バイト以内)	アプリケーションを識別するための名称(アプリケーション識別名)。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロセス管理 JBS_SPMD</li> <li>• 起動管理 JP1ControlSvc</li> <li>• 認証アクセス制御 jp1BsSess</li> <li>• 操作権限アクセス制御 jp1BsAcl</li> <li>• 認証サーバ jbsessionmgr</li> <li>• 構成管理 jbsroute</li> <li>• コマンド実行(制御プロセス) jcocmdrouter</li> <li>• コマンド実行(JP1/Base 間通信プロセス) jcocmdcom</li> <li>• コマンド実行(JP1/IM-M,JP1/Base 間通信プロセス) jcocmdapi</li> <li>• コマンド実行(実行制御プロセス) jcocmdexe</li> <li>• コマンド実行(実行プロセス) jcocmdmc</li> <li>• プラグインサービス jbsplugin</li> <li>• プラグイン(マネージャーコマンド) jbsrmtcmd</li> <li>• プラグイン(エージェントコマンド) plAdapter_Event</li> <li>• ヘルスチェック(自ホスト監視用) jbsbcd</li> <li>• ヘルスチェック(他ホスト監視用) jbschostd</li> <li>• イベントサービス jvservice</li> <li>• JP1/AJS 互換プロセス jvssvc</li> <li>• ログファイルトラップ(Windows) jevtraplog</li> <li>• ログファイルトラップ(UNIX) jevlogd</li> <li>• イベントログトラップ</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• jvtrapevt</li> <li>• SNMPトラップ変換</li> <li>• jplco_evtgw</li> <li>• その他のコマンド名</li> </ul> <p><b>コマンド名</b></p>
pid	プロセス ID。OS が付けるプロセス ID。
tid	スレッド ID。スレッドを識別するための ID。
メッセージ ID	メッセージの出力形式で説明したメッセージ ID。この製品で使用するメッセージ ID。
メッセージテキスト	統合トレースログに出力されるメッセージのテキスト。この製品から出力されるメッセージテキスト。

#### 注意

統合トレースログに出力されるログの時刻は、出力したプロセスのタイムゾーンでフォーマットされます。このため、環境変数 TZ を変更したユーザーなどがサービスを起動したり、コマンドを実行したりすると、OS に設定されているタイムゾーンと異なる時刻が出力されることがあります。



### 15.2.3 プロセス別ログ

プロセス別ログとは、JP1/Base の各機能が出力するログ情報のことです。各機能によって異なるログファイルに出力されます。出力されるログファイルについては、「[15.2.5 ログファイルおよびディレクトリ一覧](#)」を参照してください。

### 15.2.4 操作ログ

操作ログとは、認証サーバに対して「いつ」「だれが」「何を行ったか」などの操作情報の履歴を出力するログ情報です。操作ログの詳細については、「[付録1 操作ログの出力](#)」を参照してください。

### 15.2.5 ログファイルおよびディレクトリ一覧

ここでは、JP1/Base の各機能が出力するログ情報の種類とデフォルトのファイル名およびディレクトリ名について説明します。

#### (1) Windows の場合

Windows 版 JP1/Base が出力するデフォルトのログファイルおよびフォルダを次の表に示します。

「ログの種類」には、JP1/Base が出力するログの種類を記載しています。

「デフォルトのファイル名・フォルダ名」には、JP1/Base をデフォルトでインストールした場合のログファイル名と、クラスタ運用の場合のログファイル名をそれぞれフルパスで記載しています。

「最大ディスク占有量」には、ログファイルが最大でどの程度ディスクを使用するのかを記載しています。ログファイルが複数ある場合は、その合計量を記載しています。

「ファイルの切り替え時期」には、JP1/Base が出力先のログファイルを切り替えるタイミングを記載しています。ファイルがこの欄に示すサイズに達したとき、または、この欄に示す事象が起きたときに出力先が切り替わります。なお、ログファイルが一つの場合、ファイルの切り替えが発生すると同ファイルに上書きされます。ログファイルが複数あり、最大ディスク占有量に達した場合は、更新日付の古いファイルから上書きされます。

表中の *Base\_Path* は、マニュアル本文中で使用している「インストール先フォルダ¥jp1base」です。なお、*Base\_Path* は、デフォルトでは「C:¥Program Files¥Hitachi¥jp1base」です。また、表中の *SystemDrive* は、マニュアル本文中で使用している「システムドライブ」です。

表 15-3 JP1/Base のログファイルおよびフォルダ一覧

ログの種類	デフォルトのファイル名・フォルダ名	最大ディスク占有量	ファイルの切り替え時期
プロセス管理ログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBS_SPMD{1 2 3}.log	384KB	128KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBS_SPMD_COMMAND{1 2 3}.log	384KB	128KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBS_SERVICE{1 2 3}.log	384KB	128KB
	共有フォルダ¥jp1base¥log¥JBS_SPMD{1 2 3}.log	384KB	128KB
	共有フォルダ¥jp1base¥log¥JBS_SPMD_COMMAND{1 2 3}.log	384KB	128KB
	共有フォルダ¥jp1base¥log¥JBS_SERVICE{1 2 3}.log	384KB	128KB
認証サーバログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>*12</sup>	2MB	256KB
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>*13*14</sup>	2MB	256KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbsessionCmd.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbsessionmgr{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbsessionmgr_trace{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	共有フォルダ¥jp1base¥log¥ jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>*12</sup>	2MB	256KB
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥論理ホスト名¥JP1Base¥log¥jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>*13*14</sup>	2MB	256KB
	共有フォルダ¥jp1base¥log¥ jbsessionCMD.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
共有フォルダ¥jp1base¥log¥ jbsessionmgr{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB	

	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥ jbsessionmgr_trace{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
認証サーバ設定コマンドログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBSSESS{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JBSSESS{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
環境設定プログラムログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥jp1bssetup{1 2}.log	128KB	64KB
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jp1bssetup{1 2}.log	128KB	64KB
論理ホスト設定プログラムログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥jp1hasetup.{log log.old}	2,000KB	1,000KB
SNMPトラップ変換機能ログ (定義情報)	<i>Base_Path</i> ¥log¥imevtgw.conf{1 2 3}.log	3MB	1MB
SNMPトラップ変換機能ログ (監視情報)	<i>Base_Path</i> ¥log¥imevtgw.log{1 2 3}.log	15MB	5MB
イベント設定一元管理取得 コマンド用トレースログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥jevdef_get.{000 001 002} ※4	64KB	コマンド実行時
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥jevdef_get.{000 001 002}※4	64KB	コマンド実行時
イベント設定一元管理配布 コマンド用トレースログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥jevdef_distrib.{000 001 002}※4	64KB	コマンド実行時
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥jevdef_distrib.{000 001 002}※4	64KB	コマンド実行時
コマンド実行履歴 (ISAM) ファイル※1	<i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.DRF	125MB※2	125MB※2
	<i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.K01	200KB※2	なし
	<i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.KDF	1KB	コマンド実行時
	<i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.DRF	125MB※2	125MB※2
	<i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.K01	200KB※2	なし
	<i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.KDF	1KB	コマンド実行時
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ ACTISAMLOGV8.DRF	125MB※2	125MB※2
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ ACTISAMLOGV8.K01	200KB※2	なし
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ ACTISAMLOGV8.KDF	1KB	コマンド実行時
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ CMDISAMLOGV8.DRF	125MB※2	125MB※2
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ CMDISAMLOGV8.K01	200KB※2	なし
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ CMDISAMLOGV8.KDF	1KB	コマンド実行時
共通定義情報ログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBSCNFCMD¥JBSCNFCMD{1 2}.log	128KB	64KB
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JBSCNFCMD¥JBSCNFCMD{1 2}.log	128KB	64KB
jp1hosts 情報コマンドログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBSCNFCMD¥JBSCOMMCMD{1 2}.log	128KB	64KB
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JBSCNFCMD¥JBSCOMMCMD{1 2}.log	128KB	64KB
ユーザーマッピングコマンド ログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBSUMAPCMD¥JBSUMAPCMD{1 2}.log	128KB	64KB
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JBSUMAPCMD¥JBSUMAPCMD{1 2}.log	128KB	64KB
リモートコマンドログ※1	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥joccmd_result{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥joccmdapi{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥joccmdapi_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥joccmdcom{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥joccmdcom_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jocmdexe{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jocmdexe_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥joccmdrouter{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥joccmdrouter_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥JCOCMDCMD{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥joccmd_result{1 2 3}.log	2,304KB	768KB

	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jocmdapi{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jocmdapi_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jocmdcom{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jocmdcom_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jocmdexe{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jocmdexe_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jocmdrouter{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jocmdrouter_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥JCOCMDCMD{1 2 3}.log	2,304KB	768KB	
プラグインサービスログファイル	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsplugin</i> {1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsplugincom_0</i> {1 2 3 4 5 6 7 8 9}*7_{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	20MB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsplugin</i> cmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsplugin</i> mgrap{i}{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*12	2,048KB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsplugin</i> comapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*12	2,048KB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsplugin</i> cmdapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsplugin</i> hchshm{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsrmtcmd</i> {1 2 3 4 5 6 7 8}.log*12	2,048KB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsplugin</i> remotecmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	<i>Base_Path¥log¥plugin¥jbsrmtapi</i> {1 2 3 4 5 6 7 8}.log*12	2,048KB	256KB	
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥plugin¥jbspluginmgrap{i}{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*13*14	2,048KB	256KB	
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥plugin¥jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*13*14	2,048KB	256KB	
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥plugin¥jbsrmtcmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*13*14	2,048KB	256KB	
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥plugin¥jbsrmtapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*13*14	2,048KB	256KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugincom_0{1 2 3 4 5 6 7 8 9}*8_{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	20MB	256KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugincmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbspluginmgrap{i}{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*12	2,048KB	256KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*12	2,048KB	256KB	
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥論理ホスト名¥JP1Base¥log¥jbspluginmgrap{i}{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*13*14	2,048KB	256KB	
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥論理ホスト名¥JP1Base¥log¥jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log*13*14	2,048KB	256KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugincmdapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbspluginhchshm{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbspluginremotecmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB	
	構成管理ログ*1	<i>Base_Path¥log¥route¥JBSRT</i> {1 2 3}.log	384KB	128KB
		<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥route¥JBSRT{1 2 3}.log	384KB	128KB
	起動順序制御ログ	<i>Base_Path¥log¥boot¥ContServ</i> {1 2}.log	128KB	64KB
	イベントログトラップ機能トレースログ	<i>Base_Path¥log¥ntevtrap¥trace</i> {1 2}.log	1,024KB	512KB
イベントサービス用トレースログ	<i>Base_Path¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥trace</i> .{000 001 002 003 004}*4*5	5,000,000バイト*3	イベントサービス起動時*3	
	<i>Base_Path¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥imevterr</i> .{000 001 002 003 004}*3*4	5,000,000バイト*3	イベントサービス起動時*3	

	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥trace.{000 001 002 003 004}※3※4	5,000,000 0バイト ※3	イベントサービス起動時
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥imevterr.{000 001 002 003 004}※3※4	5,000,000 0バイト ※3	イベントサービス起動時
イベントサービス用エラーログ	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥error.{000 001 002 003 004}※3※4	2,500,000 0バイト ※3	イベントサービス起動時
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥error.{000 001 002 003 004}※3※4	2,500,000 0バイト ※3	イベントサービス起動時
イベントサービス API 用ログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥IMEvapi.{000 001 002 003 004}※8※12	5,000,000 0バイト ※8	1,000,000 バイト※8
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥event¥IMEvapi.{000 001 002 003 004}※8※14※15	5,000,000 0バイト ※8	1,000,000 バイト※8
ヘルスチェック機能ログファイル (自ホスト監視)	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
ヘルスチェック機能ログファイル (他ホスト監視)	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
ヘルスチェックコマンドログファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshcstatus{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshcstatus{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
ヘルスチェック API 用ログファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshcapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshcapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
ヘルスチェック共有メモリー削除コマンドログファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshcshmctf{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshcshmctf{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
JP1/AJS 互換用ソケット通信コネクションログ	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥evtrace.dir¥{ajevconn.csv ajevconn.bak}※4	2,000 行 ※5	1,000 行
JP1/AJS 互換用 JP1/SES 形式イベント送受信ログ	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥evtrace.dir¥{ajevtrap.csv ajevtrap.bak}※4	2,000 行 ※5	1,000 行
ログファイルトラップ機能エラーログ	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥logtrap¥.errorfile. <b>ID 番号</b>	数百バイト程度 ※6	ログファイルトラップ機能起動時
ログファイルトラップ機能ログ	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥logtrap¥jevtraplog¥jevtraplog.{000 001 002 003 004}	5,000,000 0バイト ※9	1,000,000 バイト※9
アプリケーションエラーログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbsdump.log	5MB	5MB
インストール時のログ	<b>Windows のインストール先フォルダ</b> ¥Temp¥HITACHI¥JP1_INST_LOG¥jp1base_inst{1 2 3 4 5}.log	128KB	インストール時
操作ログ	<i>Base_Path</i> ¥log¥BASE¥base_log[{1 2 3 4}].log	68MB※10	1,024KB※10※11

注 JP1/Base が出力するログファイルには、製品保守の必要上出力している内部ログファイルがあります。これらは、ユーザーが参照、または変更する必要ありません。なお、システム障害が発生したときなど資料採取のためにこれらのファイルをご利用元で一時保管していただくことがあります。

注※1 JP1/IM - Manager 用のログファイルです。

注※2 JP1/IM - Manager の jcocmdddef コマンドの -record オプションを使うことで以下の範囲で変更できます。

- レコード数 1 の場合 (-record 1)  
DRF ファイル:7KB, K01 ファイル:4KB
- レコード数 20000 の場合 (デフォルト値)  
DRF ファイル:125MB, K01 ファイル:200KB
- レコード数 196600 の場合 (-record 196600)  
DRF ファイル:1.2GB, K01 ファイル:2MB

注※3 ファイル数, 最大ディスク占有量は, イベントサーバ設定ファイル (conf) で変更できます。変更できる範囲については, 「[6.4.2 イベントサーバ設定ファイル \(conf\) の詳細](#)」を参照してください。

注※4 イベントサーバインデックスファイル (index) で別パスを指定した場合は, 異なるフォルダに格納されます。

注※5 1行は 100 バイト程度です。

注※6 ログファイルトラップ機能起動時に作成され, 正常終了時に削除されます。エラー発生時には, ログファイルトラップ機能を終了したときにファイルがそのまま残ります。ログファイルトラップ機能でエラーが多発すると, エラーファイルが増えていくため, 不要なエラーファイルは削除する必要があります。

注※7 jbsplugincom プロセス識別番号を示します。

注※8 ファイル数・最大ディスク占有量は, API 設定 (api) ファイルで変更できます。変更できる範囲については, 「[6.4.3 API 設定ファイル \(api\) の詳細](#)」を参照してください。

注※9 ファイル数・最大ディスク占有量は, ログ情報定義ファイル (jevlogd.conf) で変更できます。

注※10 ファイル数・最大ディスク占有量は, 操作ログ定義ファイル (jp1bs\_base\_log\_setup.conf) で変更できます。

注※11 JP1/Base 起動時に, ファイルの切り替えを自動で行うか行わないかを, 操作ログ定義ファイル (jp1bs\_base\_log\_setup.conf) で指定できます。

注※12 Windows 2000, Windows XP Professional および Windows Server 2003 の場合。

注※13 インストール時の環境変数「%ALLUSERSPROFILE%」に設定されている値になります。

注※14 Windows Vista 限定。

注※15 実行時の環境変数「%ALLUSERSPROFILE%」に設定されている値になります。

## (2) UNIX の場合

UNIX 版 JP1/Base が出力するデフォルトのログファイルおよびディレクトリを次の表に示します。

「ログの種類」には, JP1/Base が出力するログの種類を記載しています。

「デフォルトのファイル名・ディレクトリ名」には, JP1/Base をデフォルトでインストールした場合のログファイル名をフルパスで記載しています。

「最大ディスク占有量」には, ログファイルが最大でどの程度ディスクを使用するのかを記載しています。ログファイルが複数ある場合は, その合計量を記載しています。

「ファイルの切り替え時期」には, JP1/Base が出力先のログファイルを切り替えるタイミングを記載しています。ファイルがこの欄に示すサイズに達したとき, または, この欄に示す事象が起きたときに出力先が切り替わります。なお, ログファイルが一つの場合, ファイルの切り替えが発生すると同ファイルに上書きされます。ログファイルが複数あり, 最大ディスク占有量に達した場合は, 更新日付の古いファイルから上書きされます。

表 15-4 JP1/Base のログファイルおよびディレクトリ一覧

ログの種類	デフォルトのファイル名・ディレクトリ名	最大ディスク占有量	ファイルの切り替え時期
JP1/Base 起動時ログ	/var/opt/jp1base/log/JBS_START/jbs_start.log[.old]	128KB	コマンド実行時
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBS_START/jbs_start.log[.old]	128KB	コマンド実行時
JP1/Base 終了時ログ	/var/opt/jp1base/log/JBS_STOP/jbs_stop.log[.old]	128KB	コマンド実行時
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBS_STOP/jbs_stop.log[.old]	128KB	コマンド実行時
プロセス管理ログ	/var/opt/jp1base/log/JBS_SPMD{1 2 3}.log	384KB	128KB
	/var/opt/jp1base/log/JBS_SPMD_COMMAND{1 2 3}.log	384KB	128KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBS_SPMD{1 2 3}.log	384KB	128KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBS_SPMD_COMMAND{1 2 3}.log	384KB	128KB
認証サーバログ	/var/opt/jp1base/log/jbssessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB

	/var/opt/jp1base/log/jbssessionCmd.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/jbssessionmgr{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/jbssessionmgr_trace{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/ jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/ jbsessionCmd.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/ jbsessionmgr{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/ jbsessionmgr_trace{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
認証サーバ設定コマンドログ	/var/opt/jp1base/log/JSSESS{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JSSESS{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2MB	256KB
SNMPトラップ変換機能ログ (定義情報)	/var/opt/jp1base/log/imevtgw.conf{1 2 3}.log	3MB	1MB
SNMPトラップ変換機能ログ (監視情報)	/var/opt/jp1base/log/imevtgw.log{1 2 3}.log	15MB	5MB
イベント設定一元管理取得コマンド用トレースログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/jevdef_get.{000 001 002}* <sup>4</sup>	64KB	コマンド実行時
	<b>共有ディレクトリ</b> /event/jevdef_get.{000 001 002}* <sup>4</sup>	64KB	コマンド実行時
イベント設定一元管理配布コマンド用トレースログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/jevdef_distrib.{000 001 002}* <sup>4</sup>	64KB	コマンド実行時
	<b>共有ディレクトリ</b> /event/jevdef_distrib.{000 001 002}* <sup>4</sup>	64KB	コマンド実行時
コマンド実行履歴 (ISAM) ファイル <sup>*1</sup>	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.DAT	125MB <sup>**2</sup>	125MB <sup>**2</sup>
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.K01	200KB <sup>**2</sup>	なし
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.DEF	1KB	コマンド実行時
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.DAT	125MB <sup>**2</sup>	125MB <sup>**2</sup>
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.K01	200KB <sup>**2</sup>	なし
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.DEF	1KB	コマンド実行時
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.DAT	125MB <sup>**2</sup>	125MB <sup>**2</sup>
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.K01	200KB <sup>**2</sup>	なし
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.DEF	1KB	コマンド実行時
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.DAT	125MB <sup>**2</sup>	125MB <sup>**2</sup>
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.K01	200KB <sup>**2</sup>	なし
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.DEF	1KB	コマンド実行時
共通定義情報ログ	/var/opt/jp1base/log/JBSCNFCMD/JBSCNFCMD{1 2}.log	128KB	64KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBSCNFCMD/JBSCNFCMD{1 2}.log	128KB	64KB
jp1hosts 情報コマンドログ	/var/opt/jp1base/log/JBSCNFCMD/JBSCOMMCMD{1 2}.log	128KB	64KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBSCNFCMD/JBSCOMMCMD{1 2}.log	128KB	64KB
ユーザーマッピングコマンドログ	/var/opt/jp1base/log/JBSUMAPCMD/JBSUMAPCMD{1 2}.log	128KB	64KB
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBSUMAPCMD/JBSUMAPCMD{1 2}.log	128KB	64KB
リモートコマンドログ <sup>*1</sup>	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmd_result{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdapi{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdapi_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcmc{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcmc_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcom{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcom_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdexe{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdexe_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdrouter{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdrouter_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/JCOCMDCMD{1 2 3}.log	2,304KB	768KB

	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmd_result{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdapi{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdapi_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcmc{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcmc_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcom{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcom_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdexe{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdexe_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdrouter{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdrouter_trace{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/JCOCMD/JCOCMDCMD{1 2 3}.log	2,304KB	768KB
プラグインサービスログ ファイル	var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugin{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugincom_{0 1 2 3 4 5 6 7 8 9}*10_{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	20MB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugincmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbspluginmgrapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugincmdapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbspluginhcshm{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbsrmtcmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbspluginremotecmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbsrmtapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/plugin/jbsplugin{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	共有ディレクトリ /jp1base/log/plugin/jbsplugincom_{0 1 2 3 4 5 6 7 8 9}*10_{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	20MB	256KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/plugin/jbsplugincmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	共有ディレクトリ /jp1base/log/plugin/jbspluginmgrapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	共有ディレクトリ /jp1base/log/plugin/jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	共有ディレクトリ /jp1base/log/plugin/jbsplugincmdapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	共有ディレクトリ /jp1base/log/plugin/jbspluginhcshm{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
	共有ディレクトリ /jp1base/log/plugin/jbspluginremotecmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
インストール時のログ	/tmp/HITACHI_JP1_INST_LOG/jp1base_inst{1 2 3 4 5}.log	128KB	インストール時
セットアップ時のログファイル	/var/opt/jp1base/log/JBS_SETUP/jbs_setup.log	128KB	セットアップ時
構成管理ログ※1	/var/opt/jp1base/log/route/JBSRT{1 2 3}.log	384KB	128KB
	共有ディレクトリ/jp1base/log/route/JBSRT{1 2 3}.log	384KB	128KB
イベントサービス用トレースログ	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/trace.{000 001 002 003 004}*3*4	5,000,000 バイト※3	イベントサービス起動時
	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/imevterr.{000 001 002 003 004}*3*4	5,000,000 バイト※3	イベントサービス起動時
	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/imses.{log old}*4	2MB	イベントサービス起動時
	共有ディレクトリ/jp1base/event/trace.{000 001 002 003 004}*3*4	5,000,000 バイト※3	イベントサービス起動時
	共有ディレクトリ/event/imevterr.{000 001 002 003 004}*3*4	5,000,000 バイト※3	イベントサービス起動時
	共有ディレクトリ/event/imses.{log old}*4	2MB	イベントサービス起動時
イベントサービス用エラー	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/error.{000 001 002	2,500,000	イベントサービ

ーログ	{003 004}*3*4 <b>共有ディレクトリ</b> /event/error.{000 001 002 003 004}*3*4	バイト*3 2,500,000 バイト*3	ス起動時 イベントサービ ス起動時
イベントサービス API 用 ログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/IMEvapi.{000 001 002 003 004}*11	5,000,000 バイト*11	1,000,000 バイ ト*11
ヘルスチェック機能ログ ファイル (自ホスト監視)	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
ヘルスチェック機能ログ ファイル (他ホスト監視)	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
ヘルスチェックコマンド ログファイル	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshcstatus{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshcstatus{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
ヘルスチェック API 用ロ グファイル	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshcapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshcapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
ヘルスチェック共有メモ リ削除コマンドログフ ァイル	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshcshmctl{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshcshmctl{1 2 3 4 5 6 7 8}.log	2,048KB	256KB
JP1/SES 互換プロセスの 起動に関するログ	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/result.txt	数十バイ ト程度	イベントサービ ス起動時
イベント登録/受信プロ セスからイベントサー ビスへの接続時に発生し たエラー情報	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/refuse.txt <b>共有ディレクトリ</b> /event/refuse.txt	数百バイ ト程度	イベントサービ スへの接続エ ラー発生時
イベント登録/受信プロ セスとイベントサービスと の通信で発生したエラ ー情報	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/sock.log <b>共有ディレクトリ</b> /event/sock.log	1KB	1KB
JP1/SES 互換用ローカ ルサーバエラーログ	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_dmain.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_dmain.log (HP-UX の場合)	1KB	イベントサービ ス起動時
JP1/SES 互換用マネー ジャーログ	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_MNG.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_MNG.log (HP-UX の場合)	16KB	イベントサービ ス起動時
JP1/SES 互換用受信プ ロセスエラーログ	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_RVC.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_RVC.log (HP-UX の場合)	無制限*5	イベントサービ ス起動時
JP1/SES 互換用受信プ ロセスマネージャーエラ ーログ	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_RVM.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_RVM.log (HP-UX の場合)	16KB	イベントサービ ス起動時
JP1/SES 互換用送信プ ロセスエラーログ	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_SND.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_SND.log (HP-UX の場合)	16KB	イベントサービ ス起動時
JP1/SES 互換用監視プ ロセスエラーログ	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_WAC.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_WAC.log (HP-UX の場合)	16KB	イベントサービ ス起動時
JP1/SES 互換用開始コ マンドエラーログ	/tmp/.JP1_SES_startlog <b>プロセス ID</b>	数百バイ ト程度*6	JP1/SES 互換 用サブシステ ム開始時
JP1/SES 互換用停止コ マンドエラーログ	/tmp/.JP1_SES_stoperr <b>プロセス ID</b>	数百バイ ト程度*7	JP1/SES 互換 用サブシステ ム停止時
ログファイルトラップ機能 エラーログ	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/logtrap/.errorfile. <b>ID 番号</b>	数百バイ ト程度*8	ログファイルト ラップ起動時
ログファイルトラップ機能 ログ	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/logtrap/jevtraplog/jevtraplog.{000  001 002 003 004}	5,000,000 バイト*12	1,000,000 バイ ト*12
jbs_killall.cluster コマン ドトレースログ*9	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbs_killall.cluster[.]{1 2 3 4}.log	256KB	コマンド実行 時
操作ログ	/var/opt/jp1base/log/BASE/base_log[{1 2 3 4}].log	68MB*13	1,024KB*13*14

注 JP1/Base が出力するログファイルには、製品保守の必要上出力している内部ログファイルがあります。これらは、ユーザーが参照、または変更する必要ありません。なお、システム障害が発生したときなど資料採取のためにこれらのファイルをご利用元で一時保管していただくことがあります。



注※1 JP1/IM - Manager 用のログファイルです。

注※2 JP1/IM - Manager の jcocmddef コマンドの -record オプションを使うことで以下の範囲で変更できます。

- レコード数 1 の場合 (-record 1)  
DAT ファイル:7KB, K01 ファイル:4KB
- レコード数 20000 の場合 (デフォルト値)  
DAT ファイル:125MB, K01 ファイル:200KB
- レコード数 196600 の場合 (-record 196600)  
DAT ファイル:1.2GB, K01 ファイル:2MB

注※3 ファイル数, 最大ディスク占有量は, イベントサーバ設定ファイル (conf) で変更できます。変更できる範囲については, 「[6.4.2 イベントサーバ設定ファイル \(conf\) の詳細](#)」を参照してください。

注※4 イベントサーバインデックスファイル (index) で別パスを指定した場合は, 異なるディレクトリに格納されます。

注※5 エラーの発生状況に応じて無制限に増加します。ただし, イベントサービス起動時にいったん削除され, 再作成されます。

注※6 JP1/SES 互換サブシステムの開始時にエラーが発生するたびにファイルが作成されるため, 不要なファイルは削除する必要があります。

注※7 JP1/SES 互換サブシステムの停止時にエラーが発生するたびにファイルが作成されるため, 不要なファイルは削除する必要があります。

注※8 ログファイルトラップ起動時に作成され, 正常終了時に削除されます。エラー発生時には, ログファイルトラップ機能を終了したときにファイルがそのまま残ります。ログファイルトラップ機能でエラーが多発すると, エラーファイルが増えていくため, 不要なエラーファイルは削除する必要があります。

注※9 クラスタ運用時に jbs\_killall.cluster コマンドを実行すると出力されるログファイルです。

注※10 jbsplugincom プロセス識別番号を示します。

注※11 ファイル数・最大ディスク占有量は, API 設定 (api) ファイルで変更できます。変更できる範囲については, 「[6.4.3 API 設定ファイル \(api\) の詳細](#)」を参照してください。

注※12 ファイル数・最大ディスク占有量は, ログ情報定義ファイル (jevlogd.conf) で変更できます。

注※13 ファイル数・最大ディスク占有量は, 操作ログ定義ファイル (jp1bs\_baselog\_setup.conf) で変更できます。

注※14 JP1/Base 起動時に, ファイルの切り替えを自動で行うか行わないかを, 操作ログ定義ファイル (jp1bs\_baselog\_setup.conf) で指定できます。

### 15.3 トラブル発生時に採取が必要な資料

トラブルが発生したときに採取が必要な資料を示します。なお、JP1/Base では採取が必要な資料を一括採取するための「資料採取ツール」を用意しています。資料採取ツールは、Windows の場合バッチファイル(jbs\_log.bat)で、UNIX の場合シェルスクリプト(jbs\_log.sh)で提供しています。これら資料採取ツールの詳細については、「13. コマンド」の「[jbs\\_log.bat \(Windows 限定\)](#)」および「[jbs\\_log.sh \(UNIX 限定\)](#)」を参照してください。

資料採取ツールの初期設定で採取できる資料については、次に示す表中に記号で示しています。

#### 15.3.1 Windows の場合

##### (1) OS のシステム情報

次に示す OS のログ情報の採取が必要です。これらの情報は資料採取ツールで採取できます。

情報の種類	採取資料	ファイル名 <sup>*1</sup>
資料採取日時	date /t の実行結果 time /t の実行結果	date.log
Windows イベントログ	アプリケーションログ: <b>システムフォルダ</b> ¥system32¥config¥AppEvent.Evt システムログ: <b>システムフォルダ</b> ¥system32¥config¥SysEvent.Evt	<ul style="list-style-type: none"><li>• SysEvent(Backup).evt</li><li>• AppEvent(Backup).evt</li></ul>
マシンに設定されているホスト名の設定	<b>システムフォルダ</b> ¥system32¥drivers¥etc¥hosts	hosts
マシンに設定されているサービスの設定	<b>システムフォルダ</b> ¥system32¥drivers¥etc¥services	services
NIC の実装状況	ipconfig /all の実行結果	ipconfig.log
起動サービス一覧	net start の実行結果	netstart.log
マシンの環境変数	set の実行結果	set.log
ワトソンログファイル <sup>*2</sup>	<b>ユーザー指定フォルダ</b> ¥drwtsn32.log	drwtsn32.log
クラッシュダンプ <sup>*2</sup>	<b>ユーザー指定フォルダ</b> ¥user.dmp	user.dmp
マシンのシステム情報	msinfo32 /report <b>ファイル名</b> の実行結果	msinfo32.log

注※1 資料採取ツールを実行したあとの格納先でのファイル名です。

注※2 あらかじめ出力設定をしておく必要があります。設定方法については、「[2.4.3\(5\) 障害発生時の資料採取の準備 \(Windows 限定\)](#)」を参照してください。

## (2) JP1/Base の情報

JP1/Base に関する次の情報の採取が必要です。これらの情報は資料採取ツールで採取できます。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。

情報の種類	採取資料	ファイル名 <sup>*1</sup>
環境設定情報	インストール先フォルダ ¥jp1base¥conf 以下のファイル	採取元のファイル名と同じファイル名
	インストール先フォルダ ¥jp1base¥conf¥default¥以下のファイル	採取元のファイル名と同じファイル名
	インストール先フォルダ ¥jp1base¥plugin¥conf¥以下のファイル	採取元のファイル名と同じファイル名
	共有フォルダ ¥jp1base¥conf 以下のファイル <sup>*2</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
共通定義情報	jbsgetcnf コマンドの実行結果	jbsgetcnf コマンドで指定したファイル
	jbsgetcnf -h 論理ホスト名の 実行結果 <sup>*2</sup>	
ログ情報	インストール先フォルダ ¥jp1base¥log¥以下のファイル	採取元のファイル名と同じファイル名
	共有フォルダ ¥jp1base¥log¥以下のファイル <sup>*2</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥jp1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥以下のファイル <sup>*4*5</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥jp1¥論理ホスト名 ¥JP1Base¥log¥以下のファイル <sup>*4*5</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
インストールログ	Windows のインストール先フォルダ ¥Temp¥HITACHL_JP1_INST_LOG¥jp1base_inst{1 2 3 4 5}.log	採取元のファイル名と同じファイル名
イベントサービスの設定情報	インストール先フォルダ ¥jp1base¥sys¥tmp¥event¥以下のファイル	採取元のファイル名と同じファイル名
	共有フォルダ ¥jp1base¥event¥以下のファイル <sup>*2</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
イベントデータベース	インストール先フォルダ ¥jp1base¥sys¥event¥以下のファイル <sup>*3</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
	共有フォルダ ¥jp1base¥event¥以下のファイル <sup>*2*3</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
コマンド実行履歴	インストール先フォルダ ¥jp1base¥log¥COMMAND 以下のファイル <sup>*3</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
	共有フォルダ ¥jp1base¥log¥Command¥以下のファイル <sup>*2*3</sup>	採取元のファイル名と同じファイル名
統合トレースログ	システムドライブ ¥Program Files¥Hitachi¥HNTRLlib2¥spool¥hntr2*.log	採取元のファイル名と同じファイル名
ISAM の保守情報	Jischk コマンドの実行結果 <sup>*6</sup> 物理ホスト指定時: インストール先フォルダ ¥jp1base¥log¥Command¥* 論理ホスト指定時: 共有フォルダ ¥jp1base¥log¥Command¥*	isamchk.log
ファイル一覧	dir /s インストール先フォルダ ¥jp1base の実行結果	dir_jp1base.log
	dir /s 共有フォルダ ¥jp1base の実行結果	dir_jp1base.log
バージョン情報	システムドライブ ¥Program Files ¥InstallShield Installation Information ¥{F8C71F7C-E5DE-11D3-A21E-006097C00EBC}¥setup.ilg, setup.ini	base_setup.ilg, base_setup.ini
パッチ適用履歴	インストール先フォルダ ¥jp1base ¥Patchlog.txt	Patchlog_jp1base.txt
JP1/Base のバインド状況	netstat -na の実行結果	netstat.log
ネットワークアドレス解決のためのホスト名	jbsgethostbyname の実行結果	jbsgethostbyname.log
フォルダのアクセス権限	cacls インストール先フォルダ ¥jp1base の実行結果	cacls_jp1base.log
	cacls 共有フォルダ ¥jp1base の実行結果	
	cacls インストール先フォルダ ¥jp1base¥log の実行結果	cacls_jp1base_log.log
	cacls 共有フォルダ ¥jp1base¥log の実行結果	
	cacls インストール先フォルダ ¥jp1base¥log¥COMMAND の実行	cacls_jp1base_log_COMMAND.log

	結果	
	cacls 共有フォルダ¥jp1base¥log¥COMMAND の実行結果	
	cacls インストール先フォルダ¥jp1base¥sys の実行結果	cacls_jp1base_sys.log
	cacls インストール先フォルダ¥jp1base¥sys¥event の実行結果	cacls_jp1base_sys_event.log
	cacls インストール先フォルダ¥jp1base¥sys¥event¥servers の実行結果	cacls_jp1base_sys_event_servers.log
	cacls インストール先フォルダ¥jp1base¥sys¥event¥servers¥default の実行結果	cacls_jp1base_sys_event_servers_default.log
	cacls 共有フォルダ¥jp1base¥event の実行結果	cacls_jp1base_event.log
日立統合インストーラのログファイル	Windows のインストール先フォルダ¥Temp¥HCDINST¥以下のファイル	左記ファイルのコピーファイル

注 イベントサービインデックスファイル (index) で別パスを指定している場合は、指定したパスから直接採取してください。

注※1 資料採取ツールを実行したあとの格納先でのファイル名です。

注※2 論理ホスト(クラスター)環境の資料を採取する際に採取します。

注※3 イベントデータベースおよびコマンド実行履歴を採取する場合、ファイルサイズが大きく、資料採取にディスク容量が必要となる場合があります。資料採取を行う場合、事前にファイルサイズを確認してください。

注※4 インストール時の環境変数「%ALLUSERSPROFILE%」に設定されている値になります。

注※5 Windows Vista 限定。

注※6 Windows Vista 以外。

### (3) JP1/Base のプロセス一覧

Windows のタスク マネージャでプロセスの動作状態を確認します。

### (4) オペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- 発生時刻
- マシン構成(各 OS のバージョン、ホスト名、JP1/IM - Manager の構成)
- 再現性
- JP1/IM - View からログインしている場合のログインユーザー名

### (5) 画面上のエラー情報

次に示すハードコピーを採取してください。

- エラーダイアログボックスのハードコピー (および詳細ボタンがある場合はその内容)

### (6) ユーザーダンプ (Windows Vista 限定)

Windows Vista で JP1/Base のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、ユーザーダンプを採取してください。

### (7) 問題レポートの採取 (Windows Vista 限定)

Windows Vista で JP1/Base のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、問題レポートを採取してください。

## 15.3.2 UNIX の場合

### (1) OS のシステム情報

次に示す OS のログ情報の採取が必要です。これらの情報は資料採取ツールで採取できます。

情報の種類	採取資料	ファイル名 <sup>*1</sup>
資料採取日時	data の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, data.log
シスログ (syslog)	/var/adm/syslog/syslog.log (HP-UX) <sup>**2</sup> /var/adm/messages (Solaris) <sup>**2</sup> /var/adm/messages (AIX) <sup>**2</sup> /var/log/messages (Linux) <sup>**2</sup>	jp1_default_base_1st.tar.Z, syslog.log
マシンに設定されている ホスト名	/etc/hosts	jp1_default_base_1st.tar.Z, hosts
マシンに設定されている サービスポートの設定	/etc/services	jp1_default_base_1st.tar.Z, services
マシンに設定されている ユーザーの一覧	/etc/passwd	jp1_default_base_1st.tar.Z, passwd
NIC の実装状況	netstat -in の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, netstat_in.log
プロセス一覧	ps -elfa の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, ps.log
マシンの環境変数	env の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, env.log
カーネルパラメーター情 報	HP-UX: sysdef /usr/sbin/kmtune の実行 結果 ulimit -a の実行結果 Solaris: /usr/sbin/sysdef -i の実行結果 ulimit -a の実行結果 AIX: lsattr -E -l sys0 の実行結果 ulimit -a の実行結果 /etc/security/limits Linux: /sbin/sysctl -a の実行結果 ulimit -a の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z HP-UX: sysdef.log kmtune.log ulimit.log Solaris: sysdef.log ulimit.log AIX: lsatt.log ulimit.log limits Linux: sysctl.log ulimit.log
ページサイズ情報	dmesg の実行結果 (HP-UX) pagesize の実行結果 (Solaris, AIX) 採取しない (Linux)	jp1_default_base_1st.tar.Z, pagesize.log
共有メモリー情報	ipcs -a の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, ipcs.log
メモリー情報	swapinfo -t の実行結果 (HP-UX) swap -l の実行結果 (Solaris) lsp -s の実行結果 (AIX) cat /proc/meminfo (Linux)	jp1_default_base_1st.tar.Z, swapinfo.log
ディスク情報	bdf の実行結果 (HP-UX) df -k の実行結果 (HP-UX 以外)	jp1_default_base_1st.tar.Z, df.log
システム診断状況	/etc/dmesg の実行結果 (HP-UX) /usr/sbin/dmesg の実行結果 (Solaris) /usr/bin/alog -o -t boot の実行結果 (AIX) /bin/dmesg の実行結果 (Linux)	jp1_default_base_1st.tar.Z, sys_info.log
OS のパッチ適用状況	HP-UX: /usr/sbin/swlist -l product /usr/sbin/swlist /usr/sbin/swlist -l fileset -a patch_state *.*c=patch Solaris: showrev -a AIX:	jp1_default_base_1st.tar.Z, patch_info.log

	<pre>lspp -l -a /usr/bin/instfix -a -icv</pre> Linux: <pre>/bin/rpm -qa</pre>	
OS のバージョン情報	uname -a の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, uname_a.log
インストール済みの日立製品情報	/etc/.hitachi/pplistd/pplistd	jp1_default_base_1st.tar.Z, pplistd
ネットワークアドレス解決のためのホスト名	jbsgethostbyname の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, jbsgethostbyname.log

注※1 資料採取ツールを実行したあとの圧縮ファイルおよび解凍後のファイル名です(圧縮ファイル, 解凍後のファイルの順に記載しています)。Linux では, 拡張子が gz になります。

注※2 syslog ファイルは, デフォルトのファイル名と異なる場合があります。

## (2) JP1/Base の情報

JP1/Base に関する次の情報の採取が必要です。これらの情報は資料採取ツールで採取できます。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。

情報の種類	デフォルトのファイル名	ファイル名
環境設定情報	/etc/opt/jp1base/conf/以下のファイル	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/etc/opt/jp1base/default/以下のファイル	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/opt/jp1base/plugin/conf/以下のファイル	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf 以下のファイル <sup>※1</sup>	<b>論理ホスト名</b> _1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
共通定義情報	/opt/jp1/hcclibcnf/ (jbsgetcnf コマンドを実行した出力結果でも確認できます)	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/etc/opt/jp1base/default/以下のファイル	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
ログ情報	/var/opt/jp1base/log/以下のファイル	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log <sup>※1※2</sup>	<b>論理ホスト名</b> _base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
インストールログ	/tmp/HITACHI_JP1_INST_LOG/jp1base_inst{1 2 3 4 5}.log	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
イベントサービスの設定情報	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/以下のファイル	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	<b>共有ディレクトリ</b> /event/以下のファイル <sup>※1</sup>	<b>論理ホスト名</b> _base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
イベントデータベース	/var/opt/jp1base/sys/event/以下のファイル	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	<b>共有ディレクトリ</b> /event/以下のファイル <sup>※1</sup>	<b>論理ホスト名</b> _base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
JP1/SES に関するログ情報	/var/tmp/jp1_ses/以下のファイル	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/var/opt/jp1_ses/log/以下のファイル (OS が HP-UX の場合) (/usr/lib/jp1_ses/log/のシンボリックリンクあり)	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/usr/lib/jp1_ses/log/以下のファイル (OS が HP-UX 以外の場合)	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/usr/lib/jp1_ses/sys/以下のファイル	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/usr/tmp/jp1_ses/以下のファイル	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/usr/bin/jp1_ses/jp*	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	/tmp/.JP1_SES*	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
コマンド実行履歴	/var/opt/jp1base/log/COMMAND 以下のファイル	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND 以下のディレクトリ	jp1_default_base_2nd.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
プロセスの動作状況 (イベントサービスを除く)	jbs_spm�_status の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, jbs_spm�_status.log
	jbs_spm�_status -h <b>論理ホスト名</b> の実行結果 <sup>※1</sup>	<b>論理ホスト名</b> _base_1st.tar.Z, jbs_spm�_status_ <b>論理ホスト名</b> .log
イベントサービス	jevstat コマンドの実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z,

スのプロセスの動作状況	jevstat <b>論理ホスト名</b> の実行結果※1	jevstat.log jp1_default_base_1st.tar.Z, jevstat_ <b>論理ホスト名</b> .log
統合トレースログファイル	/var/opt/hitachi/HNTRLib2/spool/hntr2*.log	jp1_default_base_1st.tar.Z, 採取元のファイル名と同じファイル名
ISAM の保守情報	Jischk コマンドの実行結果 物理ホスト指定時: /var/opt/jp1base/log/COMMAND 論理ホスト指定時: <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND	物理ホスト指定時: jp1_default_base_1st.tar.Z, com.jischk.log 論理ホスト指定時: jp1_default_base_1st.tar.Z, com.jischk_ <b>論理ホスト名</b> .log
core の解析情報※3	car コマンドの実行結果 (/var/opt/jp1base/, および/opt/jp1base/ /以下の core ファイルの解析結果)	jp1_default_base_2nd.tar.Z, core_ <b>モジュール名</b> .log jp1_default_base_2nd.tar.Z, core_ <b>モジュール名</b> .cat.tar.Z
ファイル一覧	ls コマンドの実行結果 ls -lRa /opt/jp1base ls -lRa /etc/opt/jp1base ls -lRa /var/opt/jp1base	jp1_default_base_1st.tar.Z, inst_dir.log
	ls コマンドの実行結果※1 ls -lRa <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base ls -lRa <b>共有ディレクトリ</b> /event	jp1_default_base_1st.tar.Z, share_dir.log
パッチ適用履歴	/opt/jp1base/PatchInfo	jp1_default_base_1st.tar.Z, PatchInfo
パッチログ情報	/opt/jp1base/PatchLog	jp1_default_base_1st.tar.Z, PatchLog
JP1/Base のバインド状況	netstat -na の実行結果	jp1_default_base_1st.tar.Z, netstat_na.log

注 イベントサーバインデックスファイル (index) で別ディレクトリを指定している場合は、指定したディレクトリから直接採取してください。

注※1 論理ホスト(クラスタ)環境の資料を採取する際に採取します。

注※2 イベントデータベースおよびコマンド実行履歴を採取する場合、ファイルサイズが大きく、資料採取にディスク容量が必要となる場合があります。資料採取を行う場合、事前にファイルサイズを確認してください。

注※3 Linux では、次の注意事項があります。

Linux では、標準設定でコアファイル出力時の最大サイズが「0」となっている場合があります。この場合、コアダンプは出力されません。このため、コアダンプが出力できるように、jbs\_start スクリプトおよび jbs\_start.cluster スクリプトは標準で、次のように設定されています。

```
if [ 'uname' = Linux ]; then
ulimit -c unlimited
fi
```

この設定がご使用マシンのセキュリティポリシーに反する場合は、次のように行の先頭に「#」を付けてコメント行に変更してください。コメント行に変更すると、ファイルの設定は無効になります。ただし、JP1/Base のプロセスがセグメンテーション障害やバス障害などのコアダンプ出力契機に、コアダンプが出力されないため、調査ができないことがあります。

```
#if [ 'uname' = Linux ]; then
#ulimit -c unlimited
#fi
```



### **(3) オペレーション内容**

トラブル発生時のオペレーション内容について次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- 発生時刻
- マシン構成(各 OS のバージョン, ホスト名, JP1/IM - Manager の構成)
- 再現性
- JP1/IM - View からログインしている場合のログインユーザー名

### **(4) 画面上のエラー情報**

次に示すハードコピーを採取してください。

- エラーダイアログボックスのハードコピー(および詳細ボタンがある場合はその内容)

## 15.4 資料の採取方法

トラブルが発生したときに資料を採取する方法を次に示します。

### 15.4.1 Windows の場合

#### (1) 資料採取ツールを実行する

資料採取ツール (jbs\_log.bat) を実行します。

jbs\_log.bat を実行することで、同ホスト上の JP1/Base の障害調査に必要な資料を採取できます。

資料採取ツールで採取する資料の総容量はご使用の環境によって大きく変化します。実行する前に次に示す方法で容量を見積もり、ご使用のマシンの空き容量を確認してください。

#### jbs\_log.bat で物理ホストを指定した場合のデータサイズ

jbs\_log.bat で物理ホストを指定し (オプションを指定しない)、JP1/Base およびマシン環境情報の資料を採取するときは、以下の方法で採取する資料のサイズを見積もることができます。

データサイズ = 5 + a + b + c + d MB

a

インストール先フォルダ¥jp1base¥log¥以下のデータサイズ (最大 45MB<sup>※1</sup>)

b

インストール先フォルダ¥jp1base¥sys¥以下のデータサイズ (最大 55MB<sup>※2</sup>)

c

ワトソログおよびクラッシュダンプのデータサイズ

d

以下のファイルの合計値

- システムドライブ (C:¥WINNT など) ¥system32¥config¥AppEvent.evt
- システムドライブ (C:¥WINNT など) ¥system32¥config¥SysEvent.evt

注※1 JP1/IM - Manager を同一のホストで使用する場合には、さらに 142 メガバイト必要です。

注※2 デフォルト値です。イベントデータベースのサイズを変更した場合には増加します。

#### jbs\_log.bat で論理ホストを指定した場合のデータサイズ

jbs\_log.bat で論理ホストを指定し、JP1/Base およびマシン環境情報の資料を採取するときは、以下の方法で採取する資料のサイズを見積もることができます。

データサイズ = 5 + a + b + c + d + e + f MB

a

インストール先フォルダ¥jp1base¥log¥以下のデータサイズ (最大 45MB<sup>※1</sup>)

b

インストール先フォルダ¥jp1base¥sys¥以下のデータサイズ (最大 55MB<sup>※2</sup>)

c

ワトソログおよびクラッシュダンプのデータサイズ

d

以下のファイルの合計値

- システムドライブ (C:¥WINNT など) ¥system32¥config¥AppEvent.evt
- システムドライブ (C:¥WINNT など) ¥system32¥config¥SysEvent.evt

e

共有フォルダ¥jp1base¥log¥のデータサイズ (最大 45MB<sup>※1</sup>)

f

**共有フォルダ** ¥jp1base¥event¥のデータサイズ(最大 55MB※2)

注※1 JP1/IM - Manager を同一のホストで使用する場合には、さらに 142 メガバイト必要です。

注※2 デフォルト値です。イベントデータベースのサイズを変更した場合には増加します。最大値の見積もりはリリースノートを参照してください。

フォルダのデータサイズは、エクスプローラ上で右クリックをして表示されるメニューの[フォルダのプロパティ]画面で確認できます。

各フォルダのディスク占有量の最大値の見積もりは、リリースノートを参照してください。

次にツールの実行例を示します。

c:¥>c:¥usertools¥jbs\_log.bat **資料格納フォルダ**

**資料格納フォルダ**は、フルパスで指定してください。パスに空白を含む場合は、ダブルクォーテーションマーク(“)で囲んで指定してください。

ツールを実行すると、資料格納フォルダに指定したディレクトリの下に jp1default フォルダが作成されます。-h オプションを指定した場合は、jp1default フォルダと論理ホスト名のフォルダが作成されます。各フォルダの下に、base\_1st と base\_2nd のフォルダが作成され、そのフォルダの中に採取した資料がコピーされます。必要に応じて採取した資料を圧縮ツールなどで圧縮してください。

なお、jbs\_log.bat では、コマンド実行履歴ファイルやイベントデータベースなどを採取しないオプションを提供しています。詳細については、「13. コマンド」の「[jbs\\_log.bat \(Windows 限定\)](#)」を参照してください。

#### 07-00 以前の JP1/IM, JP1/AJS2 をご使用の場合の注意事項

JP1/Base 07-10 では、資料採取ツールをカスタマイズして JP1/IM および JP1/AJS2 の資料を採取することはできません。JP1/IM および JP1/AJS2 の資料を採取する場合は、各製品の資料採取ツールを個別に実行してください。

#### (2) プロセスの状態を確認する

Windows のタスク マネージャを使って、プロセスの動作状態を確認してください。正常に動作している場合に表示されるプロセスを次に示します。なお、表内の( )内の数値は同時に実行できるプロセス数です。

親プロセス名	機能	子プロセス名	機能
hntr2srv.exe(1)	統合トレース起動用	—	—
hntr2mon.exe(1)	統合トレース	—	—
jbs_service.exe(1)	JP1/Base プロセス管理起動用	—	—
jbs_spmnd.exe(1)	JP1/Base プロセス管理※1	jbsessionmgr.exe(1)	認証サーバ※1※3 認証サーバとして設定したホスト上にだけ存在する。 jbs_spmnd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsessionmgr となる。
		jbsroute.exe(1)	構成管理※1※3 jbs_spmnd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsroute となる。
		jcocmd.exe(1) jcocmdexe.exe(1) jcocmdapi.exe (コマンド実行画面数※2+1(JP1/IM - Manager がインストールされている場合))	コマンド実行※1※3 jbs_spmnd_status コマンドを実行した場合の表示名は jcocmd となる。
		jbspluginind.exe	プラグインサービス※1※3

			jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsplugin となる。
		jbshcd.exe(1)	ヘルスチェック(自ホスト監視用) ※1※3 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbshcd となる。
		jbshchostd.exe(1)	ヘルスチェック(他ホスト監視用) ※1※3 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbshchostd となる。
jbapmsrvcecon.exe(1)	起動管理	powendar.exe(1)	電源制御 JP1/Power Monitor がインストールされていると、このプロセスが生成される。
jevservice.exe(1)	イベントサービス ※1※4	jevsessvc.exe(1)	イベントサービス このプロセスは物理ホストでだけ生成される。
jevtraplog.exe(1)	ログファイルトラップ	—	ログファイルトラップ機能を使用した場合だけ生成される。
jevtrapevt.exe(1)	イベントログトラップ	—	イベントログトラップ機能を使用した場合だけ生成される。
imevtgw.exe(1)	SNMPトラップ変換	—	SNMPトラップ変換機能を使用した場合だけ生成される。

(凡例)

—:なし

注※1 クラスタシステムで複数の論理ホストが一つの物理ホスト上で動作する場合、または一つの論理ホストと物理ホストが同時に起動される場合は、上記のプロセスの同時に実行できるプロセス数の上限は、(論理ホスト数+1)となります。

注※2 接続している JP1/IM - View がコマンド実行画面を開いている数のことです。開いている画面数だけプロセス数が増えます。コマンド実行画面を閉じると、閉じた分だけプロセスは消滅します。

注※3 これらのプロセスの状態は、jbs\_spmd\_status コマンドで確認できます。jbs\_spmd\_status コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。

- 認証サーバが設定されている場合
  - jbssessionmgr
  - jbstroute
  - jcocmd
  - jbsplugin
  - jbshcd
  - jbshchostd
- 認証サーバが設定されていない場合
  - jbstroute
  - jcocmd
  - jbsplugin
  - jbshcd
  - jbshchostd

注※4 これらのプロセスの状態は、jevstat コマンドで確認できます。jevstat コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。

jevservice

### (3) オペレーション内容を確認する

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- 発生時刻
- マシン構成(各 OS のバージョン, ホスト名, JP1/IM - Manager の構成)
- 再現性
- JP1/IM - View からログインしている場合のログインユーザー名

### (4) 画面上のエラー情報を採取する

画面にエラーが表示された場合は、その情報も採取します。次に示すハードコピーを採取してください。

- エラーダイアログボックスのハードコピー

詳細ボタンがある場合は、その内容もコピーしてください。

### (5) ユーザーダンプを採取する(Windows Vista 限定)

Windows Vista で JP1/Base のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合、エラーダイアログが表示されている状態で、次の手順でユーザーダンプを採取してください。

#### 注意事項

エラーダイアログを消してしまうと正常なダンプは取得されないため、ユーザーダンプを採取できなくなってしまう可能性があります。誤って採取前にエラーダイアログを(OK ボタンなどをクリックして)消してしまった場合は、現象を再現させてからユーザーダンプを採取してください。

#### 1. タスクマネージャを起動する。

タスクマネージャは次のどちらかの手順で起動できます。

- タスクバーの空いている場所で右クリックをして「タスクマネージャ」を選択する。
- CTRL+SHIFT+ESC キーを押してタスクマネージャを起動する。

#### 2. 「プロセス」タブをクリックする。

#### 3. アプリケーションエラーで停止した JP1/Base のプロセス名を右クリックし、「ダンプファイルの生成」を選択する。

#### 4. ユーザーダンプの出力先パスを示すダイアログが表示されるので、そこから採取する。

### (6) 問題レポートを採取する(Windows Vista 限定)

Windows Vista で JP1/Base のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合、次の手順で問題レポートを採取してください。

#### 1. [ファイル名を指定して実行]のテキストボックスに「wercon」と入力し、[OK]ボタンをクリックする。

[問題のレポートと解決策]ダイアログが開きます。

#### 2. 左側の領域で、[問題の履歴の表示]をクリックする。

#### 3. 該当する問題をダブルクリックする。

問題レポートの詳細が表示されます。

#### 4. 「クリップボードにコピー」を選択する。

#### 5. コピーした内容を、テキストファイルにコピーして保存する。

保存した問題レポートを、障害調査用の資料として利用してください。

## 15.4.2 UNIX の場合

### (1) 資料採取ツールを実行する

資料採取ツール(jbs\_log.sh)を実行します。

jbs\_log.sh を実行することで、同ホスト上の JP1/Base の障害調査に必要な資料を採取できます。

資料採取ツールで採取する資料の総容量はご使用の環境によって大きく変化します。実行する前に次に示す方法で容量を見積もり、ご使用のマシンの空き容量を確認してください。

#### jbs\_log.sh で物理ホストを指定した場合のデータサイズ

jbs\_log.sh で物理ホストを指定し(オプションを指定しない)、JP1/Base およびマシン環境情報の資料を採取するときは、以下の方法で採取する資料のサイズを見積もることができます。

データサイズ = 3 + a + b + (60 × c) MB

a

/var/opt/jp1base/以下のデータサイズ(最大 83MB<sup>※1</sup><sup>※2</sup>)

b

/直下の core のサイズ(存在する場合だけ)

c

/直下, /var/opt/jp1base/, または/opt/jp1base/以下の core の数

注※1 JP1/IM - Manager を同一のホストで使用する場合には、さらに 142 メガバイト必要です。

注※2 デフォルト値です。イベントデータベースのサイズを変更した場合には増加します。最大値の見積もりはリリースノートを参照してください。

#### jbs\_log.sh で論理ホストを指定した場合のデータサイズ

jbs\_log.sh で論理ホストを指定し、JP1/Base およびマシン環境情報の資料を採取するときは、以下の方法で採取する資料のサイズを見積もることができます。

データサイズ = 3 + a + b + (60 × c) + d + e MB

a

/var/opt/jp1base/以下のデータサイズ(最大 83MB<sup>※1</sup><sup>※2</sup>)

b

/直下の core のサイズ(存在する場合だけ)

c

/直下, /var/opt/jp1base/, または/opt/jp1base/以下の core の数

d

**共有ディレクトリ**/jp1base/log/のデータサイズ(最大 45MB<sup>※1</sup>)

e

**共有ディレクトリ**/event/のデータサイズ(最大 55MB<sup>※2</sup>)

注※1 JP1/IM - Manager を同一のホストで使用する場合には、さらに 142 メガバイト必要です。

注※2 デフォルト値です。イベントデータベースのサイズを変更した場合には増加します。最大値の見積もりはリリースノートを参照してください。

フォルダのデータサイズは、du コマンドを使用して確認できます。

各フォルダのディスク占有量の最大値の見積もりは、リリースノートを参照してください。

次に、ツールの実行例を示します。

jbs\_log.sh -f **出力ファイル名**

なお、jbs\_log.sh では、コマンド実行履歴ファイルやイベントデータベースなどを採取しないオプションを提供しています。詳細については、「13. コマンド」の「[jbs\\_log.sh \(UNIX 限定\)](#)」を参照してください。

## 07-00 以前の JP1/IM, JP1/AJS2 をご使用の場合の注意事項

JP1/Base 07-10 では、資料採取ツールをカスタマイズして JP1/IM および JP1/AJS2 の資料を採取することはできません。JP1/IM および JP1/AJS2 の資料を採取する場合は、各製品の資料採取ツールを個別に実行してください。

### (2) プロセスの状態を確認する

ps コマンドを使用したときに表示されるプロセスを次に示します。UNIX の場合は、資料採取ツール (jbs\_log.sh) を実行することで、ほかの資料とともに ps コマンドの実行結果を採取できます。

表内の( )内の数値は同時に実行できるプロセス数です。

親プロセス名	機能	子プロセス名	機能		
hntr2mon(1)	統合トレース	—	—		
jbs_spmd(1)	プロセス管理※1	jbsessionmgr(1)	認証サーバ※1※4 認証サーバとして設定したホスト上にだけ存在する。 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsessionmgr となる。		
		jbsroute(1~9)	構成管理※1※4 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsroute となる。		
		jcocmd(1) jcocmdexe(1) jcocmdapi(コマンド実行画面数※2+1(JP1/IM - Manager がインストールされている場合)) jcocmdcmc(0~コマンド数※3)	コマンド実行※1※4 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jcocmd となる。		
		jbsplugin※5	プラグインサービス※1※4 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsplugin となる。		
		jbsbcd(1)	ヘルスチェック(自ホスト監視用)※1※4 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsbcd となる。		
		jbsbchostd(1)	ヘルスチェック(他ホスト監視用)※1※4 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsbchostd となる。		
		jvservice(1)	イベントサービス※1※6	jvservice(6~9,999)	イベントサービス
				jesdmain(1)※7	JP1/SES 互換用 このプロセスは物理ホストでだけ生成される。
jesrd(4~9,999)	JP1/SES 互換用 このプロセスは物理ホストでだけ生成される。				
jevlogd(1~2)	ログファイルトラップ管理デーモン	jelparentim (0~jevlogstart コマンド実行数)	ログファイルトラップ jelparentim 一つにつき、監視するファイル数分 jelchildim プロセスが生成される。なお、jevlogstop コマンドを実行すれば、jelparentim プロセスは消滅する。		
imevtgw(1)	SNMPトラップ変換	—	SNMPトラップ変換機能を使用する場合だけ生成される。		

(凡例)

—:なし

注※1 クラスタシステムで複数の論理ホストが一つの物理ホスト上で動作する場合、または一つの論理ホストと物理ホストが同時に起動される場合は、上記のプロセスの同時に実行できるプロセス数の上限は、(論理ホスト数+1)となります。

注※2 接続している JP1/IM - View がコマンド実行画面を開いている数のことです。開いている画面数だけプロセス数が増えます。コマンド実行画面を閉じると、閉じた分だけプロセスは消滅します。

注※3 JP1/IM - Manager によるリモートコマンドや自動アクションの実行数のことです。コマンド一つにつき、プロセスが一つ生成されます。処理が完了すると、プロセスは消滅します。なお、コマンドを連続して実行した場合、複数のプロセスが生成されることがあります。

注※4 これらのプロセスの状態は、jbs\_spmc\_status コマンドで確認できます。jbs\_spmc\_status コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。

- 認証サーバが設定されている場合  
jbsessionmgr  
jbsroute  
jcocmd  
jbsplugin  
jbsbcd  
jbsbchostd
- 認証サーバが設定されていない場合  
jbsroute  
jcocmd  
jbsplugin  
jbsbcd  
jbsbchostd

注※5 ps -el コマンドで表示されるプロセス名は、「jbsplugin」となります。

注※6 これらのプロセスの状態は、jevstat コマンドで確認できます。jevstat コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。

jevservice

注※7 ps コマンドで表示されるプロセス名は、/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/jpevent.conf となります。

### (3) オペレーション内容を確認する

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- 発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン、ホスト名、JP1/IM - Manager の構成)
- 再現性
- JP1/IM - View からログインしている場合のログインユーザー名

### (4) 画面上のエラー情報を採取する

画面にエラーが表示された場合は、その情報も採取します。次に示すハードコピーを採取してください。

- エラーダイアログボックスのハードコピー

詳細ボタンがある場合は、その内容もコピーしてください。



## 15.5 トラブルへの対処方法

この節では、トラブル発生時の現象別の対処方法について説明します。

### 15.5.1 OS 共通のトラブル

Windows, UNIX 共通で発生する主なトラブルを次に示します。

1	短時間に大量の JP1 イベントが発生し、転送を中止したい。
2	イベントデータベースが破損した。
3	JP1/Base を起動すると、「SES エミュレータ用のポート ID が定義されていません」のメッセージが出力される。

#### (1) 短時間に大量の JP1 イベントが発生し、転送を中止したい。

イベントデータベースを初期化しないかぎり、JP1 イベントは転送され続けます。最終的な手段として、イベントデータベースの初期化を検討してください。

イベントデータベースの初期化の手順については、「[6.6.1\(1\) イベントデータベースを初期化する](#)」を参照してください。また、JP1 イベントを大量に発生させないために、転送設定ファイルで、JP1 イベントを転送する条件を見直してください。

#### (2) イベントデータベースが破壊された。

イベントデータベースが破壊される要因と対処について説明します。

##### 要因

次に示す要因が考えられます。

- 停電などで、急にシステムの電源が落ちた。
- イベントサービスの稼働中に、OS のコマンドやバックアップ用のソフトウェアでイベントデータベースをバックアップおよびリストアした。
- イベントデータベースをエディターなどで編集した。
- コマンドの出力結果などをイベントデータベースにリダイレクトした。
- ハードディスクに障害が発生した。

##### 対処

イベントデータベースが破壊されても、イベントサービスは起動または続行し、新規の JP1 イベントの登録や取得は正常に行えます。ただし、破壊されたレコードは、イベント検索や取得の対象外となります。また、イベントデータベースに破壊されたレコードが存在すると、JP1/IM - View からのイベント検索の性能が低下するおそれがあります。イベントデータベースの破壊を通知するメッセージが出力された場合は、イベントデータベースを初期化してください。

イベントデータベースの初期化の手順については、「[6.6.1\(1\) イベントデータベースを初期化する](#)」を参照してください。

#### (3) JP1/Base を起動すると、「SES エミュレータ用のポート ID が定義されていません」のメッセージが出力される。

JP1/Base の起動時に、「SES エミュレータ用のポート ID が定義されていません」のメッセージが出力される場合の要因と対処について説明します。

##### 要因

services ファイルに JP1/SES 互換用のポート ID を指定していないためです。JP1/SES 形式でイベントを送受信しない場合は問題ありません。

##### 対処

JP1/SES, JP1/AJS および JP1/SES のプロトコルを利用した製品 (JP1/OJE など) とイベントの送受信を行う場合は、services ファイルに JP1AutoJob (Windows の場合), jesrd (UNIX の場合) を追加してください。ポート番号は任意です。

## 15.5.2 Windows の場合

Windows の場合に発生する主なトラブルを次に示します。

1	JP1/Base のイベントサービスが起動しない。
2	JP1/IM - View の[イベントコンソール]画面に表示される JP1 イベントの時刻がずれる。
3	認証サーバが起動しない。
4	「サービス固有のエラー3004」が表示され、JP1/Base EventlogTrap サービスが起動できない。
5	起動管理機能 (JP1/Base Control Service サービス) でサービスを正常に起動または停止できない。
6	起動管理機能 (JP1/Base Control Service サービス) でサービスをシステム終了時に停止できない。
7	特定の順番でサービスを起動する必要があるため、起動管理機能を使ってサービスの起動完了を待って順番にサービスが起動するように定義している。しかし、先に起動する必要があるサービスの起動が完了しないうちに次のサービスが起動してしまい、エラーメッセージが出る。
8	起動管理機能 (JP1/Base Control Service サービス) を使ってサービスを起動すると、「XXXX サービスが既に起動されています」と警告が出る。
9	起動管理機能 (JP1/Base Control Service サービス) を使ってサービスを起動すると、イベントビューアのアプリケーションログに「指定時間を過ぎても XXXX サービスの起動完了が確認できませんでした。」のメッセージが出力される。
10	起動管理機能 (JP1/Base Control Service サービス) を使ってサービスを起動すると、「KAVA4003-E 予期しないエラーが発生したため、XXXX サービスを起動できませんでした。」のメッセージが出力され、サービスが起動できない。
11	ディレクトリサーバ連携機能有効時にログインできない。

### (1) JP1/Base のイベントサービスが起動しない。

Windows ホスト上でイベントサービスが起動しない場合の要因と対処について次に示します。

#### 要因

従来の製品 JP1/IM を使用しているマシンに JP1/Base をインストールして使用する場合、JP1/IM Control Service、または JP1/IM Event サービスがコントロールパネルの[サービス]ダイアログボックス上で「自動」で登録されていると、タイミングによって JP1/Base Event サービスが起動できなくなります。

#### 対処

JP1/IM Control Service および JP1/IM Event サービスを手動に変更してください。また、そのほかの JP1/IM 関連サービスも手動にしておいてください。

### (2) JP1/IM - View の[イベントコンソール]画面に表示される JP1 イベントの時刻がずれる。

JP1/IM - View の[イベントコンソール]画面に表示される JP1 イベントの時刻がずれる場合の要因と対処について次に示します。

#### 要因

システムの msvcrt.dll のバージョンが古い場合に発生します。

#### 対処

JP1/Base のインストール時に msvcrt.dll を置き換えるかどうかの確認ダイアログボックスが表示された場合、必ず「再起動」を選択してファイルの置き換え、インストール後にシステムを再起動してください。また、ほかの製品をインストールした後に、イベントの時刻がずれるなどの動作不正が発生した場合は、JP1/Base を再インストールしてください。

### (3) 認証サーバが起動しない。

認証サーバが起動しない場合の要因と対処について説明します。

#### 要因

[JP1/Base 環境設定]画面の[認証サーバ]タブの[認証サーバ]で、認証サーバとして自ホストを指定していない場合、認証サーバは起動しません。JP1/Base の新規インストール時に自動セットアップを選択しない場合は、起動しないようになっています。

対処

[JP1/Base 環境設定]画面の[認証サーバ]タブの[認証サーバ]で、認証サーバに自ホストを指定してください。

#### (4) 「サービス固有のエラー3004」が表示され、JP1/Base EventlogTrap サービスが起動できない。

「サービス固有のエラー3004」が表示され、JP1/Base EventlogTrap サービス(イベントログトラップ機能)が起動できない場合の要因と対処について説明します。

要因

JP1/Base Event サービス(イベントサービス)が起動する前に、JP1/Base EventlogTrap サービスが起動したためです。これは、JP1/Base EventlogTrap サービスをコントロールパネルの[サービス]ダイアログボックス上で起動方法を「自動」にした場合に発生することがあります。

対処

JP1/Base EventlogTrap サービスを自動起動にしたい場合は、JP1/Base Control Service サービス(起動管理機能)を利用して、JP1/Base Event サービスの起動後に、JP1/Base EventlogTrap サービスが起動するように設定してください。JP1/Base Control Service サービスの詳細については、「[5. サービスの起動順序および終了順序の設定\(Windows 限定\)](#)」を参照してください。

#### (5) 起動管理機能(JP1/Base Control Service サービス)でサービスを正常に起動または停止できない。

JP1/Base Control Service サービスでサービスを正常に起動または停止できない場合の要因と対処を次に示します。

要因

次に示す要因が考えられます。

1. 対話形式のコマンド、またはダイアログボックスを表示するコマンドを起動順序定義ファイルに登録している。
2. スペースを含むパスのコマンドをダブルクォーテーションマーク(“)で囲わずに起動順序定義ファイルに記述している。

対処

要因への対処を上記要因の番号順に従って次に示します。

1. 対話形式のコマンド、またはダイアログボックスを表示するコマンドがないか確認し、これらのコマンドを登録しないようにしてください。
2. ダブルクォーテーションマーク(“)で囲むか、環境変数 PATH に参照パスを登録し、実行ファイル名だけを起動順序定義ファイルに記述してください。

#### (6) 起動管理機能(JP1/Base Control Service サービス)でサービスをシステム終了時に停止できない。

JP1/Base Control Service サービスでサービスをシステム終了時に停止できない場合の要因と対処を次に示します。

要因

次に示す要因が考えられます。

1. JP1/Power Monitor をインストールしていない。
2. スタートメニューからシャットダウンを実行した。
3. JP1/Power Monitor から強制終了を実行したが、定義ファイルに[Control Value]セクションを登録していなかった。
4. JP1/Power Monitor 以外で OS のシャットダウンコマンドを実行した。
5. 停止しないサービスの起動方法がコントロールパネルの[サービス]ダイアログボックスの表示で「自動」になっている。
6. 手動で JP1/Base Control Service サービスを停止した。

対処

要因への対処を上記要因の番号順に従って次に示します。

1. JP1/Power Monitor をインストールしてください。
2. JP1/Power Monitor を使って計画終了, または強制終了を行ってください。
3. [Control Value]セクションを定義ファイルに登録してください。
4. JP1/Power Monitor を使って計画終了, または強制終了を行ってください。
5. 停止しないサービスの起動方法をコントロールパネルの[サービス]ダイアログボックスで「手動」に変更してください。
6. JP1/Power Monitor を使って計画終了, または強制終了を行ってください。

**(7) 特定の順番でサービスを起動する必要があるため, 起動管理機能を使ってサービスの起動完了を待つ順番にサービスが起動するように定義している。しかし, 先に起動する必要があるサービスの起動が完了しないうちに次のサービスが起動してしまい, エラーメッセージが出る。**

直前のサービスの起動処理が完了してから次のサービスの起動処理が開始されるように定義しているにもかかわらず, 先に起動する必要があるサービスの起動処理が完了しないうちに次のサービスが起動してしまい, エラーメッセージが出る場合の要因と対処を次に示します。

要因

次に示す要因が考えられます。

1. 起動管理機能 (JP1/Base Control Service サービス) は, 直前のサービスの起動処理を完了してから次のサービスの起動処理を開始しようとしたが, 定義されている最大待ち時間を過ぎてもサービスの起動処理が完了しなかったため, 次に定義されているサービスの起動処理を開始した。
2. 起動順序定義ファイルの設定が, 直前のサービスの起動処理の完了を待たずに次のサービスの起動処理を行う設定になっている。

対処

要因への対処を上記要因の番号順に従って次に示します。

1. 時間切れを起こしたサービスの起動に必要な時間を調査してください。そして, 起動順序定義ファイル内の該当サービスの Wait=パラメーターの値を, 時間切れを起こさない時間に変更して運用してください。
2. 起動順序定義ファイル内の該当サービスの Parallel=パラメーターの設定を見直してください。詳細については, 「[5.3 起動順序定義ファイルを編集する](#)」および「[5.3.3 パラメーター一覧](#)」を参照してください。

**(8) 起動管理機能 (JP1/Base Control Service サービス) を使ってサービスを起動すると, “XXXX サービスが既に起動されています”と警告が出る。**

起動管理機能 (JP1/Base Control Service サービス) を使ってサービスを起動すると, “XXXX サービスが既に起動されています”と警告メッセージが出る場合の要因と対処を次に示します。

要因

この警告メッセージは, 起動管理機能を使って起動しようとしているサービスがすでに起動しているときに出力されます。この警告メッセージが出力される要因として, 該当するサービスのスタートアップの設定が自動起動になっていることが考えられます。

対処

起動管理機能を使ってサービスを起動する場合は, そのサービスのスタートアップの設定を手動に変更してください。

**(9) 起動管理機能(JP1/Base Control Service サービス)を使ってサービスを起動すると、イベントビューアのアプリケーションログに「指定時間を過ぎても XXXX サービスの起動完了が確認できませんでした。」のメッセージが出力される。**

起動管理機能(JP1/Base Control Service サービス)を使ってサービスを起動すると、イベントビューアのアプリケーションログに「指定時間を過ぎても XXXX サービスの起動完了が確認できませんでした。」のメッセージが出力され、かつ、該当サービスが起動している場合は、次に示す設定を見直してください。また、このメッセージが出力され、かつ、該当サービスが起動していない場合は、該当サービス製作会社に、起動が失敗する原因について調査してもらってください。

Wait=パラメーターが該当サービスのセクション内に設定されていない場合

該当サービスを起動するのに、デフォルトの待ち時間 60 秒以上の時間を必要としています。該当サービスのセクション内に Wait=パラメーターを設定し、60 秒よりも大きい値を設定してください。

Wait=パラメーターが該当サービスのセクション内に設定されている場合

該当サービスを起動するのに、設定した待ち時間以上の時間を必要としています。該当サービスの Wait=パラメーターの値を、現在設定している値より大きい値に変更してください。

**(10) 起動管理機能(JP1/Base Control Service サービス)を使ってサービスを起動すると、「KAVA4003-E 予期しないエラーが発生したため、XXXX サービスを起動できませんでした。」のメッセージが出力され、サービスが起動できない。**

起動管理機能(JP1/Base Control Service サービス)を使ってサービスを起動すると、「KAVA4003-E 予期しないエラーが発生したため、XXXX サービスを起動できませんでした」のメッセージが出る場合の要因と対処を次に示します。

要因

マシンの起動時に、Windows のサービスコントロールマネージャーによって自動起動が設定されているサービスの起動と、起動管理機能で設定されているサービスの起動が並行して動作した場合に発生することがあります。

対処

起動管理機能で設定されているサービスが起動するタイミングを遅らせるよう設定してください。これによって、サービス起動時の過負荷による起動の失敗を回避できます。

設定の詳細については、「[5.4 サービスが起動するタイミングを設定する](#)」を参照してください。

**(11) ディレクトリサーバ連携機能有効時にログインできない。**

ディレクトリサーバ連携機能有効時にログインできない場合は、統合トレースログを調査してください。次のエラーメッセージが出力されていたときは、マニュアル「JP1/Base メッセージ」を参照して要因と対処を確認し、ディレクトリサーバ管理者に連絡してください。

- KAVA1677-W
- KAVA1678-W
- KAVA1679-W
- KAVA1687-W
- KAVA1688-W
- KAVA1690-W
- KAVA1691-W

### 15.5.3 UNIX の場合

UNIX の場合に発生する主なトラブルを次に示します。

1	認証サーバが起動しない
2	イベントサービスを起動しようとする、KAJP1005-E や KAJP1852-E のエラーが発生してイベントサービスが起動できない

#### (1) 認証サーバが起動しない

認証サーバが起動しない場合の要因と対処について説明します。

要因

認証サーバを停止するように設定を変更した場合、jbssetusrsvr コマンドで自ホストを認証サーバに指定しただけでは、認証サーバは起動しません。

対処

```
jbssetusrsvr コマンドで自ホストを認証サーバに指定した後、次に示す操作をしてください。  
cd /etc/opt/jp1base/conf  
cp -p jp1bs_spmd.conf.session.model jp1bs_spmd.conf
```

#### (2) イベントサービスを起動しようとする、KAJP1005-E や KAJP1852-E のエラーが発生してイベントサービスが起動できない

イベントサービスを起動しようとしてもエラーメッセージが発生して、イベントサービスが起動できない場合の要因と対処について説明します。

要因

次に示す要因が考えられます。

1. カーネルパラメーターが JP1/Base およびそのほかの製品を考慮した値に設定されていない。
2. イベントサーバインデックスファイル (index) で指定したディレクトリがシンボリックリンクされているが、そのシンボリックリンク先のディレクトリが存在しない。
3. イベントサービスの起動時に作成されるディレクトリが権限エラーなどで作成できない。

対処

要因への対処を上記要因の番号順に従って次に示します。

1. カーネルパラメーターの値を設定し直してください。なお、カーネルパラメーターの値については、「[付録 G カーネルパラメーター一覧](#)」を参照してください。
2. ディレクトリを作成し、シンボリックリンクを再作成してください。
3. ユーザーの権限をスーパーユーザー権限にして、イベントサービスを再起動してください。

#### 15.5.4 ヘルスチェック機能で異常を検知した場合

ヘルスチェック機能では、JP1/Base の各プロセスの異常を検知できます。ここでは、ヘルスチェック機能で検知した異常要因と対処方法について説明します。

**(1) システムリソース(CPU, ディスクなど)が大量に消費されている。または、プロセスへの要求が性能の限界を超えている。**

高負荷の要因となっている処理をキャンセルしてください。

**(2) すぐに終了するはずのコマンドが終了しない。または、コマンドがリソースを保持したまま終了しない。**

コマンドプロセスを kill コマンドなどの OS 機能で強制終了してください。

**(3) プロセスがデッドロック、または無限ループの状態になっている。**

プロセスがデッドロック、または無限ループの状態になって処理が長時間終了しない場合は、次の表に示す対処方法に従って対処してください。

項番	機能	プロセス名	対処方法
1	プロセス管理機能	jbs_spmd	JP1/Base を再起動する。 Windows の場合 JP1/Base サービス(ユーザー管理を含むプロセス管理)を再起動する。 UNIX の場合 JP1/Base を再起動する。*
2	認証サーバ	jbsessionmgr	
3	構成管理	jbsroute	
4	コマンド実行	jcocmd	
5	プラグインサービス	jbsplugind	
6	イベントサービス	jevservice	イベントサービスを再起動する。 Windows の場合 JP1/Base Event サービスを再起動する。 UNIX の場合 イベントサービスを再起動する。*
7	ログファイルトラップ	jevtraplog	ログファイルトラップ管理サービス(デーモン)を再起動する。 Windows の場合 JP1/Base LogTrap サービスを再起動する。 UNIX の場合 ログファイルトラップ管理デーモンを再起動する。*
		jevlogd	
		jelparentim jelchildim	
8	イベントログトラップ	jevtrapevt	イベントログトラップサービス(JP1/Base EventlogTrap)を再起動する。
9	SNMPトラップ変換	imevtgw	JP1/Cm2/NNM を再起動する。
10	ヘルスチェック	jbsbcd jbsbchostd	JP1/Base を再起動する。 Windows の場合 JP1/Base サービス(ユーザー管理を含むプロセス管理)を再起動する。 UNIX の場合 JP1/Base を再起動する。*

注※ プロセスの終了コマンドで、該当するプロセスを停止したあと、ps -el コマンドで終了していないプロセスがないか確認してください。プロセスが残っている場合は、kill コマンドで終了してください。その後、起動コマンドでプロセスを起動してください。

**(4) 監視対象ホストに接続できない。**

- ホストが起動しているかどうか確認してください。
- JP1/Base が起動しているか確認してください。
- ネットワークが正常かどうか確認してください。
- 監視対象ホストにインストールされた JP1/Base のバージョンが 07-11 以降かどうか確認してください。

## 15.6 JP1/Base 使用上の注意事項

JP1/Base を使用する場合の注意事項について説明します。

### (1) システム起動時の注意事項

- 次のコマンドを同時に実行した場合、JP1/Base の起動が正しく行われない場合があります。これらのコマンドを同時に実行しないでください。
  - jbs\_start
  - jbs\_start.cluster
  - jbs\_spm

### (2) システム運用時の注意事項

- JP1/Base を起動しているときは、次のコマンドを使用しないでください。
  - jbshostsimport
  - jbsunsetcnf
  - jevdbinit
  - jp1base\_setup (UNIX の場合)
  - jp1base\_setup\_cluster (UNIX の場合)
  - jp1bshasetup (Windows の場合)
  - Jischk
  - Jiscond
  - Jisconv
  - Jiscpy
  - Jisext
  - Jiskeymnt
  - Jislckext
  - Jisprt
  - Jislckreg (UNIX の場合)
  - Jisrsdel (UNIX の場合)
- JP1/IM や JP1/AJS2 を利用したコマンドの実行、ジョブや自動アクションの実行中でなければ、JP1/Base を起動している状態で、次に示す環境設定情報を変更できます。
  - JP1 ユーザーの設定
  - JP1 資源グループ別権限レベルの設定 (Windows の場合)
  - JP1 ユーザーの操作権限の設定 (UNIX の場合)
  - 認証サーバの変更

JP1/IM や JP1/AJS2 の運用中に上記環境設定情報を変更する場合は、十分に注意してください。

### (3) ユーザー認証に関する注意事項

- 1 台の認証サーバにログインの負荷が集中すると、「KAVB0109-E 接続ホストと認証サーバの間で、通信エラーが発生しました」、または KAVB0105, KAVB0106, KAVB0108 のメッセージが出力され、ログインできなくなることがあります。この現象が発生した場合、しばらく待ってから再度ログインを実行してください。
- JP1/IM - View または JP1/AJS2 - View からログインするときに、パスワードの後ろに付けたスペースは無視されます。

### (4) 起動順序の制御に関する注意事項



- JP1/Base Control Service サービスの[ログオン]の設定を「システムアカウント」以外に変更しないでください。また、「デスクトップの対話をサービスに許可」オプションにチェックを入れないでください。
- JP1SVPRM.DAT ファイルには、対話形式のコマンドやダイアログボックスを表示するコマンドを登録しないでください。

#### (5) JP1/Base で使用するファイルおよびディレクトリに関する注意事項

- UNIX で JP1/Base を使用する場合、/var/opt/jp1base/tmp 以下にはファイルなどを作成しないでください。作成した場合、削除される場合があります。
- Windows では、コマンド実行機能で**インストール先フォルダ**¥jp1base¥COMMAND をカレントフォルダとして使用しています。そのため、JP1 ユーザーにマッピングしている OS ユーザーに対して、カレントフォルダの読み取り権限が必要となります。また、カレントフォルダにリダイレクトによるファイル作成や、一時ファイルの作成をする場合は、書き込み権限が必要となります。

## 付録

### 付録 A ファイルおよびディレクトリ一覧

JP1/Base で使用するファイルおよびディレクトリを次に示します。

#### (1) Windows の場合

表中の *Base\_Path* は、マニュアル本文中で使用している「インストール先フォルダ¥jp1base」です。なお、*Base\_Path* は、デフォルトでは「C:¥Program Files¥Hitachi¥jp1base」です。表中の *SystemDrive* は、マニュアル本文中で使用している「システムドライブ」です。「ファイル名・フォルダ名」には、JP1/Base をデフォルトでインストールした場合のログファイル名と、クラスタ運用の場合のログファイル名をそれぞれフルパスで記載しています。

表 A-1 JP1/Base のファイルおよびフォルダ一覧 (Windows の場合)

内容	ファイル名・フォルダ名	
コマンド格納フォルダ	<i>Base_Path</i> ¥bin¥	
ツール関連フォルダ	<i>Base_Path</i> ¥tools¥	
資料採取ツールサンプルバッチファイル	<i>Base_Path</i> ¥tools¥jbs_log.bat	
JP1/IM 関数サンプルソースファイル	<i>Base_Path</i> ¥tools¥event¥receiver.cpp	
	<i>Base_Path</i> ¥tools¥event¥sender.cpp	
JP1/IM 関数 ヘッダファイル	<i>Base_Path</i> ¥include¥JevApi.h	
AR System 連携用サンプルバッチファイル	<i>Base_Path</i> ¥tools¥helpdesk¥register_ars.bat	
環境設定フォルダ	<i>Base_Path</i> ¥conf¥	
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥	
起動管理機能 起動順序定義ファイル サービス起動遅延時間 ／タイマー監視時間定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>Base_Path</i>¥conf¥boot¥JP1SVPRM.DAT</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>Base_Path</i>¥conf¥boot¥jp1svprm_wait.dat.sample</li> </ul>	
イベントサービス イベントサーバインデックスファイル イベントサーバ設定ファイル 転送設定ファイル API 設定ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>Base_Path</i>¥conf¥event¥index</li> <li>• <i>Base_Path</i>¥conf¥event¥servers¥default¥conf**2</li> <li>• <b>共有フォルダ</b>¥jp1base¥event¥conf**2</li> <li>• <i>Base_Path</i>¥conf¥event¥servers¥default¥forward**2</li> <li>• <b>共有フォルダ</b>¥jp1base¥event¥forward**2</li> <li>• <i>Base_Path</i>¥conf¥event¥api</li> </ul>	
	jp1hosts 定義ファイル	<i>Base_Path</i> ¥conf¥jp1hosts
		<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥jp1hosts
	通信方式設定ファイル	<i>Base_Path</i> ¥conf¥physical_ipany.conf
		<i>Base_Path</i> ¥conf¥logical_ipany.conf
		<i>Base_Path</i> ¥conf¥physical_recovery_0651.conf
<i>Base_Path</i> ¥conf¥logical_recovery_0651.conf		

	<i>Base_Path</i> ¥conf¥physical_anyany.conf <i>Base_Path</i> ¥conf¥physical_ipip.conf <i>Base_Path</i> ¥conf¥logical_ipip.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥physical_ipany.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥logical_ipany.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥physical_recovery_0651.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥logical_recovery_0651.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥physical_anyany.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥physical_ipip.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥logical_ipip.conf
イベントデータベース格納フォルダ	<i>Base_Path</i> ¥sys¥event¥servers¥ <sup>※2</sup> <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥ <sup>※2</sup>
イベント変換機能 ログファイルトラップ変換 用動作定義ファイル ログ情報定義ファイル イベントログトラップ用動作定義ファイル SNMPトラップ変換用フィルターファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>任意のファイルおよび任意のフォルダを指定できます。</li> <li><i>Base_Path</i>¥jp1base¥conf¥event¥jevlogd.conf</li> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥event¥ntevent.conf</li> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥event¥timevtgw.conf および <i>Base_Path</i>¥conf¥event¥snmpfilter.conf</li> <li><b>共有フォルダ</b>¥jp1base¥conf¥event¥timevtgw.conf<sup>※1</sup> および <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥event¥snmpfilter.conf<sup>※1</sup></li> </ul>
イベントサービスの定義 情報の収集・配布機能 配布定義ファイル(転送 設定ファイル用) 配布定義ファイル(ログ ファイルトラップ用) 配布定義ファイル(イベ ントログトラップ用)	<ul style="list-style-type: none"> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥event¥servers¥default¥[jev_forward.conf   <b>任意のファイル</b>]<sup>※3</sup></li> <li><b>共有フォルダ</b>¥jp1base¥event¥[jev_forward.conf   <b>任意のファイル</b>]<sup>※3</sup></li> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥[jev_logtrap.conf   <b>任意のファイル</b>]<sup>※3</sup></li> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥event¥[jev_ntevent.conf   <b>任意のファイル</b>]<sup>※3</sup></li> </ul>
ユーザー管理機能 ユーザー権限レベルフ ァイル ディレクトリサーバ連携 定義ファイルのモデルフ ァイル 共通定義設定用サーバ 連携定義ファイル マッピング定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥user_acl¥JP1_UserLevel</li> <li><b>共有フォルダ</b>¥jp1base¥conf¥user_acl¥JP1_UserLevel</li> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥ds¥jp1bs_ds_setup.conf.model</li> <li><b>共有フォルダ</b>¥jp1base¥conf¥ds¥jp1bs_ds_setup.conf.model</li> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥ds¥jp1bs_ds_setup.conf</li> <li><b>共有フォルダ</b>¥jp1base¥conf¥ds¥jp1bs_ds_setup.conf</li> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥user_acl¥jp1BsUmap.conf</li> <li><b>共有フォルダ</b>¥jp1base¥conf¥user_acl¥jp1BsUmap.conf</li> </ul>
JP1/Base パラメーター 定義ファイル	<i>Base_Path</i> ¥conf¥jp1bs_param.conf <i>Base_Path</i> ¥conf¥jp1bs_param_V7.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥jp1bs_param.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥jp1bs_param_V7.conf
ヘルスチェック機能	<ul style="list-style-type: none"> <li><i>Base_Path</i>¥conf¥jbshc¥jbshc.conf</li> </ul>

ヘルスチェック定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>共有フォルダ¥jp1base¥conf¥jbshc¥jbshc.conf</li> </ul>
共通定義設定用ファイルのモデルファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>Base_Path¥conf¥jbshc¥jbshc_setup.conf.model</li> </ul>
共通定義設定用ファイル (07-10 以前からのバージョンアップ用)のモデルファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>共有フォルダ¥jp1base¥conf¥jbshc¥jbshc_setup.conf.model</li> <li>Base_Path¥default¥jbshc_com.conf.model</li> </ul>
拡張起動プロセス定義ファイル	Base_Path¥conf¥jp1bs_service_0700.conf 共有フォルダ¥jp1base¥conf¥jp1bs_service_0700.conf
プラグインサービス要求転送設定ファイル プラグイン用フォルダ	<ul style="list-style-type: none"> <li>Base_Path¥conf¥plugin¥reqforward.conf</li> <li>共有フォルダ¥jp1base¥conf¥plugin¥reqforward.conf</li> <li>Base_Path¥plugin¥</li> </ul>
ログフォルダ	Base_Path¥log¥ 共有フォルダ¥jp1base¥log¥
プロセス管理ログファイル	Base_Path¥log¥JBS_SPMD{1 2 3}.log Base_Path¥log¥JBS_SPMD_COMMAND{1 2 3}.log Base_Path¥log¥JBS_SERVICE{1 2 3}.log 共有フォルダ¥jp1base¥log¥JBS_SPMD{1 2 3}.log 共有フォルダ¥jp1base¥log¥JBS_SPMD_COMMAND{1 2 3}.log 共有フォルダ¥jp1base¥log¥JBS_SERVICE{1 2 3}.log
認証サーバログファイル	Base_Path¥log¥jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※10</sup> %ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※11※12</sup> Base_Path¥log¥jbsessionCMD.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log Base_Path¥log¥jbsessionmgr{1 2 3 4 5 6 7 8}.log Base_Path¥log¥jbsessionmgr_trace{1 2 3 4 5 6 7 8}.log 共有フォルダ¥jp1base¥log¥jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※10</sup> %ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥論理ホスト名¥JP1Base¥log¥jbsessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※11※12</sup> 共有フォルダ¥jp1base¥log¥jbsessionCMD.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log 共有フォルダ¥jp1base¥log¥jbsessionmgr{1 2 3 4 5 6 7 8}.log 共有フォルダ¥jp1base¥log¥jbsessionmgr_trace{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
認証サーバ設定コマンドログファイル	Base_Path¥log¥JBSSESS{1 2 3 4 5 6 7 8}.log 共有フォルダ¥jp1base¥log¥JBSSESS{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
環境設定プログラムログファイル	Base_Path¥log¥jp1bssetup{1 2}.log 共有フォルダ¥jp1base¥log¥jp1bssetup{1 2}.log
論理ホスト設定プログラムログファイル	Base_Path¥log¥jp1hasetup.{log log.old}
SNMPトラップ変換機能ログファイル (監視情報)	Base_Path¥log¥imevtgw.log{1 2 3}.log
SNMPトラップ変換機能ログファイル (定義情報)	Base_Path¥log¥imevtgw.conf{1 2 3}.log
	Base_Path¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥jevdef_get.{000 001 002} <sup>※2</sup>

取得コマンド用トレース ログファイル	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥jevdef_get.{000 001 002}* <sup>2</sup>
イベント設定一元管理 配布コマンド用トレース ログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥jevdef_distrib.{000 001 002}* <sup>2</sup> <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥jevdef_distrib.{000 001 002}* <sup>2</sup>
コマンド実行履歴 (ISAM) 保存ファイル* <sup>4</sup>	<i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.DRF <i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.K01 <i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.KDF <i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.DRF <i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.K01 <i>Base_Path</i> ¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.KDF <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.DRF <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.K01 <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥ACTISAMLOGV8.KDF <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.DRF <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.K01 <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥COMMAND¥CMDISAMLOGV8.KDF
共通定義情報ログファイ ル	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBSCNFCMD¥JBSCNFCMD{1 2}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JBSCNFCMD¥JBSCNFCMD{1 2}.log
jp1hosts 情報コマンドロ グファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBSCNFCMD¥JBSCOMMCMD{1 2}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JBSCNFCMD¥JBSCOMMCMD{1 2}.log
ユーザーマッピングコマ ンドログファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥JBSUMAPCMD¥JBSUMAPCMD{1 2}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JBSUMAPCMD¥JBSUMAPCMD{1 2}.log
リモートコマンドログファ イル* <sup>4</sup>	<i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmd_result{1 2 3}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmdapi{1 2 3}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmdapi_trace{1 2 3}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmdcom{1 2 3}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmdcom_trace{1 2 3}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmdexe{1 2 3}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmdexe_trace1.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmdrouter{1 2 3}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥jcocmdrouter_trace{1 2 3}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥JCOCMD¥JCOCMDCMD{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmd_result{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmdapi{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmdapi_trace{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmdcom{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmdcom_trace{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmdexe{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmdexe_trace1.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmdrouter{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥jcocmdrouter_trace{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥JCOCMD¥JCOCMDCMD{1 2 3}.log
プラグインサービスログ ファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbsplugin{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbsplugincom_{0 1 2 3 4 5 6 7 8 9}* <sup>6</sup> _{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbsplugincmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbspluginmgrapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log* <sup>10</sup> <i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log* <sup>10</sup> <i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbsplugincmdapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbspluginhchsm{1 2 3 4 5 6 7 8}.log

	<i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbsrmtcmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※10</sup>
	<i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbspluginremotecmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
	<i>Base_Path</i> ¥log¥plugin¥jbsrmtapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※10</sup>
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥plugin¥jbspluginmgrapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※11※12</sup>
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥plugin¥jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※11※12</sup>
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥plugin¥jbsrmtcmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※11※12</sup>
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥plugin¥jbsrmtapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※11※12</sup>
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugin{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugincom_{0 1 2 3 4 5 6 7 8 9} <sup>※6</sup> _1 2 3 4 5 6 7 8}.log
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugincmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbspluginmgrapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※10</sup>
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※10</sup>
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥ <b>論理ホスト名</b> ¥JP1Base¥log¥jbspluginmgrapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※11※12</sup>
	%ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥ <b>論理ホスト名</b> ¥JP1Base¥log¥jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <sup>※11※12</sup>
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbsplugincmdapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbspluginhcshm{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
	<b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥plugin¥jbspluginremotecmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
構成管理ログファイル <sup>※4</sup>	<i>Base_Path</i> ¥log¥route¥JBSRT{1 2 3}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥route¥JBSRT{1 2 3}.log
構成定義ファイル	<i>Base_Path</i> ¥conf¥route¥jbs_route.conf <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥conf¥route¥jbs_route.conf
起動順序制御ログファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥boot¥ContServ{1 2}.log
イベントログトラップ機能 トレースログファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥ntevtrap¥trace{1 2}.log
ヘルスチェック機能ログ ファイル(自ホスト監視)	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ヘルスチェック機能ログ ファイル(他ホスト監視)	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ヘルスチェックコマンドロ グファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshcstatus{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshcstatus{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ヘルスチェック API 用ロ グファイル	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshcapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshcapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ヘルスチェック共有メモ リー削除コマンドログファ イル	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbshc¥jbshcshmctl{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥log¥jbshc¥jbshcshmctl{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ログおよびテンポラリー フォルダ	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers <sup>※2</sup>
イベント転送トレースログ ファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥trace.{000 001 002 003 004} <sup>※2※5</sup> <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥trace.{000 001 002 003 004} <sup>※2※5</sup>
	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥imevterr.{000 001 002 003 004} <sup>※2※5</sup> <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥imevterr.{000 001 002 003 004} <sup>※2※5</sup>

イベントサービストレース ログファイル	
イベントサービスエラー ログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥error.{000 001 002 003 004}*2*5 <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥error.{000 001 002 003 004}*2*5
イベントサービス API 用 ログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥IMEvapi.{000 001 002 003 004}*7*10 %ALLUSERSPROFILE%¥Hitachi¥JP1¥jp1_default¥JP1Base¥log¥event¥IMEvapi.{000 001 002 003 004}*7*12*13
JP1/AJS 互換用定義フ ァイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥ajses.def
JP1/AJS 互換用イベント ID 保存ファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥ereb.backup*2 <b>共有フォルダ</b> ¥jp1base¥event¥ereb.backup*2
JP1/AJS 互換用ソケット 通信コネクションログフ ァイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥evtrace.dir¥{ajevconn.csv ajevconn.bak}*2
JP1/AJS 互換用 JP1/SES 互換形式イベ ント送受信ログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥servers¥default¥evtrace.dir¥{ajevtrap.csv ajevtrap.bak}*2
ログファイルトラップ機能 エラーログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥logtrap¥.errorfile.ID 番号
ログファイルトラップ機能 ログファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥logtrap¥jevtraplog¥jevtraplog.{000 001 002 003 004}*8
ログファイルトラップ機能 内部動作ファイル	<i>Base_Path</i> ¥sys¥tmp¥event¥logtrap¥conf.tl.ID 番号
アプリケーションエラーロ グ	<i>Base_Path</i> ¥log¥jbsdump.log
インストールログファイル	<b>Windows のインストール先フォルダ</b> ¥Temp¥HITACHI_JP1_INST_LOG¥jp1base_inst{1 2 3 4 5}.log
統合トレースログフォル ダ	<i>SystemDrive</i> ¥Program Files¥Hitachi¥HNTRLlib2¥spool¥
readme	<i>Base_Path</i> ¥readme.txt
操作ログ出力機能 操作ログファイル 操作ログ設定モデルファ イル 操作ログ定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>Base_Path</i>¥log¥BASE¥base_log[{1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16}].log*9</li> <li>• <i>Base_Path</i>¥conf¥jp1bs_base_log_setup.conf.model</li> <li>• <i>Base_Path</i>¥conf¥jp1bs_base_log_setup.conf</li> </ul>

注※1 これらのファイルは使用されません。

注※2 イベントサーバインデックスファイル (index) で別パスを指定した場合は、異なるフォルダに格納されます。

注※3 定義情報の配布機能を使用していない場合には存在しません。

注※4 JP1/IM - Manager 用のログファイルです。

注※5 これらのログファイル数は、イベントサーバ設定ファイル (conf) で変更できます。

注※6 jbsplugincom プロセス識別番号を示します。

注※7 これらのログファイル数は、API 設定ファイル (api) で変更できます。

注※8 これらのログファイル数は、ログ情報定義ファイル(jevlogd.conf)で変更できます。

注※9 ログファイル数は、操作ログ定義ファイル(jp1bs\_base\_log\_setup.conf)で変更できます。

注※10 Windows 2000, Windows XP Professional および Windows Server 2003 の場合。

注※11 インストール時の環境変数「%ALLUSERSPROFILE%」に設定されている値になります。

注※12 Windows Vista 限定。

注※13 実行時の環境変数「%ALLUSERSPROFILE%」に設定されている値になります。



## (2) UNIX の場合

表 A-2 JP1/Base のファイルおよびディレクトリ一覧(UNIX の場合)

内容	ファイル名・ディレクトリ名
コマンド格納ディレクトリ	/opt/jp1base/bin/
ツール関連ディレクトリ	/opt/jp1base/tools/
資料採取ツールサンプルスクリプトファイル	/opt/jp1base/tools/jbs_log.sh
JP1/IM 関数サンプルソースファイル	/opt/jp1base/tools/event/receiver.cpp
	/opt/jp1base/tools/event/sender.cpp
JP1/IM 関数 ヘッダーファイル	/opt/jp1base/include/JevApi.h
AR System 連携用サンプルスクリプトファイル	/opt/jp1base/tools/helpdesk/register_ars.sh
環境設定ディレクトリ	/etc/opt/jp1base/conf/
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/
イベントサービス イベントサーバインデックスファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/event/index</li> </ul>
イベントサーバ設定ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/event/servers/default/conf<sup>※2</sup></li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/event/conf<sup>※2</sup></li> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/event/servers/default/forward<sup>※2</sup></li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/event/forward<sup>※2</sup></li> </ul>
転送設定ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/event/api</li> </ul>
API 設定ファイル	
jp1hosts 定義ファイル	/etc/opt/jp1base/conf/jp1hosts
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/jp1hosts
通信方式設定ファイル	/etc/opt/jp1base/conf/physical_ipany.conf
	/etc/opt/jp1base/conf/logical_ipany.conf
	/etc/opt/jp1base/conf/physical_recovery_0651.conf
	/etc/opt/jp1base/conf/logical_recovery_0651.conf
	/etc/opt/jp1base/conf/physical_anyany.conf
	/etc/opt/jp1base/conf/physical_ipip.conf
	/etc/opt/jp1base/conf/logical_ipip.conf
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/physical_ipany.conf
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/logical_ipany.conf
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/physical_recovery_0651.conf
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/logical_recovery_0651.conf
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/physical_anyany.conf
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/physical_ipip.conf	
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/logical_ipip.conf	
イベントデータベース格納ディレクトリ	/var/opt/jp1base/sys/event/servers/ <sup>※2</sup>
	<b>共有ディレクトリ</b> /event/ <sup>※2</sup>
イベント変換機能 ログファイルトラップ変換用動作定義ファイル ログ情報定義ファイル SNMP トラップ変換用フィルターファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 任意のファイルおよび任意のディレクトリを指定できます。</li> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/event/jevlogd.conf</li> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/evtgw/imevtgw.conf および /etc/opt/jp1base/conf/evtgw/snmpfilter.conf</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/conf/evtgw/imevtgw.conf<sup>※1</sup> および <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/evtgw/snmpfilter.conf<sup>※1</sup></li> </ul>
イベントサービスの定義 情報の収集・配布機能 配布定義ファイル(転送設定ファイル用) 配布定義ファイル(ログファイルトラップ機能の動作定義ファイル用)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/event/servers/default/[jev_forward.conf   <b>任意のファイル</b>]<sup>※3</sup></li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/event/[jev_forward.conf   <b>任意のファイル</b>]<sup>※3</sup></li> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/[jev_logtrap.conf   <b>任意のファイル</b>]<sup>※3</sup></li> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/event/[jev_ntevent.conf   <b>任意のファイル</b>]<sup>※3</sup></li> </ul>

配布定義ファイル(イベントログトラップの動作定義ファイル用)	
ユーザー管理機能 ユーザー権限レベルファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/user_acl/JP1_UserLevel</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/conf/user_acl/JP1_UserLevel</li> </ul>
マッピング定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/user_acl/jp1BsUmap.conf</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/conf/user_acl/jp1BsUmap.conf</li> </ul>
ヘルスチェック機能 ヘルスチェック定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/jbshc/jbshc.conf</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/conf/jbshc/jbshc.conf</li> </ul>
共通定義設定用ファイルのモデルファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/jbshc_setup.conf.model</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/conf/jbshc_setup.conf.model</li> </ul>
共通定義設定用ファイル(07-10 以前からのバージョンアップ用)のモデルファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/default/jbshc_com.conf.model</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/default/jbshc_com.conf.model</li> </ul>
JP1/Base パラメーター定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/jp1bs_param_V7.conf</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/conf/jp1bs_param_V7.conf</li> </ul>
拡張起動プロセス定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/jp1bs_service_0700.conf</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/conf/jp1bs_service_0700.conf</li> </ul>
プラグインサービス 要求転送設定ファイル プラグイン用フォルダ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/plugin/reqforward.conf</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/conf/plugin/reqforward.conf</li> <li>• /opt/jp1base/plugin/</li> </ul>
ログディレクトリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /var/opt/jp1base/log/</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/</li> </ul>
JP1/Base 起動時ログファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /var/opt/jp1base/log/JBS_START/jbs_start.log[.old]</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/JBS_START/jbs_start.log[.old]</li> </ul>
JP1/Base 終了時ログファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /var/opt/jp1base/log/JBS_STOP/jbs_stop.log[.old]</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/JBS_STOP/jbs_stop.log[.old]</li> </ul>
プロセス管理ログファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /var/opt/jp1base/log/JBS_SPMD{1 2 3}.log</li> <li>• /var/opt/jp1base/log/JBS_SPMD_COMMAND{1 2 3}.log</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/JBS_SPMD{1 2 3}.log</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/JBS_SPMD_COMMAND{1 2 3}.log</li> </ul>
認証サーバログファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /var/opt/jp1base/log/jbssessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> <li>• /var/opt/jp1base/log/jbssessionCmd.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> <li>• /var/opt/jp1base/log/jbssessionmgr{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> <li>• /var/opt/jp1base/log/jbssessionmgr_trace{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/jbssessionapi.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/jbssessionCmd.log{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/jbssessionmgr{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/jbssessionmgr_trace{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> </ul>
認証サーバ設定コマンドログファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /var/opt/jp1base/log/JBSSESS{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/JBSSESS{1 2 3 4 5 6 7 8}.log</li> </ul>
SNMP トラップ変換機能 ログファイル(監視情報)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /var/opt/jp1base/log/imevtgw.log{1 2 3}.log</li> <li>• <b>共有ディレクトリ</b>/jp1base/log/imevtgw.conf{1 2 3}.log</li> </ul>

SNMP トラップ変換機能 ログファイル(定義情報)	
イベント設定一元管理 取得コマンド用トレース ログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/jevdef_get.{000 001 002}**2 <b>共有ディレクトリ</b> /event/jevdef_get.{000 001 002}**2
イベント設定一元管理 配布コマンド用トレース ログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/jevdef_distrib.{000 001 002}**2 <b>共有ディレクトリ</b> /event/jevdef_distrib.{000 001 002}**2
コマンド実行履歴 (ISAM)保存ファイル**4	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.DAT
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.K01
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.DEF
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.DAT
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.K01
	/var/opt/jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.DEF
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.DAT
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.K01
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/actisamlogv8.DEF	
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.DAT	
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.K01	
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/COMMAND/cmdisamlogv8.DEF	
共通定義情報ログファイ ル	/var/opt/jp1base/log/JBSCNFCMD/JBSCNFCMD{1 2}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBSCNFCMD/JBSCNFCMD{1 2}.log
jp1hosts 情報コマンドロ グファイル	/etc/opt/jp1base/log/JBSCNFCMD/JBSCOMMCMD{1 2}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBSCNFCMD/JBSCOMMCMD{1 2}.log
ユーザーマッピングコマ ンドログファイル	/var/opt/jp1base/log/JBSUMAPCMD/JBSUMAPCMD{1 2}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JBSUMAPCMD/JBSUMAPCMD{1 2}.log
リモートコマンドログファ イル**4	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmd_result{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdapi{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdapi_trace{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcmc{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcmc_trace{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcom{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcom_trace{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdexe{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdexe_trace1.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdrouter{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/jcocmdrouter_trace{1 2 3}.log
	/var/opt/jp1base/log/JCOCMD/JCOCMDCMD{1 2 3}.log
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmd_result{1 2 3}.log
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdapi{1 2 3}.log
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdapi_trace{1 2 3}.log
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcmc{1 2 3}.log
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcmc_trace{1 2 3}.log
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcom{1 2 3}.log
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdcom_trace{1 2 3}.log
	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdexe{1 2 3}.log
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdexe_trace1.log	
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdrouter{1 2 3}.log	
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/jcocmdrouter_trace{1 2 3}.log	
<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/JCOCMD/JCOCMDCMD{1 2 3}.log	
プラグインサービスログ	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugin{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugincom_{0 1 2 3 4 5 6 7 8 9}**7_{1 2 3 4 5 6 7 8}.log

ファイル	/var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugincmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log /var/opt/jp1base/log/plugin/jbspluginmgrapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log /var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log /var/opt/jp1base/log/plugin/jbsplugincmdapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log /var/opt/jp1base/log/plugin/jbspluginhcshtm{1 2 3 4 5 6 7 8}.log /var/opt/jp1base/log/plugin/jbsrmtcmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log /var/opt/jp1base/log/plugin/jbspluginremotecmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log /var/opt/jp1base/log/plugin/jbsrmtapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/plugin/jbsplugin{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/plugin/jbsplugincom_{0 1 2 3 4 5 6 7 8 9}*7_{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/plugin/jbsplugincmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/plugin/jbspluginmgrapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/plugin/jbsplugincomapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/plugin/jbsplugincmdapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/plugin/jbspluginhcshtm{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/plugin/jbspluginremotecmd{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
インストール時のログファイル	/tmp/HITACHI_JP1_INST_LOG/jp1base_inst{1 2 3 4 5}.log
セットアップ時のログファイル	/var/opt/jp1base/log/JBS_SETUP/jbs_setup.log
構成管理ログファイル※4	/var/opt/jp1base/log/route/JBSRT{1 2 3}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/route/JBSRT{1 2 3}.log
構成定義ファイル	/etc/opt/jp1base/conf/route/jbs_route.conf <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/conf/route/jbs_route.conf
ヘルスチェック機能ログファイル(自ホスト監視)	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ヘルスチェック機能ログファイル(他ホスト監視)	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshc{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ヘルスチェックコマンドログファイル	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshcstatus{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshcstatus{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ヘルスチェック API 用ログファイル	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshcapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshcapi{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ヘルスチェック共有メモリー削除コマンドログファイル	/var/opt/jp1base/log/jbshc/jbshcshmct{1 2 3 4 5 6 7 8}.log <b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/jbshc/jbshcshmct{1 2 3 4 5 6 7 8}.log
ログおよびテンポラリディレクトリ	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/※2
イベント転送トレースログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/trace.{000 001 002 003 004}※2※5 /var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/imses.{log old}※2 <b>共有ディレクトリ</b> /event/trace.{000 001 002 003 004}※2※5 <b>共有ディレクトリ</b> /event/imses.{log old}※2
イベントサービストレースログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/imevterr.{000 001 002 003 004}※2※5 <b>共有ディレクトリ</b> /event/imevterr.{000 001 002 003 004}※2※5
イベントサービスエラーログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/error.{000 001 002 003 004}※2※5 <b>共有ディレクトリ</b> /event/error.{000 001 002 003 004}※2※5
イベントサービス API 用	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/IMEvapi.{000 001 002 003 004}※8

ログファイル	
JP1/SES 互換用イベントID 保存ファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/ereb.backup <sup>※2</sup>
JP1/SES 互換用定義ファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/jpevent.conf
JP1/SES 互換プロセスの起動に関するログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/result.txt
イベント登録/受信プロセスからイベントサービスへの接続時に発生したエラー情報ファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/refuse.txt <b>共有ディレクトリ</b> /event/refuse.txt
イベント登録/受信プロセスによるイベントサービスとの通信で発生したエラー情報ファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/sock.log <b>共有ディレクトリ</b> /event/sock.log
ログファイルトラップ機能エラーログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/logtrap/errorfile. <b>ID 番号</b>
ログファイルトラップ機能ログファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/logtrap/jevtraplog/jevtraplog.{000 001 002 003 004} <sup>※9</sup>
ログファイルトラップ機能内部動作ファイル	/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/logtrap/conftbl. <b>ID 番号</b>
JP1/SES 互換用ディレクトリ	/usr/bin/jp1_ses/, /usr/lib/jp1_ses/および/usr/lib/jp1_ses/sys/
JP1/SES 互換用テンポラリーディレクトリ	/usr/tmp/jp1_ses/
JP1/SES 互換用メッセージカタログディレクトリ	/usr/lib/jp1_ses/nls/
JP1/SES 互換用ログディレクトリ	/usr/lib/jp1_ses/log/および/tmp/ <b>(JP1_SES で始まるファイル)</b>
ローカルサーバエラーログファイル	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_dmain.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_dmain.log (HP-UX の場合)
マネージャーログファイル	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_MNG.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_MNG.log (HP-UX の場合)
受信プロセスエラーログファイル	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_RVC.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_RVC.log (HP-UX の場合)
受信プロセスマネージャーエラーログファイル	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_RVM.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_RVM.log (HP-UX の場合)
送信プロセスエラーログファイル	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_SND.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_SND.log (HP-UX の場合)
監視プロセスエラーログファイル	/usr/lib/jp1_ses/log/.JP1_SES_WAC.log (HP-UX 以外) /var/opt/jp1_ses/log/.JP1_SES_WAC.log (HP-UX の場合)
開始コマンドエラーログファイル	/tmp/.JP1_SES_startlog <b>プロセス ID</b>
停止コマンドエラーログファイル	/tmp/.JP1_SES_stoperr <b>プロセス ID</b>
統合トレースログディレクトリ	/var/opt/hitachi/HNTRLlib2/spool/
jbs_killall.cluster コマンドトレースログファイル <sup>※6</sup>	<b>共有ディレクトリ</b> /jp1base/log/ jbs_killall.cluster[.1 2 3 4].log
操作ログ出力機能 操作ログファイル 操作ログ設定モデルファイル 操作ログ定義ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• /var/opt/jp1base/log/BASE/base_log[1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16].log<sup>※10</sup></li> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/jp1bs_base_log_setup.conf.model</li> <li>• /etc/opt/jp1base/conf/jp1bs_base_log_setup.conf</li> </ul>

注※1 これらのファイルは使用されません。

注※2 イベントサーバインデックスファイル (index) で別パスを指定した場合は、異なるディレクトリに格納されます。

注※3 定義情報の配布機能を使用していない場合には存在しません。

注※4 JP1/IM - Manager 用のログファイルです。

注※5 これらのログファイル数は、イベントサーバ設定ファイル (conf) で変更できます。

注※6 クラスタ運用時に `jbs_killall.cluster` コマンドを実行すると出力されるログファイルです。

注※7 `jbsplugincom` プロセス識別番号を示します。

注※8 これらのログファイル数は、API 設定ファイル (api) で変更できます。

注※9 これらのログファイル数は、ログ情報定義ファイル (jevlogd.conf) で変更できます。

注※10 ログファイル数は、操作ログ定義ファイル (jp1bs\_baselog\_setup.conf) で変更できます。

## 付録B プロセス一覧

JP1/Base のプロセスを次に示します。

### 付録B.1 Windows の場合

Windows のタスク マネージャを使って、プロセスの動作状態を確認してください。正常に動作している場合に表示されるプロセスを次に示します。なお、表内の( )内の数値は同時に実行できるプロセス数です。

親プロセス名	機能	子プロセス名	機能
hntr2srv.exe(1)	統合トレース 起動用	—	—
hntr2mon.exe(1)	統合トレース	—	—
jbs_service.exe(1)	JP1/Base プロ セス管理起動 用	—	—
jbs_spmd.exe(1)	JP1/Base プロ セス管理 <sup>※1</sup>	jbsessionmgr.exe(1) <sup>※2※3</sup>	認証サーバ <sup>※1※5</sup> 認証サーバとして設定したホ スト上にだけ存在する。 jbs_spmd_status コマンドを実 行した場合の表示名は jbsessionmgr となる。
		jbsroute.exe(1) <sup>※2</sup>	構成管理 <sup>※1※5</sup> jbs_spmd_status コマンドを実 行した場合の表示名は jbsroute となる。
		jcocmd.exe(1) <sup>※2</sup> jcocmdexe.exe(1) jcocmdapi.exe(コマンド実行画面数 <sup>※4</sup> +1 (JP1/IM - Manager がインストールされ ている場合))	コマンド実行 <sup>※1※5</sup> jbs_spmd_status コマンドを実 行した場合の表示名は jcocmd となる。
		jbsplugind.exe(1) <sup>※2</sup>	プラグインサービス <sup>※1※5</sup> jbs_spmd_status コマンドを実 行した場合の表示名は jbsplugin となる。
		jbshcd.exe(1)	ヘルスチェック(自ホスト監視 用) <sup>※1※5</sup> jbs_spmd_status コマンドを実 行した場合の表示名は jbshcd となる。
		jbshchostd.exe(1)	ヘルスチェック(他ホスト監視 用) <sup>※1※5</sup> jbs_spmd_status コマンドを実 行した場合の表示名は jbshchostd となる。
jbapmsrvcecon.exe(1) <sup>※3</sup>	起動管理	powendar.exe(1)	電源制御 JP1/Power Monitor がインス トールされていると、この子プ ロセスが生成される。
jevservice.exe(1)	イベントサー ビス <sup>※1※6</sup>	jevsssvc.exe(1)	イベントサービス このプロセスは物理ホストで だけ生成される。 <sup>※6</sup>
jevtraplog.exe(1)	ログファイ ルト ラップ	—	ログファイルトラップ ログファイルトラップ機能を使 用した場合だけ生成される。
jevtrapevt.exe(1)	イベントロ グ トラップ	—	イベントログトラップ イベントログトラップ機能を使 用した場合だけ生成される。
imevtgw.exe(1)	SNMP トラップ 変換	—	SNMP トラップ 変換 SNMP トラップ 変換機能を使

(凡例)

－:なし

注※1 クラスタシステムで複数の論理ホストが一つの物理ホスト上で動作する場合、または一つの論理ホストと物理ホストが同時に起動される場合は、上記のプロセスの同時に実行できるプロセス数の上限は、(論理ホスト数+1)となります。

注※2 これらのプロセスは、JP1/Base の基盤となる重要なプロセスです。JP1/Base では、これらのプロセスの異常終了時に備えて、異常終了時に自動で再起動する機能と、プロセスの異常を検知した場合に JP1 イベントを発行する機能を提供しています。プロセス停止による業務への影響を最小限にするために、あらかじめ設定しておくことをお勧めします。設定方法については、「[2.4.3 JP1/Base の障害に備えた設定](#)」を参照してください。

注※3 タスクマネージャ上ではプロセス名称の途中までしか表示されません。

注※4 接続している JP1/IM - View がコマンド実行画面を開いている数のことです。開いている画面数だけプロセス数が増えます。コマンド実行画面を閉じると、閉じた分だけプロセスは消滅します。

注※5 これらのプロセスの状態は、jbs\_spmc\_status コマンドで確認できます。jbs\_spmc\_status コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。

- 認証サーバが設定されている場合  
jbsessionmgr  
jbsroute  
jcocmd  
jbsplugin  
jbshcd  
jbshchostd
- 認証サーバが設定されていない場合  
jbsroute  
jcocmd  
jbsplugin  
jbshcd  
jbshchostd

注※6 これらのプロセスの状態は、jevstat コマンドで確認できます。jevstat コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。

jevservice



## 付録 B.2 UNIX の場合

UNIX の ps コマンドを使ってプロセスの動作状態を確認してください。正常に動作している場合に表示されるプロセスを次に示します。なお、表内の( )内の数値は同時に実行できるプロセス数です。

親プロセス名	機能	子プロセス名	機能
hntr2mon(1)	統合トレース	—	—
jbs_spmd(1)	プロセス管理※1	jbsessionmgr(1)※2	認証サーバ※1※5 認証サーバとして設定したホスト上にだけ存在する。 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsessionmgr となる。
		jbsroute(1~9)※2	構成管理※1※5 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsroute となる。
		jcocmd(1)※2 jcocmdexe(1) jcocmdapi(コマンド実行画面数※3+1 (JP1/IM - Manager がインストールされている場合)) jcocmdcmc(0~コマンド数※4) jcocmdcom(1)※10	コマンド実行※1※5 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jcocmd となる。
		jbsplugind(1)※2※7	プラグインサービス※1※5 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbsplugin となる。
		jbshcd(1)	ヘルスチェック(自ホスト監視用)※1※5 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbshcd となる。
		jbshchostd(1)	ヘルスチェック(他ホスト監視用)※1※5 jbs_spmd_status コマンドを実行した場合の表示名は jbshchostd となる。
		jevservice(1)	イベントサービス※1※6
jesdmain(1)※8※9	JP1/SES 互換用※6 このプロセスは物理ホストでだけ生成される。		
jesrd(6~9,999)※9	JP1/SES 互換用※6 このプロセスは物理ホストでだけ生成される。		
jevlogd(1)	ログファイルトラップ管理デーモン	jelparentim (0~jevlogstart コマンド実行数)	ログファイルトラップ jelparentim 一つにつき、監視するファイル数分 jelchildim プロセスが生成される。なお、jevlogstop コマンドを実行すれば、jelparentim プロセスは消滅する。
imevtgw(1)	SNMP トラップ変換	—	SNMP トラップ変換 SNMP トラップ変換機能を使用する場合だけ生成される。

(凡例)

—:なし

注※1 クラスタシステムで複数の論理ホストが一つの物理ホスト上で動作する場合、または一つの論理ホストと物理ホストが同時に起動される場合は、上記のプロセスの同時に実行できるプロセス数の上限は、(論理ホスト数+1)となります。

注※2 これらのプロセスは、JP1/Base の基盤となる重要なプロセスです。JP1/Base では、これらのプロセスの異常終了時に備えて、異常終了時に自動で再起動する機能と、プロセスの異常を検知した場合に JP1 イベントを発行する機能を提供しています。プロセス停止による業務への影響を最小限にするために、あらかじめ設定しておくことをお勧めします。設定方法については、「[2.4.3 JP1/Base の障害に備えた設定](#)」を参照してください。

注※3 接続している JP1/IM - View がコマンド実行画面を開いている数のことです。開いている画面数だけプロセス数が増えます。コマンド実行画面を閉じると、閉じた分だけプロセスは消滅します。

注※4 JP1/IM によるリモートコマンドや自動アクションの実行数のことです。コマンド一つにつき、プロセスが一つ生成されます。処理が完了すると、プロセスは消滅します。なお、コマンドを連続して実行した場合、複数のプロセスが生成されることがあります。

注※5 これらのプロセスの状態は、`jbs_spmc_status` コマンドで確認できます。`jbs_spmc_status` コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。

- 認証サーバが設定されている場合  
    `jbsessionmgr`  
    `jbsroute`  
    `jcocmd`  
    `jbsplugin`  
    `jbshcd`  
    `jbshchostd`
- 認証サーバが設定されていない場合  
    `jbsroute`  
    `jcocmd`  
    `jbsplugin`  
    `jbshcd`  
    `jbshchostd`

注※6 これらのプロセスの状態は、`jevstat` コマンドで確認できます。`jevstat` コマンドを実行して正常にプロセスが動作しているときの表示を次に示します。

`jevservice`

注※7 `ps -el` コマンドで表示されるプロセス名は、「`jbsplugin`」となります。

注※8 `ps` コマンドで表示されるプロセス名は、`/var/opt/jp1base/sys/tmp/event/servers/default/jpevent.conf` となります。

注※9 `jevservice` から起動されますが、プロセスの間に親子関係はありません。

注※10 07-51 で追加になったプロセスです。

注※11 イベントサーバ環境設定ファイル(`conf`)で、`options` パラメーターに、`v5-unused` を指定している場合は(5~9,999)、`v5-unused` を指定していない場合は(6~9,999)となります。

## 付録 C ポート番号一覧

JP1/Base で使用するポート番号について説明します。使用するプロトコルは TCP/IP です。JP1/SES 互換用を除く各ポート番号は、製品の提供時にデフォルトとして設定されています。

### 付録 C.1 JP1/Base のポート番号

JP1/Base で使用するポート番号を次の表に示します。

表 C-1 JP1/Base で使用するポート番号

サービス名	ポート番号	用途
jp1imevt	20098/tcp	JP1 イベントを他ホストに転送するときに使用
jp1imevtapi	20099/tcp	JP1 イベントを登録・取得するすべての製品、および JP1 イベント発行関数・JP1 イベント取得関数で使用
jp1imrt	20237/tcp	構成管理で使用 (JP1/IM - Manager 使用時)
jp1imcmnda	20238/tcp	コマンド実行で使用 (JP1/IM - Manager 使用時)
jp1imcmcdc	20239/tcp	コマンド実行で使用 (JP1/IM - Manager 使用時)
jp1bsuser	20240/tcp	ユーザー認証サーバで使用
JP1AutoJob <sup>※1</sup> (Windows の場合) jesrd <sup>※1</sup> (UNIX の場合)	<b>ユーザー任意</b> /tcp	JP1/SES プロトコル利用製品とのイベントの送受信で使用
jp1bsplugin	20306/tcp	JP1/IM 用定義情報の収集・配布時、および JP1/Base のヘルスチェック機能で使用
ldap	389/tcp <sup>※2</sup>	ディレクトリサーバ連携で使用
ldaps	636/tcp <sup>※2</sup>	

注※1 JP1/SES 互換用です。これらのサービスは、JP1/Base をインストールしても、services ファイルに設定されません。バージョン 5 以前の製品 JP1/SES、JP1/AJS および JP1/SES のプロトコルを利用した製品 (JP1/OJE など) とイベントの送受信をしたい場合は、services ファイルに設定してください。

注※2 JP1/Base (認証サーバ) とディレクトリサーバ間の通信で SSL を利用するかどうかで使用するポート番号は変わります。SSL を利用する場合は、636/tcp を使用します。

## 付録 C.2 ファイアウォールの通過方向

ファイアウォールの通過方向を次の表に示します。なお、JP1/Base は、パケットフィルタリング型、NAT(スタティックモード)型のアドレス変換をサポートしています。

表 C-2 ファイアウォールの通過方向

サービス名	ポート番号	ファイアウォールの通過方向
jp1imevt	20098/tcp	JP1 イベント転送元の JP1/Base → JP1 イベント転送先の JP1/Base
jp1imevtapi	20099/tcp	JP1/IM - Manager などの JP1 イベントを取得するプログラム → JP1/Base
jp1imrt	20237/tcp	JP1/IM - Manager → JP1/Base 上位 JP1/IM - Manager → 下位 JP1/IM - Manager
jp1imcnda	20238/tcp	JP1/IM - View → JP1/Base JP1/IM - Manager → JP1/Base
jp1imcmcdc	20239/tcp	JP1/IM - Manager が導入されているホストの JP1/Base → コマンド実行先ホストの JP1/Base
jp1bsuser	20240/tcp	JP1/IM - Manager → JP1/Base JP1/AJS2 - Manager → JP1/Base JP1/AJS2 - Agent → JP1/Base
JP1AutoJob (Windows の場合) jesrd (UNIX の場合)	ユーザー任意 /tcp	JP1/Base ↔ JP1/SES プロトコル利用製品
jp1bsplugin	20306/tcp	JP1/IM - Manager などのサービスを使用する上位プログラム → JP1/Base JP1/Base のヘルスチェック機能を使用する場合 監視ホストの JP1/Base → 監視対象ホストの JP1/Base
ldap	389/tcp※	JP1/Base (認証サーバ) → ディレクトリサーバ
ldaps	636/tcp※	

(凡例)

→:コネクション確立時、左項から右項への片方向で接続することを表す。

↔:コネクション確立時、両方向で相互接続することを表す。

注※ JP1/Base (認証サーバ)とディレクトリサーバ間の通信で SSL を利用するかどうかで使用するポート番号は変わります。SSL を利用する場合は、636/tcp を使用します。

表 C-2 のポート番号を利用してコネクションを確立したい場合は、ファイアウォールの設定で「サービス名のポート」と「サービス名のポート番号に対して確立されたセッションへの返信は ANY」を必ず通すようにしてください。返信が「ANY」となるのは、OS による自動採番のためです。

ファイアウォールサーバマシン上に JP1/Base をインストールする場合は、同一マシン内での通信もファイアウォールの対象となる場合がありますので、同一マシン内でも通信できるように設定してください。

### 付録 C.3 コネクションの接続状態

各ポート番号のコネクションの接続状態を次の表に示します。

表 C-3 コネクションの接続状態

サービス名	ポート番号	コネクションの接続状態
jp1imevt	20098/tcp	イベントサーバ設定ファイル (conf) の remote-server パラメーターに keep-alive を設定している場合、一定期間コネクションを維持します。強制的にコネクションが切断される場合には、パラメーターに close を設定してください。
jp1imevtapi	20099/tcp	API 設定ファイル (api) の server パラメーターに keep-alive を設定している場合、一定期間コネクションを維持します。強制的にコネクションが切断される場合には、パラメーターに close を設定してください。
jp1imrt	20237/tcp	コネクションは必要なときだけ接続します。
jp1imcmda	20238/tcp	一定期間コネクションを維持します。強制的にコネクションが切断された場合、再度コマンド実行要求が必要です。
jp1imcmdc	20239/tcp	一定期間コネクションを維持します。強制的にコネクションが切断された場合でも、自動的に再接続されます。
jp1bsuser	20240/tcp	コネクションは必要なときだけ接続します。
JP1AutoJob (Windows の場合) jesrd (UNIX の場合)	<b>ユーザー任意</b> /tcp	コネクションは必要なときだけ接続します。
jp1bsplugin	20306/tcp	コネクションは必要なときだけ接続します。
ldap	389/tcp*	コネクションは必要なときだけ接続します。
ldaps	636/tcp*	

注※ JP1/Base (認証サーバ) とディレクトリサーバ間の通信で SSL を利用するかどうかで使用するポート番号は変わります。SSL を利用する場合は、636/tcp を使用します。

## 付録D 制限値一覧

JP1/Base の各種の制限値を次に示します。

表 D-1 制限値一覧

項目	制限値
イベントサービスの環境設定(イベントサーバ設定ファイル, 転送設定ファイルおよび配布定義ファイル)の1行の最大長	1,023 バイト
転送設定ファイルの一つのフィルターの全体の最大長	64 キロバイト
イベントサーバ名の最大長	255 バイト(ただし, Windows 版提供の jevregsvc コマンドで指定できる最大長は 240 バイト)
JP1 ユーザー名	1~31 バイト
JP1 ユーザー用パスワード	6~32 バイト
OS ユーザー名	1~64 バイト(ドメイン名を含む。ただし, OS によって最大長が異なる)
サーバホスト名の最大長	255 バイト
論理ホスト名の最大長	Windows の場合:196 バイト(推奨:63 バイト)* UNIX の場合:255 バイト(推奨:63 バイト)*
ユーザー権限レベルファイルの1行の最大長	4,096 バイト
ユーザーマッピング定義ファイルの1行の最大長	4,096 バイト
認証サーバに同時にログインできる JP1 ユーザー数	10,000 ユーザー
登録できる JP1 ユーザー数	3,000 ユーザー
ユーザー権限レベルファイルに登録できる JP1 ユーザー数	3,000 ユーザー
ヘルスチェック定義ファイルの1行の最大長	1,023 バイト

注※ JP1/Base の制限値は上記のとおりですが, クラスタソフトで上記制限値に対応していない場合があります。

JP1/Base で論理ホスト名を指定する場合は, クラスタソフトの制限値を超えないよう注意してください。実際の運用では, 63 バイト以内を推奨しています。

## 付録 E 性能と見積もり

JP1/Base のメモリー所要量およびディスク占有量について説明します。

### 付録 E.1 メモリー所要量

JP1/Base のメモリー所要量については、リリースノートを参照してください。

### 付録 E.2 ディスク占有量(Windows の場合)

Windows の場合の JP1/Base のディスク占有量については、リリースノートを参照してください。

## 付録 F 正規表現の文法

JP1 製品で正規表現を使用する場合は次に示す正規表現を利用できます。正規表現を使って検索する場合、検索条件は次の表記法に従って指定してください。

### 付録 F.1 デフォルトで使用できる正規表現

Windows の場合に、デフォルトで使用できる正規表現について説明します。UNIX では、OS 提供の正規表現が適用されるため、次に示す文法とは異なります。UNIX 上で使用できる正規表現については、各正規表現の文法(regex または regex)を参照してください。

#### (1) 通常文字

通常文字とは、正規表現としてその文字自体を検索対象に指定した場合に一致する文字です。通常文字として扱わないのは「改行文字」と「特殊文字」だけです。通常文字では、大小文字を区別します。

#### (2) 特殊文字

特殊文字とは、サーカムフレックス(^), ドル記号(\$), ピリオド(.), アスタリスク(\*), および円記号(¥)です。

それぞれの特殊文字について次に説明します。

^

^は、先頭指定(前方一致)を意味します。正規表現の最初の文字として使用する場合だけ特殊文字になります。先頭以外で使用する場合は通常文字として扱われます。

^を特殊文字として指定すると、行頭にある指定の文字列に一致します。

\$

\$は、末尾指定(後方一致)を意味します。正規表現の最後の文字として使用する場合だけ特殊文字になります。末尾以外で使用する場合は、通常文字として扱われます。

\$を特殊文字として指定すると、行末にある指定の文字列に一致します。なお、^と併用すると、指定した文字列だけの行に一致します。

.(ピリオド)

.(ピリオド)は、「改行文字」以外の任意の 1 文字であることを意味します。

.(ピリオド)を特殊文字として指定すると、「改行文字」以外の任意の 1 文字に一致します。

\*

\*は、直前の正規表現の 0 回以上の繰り返しを意味します。

¥

¥は、特殊文字(\*, ., ^, \$, ¥)の打ち消しを意味します。

¥を特殊文字の前に指定すると、その特殊文字は、通常文字として扱われます。また、¥を英小文字の前に指定すると、エラーになります。なお、英小文字の前に指定しても、エラーにならない場合を次に示します。

¥n

¥n は、改行コードを意味します。

¥t

¥t は、タブを意味します。



## 付録 F.2 正規表現を拡張した場合に使用できる拡張正規表現

JP1 製品では、正規表現を拡張することで、Windows と UNIX で共通の正規表現を使用できるようになります。正規表現を拡張したい場合は、「[2.4.2 使用する正規表現を拡張する](#)」を参照して設定してください。なお、UNIX の場合は、各 OS によって適用される拡張正規表現が異なります。HP-UX, Solaris, または AIX の場合は XPG4 に準拠した拡張正規表現、Linux の場合は POSIX1003.2 に準拠した拡張正規表現が適用されます。Windows の場合は、XPG4 の拡張正規表現の文法に準じます。ここでは、拡張正規表現のうち、使用頻度が高そうな正規表現について説明します。

拡張した場合に使用できる正規表現を次に示します。

文字列

指定の文字列の行に一致します。

^文字列

行頭にある指定の文字列に一致します。先頭以外で使用する場合は通常文字として扱われます。

文字列\$

行末にある指定の文字列に一致します。末尾以外で使用する場合は通常文字として扱われます。なお、^と併用すると、指定した文字列だけの行に一致します。

^文字列\$

指定の文字列だけの行に一致します。

^\$

空行に一致します。

.(ピリオド)

「改行文字」以外の任意の 1 文字に一致します。

[文字列]

[ ]内の文字列に指定された文字のどれかに一致します。

[文字-文字]

文字コードの昇順で範囲内のどれか 1 文字に一致します。

[^文字-文字]

文字コードの昇順で範囲外のどれか 1 文字に一致します。

文字\*

直前の文字が 0 回以上繰り返されている文字列に一致します。

正規表現 | 正規表現

左右の正規表現のどちらかに一致します。

¥特殊文字

特殊文字を通常文字として扱います。

(正規表現)

正規表現をグループ化します。

### 付録 F.3 06-71 以前および 07-00 以降で使用できる正規表現の比較

06-71 以前および 07-00 以降のデフォルトで使用できる正規表現と、07-00 以降で正規表現を拡張した場合に使用できる正規表現のうち主なものについて、次の表に示します。

指定方法	機能	06-71 以前		07-00 以降	
		Windows の場合 (JP1 独自の正 規表現)	UNIX の場 合 (基本正規 表現) <sup>※1</sup>	Windows の場 合 (拡張正規表 現) <sup>※3</sup>	UNIX の場 合 (拡張正規 表現) <sup>※2</sup>
文字列	指定の文字列の行に一致する	○	○	○	○
^文字列	行頭にある指定の文字列に一致する	○	○	○	○
文字列\$	行末にある指定の文字列に一致する	○	○	○	○
^文字列\$	指定の文字列だけの行に一致する	○	○	○	○
^\$	空行に一致する	○	○	○	○
.(ピリオド)	任意の 1 文字に一致する	○	○	○	○
.*	.(ピリオド)と*の併用、任意の 1 文字に一致する	○	○	○	○
[文字列]	[ ]内の文字列に指定された文字のどれかに一致する	×	○	○	○
[^文字列]	[ ]内の文字列に指定された文字以外の文字に一致する	×	○	○	○
[文字-文字]	文字コードの昇順で範囲内の文字に一致する	×	○	○	○
[^文字-文字]	文字コードの昇順で範囲外の文字に一致する	×	○	○	○
文字*	直前の文字が 0 回以上繰り返されている文字列に一致する	○	○	○	○
文字+	直前の文字が 1 回以上繰り返されている文字列に一致する	×	×	○	○
文字?	直前の文字が 0 回または 1 回繰り返されている文字列に一致する	×	×	○	○
文字{n}	直前の文字が n 回繰り返されている文字列に一致する	×	×	○	○
文字{n,}	直前の文字が n 回以上繰り返されている文字列に一致する	×	×	○	○
文字{n,m}	直前の文字が n 回以上、m 回以内の文字列に一致する	×	×	○	○
正規表現   正規表現	左右の正規表現のどちらかに一致する	×	×	○	○
¥特殊文字	特殊文字を通常文字として扱う	○	○	○	○
(正規表現)	正規表現をグループ化する	×	×	○	○

(凡例)

○:使用できる

×:使用できない

注※1 デフォルトで基本正規表現を使用しているのは JP1/Base だけです。ほかの JP1 製品では異なる正規表現を使用しているため、デフォルトで使用できる正規表現については各製品のマニュアルを参照してください。

注※2 正規表現を拡張した場合、各 OS によって適用される拡張正規表現が異なります。HP-UX, Solaris, または AIX の場合は XPG4 に準拠した拡張正規表現、Linux の場合は POSIX1003.2 に準拠した拡張正規表現が適用されます。使用できる正規表現の詳細については、各正規表現の文法 (regexp または regex) を参照してください。

注※3 正規表現を拡張した場合、XPG4 の拡張正規表現の文法に準拠します。なお、正規表現規格で未定義とされている項目については、UNIX の場合と動作が異なることがあります。

#### 付録 F.4 正規表現を指定する際のヒント

正規表現を指定する際のヒントを次に示します。正規表現を指定する際に参考にしてください。

- 正規表現ですべての文字に一致する「.\*」を多数使用すると、検索に時間が掛かることがあります。長いメッセージなどに対して「.\*」を使用する場合は、必要な個所にだけ「.\*」を使用するようにしてください。
- UNIX では、空白以外の文字に一致させたい場合など、「.\*」の代わりに、空白以外の文字の繰り返しとなる「[^\s]\*」を使用すると、検索時間を短縮できます。

## 付録 F.5 正規表現の指定例

正規表現の指定例を次に示します。

指定方法	機能	正規表現として指定した文字列	文字列の例	一致
文字列	指定の文字列の行に一致する	spring	spring has come.	○
			winter-summer-autumn-spring	○
			-----spring-----	○
^文字列	行頭にある指定の文字列に一致する	^spring	spring has come.	○
			winter-summer-autumn-spring	×
			-----spring-----	×
文字列\$	行末にある指定の文字列に一致する	spring\$	spring has come.	×
			winter-summer-autumn-spring	○
			-----spring-----	×
^文字列\$	指定の文字列だけの行に一致する	^spring\$	spring has come.	×
			winter-summer-autumn-spring	×
			spring	○
			spring	×
^\$	空行に一致する	^\$		○
			spring	×
.(ピリオド)	任意の 1 文字に一致する	in.e	winter has come.	○
			mother of invention	○
			life is in everything	○
		s..ing	eight nine ten	×
			increasing population	×
			picnic in spring	○
[文字列]	[ ]内の文字列に指定された文字のどれかに一致する	[pr]	spring has come.	○
			today is monday.	×
[文字-文字]	文字コードの昇順で範囲内の文字のどれか 1 文字に一致する	[a-i]	spring has come.	○
[^文字-文字]	文字コードの昇順で範囲外の文字のどれか 1 文字に一致する	[^a-i]	spring has come.	○
文字*	直前の文字が 0 回以上繰り返されている文字列に一致する	ro*m	terminal	○
			cd-rom	○
			living room	○
		h.*n	This is a pen.	○
			That is an apple.	○
正規表現   正規表現	左右の正規表現のどちらかに一致する	[0-9]+ apple	That is an apple.	○
			spring in 2003	○
¥特殊文字	特殊文字を通常文字として扱う	o¥.h	<stdio.h>	○
			another man	×
(正規表現)	正規表現をグループ化する	i(n.e ng)	winter has come.	○
			interesting book	○

(凡例)

太字: 指定した正規表現と一致する文字列

空欄: 空行

○: 一致する文字列がある

×: 一致する文字列がない

## 付録 G カーネルパラメーター一覧

UNIX 環境で JP1/Base を使用する場合、JP1/Base の実行に必要なリソースを割り当てるために、OS のカーネルパラメーターを調整します。調整が必要なカーネルパラメーターについては、リリースノートを参照してください。

## 付録 H 通信設定の変更対応

06-71 以降の JP1/Base は、さまざまなネットワーク構成に応じて通信設定を変更できます。通信設定は、jp1hosts 定義ファイル、通信方式設定ファイルを使用して変更します（イベントサービスに関してはイベントサーバ設定ファイル (conf) を使用して変更します）。通信設定の詳細については、「[11. ネットワーク構成に応じた JP1/Base の通信設定](#)」を参照してください。

JP1/Base が提供する各機能の通信設定への対応状況を次の表に示します。

表 H-1 各機能の通信設定への対応状況

機能		通信設定	
		jp1hosts 定義ファイル	通信方式設定ファイル
ユーザー管理	ユーザー認証	○	○
	ユーザーマッピング	—	—
起動管理	起動順序制御	—	—
	終了順序制御	—	—
イベントサービス		×	○*
イベント変換	ログファイルトラップ	—	—
	イベントログトラップ	—	—
	SNMPトラップ変換	—	—
イベントサービスの定義情報の収集と配布		○	○
プロセス管理機能		—	—
ISAM ユーティリティコマンド		—	—
統合トレース(HNTRLib2)		—	—

(凡例)

- : サポートしている
- ×: サポートしていない
- : 通信しない

注※ イベントサーバ設定ファイル (conf) によって変更 (JP1/SES 形式のイベントは非対応)。

## 付録I 操作ログの出力

JP1/Base の操作ログとは、認証サーバに対する不正な操作などセキュリティ上の問題発生時の原因究明や、システムを安全に運用するための情報収集を目的として、認証サーバに対して「いつ」「だれが」「何を行ったか」などの操作情報の履歴を出力するログ情報です。

JP1/Base の操作ログには、対象資源である JP1 ユーザーアカウント情報または操作権限情報が登録・変更・削除された場合に、変更情報が出力されます。例えば、JP1 ユーザーのパスワードを変更した場合、いつ、どの OS ユーザーによって、どの JP1 ユーザーのパスワードを変更したかの情報が操作ログに出力されます。また、認証サーバの起動または停止の情報も出力されます。

操作ログは、08-10 以降の JP1/Base であれば、出力できます。ただし、デフォルトでは出力されません。

操作ログは、CSV 形式で出力されるテキストファイルです。定期的に保存して表計算ソフトで加工することで、分析資料として利用できます。

なお、出力された操作ログは JP1/NETM/Audit - Manager を使用して収集することで、一元管理できます。

JP1/NETM/Audit - Manager で操作ログを収集する方法については、マニュアル「JP1/NETM/Audit」を参照してください。

ここでは、操作ログの出力内容と操作ログを出力するための設定方法について説明します。

### 付録 I.1 操作ログに出力される事象の種別

操作ログに出力される事象の種別および JP1/Base が操作ログを出力する契機を次の表に示します。事象の種別とは、操作ログに出力される事象を分類するための、操作ログ内での識別子です。

表 I-1 操作ログに出力される事象の種別

事象の種別	説明	JP1/Base が出力する契機
StartStop	ソフトウェアの起動および終了を示す事象。	認証サーバの起動時または停止時
ConfigurationAccess	管理者が許可された運用操作を実行し、操作が成功または失敗したことを示す事象。	<ul style="list-style-type: none"><li>• JP1 ユーザーの登録・削除時</li><li>• JP1 ユーザーのパスワード変更</li><li>• JP1 ユーザーの操作権限の登録・変更・削除時</li><li>• jbs_spmd_reload コマンドの実行時</li><li>• jbsaclreload コマンドの実行時</li></ul>

## 付録 I.2 操作ログの保存形式

操作ログの保存形式について説明します。操作ログは、操作ログファイル (base\_log.log) に出力されます。操作ログファイルは、シーケンシャルファイルです。一定の容量に達すると、ファイル名を変更して保存したあと、変更前と同じ名称のファイルを作成して新たにログを書き込みます。一定の容量に達して操作ログファイルが切り替わる際、「base\_log.log」を、「base\_log1.log」に変更して保存し、新たに「base\_log.log」を作成して、ログを書き込みます。再び「base\_log.log」が一定量に達すると、保存済みの「base\_log1.log」を「base\_log2.log」に変更したあと、「base\_log.log」を「base\_log1.log」に変更して保存します。

このように、保存済みのログファイルは、新たにファイルが作成されるごとに**ファイル名末尾の数値+1**をしたファイル名称に変更されます。つまり、数値が大きいログファイルほど古いログファイルとなります。なお、一定の保存面数を超えると、古いログファイルから削除されます。

ファイルの切り替え時期、出力先および保存面数は操作ログ定義ファイルで変更できます。ログファイルサイズの初期値は 1,024KB です。保存面数の初期値は 4 面です。操作ログ定義ファイルの設定方法については、「[付録 I.5 操作ログを出力するための設定](#)」を参照してください。

### 付録 I.3 操作ログの出力形式

操作ログは、操作対象の JP1 ユーザーおよび JP1 資源グループ単位にレコードが出力されます。例えば、JP1 ユーザーに登録されている二つの JP1 資源グループ (jp1group1, jp1group2) の JP1 権限レベルを変更した場合、「JP1 資源グループ(jp1group1)の変更」と「JP1 資源グループ(jp1group2)の変更」という二つのレコードが出力されます。

また、ユーザー権限レベルファイル (JP1\_UserLevel) で JP1 資源グループや JP1 権限レベルの内容を変更し、jbsaclreload コマンドまたは jbs\_spm�\_reload コマンドを実行した場合、認証サーバ上の操作権限情報とユーザー権限レベルファイルの内容を比較し、変更した定義に関する情報だけが操作ログに出力されます。

操作ログ出力の出力形式、出力先、出力項目について説明します。

#### (1) 出力形式

CALFHM **x.x**,出力項目 1=値 1,出力項目 2=値 2,⋯,出力項目 n=値 n

#### (2) 出力先

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥log¥BASE¥base\_log[**n**\*].log

UNIX の場合

/var/opt/jp1base/log/BASE/base\_log[**n**\*].log

注※

**n** は 1～16 の 10 進数です。

#### (3) 出力項目

出力項目は二つの分類があります。

- 共通出力項目  
操作ログを出力する JP1 製品が共通して出力する項目です。
- 固有出力項目  
操作ログを出力する JP1 製品が任意に出力する項目です。

##### (a) 共通出力項目

共通出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。

表 I-2 操作ログの共通出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	共通仕様識別子	—	CALFHM	ログフォーマット識別子
2	共通仕様リビジョン番号	—	<b>x.x</b>	ログフォーマットを管理するためのリビジョン番号
3	通番	seqnum	通し番号	操作ログレコードの通し番号(プロセスごとに採番される)
4	メッセージ ID	msgid	KAJP6 <b>xxx-x</b>	製品のメッセージ ID
5	日付・時刻	date	<b>yyyy-mm-ddThh:mm:ss.sssTZD</b> <sup>※1</sup>	操作ログの出力日時およびタイムゾーン
6	発生プログラム名	progid	JP1Base	事象が発生したプログラムのプログラム名
7	発生コンポーネント名	compid	User_management	事象が発生したコンポーネント名
8	発生プロセス ID	pid	認証サーバのプロセス ID	事象が発生したプロセスのプロセス ID
9	発生場所(ホスト名)	ocp:host	認証サーバのホスト名 <sup>※4</sup>	事象が発生したホストのホスト名



10	事象の種別	ctgry	<ul style="list-style-type: none"> <li>• StartStop</li> <li>• ConfigurationAccess</li> </ul>	操作ログに出力される事象を分類するためのカテゴリー名
11	事象の結果	result	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Success (成功)</li> <li>• Failure (失敗)</li> </ul>	事象の結果
12	サブジェクト識別情報	subj:uid	<ul style="list-style-type: none"> <li>• OS ユーザー名<sup>※4</sup></li> <li>• Unknown<sup>※2</sup></li> <li>• Not Support<sup>※3</sup></li> </ul>	事象を発生させた OS ユーザー名

(凡例)

—: 出力される属性名はありません。

注※1

T は日付と時刻の区切りです。

**ZD** はタイムゾーン指定子です。次のどれかが出力されます。

+**hh:mm**: UTC から **hh:mm** だけ進んでいることを示す。

-**hh:mm**: UTC から **hh:mm** だけ遅れていることを示す。

Z: UTC と同じであることを示す。

注※2

Unknown は、jbs\_spmc\_reload コマンド実行時に出力されるメッセージ(KAJP6016-I~KAJP6020-I)の場合に出力されます。このコマンドを実行した OS ユーザー名は、直後に出力される KAJP6022-I~KAJP6023-W のサブジェクト種別情報に出力されます。

注※3

Not Support は、08-00 以前の JP1/Base で、ユーザー認証機能のコマンドを実行した場合に出力されます。どの OS ユーザーによって実行されたか知りたい場合には、JP1/Base のバージョンを 08-10 以上にしてください。

注※4

値を取得できなかった場合は、None が出力されます。

## (b) 固有出力項目

固有出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。

表 I-3 操作ログの固有出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	オブジェクト情報	obj	<ul style="list-style-type: none"><li>• JP1user</li><li>• Permission</li><li>• Process</li><li>• Password</li></ul>	操作の対象
2	操作情報	op	<ul style="list-style-type: none"><li>• Add</li><li>• Apply</li><li>• Update</li><li>• Delete</li><li>• Start</li><li>• Stop</li></ul>	操作内容
3	オブジェクトロケーション情報: 認証サーバ名	objloc:authsv	認証サーバ名 <sup>※1</sup>	操作対象の資源がある認証サーバ名を出力する
4	オブジェクトロケーション情報: JP1 ユーザー名	objloc:user	JP1 ユーザー名 <sup>※1</sup>	操作対象の資源の JP1 ユーザー名を出力する
5	変更前情報: JP1 資源グループ名	before:rsrcgrp	JP1 資源グループ名 <sup>※1</sup>	変更前の情報として、削除された情報を出力する
6	変更後情報: JP1 資源グループ名	after:rsrcgrp	JP1 資源グループ名 <sup>※1</sup>	変更後の情報を出力する
7	変更後情報: JP1 権限レベル名	after:prmsn	JP1 権限レベル名 <sup>※1</sup>	変更後の情報を出力する
8	権限情報	auth	<ul style="list-style-type: none"><li>• Windows Administrator</li><li>• UNIX SuperUser</li></ul>	操作した OS ユーザーが持つ権限
9	リクエスト送信元ホスト	from:ipv4	コマンド実行ホストの IP アドレス <sup>※1※2</sup>	コマンド実行ホストの IP アドレス
10	自由記述	msg	メッセージ <sup>※2</sup> の詳細については「 <a href="#">付録 I.6 操作ログに出力されるメッセージの一覧</a> 」を参照。	事象の内容を示すメッセージ

注※1

この値は、操作ログによって出力の有無が異なります。表 I-4 を参照してください。

注※2

値を取得できなかった場合は、None が出力されます。

操作ログに出力される固有出力項目のうち、出力の有無が異なる項目について、メッセージID ごとに次の表に示します。

表 I-4 メッセージ ID と固有出力項目の出力有無

メッセージID	オブジェクト ロケーション 情報: 認証サ ーバ名	オブジェクトロケー ション情報: JP1 ユ ーザー名	変更前情報: JP1 資源グル ープ名	変更後情報: JP1 資源グル ープ名	変更後情報: JP1 権限レベ ル名	リクエスト 送信元ホ スト
KAJP6000-I	○	○	×	×	×	○
KAJP6001-W	○	○	×	×	×	○
KAJP6002-I	○	○	×	×	×	○
KAJP6003-W	○	○	×	×	×	○
KAJP6004-I	○	○	×	×	×	○
KAJP6005-W	○	○	×	×	×	○
KAJP6006-I	○	○	×	○	○	○
KAJP6007-W	○	×	×	×	×	○
KAJP6008-I	○	○	×	○	○	○
KAJP6010-I	○	○	○	×	×	○
KAJP6011-W	○	○	×	×	×	○
KAJP6012-I	○	×	×	×	×	×
KAJP6013-E	○	×	×	×	×	×
KAJP6014-I	○	×	×	×	×	×
KAJP6015-E	○	×	×	×	×	×
KAJP6016-I	○	○	×	○	○	○
KAJP6017-W	○	×	×	×	×	○
KAJP6018-I	○	○	×	○	○	○
KAJP6020-I	○	○	○	×	×	○
KAJP6022-I	×	×	×	×	×	×
KAJP6023-W	×	×	×	×	×	×

(凡例)

○: 出力される。

×: 出力されない。

#### (4) 出力例

操作ログの出力例を次に示します。

```
jbsadduser コマンドで JP1 ユーザー「jp1user1」を登録した場合、認証サーバ「server1」の操作ログに出力される内容
CALFHM 1.0,seqnum=59,msgid=KAJP6000-I,date=2006-09-10T11:05:23.480+09:00,
progid=JP1Base,compid=User_management, pid=4028,
ocp:host=hostA,ctgry=ConfigurationAccess,result=Success,
subj:euid=Administrator,obj=JP1user,op=Add,objloc:authsv=server1,
objloc:user=jp1user1,auth=Administrator,from:ipv4=206.aa.bb.ccc,
msg=JP1 ユーザーの登録に成功しました
```

## 付録 I.4 操作ログが出力される契機

操作ログが出力される契機およびメッセージ ID の一覧を示します。各メッセージ ID が出力するメッセージ本文を知りたい場合は、「[付録 I.6 操作ログに出力されるメッセージの一覧](#)」を参照してください。

表 I-5 操作ログが出力される契機およびメッセージ ID

操作	契機		メッセージ ID
	結果	失敗ログが出力される事象	
JP1 ユーザーの登録時	登録成功	—	KAJP6000-I
	登録失敗	登録済みの JP1 ユーザーを登録しようとした	KAJP6001-W
JP1 ユーザーのパスワードの変更時 <sup>※1</sup>	変更成功	—	KAJP6002-I
	変更失敗	<ul style="list-style-type: none"> <li>変更しようとした JP1 ユーザーが存在しない</li> <li>旧パスワードが誤っている</li> </ul>	KAJP6003-W
JP1 ユーザーの削除時	削除成功	—	KAJP6004-I
	削除失敗	削除しようとした JP1 ユーザーが存在しない	KAJP6005-W
JP1 資源グループの登録時	登録成功	—	KAJP6006-I
JP1 資源グループの変更時	変更成功	—	KAJP6008-I
JP1 資源グループの削除時	削除成功	—	KAJP6010-I
	削除失敗	削除しようとした JP1 ユーザーが存在しない	KAJP6011-W
認証サーバの起動時	起動成功	—	KAJP6012-I
	起動失敗	認証サーバの起動に失敗した	KAJP6013-E
認証サーバの停止	停止成功	—	KAJP6014-I
	停止失敗	認証サーバの停止に失敗した	KAJP6015-E
JP1/Base のプロセスの再読み込み時 (jbs_spm�_reload コマンド実行時) <sup>※2</sup>	登録成功	—	KAJP6016-I
	更新失敗	更新処理が途中で失敗した	KAJP6017-W
	変更成功	—	KAJP6018-I
	削除成功	—	KAJP6020-I
	コマンド成功	—	KAJP6022-I
	コマンド失敗	jbs_spm�_reload コマンドが失敗した	KAJP6023-W
ユーザー権限レベルの再読み込み時 (jbsacreload コマンド実行時) <sup>※3</sup>	登録成功	—	KAJP6006-I
	変更成功	—	KAJP6008-I
	削除成功	—	KAJP6010-I
	更新失敗	更新処理が途中で失敗した	KAJP6007-W

(凡例)

—: 出力される失敗ログはありません。

注※1

連携ユーザーのパスワードを変更しようとしたとき、操作ログは出力されません。連携ユーザーのパスワードは連携先のディレクトリサーバで管理するため、認証サーバ上で変更できません。jbschgpasswd コマンドを実行すると KAVA5209-E メッセージが出力されます。

注※2

jbs\_spm�\_reload コマンドは、JP1/Base のプロセスを再読み込みするコマンドです。このコマンドを実行すると、ユーザー権限レベルファイル (JP1\_UserLevel) に定義された操作権限の情報が読み込まれます。認証サーバ上の操作権限情報から変更のあった JP1 ユーザー情報だけが、操作ログに出力されます。

注※3

jbsaclreload コマンドは、ユーザー権限レベルファイル (JP1\_UserLevel) に定義された操作権限の情報を読み込むコマンドです。認証サーバ上の操作権限情報から変更のあった JP1 ユーザー情報だけが、操作ログに出力されます。

## 付録 I.5 操作ログを出力するための設定

操作ログを出力するための設定は、操作ログ定義ファイル(jp1bs\_base\_log\_setup.conf)で行います。操作ログを出力するために設定する内容とその手順について次に示します。

### (1) 設定手順

操作ログを出力するための設定手順を次に示します。

1. **操作ログ定義ファイル(jp1bs\_base\_log\_setup.conf)を編集する。**
2. **jbssetcnf コマンドを実行する。**  
設定内容が共通定義情報に反映されます。
3. **設定を有効にする。**  
JP1/Base を再起動するか、jbs\_spmc\_reload コマンドを実行すると設定が有効になります。

### (2) 操作ログ定義ファイル(jp1bs\_base\_log\_setup.conf)の詳細

操作ログ定義ファイル(jp1bs\_base\_log\_setup.conf)の詳細について説明します。

#### (a) 格納先ディレクトリ

操作ログ定義ファイルの格納先ディレクトリを次に示します。

Windows の場合

**インストール先フォルダ**¥jp1base¥conf¥

UNIX の場合

/etc/opt/jp1base/conf/

#### (b) 形式

操作ログ定義ファイルには、操作ログの出力の有無、操作ログファイル(base\_log.log)の出力先、サイズ、保存面数および自動的にファイルを切り替えるための設定を次の形式で定義します。

#### “項目名”=値

設定項目を次の表に示します。なお、操作ログファイルの出力先以外は、すべて 16 進数で指定します。表中の( )内の数値は、10 進数です。

表 I-6 操作ログ定義ファイルで設定する項目および初期値

項番	項目	説明
1	ENABLE	操作ログの出力を有効にするか無効にするかを指定します。下記以外の値を指定した場合、初期値を仮定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• 初期値 00000000</li><li>• 操作ログの出力を無効にする場合 00000000</li><li>• 操作ログの出力を有効にする場合 00000001</li></ul>
2	LOGFILEDIR	操作ログファイルの出力先を指定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• 初期値 Windows の場合 <b>インストール先フォルダ</b>¥jp1base¥log¥BASE UNIX の場合 /var/opt/jp1base/log/BASE</li></ul>
3	LOGSIZE	操作ログファイルのサイズをバイトで指定します。下記の指定できる範囲の下限値よりも小さい値を指定した場合は、下限値を仮定し、上限値よりも大きい値を指定した場合には、上限値を仮定します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• 初期値 00100000 (1,024KB)</li><li>• 指定できる範囲 00002000~00400000 (8KB~4,096KB)</li></ul>

4	LOGFILENUM	<p>操作ログファイルの保存する面数を指定します。下記の指定できる範囲の下限值よりも小さい値が設定された場合には、下限値を仮定し、上限値よりも大きい値が設定された場合には、上限値を仮定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 初期値 00000004(4面)</li> <li>• 指定できる範囲 00000001~00000010(1~16面)</li> </ul>
5	LOGCHANGEOPT	<p>JP1/Base が起動した時点で、自動的にファイルを切り替えるかどうかを指定します。下記以外の値を指定した場合、初期値を仮定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 初期値 00000000</li> <li>• 起動時に切り替えない場合 00000000</li> <li>• 起動時に切り替える場合 00000001</li> </ul>

**(c) 操作ログ定義ファイルの定義例**

操作ログを出力する場合の定義例を示します。例えば、ENABLE の値を「00000001」に変更すると、1MB の操作ログが出力され 4 面まで保存できます。

[JP1\_DEFAULT¥JP1BASE¥BASE\_LOG]

"ENABLE"=dword:00000001

"LOGFILEDIR"="/var/opt/jp1base/log/BASE"

"LOGSIZE"=dword:00100000

"LOGFILENUM"=dword:00000004

"LOGCHANGEOPT"=dword:00000000

## 付録 I.6 操作ログに出力されるメッセージの一覧

ここでは、操作ログに出力されるメッセージ ID およびメッセージ本文を示します。

KAJP6000-I

JP1 ユーザーの登録に成功しました  
The JP1 user was registered successfully.

KAJP6001-W

JP1 ユーザーの登録に失敗しました  
An attempt to register the JP1 user has failed.

KAJP6002-I

JP1 ユーザーのパスワードの変更に成功しました  
The password for the JP1 user was changed successfully.

KAJP6003-W

JP1 ユーザーのパスワードの変更に失敗しました  
An attempt to change the password for the JP1 user has failed.

KAJP6004-I

JP1 ユーザーの削除に成功しました  
The JP1 user was deleted successfully.

KAJP6005-W

JP1 ユーザーの削除に失敗しました  
An attempt to delete the JP1 user has failed.

KAJP6006-I

JP1 資源グループの登録に成功しました  
The JP1 resource group was registered successfully.

KAJP6007-W

JP1 ユーザーの操作権限に関する定義情報の再読み込みに失敗しました  
An attempt to reload the definition information about the JP1 user operating permissions has failed.

KAJP6008-I

JP1 資源グループの変更に成功しました  
The JP1 resource group was changed successfully.

KAJP6010-I

JP1 資源グループの削除に成功しました  
The JP1 resource group was deleted successfully.

KAJP6011-W

JP1 資源グループの削除に失敗しました  
An attempt to delete the JP1 resource group has failed.

KAJP6012-I

認証サーバの起動に成功しました  
The authentication server was started successfully.

KAJP6013-E

認証サーバの起動に失敗しました  
An attempt to start the authentication server has failed.

KAJP6014-I



認証サーバの停止に成功しました

The authentication server was stopped successfully.

KAJP6015-E

認証サーバの停止に失敗しました

An attempt to stop the authentication server has failed.

KAJP6016-I

JP1 資源グループの登録に成功しました

The JP1 resource group was registered successfully.

KAJP6017-W

JP1 ユーザーの操作権限に関する定義情報の再読み込みに失敗しました

An attempt to reload the definition information about the JP1 user operating permissions has failed.

KAJP6018-I

JP1 資源グループの変更に成功しました

The JP1 resource group was changed successfully.

KAJP6020-I

JP1 資源グループの削除に成功しました

The JP1 resource group was deleted successfully.

KAJP6022-I

jbs\_spm�\_reload コマンドの実行に成功しました

The jbs\_spm�\_reload command was executed successfully.

KAJP6023-W

jbs\_spm�\_reload コマンドの実行に失敗しました

An attempt to execute the jbs\_spm�\_reload command has failed.